

# 研 究 紀 要

## 第 33 集

はじめに	1
A. 研究開発の課題	5
研究課題・研究委嘱事項	5
(1) 研究開発課題	5
(2) 研究委嘱事項	5
(3) 研究開発の委嘱期間	5
B. 研究開発3年間の経過	5
I. 研究のねらい	5
II. 研究の全体計画	6
III. 研究組織	6
IV. 研究開発の経過	8
V. 研究内容1 カリキュラムの編成	11
1. 学校改革・教育目標・青年期教育	11
2. 編成の基本方針	25
3. 編成作業	25
4. 新カリキュラムの実施にあたっての問題と課題	26
5. 英語科カリキュラム20人学級制について	28
VI. 研究内容2 総合教科の創造	49
1. 総合学習の課題と展望	49
2. カリキュラムと総合教科	65
3. 基本的な性格付け	73
4. <奈良学>について	74
5. <環境学>について	108
VII. 運営指導委員から	133
VIII. 本校生徒の生活・意識実態調査	143
IX. 研究の成果と問題点	224

1 9 9 2

奈良女子大学文学部  
附属中・高等学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第55条において準用する第26条の2及び第57条の3の規定に基づき、教育課程の基準改善のために文部大臣の委嘱を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容の全てが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適応できる性格のものでないことに留意してお読み下さい。

# はじめに

山 田 昇

本校は、1973年以降、6年制一貫中等教育を実施してきました。臨時教育審議会が、6年制一貫中等教育の提案をしたのが、1985年ですから、それより10年以上も前から、この制度を採用してきました。6年一貫教育を採択した当時の論議の内容を十分に明らかにすることは出来ませんが、少なくとも本校がかかえていた実践的課題、つまり同じキャンパスの中で中学校卒業者を選別して、高等学校入学者を新たに選抜しなければならないということの中に含まれていた矛盾は、この制度を採用した最大の動因であったといつてよいと思われまふ。

いづれにしても、本校においては、とにかく今日まで、6年制一貫中等教育の実績が積み重ねられ、その教育課題も明確になりつつ、先導的な中等教育に焦点化された教育研究が行われてきました。とくに、一昨年度より、現代社会にふさわしい学校改革と新しい教育課程を展望して、文部省の研究開発指定校としての研究と教育を積み重ねてきました。

私は、本校の教育研究の基本的な視点と、同時に本校の存立の基礎である、6年制一貫中等教育の今日的な意義について、あらためて考えてみたいと思つていますが、国立大学附属学校としてのその取り組みは、新しい青年期教育への重要な試行でなければならないと考えています。

本校の特徴は、6年間を2-2-2製の段階的発展と見て青年期の発達途上の難しい時期に適切なカリキュラムの提供と発達の指導を実現すること、とくに、選択科目制の有効な活用と少人数教育によって個性化を図ること、中学年に奈良学や環境学の総合科目を導入し中だるみを克服し、受け身の学習ではなく、現代の課題に即して生徒が自主的に探求する学習を組織していこうとしていることなどです。

全体としての教育の在り方や、教育環境の変化の中で、本校に入学してくる子どもたちの質的变化に対応しつつ、どのような教育が必要かということに、本校の教育創造の努力は積み重ねられてきました。その足跡は、本校の研究紀要に蓄積されて、1960年度より33集を継続しており、この間多くの研究と教育の成果がもたらされました。

しかし、本校が6年制一貫中等学校の道を選択した段階で、6年制中等学校としてどのような教育をするのかということについて、必ずしも明確な展望があったとはいえないのではないかと思われまふ。

その後の10年間の苦悩、そしてその中から、本校が何をしなければならないのかという学校改革の論議、ここにいたる経緯については、昨年度(1990年度)紀要に掲載された吉田裕「学校改革と教育目標について」の論稿がきわめて的確に語つていて思われまふ。

この論稿には、中学入試段階での文部省主導の抽選制導入等により生徒の学力低下とそれによる生徒間の学力格差の拡大、それに伴う学習意欲の減退や自治と自主性の喪失が進んだ、低学力対策の必要や進路の多様化、多様な生徒指導の必要などの状況が進行したことが指摘されています。しかし、その過程が果たして、「普通の高校」への回帰であったのかどうかは分析を要する問題だと思つます。本来の意味での「普通の高校」がどこにあるのか、周囲の状況が激しく変化していく中で本校がどのような学校で、どのような教育をするのかは厳しく問われてきたところだと思つます。吉田論文に「普通の高校」とはどんな学校だったのか、そこではどんな教育がどのように行われるのか、本校はいかにあるべきか、再び問い直さざるを得なくなつてきた、「普通の高校」のイメージがつかめな

いまま、教師自身が自己変革する方針と方法をもつことが出来なかった」と指摘されています。このコメントの中に万感の想いが込められていると私は思います。

「6年一貫教育を実施して10年あまり、本校教育は見通しを失い、低迷に陥った。かつての進学校のイメージと高校入試のない学校として、一時増加した本校への受験生は次第に減りはじめた。とくに、男子受験生の減少がいちじるしく、本校の男子生徒は私立中学に合格しなかった生徒のたまり場になった。附属小学校からの受験生も、附属中高校を避け、有名私立中学へ進学する傾向が年々強くなった」と。このコメントの中にも、極めて重要な指摘があると思います。

この場合、中高一貫教育というのは、単に6年一貫ということではなくて、義務教育の3年間と、非義務教育の3年間を一貫させることであり、高校時代の青年期をどのようなシステムでどのように教育するのがもっとも妥当な方法であるかということへの展望を必要とする、そういう問題だということを考えなければならないと思うのです。

今、日本のほとんどすべての子どもは、上級学校へ進学する過程で、何らかの選抜を通過せざるを得ない状況におかれています。それが高校入試という関門です。数年前まで、京都に僅かに高校三原則が残されていましたが、それも廃止され、山梨の小学区制も地勢的な極めて特殊な条件によって存続しましたが、これも状況は変化しつつあります。そこから生じている問題は多く、学校の序列化や、不本意入学を蔓延させている職業科高校の現実、その中で多数の中退者問題は社会問題にさえなっています。高校を選ぶ過程で、青年期前期の極めて鋭敏な心身が影響を受けて発達途上の挫折を経験する子どもも多いのが実情です。それは、義務教育の終了時点を節目に行われていますが、95%の子どもが高校へ進学するようになった現実のもとで、厳しい選別現象となって現れてきています。そのような中で、「普通の高校」とはどのような学校なのかは益々難しくなっています。

そして、一部の子どもたちは、それより早く小学校を終了した段階で、中学校を選びます。有名私学の中高一貫の進学校が隆盛になるにつれて中学校入試競争が激化してきた現実に直面しています。

義務教育の本来の精神から考えると、中学校の入試競争の激化は決して望ましいことではないと思います。基本的には選別の早期化であり、義務教育の中途段階で、学校の類別化を促進することになるからです。しかし、このような状況の中で、中高一貫教育を選びとった学校は、中学校入試の段階で、高校入試に作用する原理、つまりどのような高校教育をするのかという観点をなんらかの形で受けとめなければならない現実に立たされているということを私たちは実感しています。

このような様々な条件の中で、私たちは、青年期教育がどうあるべきか、子どもたちの認識発達、人間的成長にとって何が大切か、教師は何をなすべきかをくりかえし問い直しながら、現実の子どもたちに高等学校卒業までの学力と個々の子どもに適切な進路を保障するための教育的かつ研究的努力を積み重ねているというのが現状であり、本校の教育研究はこのような観点から進められています。

ところで、本校の研究的な伝統は、もとより戦前の高等女学校時代の模範的女子教育以来のものであり、戦後教育の新しい条件の中で、再編発展させられてきたということが出来ます。

先般、私は、戦後初期の『中学教育』という本校教育研究会によって刊行されていた月刊雑誌を見出し、戦後初期の新教育模索の時代に、本校が、新しい中等教育の在り方を先導的に探求する最先端に位置していたことを知りました。私の手元にあるのは、昭和25年の二冊で、昭和25年4月号（国語教育特集）と5月号（特別教育活動特集）です。昭和24年10月創刊で、何時まで続いたのかまだわかりません。

国語教育特集の巻頭言には、当時の学力低下の問題が指摘され、新しい理想を掲げながらそのような欠陥を見せつけられることは悲しい事実であり、屈辱であるにとらえ、「基礎能力の望ましい発展」

と「国語教育の主体性」の確立が叫ばれています。「言語生活の問題」について、斯界の権威国立国語研究所長の西尾実氏が玉稿をよせておられることも注目すべきところです。さらに倉沢栄吉氏の「国語学習指導計画とその実践」、横田俊一教授の「詩人の目」、中西昇女高師教授の「国語教育の基本構造」等、多彩な内容の雑誌となっています。

特別教育活動特集の巻頭言には、特別教育活動は、「自発活動の領域が広いだけに、生徒の活動がより中心的でなくてはならぬ」、しかし「生徒の自発活動と教師の指導とは、反比例するものではなくて、むしろ正比例する」と指摘しています。この考え方を倒錯して新教育を損ねていることが問題だと捉えています。また、当時文部省の井坂行男氏の「特別教育活動とガイダンス」という論文を載せています。さらに中西教授が「特別教育活動の実施準備」という本校での特別教育活動の指針を明らかにしています。

なお、当時、『奈良プラン ホームルーム』（奈良女子高等師範学校附属中学校高等学校教育研究会著）という本校編纂の著書があったことも確認しておくべき点だと思います。

つまり、本校は当時の中等教育界に指導的な世論を形成していたことが注目されなければならないと考えられます。

私たちは、今日再び新しい中等教育の在り方を求めて、教職員一体となって理想の探求に努めています。そのためにも、このようなすぐれた教育実践の遺産を大切に、また日々新たに、次の時代に継承され得る新しい仕事を創り出していこうとしています。

本年度は、新カリキュラムの内、とくに奈良学と環境学に集約される総合学習の取り組みを中心に、その問題意識、研究経過、教育の視点、生徒の学習活動とその成果などを中心として、報告書がまとめられました。奈良学、環境学を貫く総合学習の基本的な考え方や、その今日的な意義については、本報告書中に詳しく述べられていますのでご検討の上、ご批判を賜りたいと思います。

とくに、松本博史「カリキュラムと総合教科」の論稿に、元本校副校長の松村正樹による大正自由教育の分析考察に託して論じた、本校教育への問題提起を精細に検討して、総合学習が、合科学習に由来するものであることを指摘しています。合科学習は、「とかく遊離して相互のつながりの見失われがちな分科学習を補強し、主役の系統学習を支える横木あるいは梁のようなものとして、ところどころに入れることが必要ではないだろうか。教科と教科をつなぐ総合学習的な単元として、それを学習したことが次の教科別学習への動機づけとなるような内容を設定して行えば、大きな役割を果たすだろう」ととらえられ、具体的な総合学習への提案がそこにあったことを指摘しています。松本論文では、この問題提起の受けとめ方の中で、教師自身の教育観・知識観の変革が必要であると考察しています。総合教科の学習を通して、生徒が、「知識と行動を結びつけ、実生活と教科学習との関連を主体的につけ、個々の専門教科別の学習への関心をいっそう豊かにしてくれる」、それを期待すると述べています。それから、総合学習は、学習の「対象を現実社会の中に求め、現実的問題を学習課題とする」、「現実的問題の解明には、多面的な知識、方法、考察を必要とする」、だから生きた現実を学習するために多様な知識・技術を活用する行動が必要になると述べています。現実を「全体的に理解し、その解決の途について考察し、生徒一人一人の主体的な姿勢を創り出す」、これが総合学習のねらいであるとしています。本校の学校改革の中で、総合学習は、学校全体の教育姿勢を問い直していく問題として、討議されてきたということが出来ます。

本年度の授業研究会に際しては、奈良学に、本校元教官現立命館大学鈴木教授、本校外国人講師ロレンゾ・セシリア講師、環境学に、環境庁細木邦子調査官、奈良教育大学岡教授、奈良女子大学梁瀬教授、奈良女子大学杉峰助教授、さらに、環境問題を中心とする全体講演に高知県大方町長坂本義春

氏をお迎えして実りのある研究会をもつことができたことはたいへんありがたく、ご協力いただいた先生方に改めてお礼を申し上げたいと思います。

本校のこれらの取り組みは、単に研究指定校であるからということだけでなく、日常的に教育研究を使命とし課題としているところから積み重ねられてきたものであり、それ故に今後とも持続的に発展的に維持されていくものだと考えております。本校の現状や教育実践にご関心をもっていただける多数の方に、今後ともご指導ご助言を賜りたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。

1992年1月

# 研究開発の概要

## A. 研究開発の課題

### 研究課題・研究委嘱事項

本校は、平成1年4月1日、学校教育法施行規則第55条において準用する第26条の2及び第57条の3の規定に基づき、文部大臣より指定され、以下の事項について研究委嘱を受けた。

#### (1) 研究開発課題

中学校及び高等学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発

#### (2) 研究委嘱事項

中学校及び高等学校において、生徒の実態に対応して、教育内容の一貫性、継続性を一層深め、中学校及び高等学校の教育の連携を計る教育課程の研究開発を行う。

#### (3) 研究開発の委嘱期間

平成1年4月1日～平成4年3月31日までの3カ年間

## B. 研究開発の経過

### I. 研究のねらい

生徒の多様な能力・個性に対応した教育を通して、自由で自立した人格の形成と社会的責任の自覚の育成を図るために、6年間一貫した教育課程を編成する。そのために、具体的には、次の事項について検討する。

#### ① 第1学年から第6学年を、2-2-2年制とする

低学年（1～2年）6年一貫教育を貫徹するのに必要な基礎学力の定着を図る。

それを実現するための学習方法・態度の習得を図る。

中学年（3～4年）自主的学習方法の習得：実験・調査・研究・発表等の方法を授業に取り入れ、学習への興味・関心を広げ、多面的、多元的なものの見方を養う。

ここで、総合教科を実施する。

高学年（5～6年）生徒の能力・適性・進路に応じた選択制の大幅な採用。

進路に応じた科目の選択、到達度に対応した選択を可能にする。

#### ② 2-2-2制実施のためのカリキュラムの作成

教育内容の精選と一貫性、継続性をもつ必修教科・科目と選択教科・科目のあり方。

#### ③ 生徒会活動、学校行事、学年行事、教科の行事、PTA活動等の2-2-2制での位置付けと見直し

#### ④ <総合教科>の設置 講座<奈良学><環境学>の開講

学校での学習を教科書の中だけで終わらせないために、現実社会の具体的な問題と学校教育を直接結び付ける。問題を生徒自身のものにするために、フィールドワークや自主的学習活動を教育課程に位置付ける。

そのために、教科の枠組を外したり、保護者、専門職の退職者、一般社会人を講師に招き、学校に多様な能力を吸収する。

## Ⅱ. 研究の全体計画

### 第1年次（平成1年度）

1. 研究組織の確立
2. 研究計画（研究の目的、方針）の作成
3. 研究情報、資料の収集、先進校視察
4. 現行教育課程における生徒の実態調査の実施
5. 総合教科の基本構想：実施学年・内容・方法・参加教科の決定
6. 本校の研究計画の方針等についての保護者、学外者の意見の集約
7. 第2年次のための年間指導計画案の作成
8. 第1年次の研究報告書の作成

### 第2年次（平成2年度）

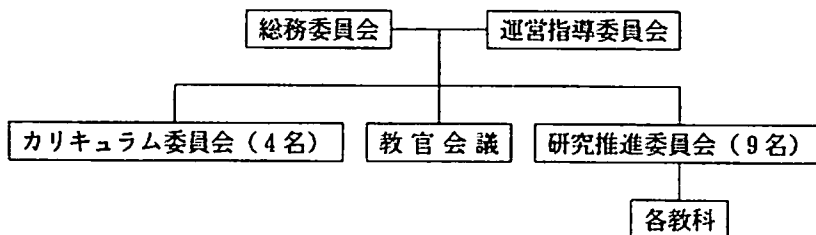
1. 第1年次の報告書の作成
2. 新カリキュラムの実施細案の作成
3. 新カリキュラムの一部実施  
総合教科<奈良学>の実施：中学3年生を対象に実践（マニュアルの作成）
4. 総合教科<環境学>の指導計画（内容と方法）の作成
5. 第2年次の実践上の諸問題の検討
6. 現行教育課程における生徒の実態とその分析
7. 第3年次のための年間指導計画案の作成（概要）
8. 第2年次の研究報告書（新カリキュラムについて）の作成

### 第3年次（平成3年度）

1. 第3年次のための年間指導計画の実施
2. 総合教科の実施・評価と次年度の総合教科の指導計画の作成
3. 第3年次の実践上の諸問題の検討
4. 現行教育課程における生徒の実態調査報告書
5. 次年度のための年間指導計画案の作成
6. 研究発表会の開催：<奈良学><環境学>の公開授業
7. 第3年次（総合教科について）および3年間の研究報告書の作成

## Ⅲ. 研究組織

### (1) 研究組織図





(2) 研究担当者

カリキュラム委員 中尾博一（教務） 松本博史（研調） 中道貞子 仲 光雄  
研究推進委員

1年次

研究調査部 松本博史（数） 中道貞子（理）  
教 科 野沢省三（国） 加藤 勇（英） 勝山元照（社） 吉沢榮敏（芸）  
奈良重幸（保体） 上浦一道（技） 原田美知子（家）  
研究開発担当 松本博史

2年次

研究調査部 松本博史（数） 中道貞子（理）  
教 科 芳村昭男（国） 加藤 勇（英） 勝山元照（社） 吉沢榮敏（芸）  
渡辺幸子（保体） 上浦一道（技） 原田美知子（家）  
研究開発担当 松本博史

3年次

研究調査部 松本博史（数） 中道貞子（理）  
教 科 芳村昭男（国） 加藤 勇（英） 長谷川淑子（社） 吉沢榮敏（芸）  
渡辺幸子（保体） 上浦一道（技） 原田美知子（家）  
研究開発担当 松本博史

(3) 運営指導委員会

氏名	勤務校	職名	専門分野	指導教科
小谷 稔	元奈良工業高等専門学校	教授	国語教育	国 語
落合豊行	奈良女子大学理学部	教授	幾何学	数 学
重松敬一	奈良教育大学教育学部	助教授	数学教育	数 学
森井 実	奈良県立奈良高等学校	校長	生物教育	理 科
梁瀬度子	奈良女子大学家政学部	教授	生活環境学	家庭科
岡 俊博	奈良教育大学教育学部	教授	技術科教育	技術科
吉田幸子	奈良女子大学文学部	教授	英文学	英 語
鈴木 良	立命館大学産業社会学部	教授	近現代史	社 会
丹羽助昭	奈良女子大学文学部	教授	体育心理学	保 体
小川清彦	奈良教育大学教育学部	教授	美術教育	芸 術
総 合 教 科 担 当				
松井春満	奈良女子大学文学部	教授	教育学	総合教科
山田 昇	奈良女子大学文学部	教授	教育学	総合教科
杉峰英憲	奈良女子大学文学部	助教授	教育学	総合教科
環境教育協力者				
菊池るみ子	高知大学教育学部	助教授	教育学	環境教育

## IV. 研究開発の経過

昭和63年

12月8日 研究開発校希望調査提出の件を研究調査部より会議に提案、了承

平成元年

2月12日 内示

2月16日 カリキュラム委員の決定、運営指導、研究推進委員の決定

2月22日 文部省へ研究開発実施計画書の提出

3月4日 第1回カリキュラム委員会

3月16日 第2回カリキュラム委員会

3月17日 教官会議 新カリキュラムの実施決定

5月6日特別会議の開催を決定

4月8日までに各教科のカリキュラム試案の提出を決定

4月1日 教育課程の基準改善のための教育研究開発の実施の囑託を受ける

4月15日 第3回カリキュラム委員会 特別会議のための議案作り

5月6日 第1回研修会(特別会議)教科ごとに新カリキュラムの説明

5月19日 第4回カリキュラム委員会 2-2-2制に伴う問題点の洗いだし

5月23日 教官会議 総合教科について吉田裕、勝山教官から提案

5月24日 第5回カリキュラム委員会 教官アンケート原案作り、文部省提出資料作り

6月1日 第6回カリキュラム委員会 教官アンケート討議と作成

6月6日 第7回カリキュラム委員会 会議の進め方について討議

6月7日 教官会議 教科別のカリキュラム原案を7月20日までに作成することに決定、教官アンケートの記入について説明

6月14日 第1回推進委員会を開催 総合教科の推進を担当することを決定

6月26日 第1回運営協力者会議案内状の発送

7月13日 第2回研修会 大阪大学 水越敏行先生<研究開発校について>

7月15日 第1回運営協力者会議

7月28日 第8回カリキュラム委員会 各教科提出されたカリキュラム原案を討議

8月30日 第9回カリキュラム委員会 8月31日の会議案の作成と持ち方について

8月31日 第3回研修会 教科提出のカリキュラムを討議

9月6日 第2回推進委員会 総合教科について各教科の内容原案の提出の決定

9月20日 第10回カリキュラム委員会 文部省視察打合せと資料の作成

9月27日 教科提出カリキュラム内容の討議-精選をめぐって-

教官会議におけるカリキュラム討議の質的転換-教科内容の検討から枠組の検討へ、総合教科の今後の予定を示す

9月30日 総合教科について各教科から目標と内容の案が提出される

10月2日 第3回推進委員会 総合教科の日程を協議

10月3日 文部省研究開発校実地調査

文部省より神田外国語大学教授 佐々木輝雄先生・中学校・高等学校課教科調査官 江田稔先生・高等学校課研究開発担当 一井武明先生の3氏が来校し、授業参観及び研究開発の実施状況の経過報告について協議する

- 10月11日 全体会議 時間割り枠組、履習単位、5－6年の選択について教科へのアンケート
- 10月12,13日 平成元年度地区別教育研究開発協議会へ出席（仲、松本）
- 10月25日 第4回推進委員会 総合教科実施教科へのアンケート実施  
教科の決定、講義時間数、フィールドワークの内容と時間数、発表形式について調査
- 11月1日 全体会議 5、6年の選択制についてカリキュラムのモデルを提示
- 11月11日 第10回カリキュラム委員会
- 11月13日 第5回推進委員会 総合教科に関して教務に係わる側面の説明
- 11月15日 全体会議 カリキュラム枠について、5、6年の選択制
- 11月24日 第11回カリキュラム委員会 教官意識調査の原案について
- 12月1日 第6回推進委員会 実施教科の回答の検討
- 12月6日 全体会議 カリキュラムに対する教官意識調査の説明と記入
- 12月9日 第12回カリキュラム委員会 教官意識調査の検討
- 12月13日 全体会議 教官意識調査の説明と記入
- 12月18日 第7回推進委員会 枠組原案の作成
- 12月20日 第13回カリキュラム委員会 教官意識調査の分析結果に基づく委員会のカリキュラム原案を示すことを決定

平成2年

- 1月9日 全体会議 総合教科案討議
- 1月12日 第14回カリキュラム委員会  
全体会議提出用カリキュラム1次原案の討議
- 1月24日 全体会議 カリキュラム1次原案の討議（第1回）
- 2月7日 全体会議 カリキュラム1次原案の討議（第2回）
- 2月21日 全体会議 カリキュラム1次原案の討議（第3回） 1年～4年の時間数を決定  
1次原案に関するアンケートの実施
- 3月5日 第15回カリキュラム委員会 アンケートの分析
- 3月7日 全体会議 アンケートの報告 中学1、2年の英語20人学級について
- 3月10日 第16回カリキュラム委員会 2次原案の作成
- 3月20日 文部省報告書作成
- 4月7日 平成2年度第1回カリキュラム委員会 奈良学オリエンテーションについて打ち合わせと生徒用アンケート作成
- 4月13日 第2回カリキュラム委員会 カリキュラムについての教官アンケートの内容審議
- 4月18日 平成2年第1回全体会議 新カリキュラムの具体化のためのアンケート実施
- 5月16日 第3回カリキュラム委員会 アンケートの分析と具体化のための提案事項の決定
- 5月19日 第2回全体会議 平成2年度本校紀要を新カリキュラム特集、平成3年度紀要を総合教科<奈良学><環境学>特集とする事について討議
- 5月22日 第4回カリキュラム委員会 新カリキュラム実施のための周辺問題について
- 5月23日 平成2年度第1回推進委員会 紀要の内容について討議 新カリキュラム編成の視点と内容の系統図・一覧表を6月30日までに提出  
本年度運営指導委員会は教科毎に随時開催を決定
- 6月5日 カリキュラム委員が大阪教育大学教授 鈴木善次先生に環境学について指導と助言を受ける

- 6月7日 平成2年度研究開発学校連絡協議会に出席 (中尾、中道、松本)
- 6月20日 第1回環境教育委員会 今後の計画の立案
- 7月3日 第5回カリキュラム委員会 新カリキュラム実施についての教務部原案について討議
- 7月4日 第3回研修会 大阪大学人間科学部教授 梶田一先生 開発学校の役割について
- 7月4日 第2回環境教育委員会 環境教育の各教科の基本的な考え方について  
奈良女子大学杉峰先生、高知大学菊池先生が継続的に環境教育委員会に参加することが決定
- 7月17日 第6回カリキュラム委員会 全体会議提出原案の討議
- 7月18日 第3回全体会議 新カリキュラム実施細目についてのカリキュラム委員会原案についての討議
- 9月1日 第3回環境教育委員会 各教科提出の内容を説明
- 9月3日 第7回カリキュラム委員会 全体会議提出原案の打ち合わせ
- 9月5日 第4回全体会議 道徳、H・R検討委員会の設置、科目名の決定
- 10月3日 第5回全体会議 校時についての討議
- 10月11,12日 平成2年度中部地区教育研究開発協議会(岐阜)出席(松本)
- 10月17日 第6回全体会議 朝の会・終わりの会について討議
- 10月18日 第4回環境教育委員会 水・空気・緑をテーマにする事について討議
- 10月31日 第7回全体会議 空き時間の生徒の過ごし方、自習室の確保について
- 11月7日 第5回環境教育委員会 50時間の分配と具体的内容の構成  
環境教育構造化 杉峰先生よりプリントにて説明
- 11月21日 第8回全体会議 新カリキュラム実施細目についての討議の継続
- 11月24日 日本科学教育学会(於大阪教育大学)で理科を中心とした環境教育について報告(中道)
- 12月5日 第9回全体会議 校時、教室の配置、空き時間の処理、履修しても習得しなくともよい時間数、1講座あたりの人数等について合意
- 12月15日 第6回環境教育委員会 講義内容の検討
- 平成3年
- 1月17日 第7回環委 50時間の教材の具体例の検討
- 2月23日 第8回環委 オリエンテーションの内容について
- 3月22日 第9回環委 岩井川の下見
- 3月30日 第10回環委 講義内容について <理科分野講義内容>
- 4月17日 第1回全体会議 新カリ実施について 英語科専任講師について
- 6月5日 第2回全体会議 新カリ実施について 自習室の確保について
- 6月10日 平成3年度研究開発学校連絡協議会に出席 (吉田、中道、松本)
- 7月3日 第3回全体会議 新カリ実施について 生徒会活動について
- 7月17日 第4回全体会議 新カリ実施について 学校行事の見直しについて
- 9月18日 第5回全体会議 公開研究会について
- 10月17,18日 中部地区研究開発協議会(山梨)にて本校の研究経過を松本、中道、吉田が報告
- 11月22日 公開研究会 研究開発学校指定実施報告と総合教科の公開授業
- (文責 松本博史)

## V. 研究内容1 カリキュラムの編成

### 1. 学校改革・教育目標・青年期教育

吉田 裕・松本博史

#### 1. カリキュラム編成の背景

##### (1) 6年一貫(1972年以前)前の本校

###### 生徒の構成

中学入学者の構成：附属小学校から60～70人(競争率1.1～1.3倍)

一般小学校から70～80人(競争率3.5～4.7倍)

###### 方法：学力試験

高校入学者の構成：附属中学校から110人(中学の成績下位者の約40人が不合格)

一般中学校から40人(競争率10～16倍)

###### 方法：学力試験

##### 〈問題点〉

附属小学校から中学校への70人の接続は、同じ大学の附属であるからという名目上の理由からだけで、小・中・高の連続した児童生徒を対象にした教育実践や教育研究等が一切為されたことがない、いわば中味がないのに容れ物だけが年々用意されているという体制であった。これについては、毎年、入学試験の時期になると、一般の受験生の保護者からその不公平性に現在も抗議を受けている。

中学1年入学段階において、1クラスの半分までが1つの特定の小学校からきている生徒達が占めているのは、異常な状態といわざるを得ない。附属小学校からの学習習慣、強固な友人関係、問題行動がそのまま中学校に持ち越される。また、PTA活動に於いても接続生徒の保護者と外部からの保護者の感情的な食い違いと、偏った人間関係は6年間継続する。

中学校から高校への接続段階での問題点は、同じキャンパスで、同じ教師が兼務して教えているのに、その教師が自分達の教えている生徒を選別し、ふるい落とし、自分達が教えてきた生徒のうち低学力者を外に出して公私立を受けさせる。その一方では、公立高校の入試に先立って一般中学の優秀な生徒の上澄みをすくうようなやり方で、できるだけ優秀な生徒を集めるというエリート校志向でもあった。

このような中・高接続制度のもとで、入試を控えた中3段階での生徒、父母の動揺は大きく、クラスの生徒同志の反目、そこからくる学級経営の困難化、毎年繰り返される中3担任や生徒会の〈一貫アピール〉の運動が活発化した。

外的な問題点として、公立高校の入試制度が内申書重視のため、外へ出る生徒は、学力試験ではたとえ上位にあっても、内申が不利のため落ちるといった結果になった。全国的には、附属学校の入試をめぐる不祥事をきっかけとした附属の体質へのマスコミの批判等が起こりつつあった。

##### (2) 6年一貫後(1973年～1988年)の本校

###### 一貫後の主な取り組み

1973年 高校入試の廃止、中高6年一貫開始、中学入試に実技を加味。

(附属小学校50名、一般85名)

1974年 学校行事の見直し

1975年 校区を縮小、標準学力テストの実施、6年一貫カリキュラムの検討・実施。

- 1978年 抽選（志願者を抽選により定員の3倍に絞る）の後、テスト・実技による入試。  
校内研究会発足、教科担当者会議の開催。
- 1979年 40人学級（附属小学校50名、一般70名）
- 1985年 校内研究会に於いて授業公開
- 1987年 公開研究会の開催
- 1989年 情報教育部の設置
- 1989年～1991年 研究開発学校指定
- 1991年～1992年 コンピュータ利用教育文部省指定研究校

〈問題点〉

入試制度を変更して、奈良県下の〈有数の進学校〉から〈普通の高校〉を目指した。上のように、制度的、形式的な取り組みは数々行われたが、それにとまらざるべき教育の中身を支えるための研究と実践が遅々として進まなかった。

しかし、歴史スライド作り、英語劇、フィールドワーク、奈良公園観察、岩石調査、音楽会、写生会、百人一首大会、工場見学等ただ知識を詰め込む受験勉強ではない教育が実践された。これらの実践の積み重ねは、その後の総合教科の実践に際しての本校の〈自信〉と〈推進力〉となっている。

1980年代後半になると、数々の矛盾が表面化してきた。予想以上の急速な学力差の拡大（高校3年時で偏差値30～85）による高校でのクラス別授業の困難化が最も大きな問題点となった。当初、このような状況の変化に対して、学力差に対応するための教育課程の研究や教育実践よりも、学力差を縮めるための方策の模索－入試制度の変更－の方が先行する傾向があった。

〈くのびのび〉が〈くだらだら〉となる中学3年あたりでの〈なかだるみ現象〉や高校入試がないことからくる緊張感の欠如の結果、学習、生活の両面にわたって〈乱れ〉が顕在化した。6年一貫教育で期待された生徒会活動やクラブ活動の活発化も見られず、次第に生徒の自治力や自主性も失われて行った。学園祭の低迷に対する教師のテコ入れ、〈ゆとり教育〉への参加意欲の減退にたいする、教師のヤラセの傾向が出始めた。

これらの矛盾や混乱した現象に対して、教師は、先ず進路保障の立場から、低学力生徒への指導に力を入れた。個別指導、補習、追試験、追追試験等の対策を取った。しかし、このような指導が特定の生徒達に集中し、その生徒達が耐えきれないということもあった。

中学での学習の遅れは、高校での学力差の拡大につながり、高校3年段階でも、スムーズに受験態勢に入れないほど日常の学習習慣のついていない生徒が年々増加していった。それは、進路の多様化となって現れ、教師は多様化に対応するために、様々な補習を放課後や夏休みに実施した。それと同時に、授業方法の工夫、試験問題の易化、評価方法の改善、進学規定の見直し、高2・3年での選択科目を増やすカリキュラムの手直し、高2における英語の到達度別クラス編成の実施等の対応策を講じた。これらの対策は、一面では教育の持つべき〈厳しさ〉の喪失であり、意識の高い生徒達の〈やるき〉を殺ぐことにもなった。

中学でも、中1・2で、学習習慣をつけるための担任による補習や個人指導、中3での学力テストの実施等が試みられた。しかし、これらは小手先の改善策であり抜本的な改善には至らなかった。

生徒指導においても、遅刻者の入室許可書制度、校門指導、学校不適応生徒の指導・家庭訪問、問題行動（非行）の多発とそれ等への対応等、学校の秩序を維持するための特別な対策の必要性が生じた。

このような学習指導、生徒指導の対応策は、生徒の自主性の喪失、教師の管理教育の強化とな

った。これと軌を一にして、教師間において、クラブ指導と学習活動に関する意見の不一致、生活指導における問題認識の不一致、理論と議論の先行、世代間のズレ、教師の高齢化等本校の教師集団の弱点が一挙に表面化した。

本校の目指していた<普通の学校>とはどんな学校であったのか、そこでどんな教育を実践しようとしていたのかについて、教師間に共通のイメージも認識もなく、本校はいかにあるべきかという<本校のアイデンティティ>を喪失した状態に陥った。

その反面で、目前の生徒達に対応するために為された教材作りに対する教師の努力は、校内的には、貴重な教育研究や教育体験が蓄積され、各教科の6年一貫を見通したカリキュラムや教材の構成、校内での授業の公開と相互批判、公開研究会の開催、いろいろな教科で取り組まれたフィールドワークの蓄積、校外的には公立中高の先生方との教材研究のための学習会の開催、教科書執筆への協力依頼、数教協、歴教協等の民間教育団体の機関誌、教科教育雑誌や出版物への執筆依頼、各地の研究会からの講師依頼となって結実した。

## 2. 学校改革へ ―学校をとりまく状況の変化―

本校の教師が、生徒のいろいろな問題に対症療法的な対応策に終始し、本校のアイデンティティを模索している間に、教育をめぐる社会的な情勢は大きく変化していた。大学入試の共通1次テスト実施により、進学予備校等の受験産業は大型コンピュータを駆使した情報産業として大きく成長し強大になった。その受験産業の弾き出す偏差値は、全国の国公立大学の序列化と、同時に私立大学の序列化をも生み出した。その結果惹き起こされた、国立よりも私学へという流れ<国公立の地盤沈下>が私大への入学を著しく難化し、本校の生徒達の近畿圏の私立大学への入学は非常に困難なものになった。県内でも、大学入試に対応した私立6年一貫中高校が増加し、それが学習塾を繁盛させた。また、国民の加熱した受験への要求は、本校の目指した教育とは、逆方向に向かっていった。

その中で、本校の進路指導は、生徒の幅広い学力差と要求の多様化に応じる体制を組むことができなかった。国公立・私立・短大・専門学校・就職に関して全ての情報を整えることや、それに対応するための学習指導体制を十分とることができなかった。そこから自分達の教師としての力量に限界を感じ、限られた力量で面倒を見られる程度にまで学力差を縮めたいという空気が教員間に生まれてきた。それと絡んで、学力差の最大の原因でもある附属小学校からの慣習的な連絡進学の足枷がどういかならないものかという年来の懸案が浮上した。

校内暴力、いじめが社会問題化していた頃は、かつての進学校のイメージと高校入試のない自由な学校として、一時的に受験者も増加した。しかし、<有数の進学校>から<普通の高校>への変身の当然の結果として、いわゆる有名大学への合格者数が減少する、それに呼応する形で、本校への受験者数が次第に減り始めた。特に、男子受験生の減少は著しく、本校の男子生徒は近隣の私立中学に合格しなかった生徒達が集まるようになった。だから、本校の中学1年生の担任の学期当初の仕事は、クラスの男子生徒達にいかに自信と誇りを持たせ、積極的に、前向きに学校生活に取り組ませるかということである。

附属小学校からの受験生も、附属中学を避け、有名私立中学へ進学する傾向が年々強くなった。本校が進学校としての実績が減少すると、奈良市民にとっても小学生にとってもかつての魅力ある存在ではなくなった。

このような現実を前に、この10年間の本校教育の成果と問題点を分析、整理し、本校の教育を見直し、本校のアイデンティティを確立しようという機運が生まれ、1987年から<学校改革>が教官会議で議論されることになった。

### 3. 教育目標の設定

本校には、もともと、明文化された教育目標というものはないが、生徒中心・学問主義的・反受験主義の伝統があった。本校の教育についての全てのことは、教官会議の場で時間をかけて議論し、決定し、実行するという暗黙の了解が存在していた。

本校では、〈いろいろの生徒と教師がいろいろの所において、いろいろ楽しいことをやっている〉〈くたいていの生徒が誰か（教師）と関わりを持っている〉—このような状態に、この学校はサロンだという批判も聞かれた—というように、伝統的に教師個人の個性と教育観に基づき、個々の教師が自分の責任の範囲内で生徒と接し教育活動に従事していた。それが本校教育の大きな魅力の一つであり、自由な校風を生み出す大きな要素でもあった。

教育目標を設定するという合意のもとで議論を進める過程では、教師全員が納得できる目標が設定できるかどうか、ずいぶん危ぶまれたが、本校の教育改革を成功させる為に、幾度も熱のこもった議論が繰り返された。

まず、教育目標を作るために、次のような4項目が合意された。

- ① 本校の伝統的な自由な校風を基本にすること。
- ② <受験主義>による進学エリート校にしないこと。
- ③ 進路を保障する学力をつけること。
- ④ 現代の社会情勢に応じられること。

このような視点のもとに、何回かの議論が行われ、次の3つの教育目標とカリキュラム作成の方針が合意された。

#### 本校の教育目標

- ① 自由で自立した人格と社会的責任の自覚を養う学校  
自主的学習活動、生徒会活動・クラブ活動などを通じて、豊かな人間性と社会道徳、社会への適応性を養う。
- ② 多様な能力に対応し、それらを伸ばせる学校  
生徒の特性や能力に応じて、勉学、芸術、スポーツ、自治活動を保障する。
- ③ 社会、世界に開かれた学校  
留学生、帰国子女、社会人等も受け入れる。社会体育と連携したり、社会人や教育関係者などを講師として招く。

#### カリキュラムの指針

- ① 第1学年から第6学年までを、2-2-2年制の3段階に分ける  
低学年（1～2年）……基礎的学力及び学習の基本的方法を習得する。集団生活の民主的・道徳的ルールを身につける。  
中学年（3～4年）……自主的・体験的・実験的学習を取り入れ、幅広い学力を身につけ、学習意欲を高める。  
高学年（5～6年）……学力・能力・個性・特性・進路に応じた学習の保障、人間性豊かな自立した人格の育成を図る。
- ② 全ての学年・教科において、従来の学習方法を一步進めて、生徒の主体的な活動を重視し、あらゆる表現活動の育成をめざす。
- ③ 2つ以上の教科で合同した科目を設置する。



## 4. 入試改革

### (1) 抽選制度改革

教育目標を達成するために10年間続いた入試方法を再検討することになった。特に、＜抽選→試験＞制は、生徒の学力差の拡大をもたらした大きな原因であったために、議論が集中した。進学校でない象徴として抽選制を堅持すべきだという意見、既に進学校ではなくなり抽選制の意味がなくなった、抽選をやめても県内の私立のほとんどが進学校であるために再び昔のような進学校には戻らない、これからは女子大附属中・高校の教育そのものでアピールすべきだ、等議論が繰り返された。

結局、抽選制を廃止することが多数の意見として合意された。しかし、1年後文部省の指導により以前とは異なる形式＜1次試験（基礎学力）→抽選→2次試験＞で再び抽選が導入されることになった。

### (2) 附属小学校との接続入試改革

附属小学校からの接続人数は50名プラス数名と合意されていた。しかし、附属小学校からの志願者は年々減り、特に附属小学校での成績上位者が抜ける＜上抜け＞現象が著しくなり、本来の接続の意味が有名無実と化していた。そのため、附属幼稚園・附属小学校・附属中高・大学の代表により附属学校接続委員会を設け接続の意義と接続方法を討議した。

そこで合意されたことは、①大学として、幼・小・中高・大の接続の意味とその方法について引き続き検討する。②小学校と中学校との接続は、互いの教育を尊重する。③入学検査に於いて、附属小学校の特別枠は設けないが、接続の意味を考慮する。

### (3) 上の合意に基づき当面次のような入試方法を実施している。

1次検査……国語・算数の基礎学力（受検者の平均点が80点前後）によって定員の3倍にしぼる。  
附属小学校からの受検者はこれを免除する。

抽 選 1次合格者が受ける。

2次検査……国語・算数・社会・理科（実験を含む）・体育（実技）・家庭・図工（実技を含む）  
音楽（実技含む）の8教科

1次検査・抽選合格者と附属小学校の受検者が受ける。

合格判定……1次検査（附属小学校の受検生は内申書の点数）と2次検査との合計点によって決定する。

この入試制度は目下のところ、附属小学校からの接続人数に問題がある。本校でも、教育内容の検討の継続と相俟って、接続の意義、入試制度の検討、共同研究の進め方等を、附属小学校との間で協議していくためのワーキンググループが作られ具体的な活動が始まっている。

## 5. 青年期教育としての6年一貫教育

松 本 博 史

本校の6年一貫教育をめぐる問題点を、生徒・社会・学校の枠組みから考える。

### (1) 生徒：青年期

本校に在籍する生徒達は、「青年期」のまっただなかにある。モーリス・ドベスは『教育の段階』において、青年期を「思春期」と「青年期」とに分け、「思春期」は12歳から16歳で、この時代の問題は生理的な成熟が基礎にあり、不安と動揺の時期であるとしている。今まで絶対であった教師に対しては、その学識の面や、人格の面についても、欠点が目立ち、敬愛していた両親が、尊敬に値しなくなり、むしろみだらにみえ、うとましく、嫌悪感が先にたつようになる。ま

た、身の回りの整理整頓をきちんとしていた子供が、ある日突然、生活習慣や態度も乱れ、親にとっては全く別の子供になったかのように感じる。これは、古い自分を壊し、新しい自分を作るためには、それまでの人間関係—特に親子関係—を作り変えなければならないからである。そのとき、壊すべき関係が強固であればあるだけ、関係の再構築のための土台は強固になる。だから、壊すべき壁が存在しなかったり、軟弱であれば後日、問題行動が生じてくることもある。

「思春期の入り口における退歩とゆらぎは法則的であり、子どもたちは、次の飛躍へ向けて、一步後退したところから助走を始めているように見える」だから、教師や親は<退歩>と<ゆらぎ>から生じる問題について、強圧的にのみ対応するのではなく、<法則的>なものであるという認識を根底に持ってこの時期の生徒達に対応しなければならない。

ドベスの「青年期」は16歳から20歳までで、この時期は、「感性と知性の不均衡、あるいは内的世界の発見と外的世界の拡大、孤独と憧れ、自己中心性と自己犠牲、内面への沈潜と激しいアクティング・アウト的な行動、力が充実してくると同時に、なにものに対してもアパシーになっていく二極分裂的な傾向を持つ時代」で「それは個性の発見の前兆でもあり、そこで内面的な葛藤を繰り返すなかで、自分で自分を発見していくのであり、そのような発達上の重要な段階が「青年期」なのである」「この過程はまた、それまでの親子の関係の変化と精神的乳離れを体験する自立の過程でもある。こうして、この時期は自己の発見と自立の時期であり、それが「第二の誕生」といわれる理由でもある」（堀尾輝久氏『教育の原理1』東大出版会1985年）

## (2) 社会：株式会社日本の裏庭

マーガレット・ミード女史は『サモアの思春期』において、青年期というものは文明が原因となって生じ、きわめて歴史的・社会的な現象であることを明らかにした。西平直喜氏は、「青年期は資本主義的生産社会の副産物」「青年期の長さは文明のパロメータ」という考え方が優勢になってきた、と述べている。（岩波講座『子どもの発達と教育6』）

今日の教育をとりまく状況は、東西の軸の消滅という歴史的転換期に遭遇している。<教育の南北問題>において、日本の教育は、先進「北」側工業国に共通した問題に直面している。すなわち、経済競争に絡み取られる形での受験競争で日本が最先端を走っている。明治以来、日本の教育は制度、内容、方法ともに諸外国にモデルを求めていた。しかし、現在はそのモデルがなく、<経済発展=教育の成果>という形で、逆に、諸外国のモデルにされようとしている。

発達の見た現代日本の教育的状況は<株式会社日本の裏庭>という表現がすべてを物語っている。裏庭には表に置けない<汚物>を人目につかないように置くように、裏庭は表の矛盾が集中する場所である。すなわち、株式会社を支えている家庭は、「父親不在・モデルの揺らぎ」「密室の母子としての密着」「核家族」という問題を抱え、学校では、画一主義、管理主義、偏差値重視等がはびこり、自立への成長の足を下から引っ張っている。また、社会の価値意識としての学歴主義、競争主義、序列主義が、青年の頭の上から、「一人前」への自立を抑圧している。

最近、問題行動を起こす、あるいは行動にいたらないまでも<アレル>生徒達は、大なり小なり<家庭の問題><両親の問題>を抱えている場合が多い、担任は生徒達と同時にその家庭までをサポートする必要にせまられる場合がある。そのような場合、家庭の状況が回復されて初めて、生徒が自立を始めることが多い。

## (3) 学校：発達のみた本校のカリキュラム

身体的成熟、豊かな感性、論理・認識能力の育成、社会性の育成、自己選択性の育成、アイデンティティの確立が中学・高校期の間には一体化し、連続した流れとして達成されていく。この時期に、中高の6年を一貫し、切断することなく、これらの発達課題を遂げさせることは大切であ

り、意味がある。ここに、本校の最大のメリットがある。

従って、本校のカリキュラムには、いかに確固とした自立を達成させるかの観点を明確に含まねばならない。また、この裏返しとして、青年期を分断しないでまるごと抱え込むことについての問題点にも十分対応できる学校のシステム作りが必要となる。

#### ① <中だるみ>と生徒指導

本校の教育の問題点の一つに<中だるみ>の問題がある。中だるみの現象は、中学3年生、高校1年生の時期に発現し、勉強しない、クラブ活動もしない、生活の習慣が崩れる、規則を守らない等の現象として表れる。しかし、<何もしていない>のではなくて、水面下では、活発な活動がなされている。数学的な発見が、しばしば「孵卵期」と言われる時期を経てなされるのは有名な事実である。この孵卵期の存在は、文芸、芸術活動などあらゆる創造活動に存在することが報告されている。また、孵卵期の前後には、大変なエネルギーを必要とするとも報告されている。中だるみは自分を模索する時間であり、成熟への孵卵期間と考えられる。親や教師の目には、子どもたちが、一見何もしていないように見える、しかし、次のジャンプへのための体勢作りである。

この時期の退行現象である馬鹿騒ぎや逸脱行動は、「それまでの自己の殻を破って、新しい自分へと脱皮するための通過儀礼である。」(堀尾)とさえ言われているが、この時期を共に過ごすわれわれ教師はこの馬鹿騒ぎにつき合い、しかも適切な時期を見計らって収拾し、新しい規範や規律を身につけさせなければならない。この時期の生徒を担当する教師は、生徒達と面と向き合うのに非常なエネルギーを消耗する。このエネルギーを節約すると高校生になったとき、それ以上のエネルギーを投入する必要がでてくることもある。

この時期の生徒達は、<だらしなく><まったくいいかげん>である。だから、このような状態を<放置>する教師の行動は、保護者にとっては、本校のしつけ教育に対する<いらだち>の原因にもなっている。

本校の発達的な観点からの今後の問題点としては、学校不適應・登校拒否・自殺に対する対応を考えておかなければならない。幸い、目下のところ本校の登校拒否率は極めて低い。自殺者は高校入試がなくなってからはでていない。

軽度の学校不適應傾向にある生徒も潜在的に存在しているが、いまのところ、担任の努力とそれを支える教師集団の存在、学校全体の<自由な空気>に救われているところがある。不適應傾向にある生徒達は、どちらかといえば、繊細で傷つきやすく、個性豊かな生徒であるので、彼らには、かなりの<自由の保証>が必要となる。また、彼らに対する教師の姿勢は、相手を認め、受容し、彼らと共に苦悩を分け持ち、愛情をもちながら、ともに歩む人、自分自身も生き生きと生きる人間でなければならない。とくに、弱さを持つ生徒への指導は、人間的成長と人間性と人権への深い配慮を持って接して、共感と信頼にもとづく厳しさが要求される。このような教師の指導は、その他の生徒に対しても人間的共感と理解を呼び起こすものとする。

本校では、時間的余裕があり、生徒たちは迷い、悩み、馬鹿騒ぎする時間が十分ある。われわれ教師は、3年間で子どもたちを見るのではなく、高校卒業時には、とにかく一大人になって一巣立っていくという確信を持って、6年間の幅でゆったりと見ることが出来る。

本校の生徒指導は、すべての教師が一致団結して、一枚岩的に、歩調を合わせることは巧くない。個性豊かな教師が、積極的に、独自の方法で、生徒達に働きかけることで担任と生徒の信頼関係で成立している部分がある。ところが、この10年余りの間の生徒の多様化の中で、これまでの本校の指導体制では対応できない事態も生じ、教師間の意志統一も図れない局面も現

れてきた。がしかし、上のような本校の教育の根底を支えている伝統は、開かれた、自由な雰囲気の中の民主的な教師集団の存在と、教師、生徒が共に自主的に、各自の責任で行動し、本校の教育に関わるすべての事柄について、自由に討議する場の保証である。

## ② 本校の教育目標と教育的援助

青年期における6年間を発達のみにみた場合、まず最初の2年〈小学校からの離陸〉と最後の2年〈社会への着地〉という発達課題が明確に決まる。次に、生徒たちには明確な課題の見えてこない、しかし、発達のには重要な〈中だるみ〉に象徴される〈混沌〉の2年間がみえてくる。このような、2-2-2の各段階に目標を設定し、発達課題に積極的に働きかけるカリキュラムを構造化した。

### 低学年（1～2年）

基礎的学力及び学習の基本的方法を習得する。集団生活の民主的・道徳的ルールを身につける。

#### 教育的援助・指導

- ・いろいろな教師との出会い
- ・自分達で考えて実行できるという有効感と達成した成就感
- ・グループ活動の基礎的訓練
- ・楽しくわかりやすい授業、具体的、操作的な方法を取り入れた授業
- ・自治的活動の奨励

生徒と教師の出会いは、教師にとっても生徒にとっても大きな意味を持っている。生徒にとって、教師は、彼らの両親と同様に、最も身近な大人モデルである。小学校とは違い、教科毎に異なる多数の教師と出会う。多様な個性豊かな教師と出会い、彼らなりの教師について発見と体験を繰り返す。そのうちに、生徒の自我の発達にともない、ある生徒は〈自分にとっての教師〉を見つけ、また、別の生徒は、反発を持ちながら教師とつき合うことにもなる。しかし、高校生になり、卒業も近づく頃になると、反発を持っていた生徒も、同じ生身の人間として、教師をくゆるせるようになり、新たな出会いを持って卒業していく。このような出会いが、生涯にわたっての「友人」となることもある。

一泊行事や遠足の際の行き先、グループの組み方、適切な服装、おやつの費用など諸々のルールを自分達で決める体験を通し、〈自分達でやった〉〈自分達でできた〉という経験をさせたい。これによって、積極的に次の行事への参加を促すことができるし、グループ活動の基礎的訓練にもなる。

この年齢は具体的操作期から形式的操作期への移行の時代でもある。だから、授業内容・方法・展開に十分留意する必要がある。本校の教師は、高校と兼任であるために、教師はつい抽象的な授業展開になりがちである。しかし、発達のには、抽象的思考に抵抗を示す生徒も存在している。だから、具体物、実験、操作などを取り入れた楽しく分かりやすい授業を心がけなければならない。そして、学ぶことの楽しさと意義が生徒達に理解されるようにしたい。この時期の授業に対する感情が、授業に対する生徒の態度、取り組みの姿勢に影響を与えると考える。また、課題の提出や期限の遵守、宿題の励行、授業を受ける態度等の学習習慣もこの時期に、きっちりと身につけさせたい。

基礎基本の充実のために、数学の授業時間にゆとりをもたせ、週4時間確保したり、英語の20人学級と外国人講師の採用を保護者負担で実現し、〈聞く〉〈話す〉ことを中心に入門期の英語教育を実践している。最大の問題点はこれらの経費の大部分が保護者負担であるところである。今後、公費負担のために、国への働きかけを継続的に続けねばならない。

## 中学年（3～4年）

自主的・体験的・実験的学習を取り入れ、幅広い学力を身につけ、学習意欲を高める。

教育的援助・指導

- ・自分にとっての教師の発見
- ・学習方法の確立
- ・自己表現、自己主張（教師批判、学校批判）
- ・水泳訓練、グループ活動
- ・自治的活動の保障

この学年では、生徒達はかなり抽象的な思考も可能になっているが、まだ完成の段階にはない。だから、最近接領域にある発達課題を積極的に提示し、この段階を完成させたい。その具体的な方策の一つとして、課題学習がある。具体的な課題（奈良学）から抽象的な課題（環境学）へと進むフィールドワークを実践することを通し、各自の学習方法を確立させ、真の学力をつけるための基礎を作りたい。この学年で各自の学習方法をしっかり確立させることが、後々の為に是非必要な課題である。

3年時の水泳訓練では、学年全員が、訓練の計画、立案、運営、総括等に何らかの形で参加する。これらの取り組みの経験や、遠泳の成功により、彼らは、身心ともに、一回りも二回りも大きくなる。

フィールドワークや水泳訓練での活動はグループ活動が中心となる。だから、生徒達は集団の中で、自己主張と協調といった矛盾する場面に立たされることにより、社会性を養うことができる。

学校の規則や教師の発言や行動に批判的になるのもこの時期である。生徒会の執行部が中心となり、中学3年生が制服の自由化運動を勢力的に毎年繰り返すが発達のギャップのために、全校的な展開にならない、低学年の生徒達には、制服自由化は自己の課題と成らないし、自己主張の必要性をも感じていない。ここで、きっちりと教師批判や学校批判をしておくことは、生徒自身の自立にとって必要なことである。

この学年の特徴である〈中だるみ〉についてはすでに述べたが、それを避けるために、適切な課題を工夫することによって、緊張感のある充実した中学年を送らせるのが本校教師の願いである。

## 高学年（5～6年）

学力・能力・個性・特性・進路に応じた学習の保障、人間性豊かな自立した人格の育成を図る。

教育的援助・指導

- ・同じ大人としての教師との邂逅
- ・自由と責任、権利と義務
- ・自己選択権の保障と選択学習の拡大
- ・職業選択能力、キャリア教育

この学年の生徒達は、本校の自治的活動を中心に担わなければならない。クラブ活動、生徒会活動、学園祭等では、リーダーとしての役割を果たしている。これらの活動に対し教師は、彼らの力量に応じた対応の仕方をしなければならない。彼らの行動（企画・運営）に対し、問題がある場合には、教師集団の考え方を示し、真っ向から〈対峙〉する形で、教師と生徒の交渉を、合意点が見つかるまで、繰り返し、執拗に行わなくてはならない。

自らの進路選択を自ら決定し、いかにスムーズに〈社会への着地〉ができるかは、低学年期の基礎学力の充実、中学年期の学習方法の確立を経て、自立した人格の形成の可否に依存するだろう。

この学年の成長が、本校の教育活動全体の総合評価と見なせる。この学年の生徒達を各自の希望の進路に向かっていかに取り組ませるか。具体的には、いかに受験勉強にスムーズに入らせる事が出来るか、これがこの学年の教科担当と担任の腕の見せ所となる。一貫前の本校では、<大学受験などは本人の責任、学校はそんな事は与り知らぬ>という風潮があったが、今はもうそんな時代ではないだろう。

## 6. 女子大附属に期待する 一外からみた附属小・中・高一

平成3年度入学者の保護者に、本校のカリキュラムの詳細の掲載された紀要第32集をお読みいただき感想をお願いしたところ、田村聡子氏より原稿がいただけたのでこれを掲載する。また、奈良女子大の附属小学校を卒業され、考えるところがあり本校を受験されずに公立中学校へ進まれたお子さんのお母さんからも原稿がいただけたので併せ掲載することとした。ともに題目はこちらでつけさせていただいた。

### (1) 「附属小・中高にのぞむ」田村聡子

たまたま、家が附属幼稚園・小学校のすぐそばにあり、“まさか”のくじにも当たりましたので、附属幼稚園の2年保育に入れて入れていただいて以来、今日の中1迄、奈良女子大の附属でお世話になって参りました。そして、この間、娘の場合は、本当に伸び伸びと楽しく過ごさせていただいたように思います。ところが、残念なことに、最後になって表面化した、我々には訳の分からぬ、小・中学校の“不和”に、親も子どももかなり惑わされました。人間教育を柱にし、お一人々は経験豊で、探求心旺盛、こどもの教育に打ち込んでおられる先生方が揃っておられる学校で、どうしてこういうことが起こるのか……。

私どもは、一人娘でもあり、校区の学校も安定していたこともあって、まあ、こどもが人間として、人や自然などに対して、本当に優しい眼差しと関心をもち続け、自分でしっかり自分の道を自分なりに選んで生きてゆける人になってくれることだけを望んでおりました。だから、上のお子さんをお持ちで、まともに受験の波を経験されているご家庭とは少し違って、比較的のんびりしていたと言うか、こわいもの知らずと言うか、とにかく親子共々、日々楽しく過ごさせていただいておりました。そんなわけで、幼稚園の終わり頃から、小学校低学年にかけて、ときどき耳にはいる他のお母さん方の附属小・中高での学習面や進学状況などへの心配も聞き流して、“先生方はプロなんだから、任せておかれればいいのに”と思っていました。それより、私が知りたかったことは、附属小学校の“なかよし・けいこ・しごと”についてでした。小学校入学直前の説明会で一応教えて頂いたのですが、その時はもう一つピンとこず、とにかく“なかよし”というのが私達の時代の自治活動やクラブ活動のようなもの、“けいこ”が学習、そして“しごと”は、ええっと……、ま、これはそのうち分かるでしょうという具合でした。

さて、娘が3年生になりました時、私は、クラスの教養部の委員になり、学校のことを急にいろいろ知るようになり、少々戸惑いました。“自由でのびのび”している学校のPTA活動が、いちいち各担任の先生に相談ではなく“おうかがい”を立てなければならず、委員会で、誰かが新しい提案や分からない点を質問すると、“一応聞きおく”という調子。明確な討議、返答もなくそれはその場限り。

すべてのことは、もう既に決まっていて、ひたすら波風立てずにことを運ぶ、一学年たった2クラスの小さな学校なのに、クラス同志の交流が殆どない状態。私は“これはまるで、一クラスが○×先生王国で、隣は別世界”と感じました。幸い、私が委員の時は、志を同じくする方が隣のクラスの役員の中にもおられて、勿論有志の方々と共にでしたが、合同の影絵交流会が成立し

ました。で、その経験から思ったことは、保護者の方も、余り思惑を考えずに、積極的に“どんどん”アタック”する方がいいと思いました。が、しかし、これも、ここまで。

とにかく、この一種異様な無風状態の中で、様々な憶測、疑問、噂が飛び交い、なんだか妙な具合でした。そして、娘が4年生になった年の半ばの育友会総会で、急に中学校入試方法の変更が発表されました。それを聞いた時、“エッ！何で今ごろ急に？殺生な、なんと強引な中学校だろう。とうとう、附属中高も受験の波に呑み込まれたわけか”などと思い”一体どんな中学校なのだろう”と改めて大きな疑問が湧きました。また、この時、この年の附中の入試に落ちた人で理由を知りたい人には一人々に納得行くまで、その理由を説明するからということでした。しかし、その後、小中学校のどちらからも、何の説明もありませんし、きちんと質問しても、なぜこういう事になったのかについての明確なお答はありませんでした。

ただ、私に分かったことは、小・中の先生方の間に意志の疎通がないことらしい、また、かなり感情的なこじれもあるらしいということでした。そして、“一体、こども達をどう思っているのだろう”と初めて両校の先生方への強烈的な疑問が湧き起こりました。で、さしあたりは、附属中学がどういう中学校なのか知りたかったので、入試説明会に行きましたところが、授業の進め方とか、行事を生徒達が自主的に進めることだとか、教育の基本方針とでも言うか、考え方というか、とにかく附属小学校のやり方と酷似していたわけで、どうしてこれで喧嘩のようなことになるのか、不思議でした。

ところが、過去何年間の附属中学校の入試問題を見て、びっくり。“エッ！こんなこと学校で習っていない、これも、あれも”です。でも常々、小学校の先生方がおっしゃりもし、親も含めての指導もしておられる通りのことを「100%」実行していれば、附属中学への入学は何とかなるものと考えておりました。ところがそれは、理想であってこれでは土台無理。なるほど“附属向き”の塾がはやるのも無理ないなどと妙に納得したことでした。

この年受験なさったお子さんをお持ちのお母さん方はどんな気持ちだったか。私達でさえこんなに動揺したのに。でも、わが家の場合は先に申しました通り、校区の中学校が自由の伝統を持つところだったし、“どちらにしろ、結局、こども次第なんだから”というわけで、残る2年半、精一杯附小のいいところを吸収してくれたらいいと考えていました。しかし、それと同時に、受験々々とは言いたくはありませんが、附属小学校の“けいこ”が中学校段階へ進めるための学力には役立たないように思うようになりました。さて、では、どの程度のことを身につけておけば良いのか、折角の小学校生活を、それこそ“けいこ”だけで過ごさせるのは、馬鹿気ていると思いきや困ってしまいました。

学校でこのことをお聞きしても、例によって、明確な返答は得られないし、幸い知人に小さな塾経営者がいて、相談した所、“お母さん、それは理想。甘い！”“しかし”とこちらも頑張っ“とにかく、つぶしが利く程度に”ということになり、“じゃ、週2日1時間ずつでも来てみるか”ということになりました。この少し前、娘が進研ゼミをしたいと強く言い出して考えていたのですが、内容がとっても面白く、理科などの実験も家である程度できるようになっていたので購読することになり、どちらかと言うと、親が喜んで読んだりしたり、娘はつられて……という風でした。

いよいよ6年生になって、中学校を決める段になって、親の方が迷いました。地元の中学校にしようかと。高校受験はあるけれども、附属より、すべてに於いて、ストレートで、風通しがよいうだったからです。しかし、その反面、その気になれば6年かけて、じっくり自分を見つめたり、いろんな経験を積めるだろう附属も捨て難く。結局、娘の“やっぱり附属に行きたい”で

決まり受験。入学。今、私が少し戸惑っていること、それは、思っていたよりも、附中高の先生方がオープンで率直であり、私達の思いを知ろうとしておられることです。

私が幼・小・中高校について思いますことは、これまでズーッとそうであった様に、人間の変わらぬものを基盤におき続けてそれについての探求と実践を目指していただきたいと言うことです。今、変わるもののスピード、量ともに増して来て、私など溺れそうですが、でも、人間が生まれ、育って行くのにかかる時間、一つ々踏んで行かねばならぬ段階、必要な手順というのは昔と余り変わっていないのではないのでしょうか。いくら焦って、一時は省いてやって行けたと思ってみても、必ず歪がどこかに出てきてしまうのが現実じゃないのでしょうか。

そこに立って、もう一度、オープンマインドに、先生方が、幼・小・中・高とたどっていくすべての子供達の成長という流れを真剣に求めて、見定めて欲しい。たとえ何年かかろうと。

“国立”という昔の栄光などに未練を持たず、いな国立であるからこそ、真の人間を見つめて欲しい。真に自由であって頂きたい。幼・小・中高、各段階に独自の問題があり、時として、対立があるとしても、それも、またよし。ただ、そこには必ず多様な生身の私達の子ども達がいることだけを忘れないで欲しい。研究の対象、手段とされる子どもではなく今日を生きる子どもである、その子ども達のための学校であることを常に忘れないでいただきたい。これこそが、“附属”の意味するものであらうと考えます。一本筋が通ってれば、変わりゆくものへも勇敢に対処して行けると考えます。この一本の筋が通ってれば、私達父兄もそれはそれとして、各々に対処して行けると思います。変化に対しての対処の仕方には色々あるのだし、私達が同意できず、時に別の道を選択してもそれはそれで良いのではないかなと思います。

娘達にとっては、勿論、私達にとっても、とつても、とつても大切な思い出を沢山作って下さった小学校だから、この受験戦争の中で、やっぱり何かと人間教育を目指しておられる先生方ばかりだったから、娘に続いて沢山の子ども達が過ごしている小学校だから、やっぱり言いたいのですが、“けいこ”“なかよし”“しごと”このバランスが崩れ始めているように思いました。なぜなら、この三つの大切な柱は、ひとりのプロで支えきれぬものではなく、多様なプロの有機的結合によってやっと支えて行け、生かして行けるものだと思うのですが。それに必要なストレートさという風が、校内に不足していたように思いました。

また、附属中学校については、相変わらず、どうして、いわゆる“粒揃い”を集めなくてはならないのか、私には分かりませんが、小学校より更に厳しい現実との対決の中、これまた、子ども達の人間としての成長を守り抜こうとする熱意をひしひしと感じます。それ故に、カリキュラムはカリキュラムとして、その中の子どもではなく、目前の子ども達を先ず見ていただきますよう、お願いいたします。親の方にも、非常な責任と問題があることは承知で、本当に手探りで、子育てしております。ひとりの親の言いたい放題、以上です。(平成3年8月14日)

「松本博史から一言」 田村さんがご指摘なっているように、附中高と附小の間には、生徒達だけがつながり、教官同志の教育的なつながりはほとんど(皆無ではない)ありませんでした。しかし、現在は、両校の教科有志の話し合いから始まり、正式な組織として、各校から代表者が出てワーキング・グループを作り、接続問題をはじめとして、小・中高・大学間の教育的な共同研究の検討を具体的に進めることを目指した活動が今年度から動き出しました。



(2) 「外からみた附中高」匿名希望

私は三児の母親でございます。長男は大学2回生、次男は浪人生、長女は附属幼稚園、附属小学校を経て、今春より公立中学一年生です。三人の子どもの変容の中から母親として学び日々痛感しておりますことを、雑感としてまとめさせていただきますのでひとりの母親の拙き考え方としておくみとりいただければ幸いです。

近ごろ、学校教育のあり方を世論の中でよく問われていますが、それよりも先に家庭教育、子どもをとりまく地域社会、受験体制、企業の大学生の受け入れなど、幼児期から青年期までの一貫した教育過程の中に様々な問題点があります。人間形成の基礎基本を学齢に応じて体得させているかどうかの見直しの必要があるのではないかと考えています。今の子ども達は自然とふれあい、土の上の快い感触を手や足の裏で感じながら四季の風に触れ、太陽の恵みにふと心動かされている感性を磨く大切な学習をどこでどのくらいしているのだろうか。

社会がどのように日進月歩変化して行こうとも、人格形成の根源は変わらないものです。いつも状況に流されやすい母親は生活様式が簡便になり、何でも既成のものを入手でき、生活が機能的になると、子育てという親が心身ともに全力投球で臨まねば出来ない大仕事まで、簡便に育て上げる叡知を得たかのように思い違っているのではないのでしょうか。

そんな昨今の中で、毅然として、独自の教育理念に基づいて子ども達をゆったりと緻密に教育していただいた附属小学校の先生方には感謝しております。素晴らしい先生のお教えはずっと後からじわっと感慨にふけることが出来るものだと思いますので娘もきっと附小で学んだことの幸せに感動してくれるものと期待しています。

附属中高の教育理念やカリキュラム、諸先生方の熱意溢れる指導力、豊かな人間性はきっと素晴らしいものであると羨望の極みでございます。しかし、私は中学校受験はあまり好ましいこととは考えておりません。三人の子どもや、その友達などの周辺を見ましても、まだまだ中学受験に自ら果敢に挑んで行く精神力も自立心も育っていません。ハイレベル中学といわれる学校へ受験していく子どもは、親に受験用のノウハウや知識をしっかり詰め込まれ、塾通いを余儀なくされ、受験へと方向付けされてきた子どもが多いと思うのです。

しかし、子どもも中三ぐらいになりますと、自分の力も弱点も個性も客観的に見えてきます。自分の周囲が見えてくると自己主張もはっきりし、自分の進路を模索し始めます。本当の意欲が出てくるのはこのころだと思います。少々出遅れた感じがしても小学校でゆっくり知・情・意・体のバランスをとりながら学んできた子どもは、中学校三年ごろから高校にかけて、ぐんぐん伸びて逆転していった子どもたちをどんなに多く驚きをもって出合ってきたことかしのれません（特に男子に）。にわか仕上げの受験学習にエネルギーを費やしてきた子どもは、せっかくの大学受験の頃、その学力は、砂上の楼閣と化してしまうこともありますので、決して無理をさせないで育て上げたいと思っています。

中高校と六年一貫教育が魅力で憧れるのですが、私は、敢えて賛成しないものです。子どもは目前に差し迫った目標があるからこそ頑張るもので遠い先に目標をおいてはなかなか安閑としてしまいがちです。人生のうちで一番顕著な成長をする中学高校時代は、三年サイクルぐらいの細分化の方が、より自分自身を確かに試して行けるのではないかと思います。六年一貫の私学ではかなりの授業の先取りで、中学三年生で数1や代数・幾何など、また受験のためのポイントを押さえた極端な英語を早々と文系、理系の選択をさせて履修させているところもあるようです。が、教育的な視点からは好ましいこととは申せません、しかし、現状の大学受験の実態からは致し方ないことかもしれません。

貴校のように中学校受験での段階で合否のボーダーラインを上げ偏差値男子61、女子63ぐらゐのかなり高い学力の生徒達ばかりですと、国立、公立、関関同立、早稲田、慶応、上智……等への進学率が高くなるはずだと思います。しかし、国・公立高校独特の授業と授業内容では、現大学受験への対処は難しく、浪人生をたくさん出すことになっていると思います。

御校は中学校と高等学校を切り離され、高校受験があれば素晴らしく高校の授業が高度になるのではないかと考えております。そうすると、小学校は、低学年から、中学校受験に影響されること無く、もっと落ちついた子どもや親を附小の先生方に託して行けるのではないのでしょうか。折角の指導力、気迫、情熱がある先生方が多いのですから。

次に、附中の生徒は粒がそろいすぎると思います。八教科受験ですから、心身ともに均整がとれて偏りは無いと思います。先生としては、授業の導入はとて理解が早くスムーズではないかと思いますが、色々な人間との出会いや、手こずる子どもの扱いということでは、教育研究の逸材が少ないのではないのでしょうか。公立は、あらゆる家庭環境の中の友達、障害を持った子ども、色々なタイプの先生、その子なりに協調し合い、社会の縮図の初歩段階を、人間の機微に触れて処世の術を学んでいます。この厳しさの中に身を置くことはよい学習の場だと思っています。

(平成3年10月25日)

#### 「松本博史から一言」

- ① 学力について：小学校から中学校受験に関しては、確かに、教育投資も含めて<親の実力>が大きな部分を占めることは確かです。本校でも、伸び切ったゴムのように入学と同時にプツンという子どもも確かに存在します。このような生徒達を見たとき、子どもの成長発達に合わせてゆっくり育てていったらなあ、と考えることがよくあります。本校の授業の方式では浪人が沢山出る、ということについては、以前からも、附属は学力については家庭に負担をかけ、教師はキレイゴトを言っているという批判があります。教師は、放課後、春休み、夏休みなど可能な限り補習補講を実施して学力補充に努力しています。しかし、受験産業の受験情報、入試情報の管理が進み、本校教師が常日頃言っていた<本当の学力をつけていれば、過度の入試対策は特に必要でない><本校の授業をしっかりと受けていれば、高三になってから受験勉強をすれば大丈夫だ>といったことが、世間では通じなくなってきたことも確かです。だが、大学や企業の関係者の話に、大学・企業が必要とする学力の質は、本校の実践している総合教科等で必要な個性的、自主的、創造的な<本当の学力>であるというような話をよく聞くようになってきた。最近では、大学の指定校推薦等の推薦理由の一つとして、本校のフィールド・ワークの実践を持って行かせると、それぞれの大学ではそれなりの評価を受けています。
- ② 附中高を切り離すことについて：本校では、歴史的に、中学校と高等学校が併設され、教員も併任している学校で、中高を切り離すことの矛盾や、発達のにも青年期を同じ学校で過ごさせることの意義についても既に述べたところです。これを切り離さないで、どのような後期中等教育の展開が可能かという本校の試みは、将来、日本の教育を考える際のモデルとして役立つと信じていますし、そのような実験・実践を心がけるべきであると考えています。
- ③ 「粒揃い」ということについて：学校改革以前は偏差値で言えば30～80の幅で分布し、一つの教室で授業がほとんど成立し難いところまで開いたことは先に述べました。その反動として、今回の選抜方式は確かに「粒揃い」といえるかもしれません。今後、「社会の縮図」となるような選抜方法の改善の検討を継続して行かなければならないことも事実です。しかし、本校の目指すところが、大学入試のみを目指したエリート教育でないことは理解していただけると考えます。

## 2. 編成の基本方針

本校の教育目標「自由で自立した人格、社会的責任の自覚、多様な能力の伸長」を達成するために、カリキュラムを次の方針で編成する。

- (1) 中・高6カ年を2年単位に区切る。
  - ① 低学年においては、基礎学力の定着に重点を置く。
  - ② 中学年においては、多様な自主的学習方法を取り入れる。
  - ③ 高学年においては、生徒の能力・適性・進路に対応するための大幅な選択制を取り入れる。
- (2) 2つ以上の教科を総合した科目を設置する。
- (3) 全ての学年・教科において、従来の学習方法を一步進めて、〈話す〉〈文章を書く〉〈演ずる〉等のあらゆる表現能力の育成をめざす。
- (4) 平成5、6年度から実施される新学習指導要領にも対応できるものとする。
- (5) 現在の人員・予算・施設の枠内でカリキュラムを編成する。
- (6) 平成3年1月8日に新カリキュラムを提出する。
- (7) カリキュラム実施細案の決定。

校時、ホームルームの配置、5、6年生の空き時間の過ごし方、修得単位時間数の決定（4年、5年では80単位以上）履修届を提出しても修得しなくともよい単位数は5単位以内、指導要録への記入の仕方等

(文責 中尾博一・仲 光雄)

## 3. 編成作業

### 1. 編成日程

- (1) カリキュラム委員（4名）、研究推進委員（9名）、運営協力者（13名）の決定。
- (2) カリキュラム委員会が中心になり、平成1年度中に新カリキュラムを編成する。
- (3) 教科のカリキュラム細案を平成3年1月8日までに作成。
- (4) 研究推進委員が中心になり、総合教科を構成する。
- (5) 平成2年度は、新カリキュラムの部分実施、総合教科〈奈良学〉の試行。
- (6) 平成3年度は、総合教科〈環境学〉の試行。
- (7) 新カリキュラム実施のための細目の決定。
- (8) 平成3年度は、1～4学年で新カリキュラムの実施、5～6学年は、年次移行。  
平成5年度は、1～6年の全面实施。

### 2. 平成3年度までの作業日程

平成1年

- 4月 個人、各教科からカリキュラム編成についての基本方針と、カリキュラム試案の提出。  
カリキュラム委員会がこれらを取りまとめる。
- 5月 カリキュラム試案の検討会と問題点の洗いだし。
- 6月 カリキュラム試案を補説するために、各教科ごとに6カ年の教科別系統図を作成する。
- 7月 運営協力者の助言のもとに学習内容の詳細を検討。

- 8月 各教科提出の学習内容を全体会議の場で協議。
- 9月 新設の総合教科について具体的内容を検討する。
- 10月 新カリキュラムの各学年の授業時間数について協議を始める。
- 11月 新カリキュラムの各学年の授業時間数について協議を継続。
- 12月 新カリキュラムの各教科の単位数決定のための教官アンケートを実施。

平成2年

- 1月 教官アンケートの結果を参考にカリキュラム委員会が新カリキュラ第1次原案を全体会議に提示。
- 2月 第1次原案について討議。1～4学年の総単位数を決定。5年での選択学習の実施は見送る。
- 3月 第1次原案の5、6学年の討議のための教官アンケートを実施、それをもとにして第2次原案を全体会議で討議、決定。
- 6月 教科毎にカリキュラム作成の視点と内容の系統図・一覧表提出。

平成3年

- 1月 各教科のカリキュラムの詳細を提出。
- 4月 新カリキュラムの一部実施

(文責 中尾博一・仲 光雄)

## 4. 新カリキュラム実施にあたっての問題点・課題

中尾博一・仲 光雄

平成3年度は、1年から4年まで、新カリキュラムを実施したが、選択制の大きな部分を占める5・6年には実施してないので、十分な評価をする事ができない。ここでは、新年度において表れてきた問題点を報告する。

### (1) 施設などの問題について

まず困ったのが、教室確保の問題であった。1年・2年の英語の時間は、クラスを2つに分けて、約20人ずつで授業を行うため、当然教室が余分に必要になる。当初、特別教室で授業を受けているクラスの教室を、他のクラスの英語の授業に当てることを考えたが、空き教室を渡り歩くことになるので、英語の時間毎に学習する教室が異なり、また、他のクラスや他学年の生徒が出入りするのでは、教室の管理上も好ましくないという判断から、この方法は採用しなかった。結局、窮余の策として、理科講義室・書道教室および社会科教室を使用することにしたが、理科・書道・書写および社会の授業に少なからぬ影響を与えた。具体的に言うと、時間割作成において、重なりを避けなければならないと言う枠をはめられたこと、教室の使用頻度が高くなったため、授業の準備をあらかじめする事が出来ない事が多くなったこと、などが挙げられよう。

もう1つは、大教室の使用の重なりである。本校では、一学年の生徒、約120人が同時にはいれる部屋は、大教室しかない。HR・道徳の時間に加えて、新カリキュラムの「環境学」「奈良学」での使用が多くなり、その調整が大変である。この「大教室」は、もともと「教育実習生講義室」として作られたものであり、教育実習期間ともなれば、もうお手上げの状態である。

本年度(平成3年)は、新カリキュラムが1年から4年までしか施行されていないにも関わらず、

この状態であるのだから、来年度（平成4年）以降、選択科目が多い5・6年生にも新カリが施行されると、教室の不足はますます大きな問題となろう。空き時間の生徒（何も選択しない生徒）のための「自習室」も当然必要となるに違いない。

## (2) 生徒・教職員の意識の問題について

この新カリキュラムは、別の項で示したように、数年にわたる教師集団の討議・研究に基づいて作成されたものであるが、いざ実施してみると、当初の予想とはずいぶん違ったものになりつつあるように思われる。

その典型が、来年度（平成4年）の5年生における選択をどのように指導するかということである。この学年は、新カリを最初に実施する学年であるので、早くから新カリの主旨を徹底させるべく、いろいろな機会をとらえて生徒・保護者に説明をしてきた。ところが、4年生の9月の段階で選択に関する「予備調査」を行ったところ、意外な結果となった。数学を選択する者が多いこと、理科と社会をあわせて目いっぱい3科目を選ぶ者が多いこと、自由選択の部分については、何も選択しなくてもいい自由があるにもかかわらず、何も選択しない生徒（空き時間ができる生徒）が少ないこと、などである。これでは従来の生徒の選択と余り変わらないわけで、新カリの理念が真にいかされているとは言い難いと思う。

この理由を推測してみると、次のようになろう。

- ① 生徒の方で、4年の段階ではまだ進路をしぼれないので、将来さまざまな進路の余地のある選択・できるだけ多くの科目を選んでおいた方がいいと判断したため。（もちろんこれは保護者の意向でもあろう）
- ② 担任の方が、「空き時間」の生徒の管理に不安を覚え、何かを選択させておく方がよいと考え、それが生徒の選択にさまざまな形で影響を与えたため。
- ③ 中学の3年間を担当した者が、すべて変わり、この学年の生徒の特性・ものの考え方をつかむのに時間がかかり、科目選択に関する適切な指導がおこない難かったため。

この新カリは、5年・6年においては、生徒の能力・進路によってさまざまな科目選択ができるように作られたものであるが、担任・進路指導部・教務などによって、適切な指導と助言が行われないと適切に機能しないだろうと思われる。

## (3) 学校5日制がらみの問題について

文部省の指導によって、「週5日制」が実施されようとしている。平成4年度から段階的に実施され、遠からず全面実施となろう。ここで大きな問題が生じる事になった。

この新カリは、「週5日制」を前提としていない。カリ作成の議論の中で、週5日制を見通して週当たりの時間数を減じておくべきであると言う意見もあったのだが、それは取り入れられなかった。ちなみに、新カリの週当たりの総時間数は、1・2年=32時間、3・4年=34時間、5・6年=最大36時間である。

取るべき道は、甲=新カリをこのまま実施する。乙=週5日制にあうように新カリの改訂に取り組む。のどちらかであろう。

甲の道を取ると、1～4年においても7時間授業の日が大幅に生じ、5・6年においては7時間授業の日が毎日になる。しかし、乙の道を取ると、新カリは一度も実施しないまま改訂される事になり、我々としては忍びがたいところである。この問題を検討するために「5日制委員会」が作られ、問題の解決へ向けて努力を始めている。

## 5. 英語科カリキュラム20人学級制について

英語科 荒木孝子 加藤 勇 平田健治  
水町律子 吉岡幸子

### 1. はじめに

1993年度より全面的に新指導要領が実施されるが、そのための新カリキュラムの編成へ向けて、英語科では1991年度より中学1年生と2年生に20人クラス制が実施された。導入の過程については、研究紀要第32集に述べている。既に1960年代に、言語教育における不利な環境を構成する要素として、マイケル・ウエストは30人以上の生徒からなるクラスをあげている。更にゲイトンビは20人以上のクラスでは効果があがりにくいと述べている。(Michael West : "Teaching English in Difficult Circumstances," 1960. E. V. Gatenby: "Conditions for Success in Language Learning") 欧米の学校では言語教育は普通10人から20人くらいの少人数のクラスでの授業で行われていることは周知のことである。国際化が叫ばれ、また国際交流が各地で盛んに行われてきている今、世界語となりつつある英語の日本での教育環境は、その要求に答えられる水準のものとはほど遠い。ウエストやゲイトンビの主張以来30余年を経て、ようやくわが校では長年要求し続けた少人数制による言語教育が部分的にでも認められたことになる。しかし、およそ教育は地道な努力を要求されるものであり、一夜にして英語を駆使する力がつくわけでもない。AETの導入と20人学級がほぼ時を同じくして実施されたこの機会に、語学教育が少なくとも少しはよい方向へ向いたことへのワンステップとしての報告になればよいと考えている。同時に私たち英語科は、今年度から施設面は別として、かなり恵まれた環境で授業ができたことへの喜びと責任を感じていることをつけ加えたい。

### 2. 授業形態と学習内容

#### [A] 授業形態

授業の形態は次のようである。各学年の担当は、A教諭(常勤の教師) B教諭(非常勤の教師)とAETである。中学2年A組を例にあげてみよう。

#### [1学期中間考査まで]

	週のうち1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
中2 Aい組	A (教諭)	A, AET	A	A
中2 Aろ組	B (教諭)	B	B, AET	B

#### [1学期中間考査から期末考査まで]

	週のうち1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
中2 Aい組	B (教諭)	B	B, AET	B
中2 Aろ組	A (教諭)	A, AET	A	A

上の表のように2人の教師が同時に授業に出ていく。い組とろ組は名列順に男女半分に機械的に分割されている。中学1年生は生徒が教師に慣れることに重点をおき、2学期の中間考査後、担当教師のクラス持ち換えを行った。2年生は1年間に3回担当クラスの持ち換えが行われることになる。これはA教諭とB教諭の授業を生徒が均等に受けられるという配慮からである。理解の遅れがちな生徒に対しては、主として、常勤のA教諭が補習、追試などの手当をすることになっている。そのためには、授業の進度、考査の内容、小テストの難易度等などについて詳しい打ち合わせが必

要になってくる。常勤と非常勤が1人ずつで学年を担当している場合は、その打ち合わせは比較的スムーズに行われるが、例えば今年の中学1年生の場合のように常勤2人、非常勤2人の教師集団となると、このプログラムをこなすには、打ち合わせの時間などの制約も大きい為、かなりの苦勞をとまう。しかし、打ち合わせが密であればあるほど、授業の効率はあがるものであり、生徒達が担当者がかわることに對して持つ不満も減少するようである。

[B] 学習内容

学習内容については、研究紀要第32集に既に述べてあるが、それより更に詳しく、変更点も含めて、ここに表にして掲載する。

使用教材は次の通りである。

- [中学1年] 教科書 Total English 1  
 問題集 新中学問題集(発展編)1年  
 sub-reader Nine Stories about People  
 NHK基礎英語テキスト  
 対話プリント(自主教材)
- [中学2年] 教科書 Total English 2  
 問題集 新中学問題集(発展編)2年  
 sub-reader Nine Stories about People その他  
 NHK統基礎英語テキスト  
 A E Tとの自主教材及び Streamline English(Departures)

<1991年度 20人学級による学習内容>

\*印 A E Tとの自主教材

	中 学 1 年 生	中 学 2 年 生
4月	簡単な挨拶、自己紹介、 アルファベットの読み方、書き方 Be動詞(肯定文、否定文、疑問文) 疑問詞(what, how, where) *対話練習(挨拶、紹介)	比較級(原級比較、比較級、最上級)の復習とmore, most を使った比較  * Shopping for Food
5月	have動詞(肯定文、否定文、疑問文) 一般動詞(1、2人称)、冠詞、代名詞 疑問詞(how many, how much) *対話練習(簡単な買い物)	不定詞(名詞的用法) 動名詞 命令文(否定、be動詞) * Proper Introductions
6月	一般動詞(1、2人称、疑問文、否定文) 名詞(曜日、月の名前)、指示代名詞(形容詞的用法)、疑問詞(who, which)、時刻 *対話練習(品物の受け渡し)	助動詞(未来形)、be going to... Will you...? Shall I...? 過去形の復習(不規則動詞) * Where is it? (Finding Places)
7月	一般動詞(3人称、疑問文、否定文) 疑問詞(when, where) 前置詞(場所) *対話練習(品物の置かれている場所)	接続詞の導入(and, but, that) 物語を読む(Nine Stories about People) to 不定詞(副詞的用法、形容詞的用法) * Showing the Way
9月	命令文、目的格、所有格、所有代名詞 形容詞、副詞 接続詞(and, but, or)  *対話練習(品物の所有者)	接続詞(when, if, because, after, before, though, while) 命令文+and, or 助動詞(may, must, have to, be able to) * Showing the Way

10月	助動詞(canの用法) 疑問詞(how tall, how old) *対話練習(レストランでの注文)	能動態と受動態(現在形)の導入 *Hailing for a Taxi, Catching the Bus *Borrowing and Lending
11月	現在進行形(肯定文、疑問文、否定文) *対話練習(招待、待ち合わせの場所)	受動態(過去形) 感嘆文(how, what) *Borrowing and Lending
12月	復習(既習文法事項) クリスマスソング練習 *対話練習(小銭に換えてもらう)	受動態(by以外を使うもの) 現在完了の導入(完了、継続、結果) *Christmas Party (Monito, Songs, Quiz)
1月	過去形 *対話練習(衣服や持ち物)	現在完了 物語を読む *At a Restaurant
2月	比較級 *対話練習(いろいろな買い物)	暗唱大会へ向けて物語を読む *A Phone Call
3月	最上級 *対話練習(趣味)	2年の総まとめ *Welcoming a Guest to Your House

### 3. 評価 — アンケート調査の結果と考察

子どもの認識の発達のスジみちにあったカリキュラムということに重点を置いた2-2-2制のカリキュラムを作成して1年が経過した。国際語となりつつある英語の学習を一様に始めた生徒達の1年後、2年後の反応、成果はどうであろうか。発達上の特徴点が十分に生かされて、生徒達の学習への興味、授業へ向けての態度、モチベーションはどうであろうか。英語科では、生徒達の状況把握のために、アンケート調査を12月に行った。その詳しい結果は資料の欄に掲載する。ここでは、アンケート結果に基づいて、①英語の授業全般に対して、②20人学級について、考察する。

#### ① 英語の授業全般について

##### 〈項目1 英語は好きか〉

1年生は「好き、大好き」を合わせて、約58%、2年生は約35%である。「普通」までを合わせると、実に1年生は約85%、2年生は約80%に達する。1年生は初めて習う学科なので、興味が強く、「好き」が多いのは当然であるが、2年生になると少し学習程度が進み、精神的にも成長してその数は減るであろうと予想された。しかし、その予想に反して、「嫌い、大嫌い」の人数が2年生で増えていない。これは特筆すべきことであり、2年生で英語嫌いになっていないという結果が出た。ちなみに昭和56年度、英語の授業が週3時間に減った年度の秋に行ったアンケート調査(★印参照)では、「嫌い」が、1年生から2年生になると2.6倍に激増し、「つまらない」も2.6倍に増えている。

#### ★ 教科[英語]についてのアンケート及び集計

(アンケート実施 昭和56年10月 対象 本校中学1年生119人、同2年生118人)

[1] 英語の授業についてどう思いますか。(A, B, Cでそれぞれ1つずつ選びなさい)

- |   |        |   |          |   |              |
|---|--------|---|----------|---|--------------|
| A | 1. 嫌い  | B | 1. つまらない | C | 1. ちっともわからない |
|   | 2. ふつう |   | 2. ふつう   |   | 2. まあまあわかる   |
|   | 3. 好き  |   | 3. 興味がある |   | 3. わかる       |



集計 A

	1年	2年
1	12	31
2	51	57
3	56	30

B

	1年	2年
1	8	21
2	54	58
3	57	39

C

	1年	2年
1	11	14
2	72	82
3	36	22

## 〈項目2 英語の授業は楽しいか〉

### 〈日本人教師の場合〉

1年生では、「楽しい」が約40%、2年生では約41%、「普通」まで合わせると、1年生が約88%、2年生が約85%に達している。2年生の〈理由〉の項目の文章表現を読めば分かるが、授業を「楽しい」などとは思わないという少々冷めた態度がうかがえるため、「普通」の項が増加している。「大嫌い」の項では、むしろ2年生のほうが数が減っている。英語の授業では生徒達は、結構なごやかに楽しんでいるようである。

### 〈AETの場合〉

当然の結果かも知れないが、テストから開放されて、会話中心の授業に伸び伸びとした生徒の姿がうかがえる。1年生では、「嫌い、大嫌い」が約9%、2年生では11%である。2年生の場合、自我意識の発達などのために、嫌いな数がもう少し増えると思われたのであるが、この調査結果を見る限り、発達上の特徴点はそう明白には表れていない。会話の授業はリラックスして楽しんでいるようである。

## 〈項目4 英語の授業で興味あるもの〉

英語の歌を聴いたり、ゲームをしたりする普通の授業とは異なる遊び的要素をもつものに関心が強いのは当たり前のことである。しゃべることに関心を持つ生徒も意外に多く、1年生では25%強、2年生でも16%ある。更に2年生では、知的好奇心が強まり、英語の物語を読むことにも関心が強くなってきている。

## 〈項目5 何のために英語を勉強するのか〉

「将来仕事に必要だから」と考えている生徒達が1年生、2年生ともに一番多く、国際化時代に向けての意識が高いものと思われる。「外国へ行きたい、外国の人としゃべりたい」という自己本意的欲求よりも、まず将来へ目が向けられている。2年生になると、第2位の数は、5年先の「受験へ向けて必要」と考えている。頭の中では、既に、受験を意識しだしているようである。

## ② 20人学級について

### 〈項目1 全体的雰囲気について〉

「よい」と考えている生徒達が、1年生、2年生ともに過半数を越えている。「よくない」と考えているのは、1年生で約9%、2年生で約10%あり、その中には、緊張し過ぎると感じているほかに、多人数のほうが質問が多岐にわたり、知らないところによく気づくので知的好奇心が満足できるというものまで含まれている。

### 〈項目2 授業中の態度〉

#### 〈日本人教師の場合〉

1年生も、2年生も大体よく集中して授業を聴いているようであるが、「発表する、質問する」の項が予想外に低い。

#### 〈AETの場合〉

授業中よく聴かないのは、1年生2名、2年生5名だけであり、非常によく集中して聴き、発表、質問ともに割合活発にしているという結果が出ている。

### 〈項目3 授業中であてられる回数〉

日本人教師、AETともに、多いと答えた数は2学年ともに約25%である。生徒達にすれば、英語の授業で、2、3回当てられてもさほど多いとは感じていないのではないだろうか。彼らにとって当てられることは授業に集中することであり、授業に積極的に参加していることを意味し、むしろ喜ばしいことのようなのである。

### 〈項目4、5 授業の進み具合、授業はよく理解できるか〉

#### 〈日本人教師の場合〉

進度が「速い」と感じる者が、1年生で約40%、2年生で約60%ある。そして、授業が「全くわからない」と回答した生徒が、1年生で約2%、2年生で約4%、「わからない」を加えると、1年生で14%、2年生では、20%ある。これは、英語の授業が好きで、楽しいとは別に、進度がかかり速いので、うっかり怠けている生徒達には、定着があまりよくないことを示している。こうしたスロー・ラーナーに対し、常時、補習などの手だてが必要なことをも示している。

#### 〈AETの場合〉

進度が「速い」と感じる者が、1年生で約30%、2年生で約37%、「わからない」と回答した者が、1年生で約16%、2年生で約18%ある。英語の得意でない生徒にとっては、わけの分からないことをむやみに暗記させられているという印象は拭いえない。ここでも、「楽しい」と、「理解できる」とは別物であることがはっきりする。

### 〈項目6 ラジオ講座について〉

「嫌い、大嫌い」が1年生では約30%、2年生では約40%あり、内容が「難しい」と感じる者が、1年生で約45%、2年生では約60%の高い数字が出ている。毎日欠かさず聴くことの難しさ（大体聴いている数は、1年生で約70%、2年生で約66%）に加えて、日常会話に用いる単語の数の多さに辟易しているものと思われる。それにもかかわらず、「将来役に立つ」と思っている生徒は、60%もいるのであり、もし毎週テストがなければ、「好き」になる生徒の数は増えるかもしれない。しかし、英語科では、ラジオ講座は授業内容に取り入れ続けたいと考える。リスニング能力と日常会話の基礎を、1年生と2年生の基礎の段階にしっかりつけることこそ、将来の会話能力へとつながると考えるからである。

### 〈項目7 英語の授業時間数について〉

現在よりも授業時間数を「増やして欲しい」と思う者が、1年生で約42%、2年生で約33%もいる。英語の授業が楽しいから増やして欲しいと考えるより、これは、将来受験に必要なだから増やして欲しいと考えているところも大きいと思われる。

### 〈項目8、9、10 学校以外で英語を習っているか〉

2学年ともに約半数ほどが何らかの形で学校以外で英語を習っているわけである（1年生回答者119人中55人、2年生回答者118人中64人）。しかし、2年生で塾等に通いだした者は15人しかいないところを見ると、学校の授業に対して、信頼感を抱いているのではないかと思われる。勿論、学校の授業の進度が塾と合わないために、やめたり、通えないという消極的理由も考えられる。しかし、社会情勢から鑑みた場合、わが校では英語の塾通いはむしろ減っているものと思われる。ちなみに、56年度のアンケート調査では、塾通いが半数を越えていた（1年生119人中69人、2年生118人中63人）。およそ10年前より数が増えてはいないのである。

### 〈項目11 中学2年生に20人学級についての質問（文章表現）〉

詳しくはアンケートの最後の項目の文章表現を参考にして頂きたい。2年生は去年は40人学級で授業を受けた学年であり、特に際だって数の多い意見だけ以下に掲載する。

- |        |                 |       |
|--------|-----------------|-------|
| [男子生徒] | ・当たる回数が倍増した     | (17人) |
|        | ・授業がよくわかるようになった | (13人) |
|        | ・質問しやすくなった      | (8人)  |
| [女子生徒] | ・当たる回数が倍増した     | (17人) |
|        | ・質問しやすくなった      | (12人) |
|        | ・授業に集中しやすくてよい   | (12人) |
|        | ・楽しい授業になった      | (8人)  |
|        | ・授業がよくわかるようになった | (6人)  |
|        | ・指導がゆきわたるようになった | (6人)  |

以上アンケート結果に基づいて考察した。

20人学級による授業を始めてまだ1年が経過していないが、確かに少人数制による授業の結果、子どもの質問、発言の機会が保証されてきたし、より積極的に授業に参加する生徒達の姿がうかがえる。彼らが国際人として成長するためにどれだけ貢献できるのか、この学習の成果が問われるのはずいぶん先のことである。しかし、少人数制による授業が、より豊かで、より生き生きとした授業へと向かう一歩であることは、このアンケート結果に如実に示されている。

〔資料1〕

英語アンケート

英語の授業全般についてたずねます。

1. 英語が好きですか。 A) 大好き B) 好き C) 普通 D) きらい E) だいきらい
2. 英語の授業は楽しいですか。
  - a) 日本人の先生の授業  
A) とても楽しい B) 楽しい C) 普通 D) 楽しくない E) 全く楽しくない
  - b) セシリア先生の授業  
A) とても楽しい B) 楽しい C) 普通 D) 楽しくない E) 全く楽しくない
3. それはどういう理由ですか。
  - a) の項目 A) B) を選んだ理由……………  
C) を選んだ理由……………  
D) E) を選んだ理由……………
  - b) の項目 A) B) を選んだ理由……………  
C) を選んだ理由……………  
D) E) を選んだ理由……………
4. 英語の授業の中でいちばん興味のあるものに○をつけなさい。  
A) 英語を聞くこと B) 英語をしゃべること C) 英語を声を出して読むこと  
D) 英語を書くこと E) 英語を日本語に訳すこと  
F) 物語などを読むこと G) 歌を聞くこと H) ゲームをすること  
I) 外国のお話を聞くこと J) 問題集を解くこと
5. 何のためにあなたは英語を勉強すると思いますか。  
A) 外国の人としゃべりたいから B) 外国に行きたいから  
C) 将来仕事など、生きていくのに必要から D) 受験に必要だから  
E) 外国の本を読んだり、歌を歌いたいから  
F) 外国の生活や文化に興味があるから G) 日本のことを外国の人に知ってもらいたいから H) その他

20人学級についてたずねます。

1. 全体的雰囲気はどう感じますか。 A) よい B) 普通 C) よくない
2. あなたの授業中の態度はどうですか。

〔日本人の先生の場合〕

- (1) 聞く態度 A) よく聞いている B) ぼんやり聞いている C) 聞いていない
- (2) 発表 A) よくする B) 普通 C) しない
- (3) 質問 A) よくする B) 普通 C) しない
- (4) 友達との会話などの練習  
A) よくする B) 普通 C) しない

〔セシリア先生の場合〕

- (1) 聞く態度 A) よく聞いている B) ぼんやり聞いている C) 聞いていない
- (2) 発表 A) よくする B) 普通 C) しない
- (3) 質問 A) よくする B) 普通 C) しない

(4) 友達との会話などの練習

- A) よくする      B) 普通      C) しない

3. 授業中に先生に当てられる回数はどうですか。

〔日本人の先生の場合〕

- A) 多すぎる      B) かなり多い      C) 普通      D) かなり少ない      E) 少ない

〔セシリア先生の場合〕

- A) 多すぎる      B) かなり多い      C) 普通      D) かなり少ない      E) 少ない

4. 授業の進み具合はどうですか。

〔日本人の先生の場合〕

- A) 速すぎる      B) 少し速い      C) 普通      D) 少し遅い      E) 遅すぎる

〔セシリア先生の場合〕

- A) 速すぎる      B) 少し速い      C) 普通      D) 少し遅い      E) 遅すぎる

5. 授業はよくわかりますか。

〔日本人の先生の場合〕

- A) よくわかる      B) 分かる      C) 普通      D) わからない      E) 全くわからない

〔セシリア先生の場合〕

- A) よくわかる      B) 分かる      C) 普通      D) わからない      E) 全くわからない

6. ラジオ講座について

- (1) 好きですか      A) 大好き      B) 好き      C) 普通      D) きらい      E) だいきらい  
(2) 家で聞いていますか      A) 毎日      B) 時々      C) たまに      D) 全然  
(3) 内容は      A) 大変易しい      B) 易しい      C) 普通      D) 難しい      E) 大変難しい  
(4) 役にたつと思いますか      A) 大変役にたつ      B) 役にたつ      C) 普通      D) 役にたたない  
E) 全く役にたたない

7. 英語の授業は週何時間くらいがいいと思いますか。

- A) 毎日      B) 5時間      C) 4時間      D) 3時間

8. 学校以外で英語を習っていますか。

- a) 習っている      b) 習っていない

9. a) と答えた人は以下の項目に答えて下さい。

- (1) いつから習い始めましたか。      A) 小学生低学年      B) 小学生高学年      C) 中学1年  
D) 中学2年  
(2) 週何回習っていますか。      A) 1回      B) 2回      C) 3回      D) 4回  
E) それ以上  
(3) どこで習っていますか。      A) 家で個人的に      B) 塾で  
(4) (3)のB) と答えた人は次の項目に答えて下さい。

- A) 学校の教科書中心の予習、復習      B) 英会話  
C) 受験英語      D) 公立中学と同じ内容

10. b) と答えた人は以下の項目に答えて下さい。

- A) 学校の授業が分かるので今のままでよい      B) 学校の進み具合が塾と合わない  
C) 学校で補習してもらっているから      D) その他

11. 中学2年生にたずねます。

昨年のクラス単位の授業と比べてどうですか。感じているところを書いて下さい。

〔資料2〕

アンケート集計結果

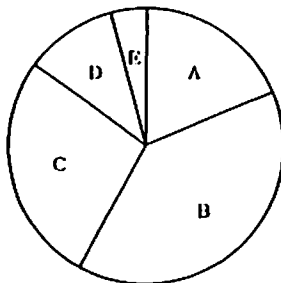
〔1年生〕

1. 英語が好きですか

A大好き B好き C普通 D嫌い E大嫌い

(単位:人数)

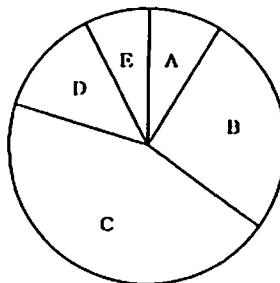
A-	22 (18.5%)
B-	47 (39.5%)
C-	32 (26.9%)
D-	13 (10.9%)
E-	5 (4.2%)
合計	119



〔2年生〕

(単位:人数)

A-	10 (8.5%)
B-	31 (26.3%)
C-	53 (44.9%)
D-	15 (12.7%)
E-	9 (7.6%)
合計	118



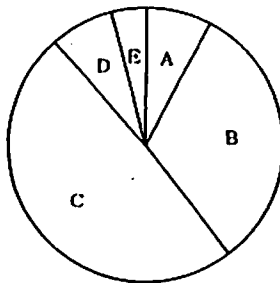
2. 英語の授業は楽しいですか

Aとても楽しい B楽しい C普通 D楽しくない E全く楽しくない

〔日本人の先生の授業〕

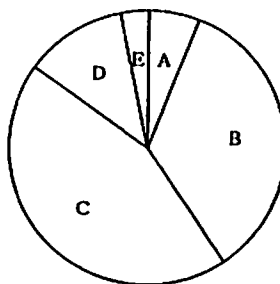
(単位:人数)

A-	9 (7.6%)
B-	38 (31.9%)
C-	58 (48.7%)
D-	9 (7.6%)
E-	5 (4.2%)
合計	119



(単位:人数)

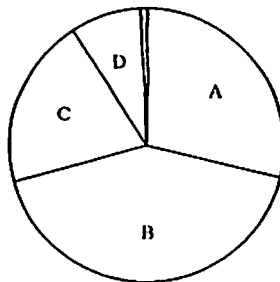
A-	7 (5.9%)
B-	41 (34.7%)
C-	52 (44.1%)
D-	14 (11.9%)
E-	4 (3.4%)
合計	118



〔セシリア先生の授業〕

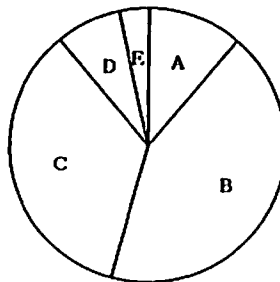
(単位:人数)

A-	34 (28.6%)
B-	50 (42.0%)
C-	24 (20.2%)
D-	10 (8.4%)
E-	1 (0.8%)
合計	119



(単位:人数)

A-	13 (11.0%)
B-	51 (43.2%)
C-	41 (34.7%)
D-	9 (7.6%)
E-	4 (3.4%)
合計	118

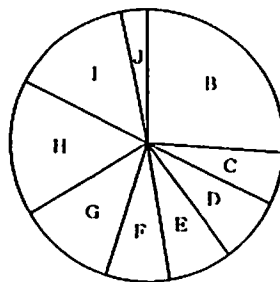


4. 英語の授業の中でいちばん興味のあるもの

A英語を聞くこと B英語をしゃべること C英語を声を出して読むこと D英語を書くこと E英語を日本語に訳すこと  
F物語りなどを読むこと G歌を聞くこと Hゲームをすること I外国のお話を聞くこと  
J問題集を解くこと

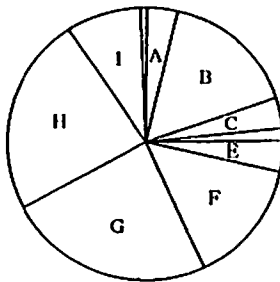
(単位:人数)

A-	0 (0.0%)
B-	34 (28.0%)
C-	8 (6.1%)
D-	10 (7.6%)
E-	10 (7.6%)
F-	10 (7.6%)
G-	15 (11.5%)
H-	21 (16.0%)
I-	19 (14.5%)
J-	4 (3.1%)
合計	131



(単位:人数)

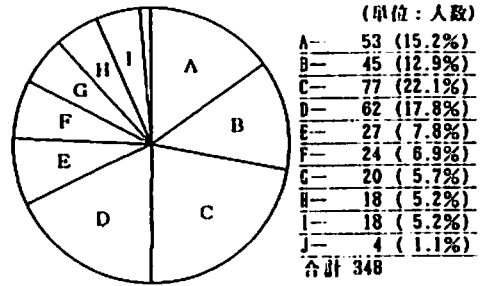
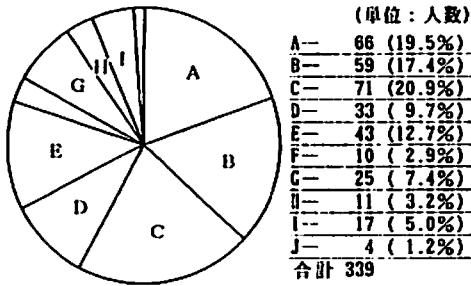
A-	5 (3.6%)
B-	22 (16.1%)
C-	5 (3.6%)
D-	2 (1.5%)
E-	5 (3.6%)
F-	20 (14.6%)
G-	33 (24.1%)
H-	32 (23.4%)
I-	12 (8.8%)
J-	1 (0.7%)
合計	137



〔1年生〕

〔2年生〕

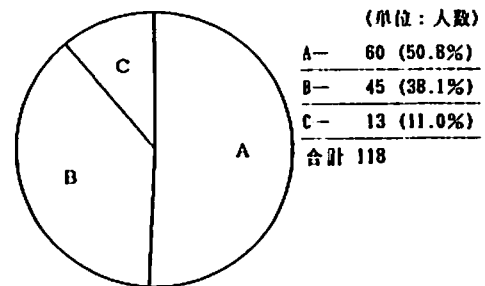
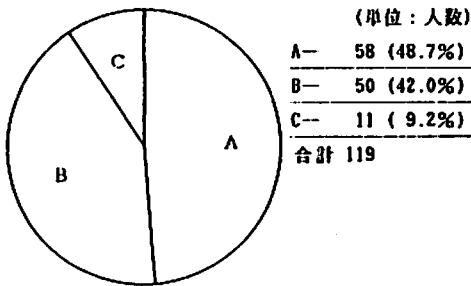
5. 何のためにあなたは英語を勉強すると思いますか。  
 A 外国の人としゃべりたいから B 外国に行きたいから C 将来仕事などで、生きて行くのに必要だから  
 D 受験に必要だから E 外国の本を読んだり、歌を歌いたいから F 外国の人の生活や文化に興味があるから  
 G 日本のことを外国の人に知ってもらいたいから



■ 20人字級についてたずねます

1. 全体的な雰囲気はどう感じますか

A よい B 普通 C よくない

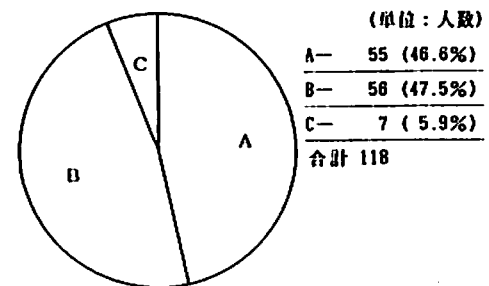
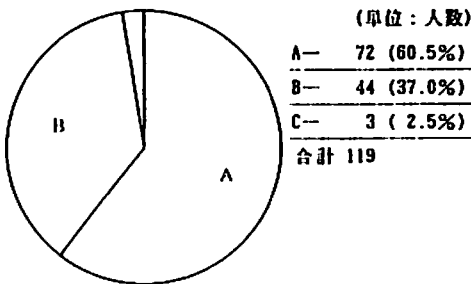


2. あなたの授業中の態度はどうですか

〔日本人の先生の授業〕

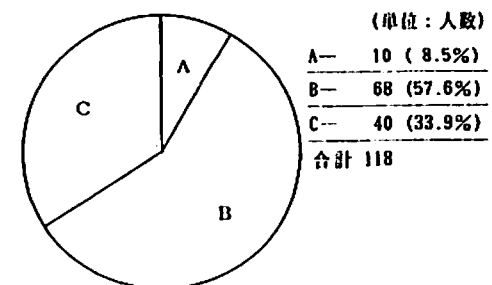
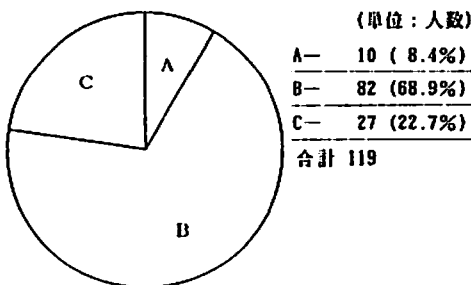
(1) 聞く態度

A よく聞いている B ぼんやり聞いている C 聞いていない

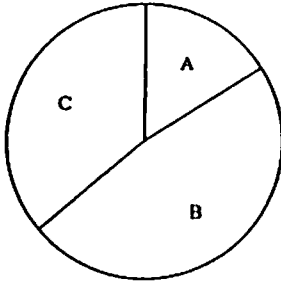


(2) 発表

A よくする B 普通 C しない



〔1年生〕



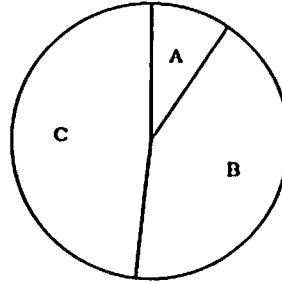
(単位：人数)

A-	19 (16.0%)
B-	57 (47.9%)
C-	43 (36.1%)
合計	119

(3) 質問

Aよくする B普通 Cしない

〔2年生〕

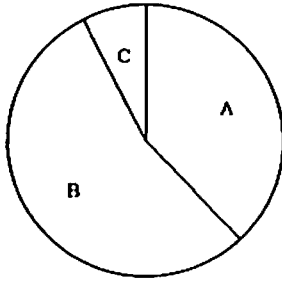


(単位：人数)

A-	11 (9.3%)
B-	50 (42.4%)
C-	57 (48.3%)
合計	118

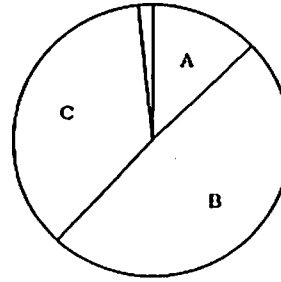
(4) 友達との会話などの練習

Aよくする B普通 Cしない



(単位：人数)

A-	45 (37.8%)
B-	65 (54.6%)
C-	9 (7.6%)
合計	119



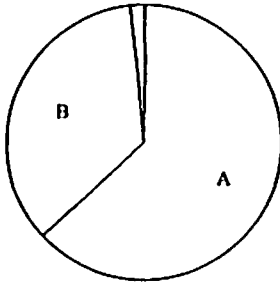
(単位：人数)

A-	15 (12.7%)
B-	58 (49.2%)
C-	43 (36.4%)
D-	2 (1.7%)
合計	118

〔セシリア先生の授業〕

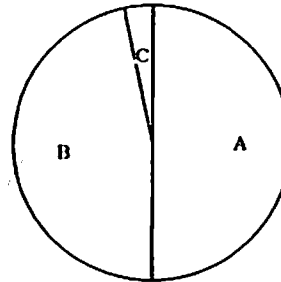
(1) 聞く態度

Aよく聞いている Bぼんやり聞いている C聞いていない



(単位：人数)

A-	75 (63.0%)
B-	42 (35.3%)
C-	2 (1.7%)
合計	119

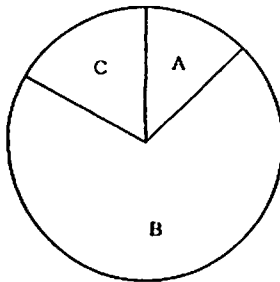


(単位：人数)

A-	59 (50.0%)
B-	55 (46.6%)
C-	4 (3.4%)
合計	118

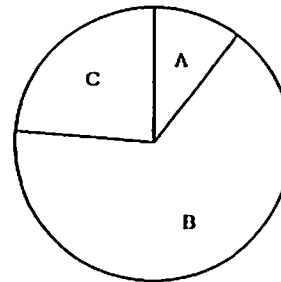
(2) 発表

Aよくする B普通 Cしない



(単位：人数)

A-	15 (12.6%)
B-	84 (70.6%)
C-	20 (16.8%)
合計	119



(単位：人数)

A-	12 (10.2%)
B-	78 (66.1%)
C-	28 (23.7%)
合計	118

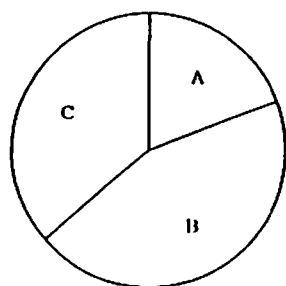


[1年生]

(3) 質問

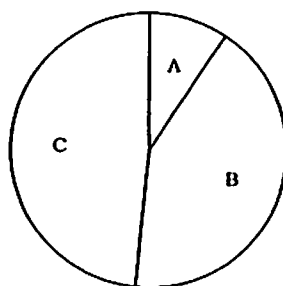
[2年生]

Aよくする B普通 Cしない



(単位:人数)

A-	23 (19.3%)
B-	53 (44.5%)
C-	43 (36.1%)
合計	119

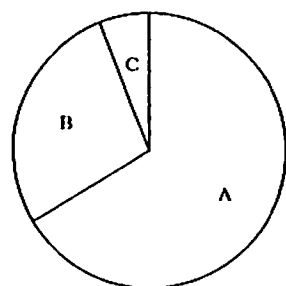


(単位:人数)

A-	11 (9.3%)
B-	50 (42.4%)
C-	57 (48.3%)
合計	118

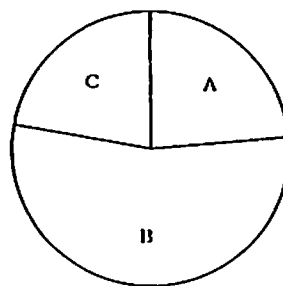
(4) 友達との会話などの練習

Aよくする B普通 Cしない



(単位:人数)

A-	79 (66.4%)
B-	33 (27.7%)
C-	7 (5.9%)
合計	119



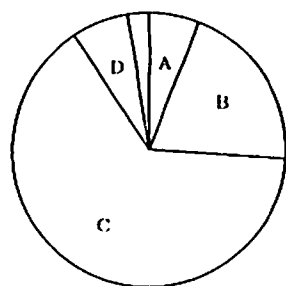
(単位:人数)

A-	28 (23.7%)
B-	64 (54.2%)
C-	26 (22.0%)
合計	118

3. 授業中に先生に当てられる回数はどうですか

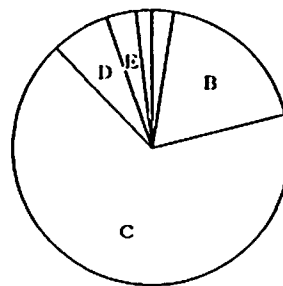
A多すぎる Bかなり多い C普通 Dかなり少ない E少ない

[日本人の先生の授業]



(単位:人数)

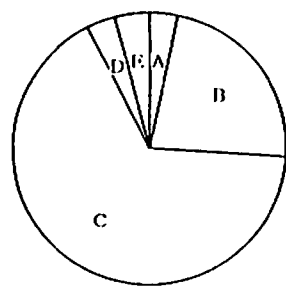
A-	7 (5.9%)
B-	24 (20.2%)
C-	77 (64.7%)
D-	8 (6.7%)
E-	3 (2.5%)
合計	119



(単位:人数)

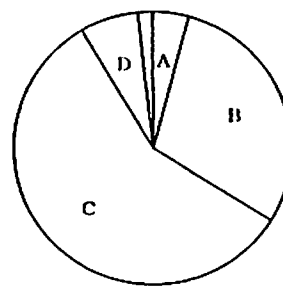
A-	3 (2.5%)
B-	22 (18.6%)
C-	79 (66.9%)
D-	8 (6.8%)
E-	4 (3.4%)
F-	2 (1.7%)
合計	118

[セシリア先生の授業]



(単位:人数)

A-	4 (3.4%)
B-	27 (22.7%)
C-	79 (66.4%)
D-	4 (3.4%)
E-	5 (4.2%)
合計	119



(単位:人数)

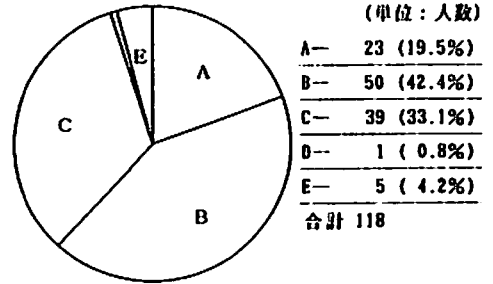
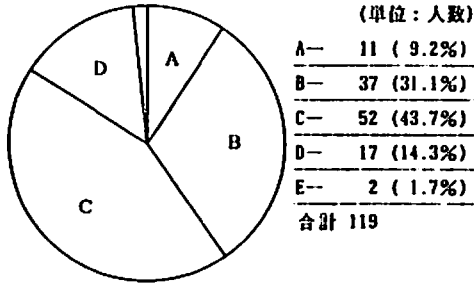
A-	5 (4.2%)
B-	35 (29.7%)
C-	68 (57.6%)
D-	8 (6.8%)
E-	2 (1.7%)
合計	118

[1年生]

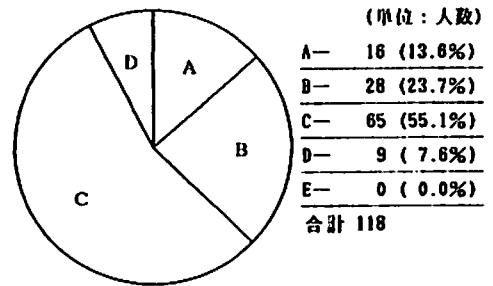
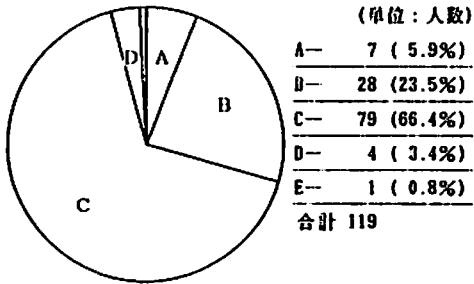
4. 授業の進み具合はどうか

[2年生]

A速すぎる B少し遅い C普通 D少し遅い E遅すぎる  
[日本人の先生の授業]

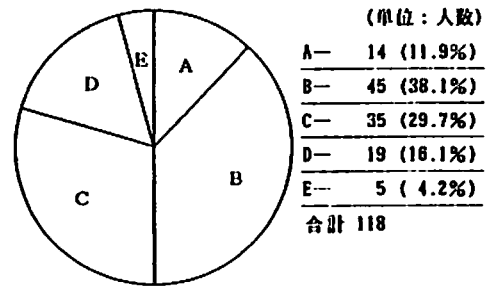
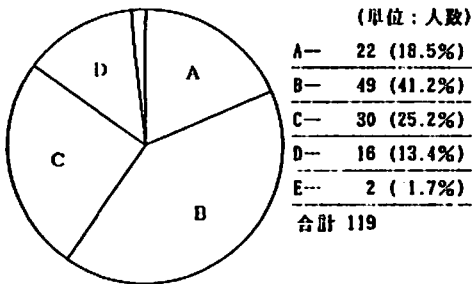


[セシリア先生の授業]

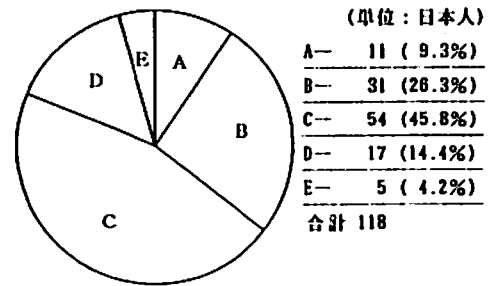
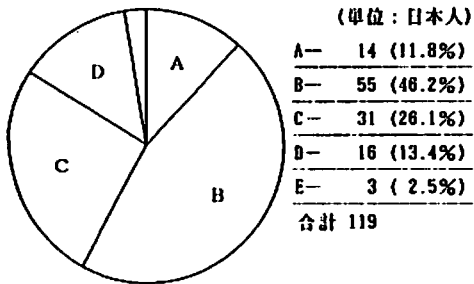


5. 授業はよくわかりますか

Aよくわかる Bわかる C普通 Dわからない E全くわからない  
[日本人の先生の授業]



[セシリア先生の授業]



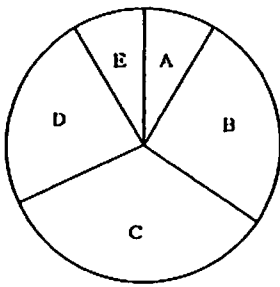
[1年生]

6. ラジオ講座について

[2年生]

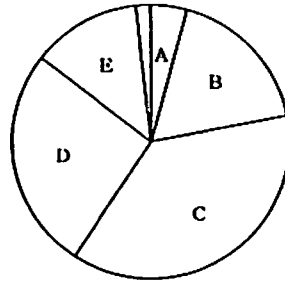
(1) 好きですか

A大好き B好き C普通 D嫌い E大嫌い



(単位: 人数)

A	10 (8.4%)
B	31 (26.1%)
C	40 (33.6%)
D	28 (23.5%)
E	10 (8.4%)
合計	119

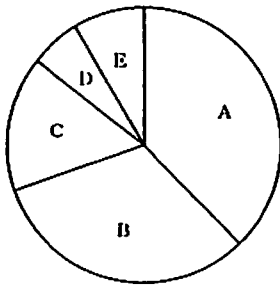


(単位: 人数)

A	5 (4.2%)
B	21 (17.8%)
C	44 (37.3%)
D	31 (26.3%)
E	15 (12.7%)
F	2 (1.7%)
合計	118

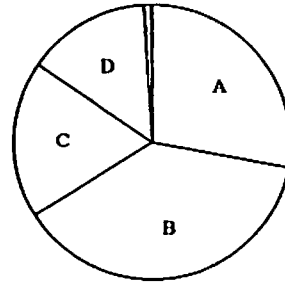
(2) 家で聞いていますか

A毎日 B時々 Cたまに D全然



(単位: 人数)

A	45 (37.8%)
B	38 (31.9%)
C	19 (16.0%)
D	7 (5.9%)
E	10 (8.4%)
合計	119

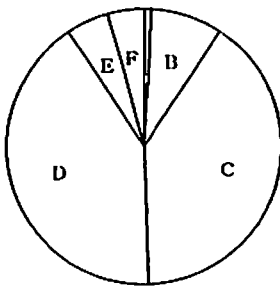


(単位: 人数)

A	33 (28.0%)
B	45 (38.1%)
C	22 (18.6%)
D	17 (14.4%)
E	0 (0.0%)
F	1 (0.8%)
合計	118

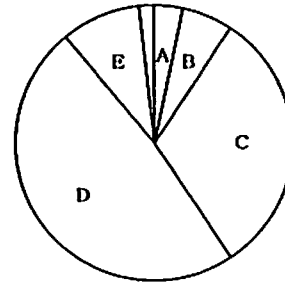
(3) 内容は

A大変易しい B易しい C普通 D難しい E大変難しい F無回答



(単位: 人数)

A	1 (0.8%)
B	10 (8.4%)
C	48 (40.3%)
D	49 (41.2%)
E	8 (5.0%)
F	5 (4.2%)
合計	119

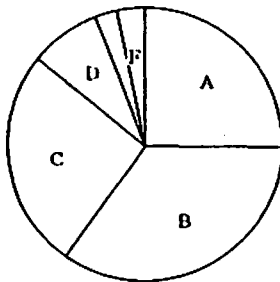


(単位: 人数)

A	4 (3.4%)
B	7 (5.9%)
C	37 (31.4%)
D	57 (48.3%)
E	11 (9.3%)
F	2 (1.7%)
合計	118

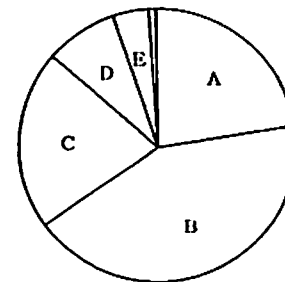
(4) 役にたつと思いますか

A大変役にたつ B役にたつ C普通 D役にたたない E全く役にたたない F無回答



(単位: 人数)

A	30 (25.2%)
B	41 (34.5%)
C	31 (26.1%)
D	10 (8.4%)
E	3 (2.5%)
F	4 (3.4%)
合計	119



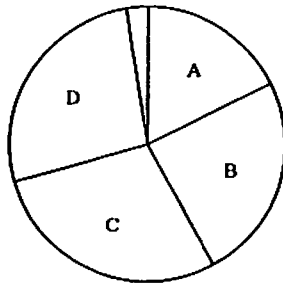
(単位: 人数)

A	27 (22.9%)
B	50 (42.4%)
C	25 (21.2%)
D	10 (8.5%)
E	5 (4.2%)
F	1 (0.8%)
合計	118

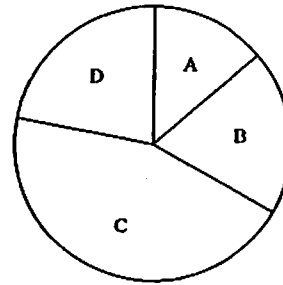
〔1年生〕

7 英語の授業は週何時間くらいがいいとおもいますか  
A 毎日 B 5時間 C 4時間 D 3時間

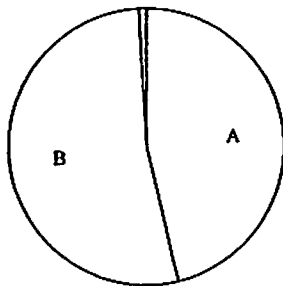
〔2年生〕



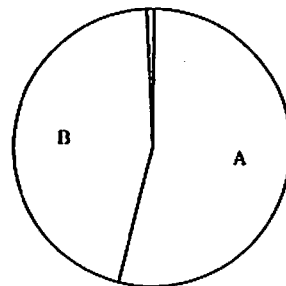
(単位:人数)	
A-	21 (17.6%)
B-	29 (24.4%)
C-	34 (28.6%)
D-	32 (26.9%)
E-	3 (2.5%)
合計 119	



(単位:人数)	
A-	16 (13.6%)
B-	23 (19.5%)
C-	53 (44.9%)
D-	26 (22.0%)
合計 118	

8. 学校以外で英語を習っていますか  
A 習っている B 習っていない C 無回答

(単位:人数)	
A-	55 (46.2%)
B-	63 (52.9%)
C-	1 (0.8%)
合計 119	

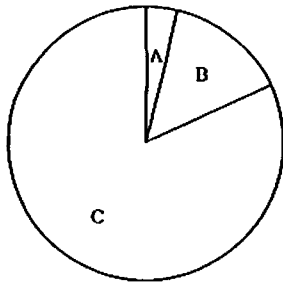


(単位:人数)	
A-	64 (53.8%)
B-	54 (45.4%)
C-	1 (0.8%)
合計 119	

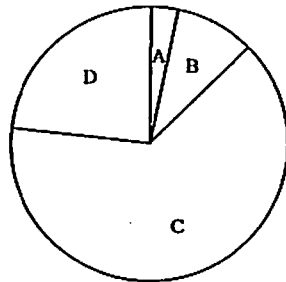
9. 8でAと答えた人は次の項目に答えて下さい

(1) いつから習い始めましたか

A 小学校低学年 B 小学校高学年 C 中学1年



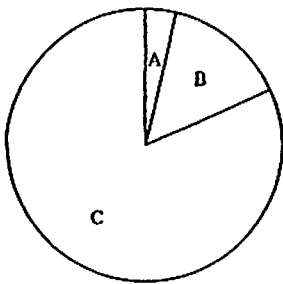
(単位:人数)	
A-	2 (3.6%)
B-	8 (14.5%)
C-	45 (81.8%)
合計 55	



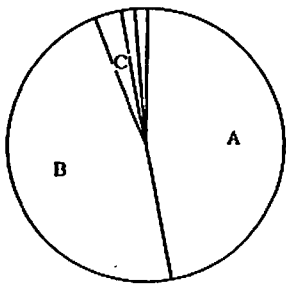
(単位:人数)	
A-	2 (3.1%)
B-	6 (9.4%)
C-	41 (64.1%)
D-	15 (23.4%)
合計 64	

(2) 週何回習っていますか

A 1回 B 2回 C 3回 D 4回 E それ以上



(単位:人数)	
A-	2 (3.6%)
B-	8 (14.5%)
C-	45 (81.8%)
合計 55	

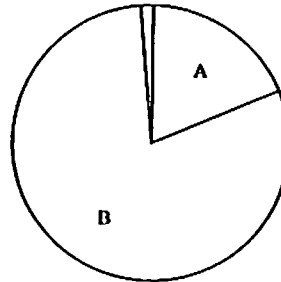
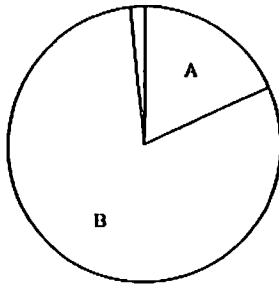


(単位:人数)	
A-	30 (46.9%)
B-	30 (46.9%)
C-	2 (3.1%)
D-	1 (1.6%)
E-	1 (1.6%)
合計 64	

〔1年生〕

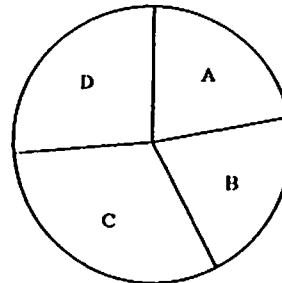
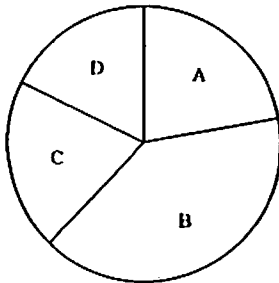
(3) どこで習っていますか  
A家で個人的に B塾で C無回答

〔2年生〕



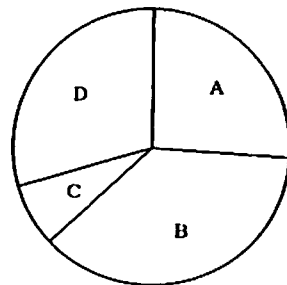
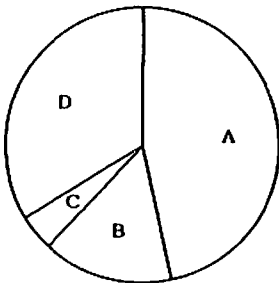
(4) (3)でBと答えた人は次の項目に答えてください

A学校の教科書中心の予習、復習 B英会話 C受験英語 D公立中学校と同じ内容



10. 8でBと答えた人はなぜそう答えたのですか

A学校の授業が分かるので今のままでいいから B学校の進み具合が塾と合わないから  
C学校で補習してもらっているから Dその他



## アンケート集計結果（文章表現）

2. 英語の授業全般について（英語の授業は楽しいですか。）

3. 2の理由

〔1年生男子生徒〕

2	a) 日本人の先生の場合	b) セシリア先生の場合
A	日常使える英語を学べる（1人） 他国の言葉を覚えるのが楽しい（1） 問題が解けたとき、嬉しい（1） 今のところ何とかよくわかる（1）	リラックスできるし、楽しい（3） 実生活に必要な英語を習う（2） 生の英語が聞ける（2） 友達とみんなの前で会話できる（2） 他の国のことが知れるし、ゲームもある
B	会話が早いから（3） 先生の言っていることがわかる（3） 先生がユニーク、楽しい（2） 科目として好きだし、楽しい（2） 特になし（2）	役に立つ会話が習える（10） 楽しい（4） ゲームができる（4） 先生の言っていることがわかる（1） 特になし（1）
C	別に特にならなっていない（9） 面白い、分かりやすい（2） ゆっくり、分かるまでやってもらえる （3） 楽しいが、難しくて分からないところがある（4） 基礎英語や、宿題ばかりしている（1） 役にたつこともあるけど面白くない（3）	特になし（4） 会話の練習が出来る（2） 面白い（1） 会話がよく分からない（2） 楽しいが、難しい（1） 英語が好きでない（1）
D	英語が好きでない（3） 特になし（2） よく分からない（1）	会話が早い（3） 難しい（1） 会話を覚えるのが難しい（1） 英語が好きでない（1） 日本語と英語の区別がない（1）
E	英語が好きでない（1） 会話を覚えるのは難しい（1） テストばかりだから（1）	英語が好きでない（1）

※備考 A) とても楽しい B) 楽しい C) 普通 D) 楽しくない  
E) 全く楽しくない

## 〔1年生女子生徒〕

2	a) 日本人の先生の場合	b) セシリア先生の場合
A	実際に会話をする (3) 英語が好き (1) 面白い (1) 出来たときに嬉しい (1)	日常会話ができる (10) 遊びをいれた授業 (ゲームなど) (4) 友達との会話練習が楽しい (6) 気楽に出来る (2) 外国に行ったような気になる (1)
B	先生が楽しい、優しい (7) 英語が好き (5) 新しい言葉や外国のことがかる (4) 基礎英語などの英会話がある (3) 授業の進み方が速い (1)	会話やゲームが楽しい (8) いろいろな会話ができる (7) 先生がいいし、雰囲気楽しい (4) 本当の外国の言葉が聞ける (2) 外国に行った気分になる (1)
C	特になし (6) 問題集は面白くない (3) 普通にやっているだけでもの足りない (2) テストや暗唱が難しい (4) 教科書の進め方に不満 (3) 授業内容に計画性がない (3)	会話だけのところがいい (1) ゲームが楽しい (1) 難しくもなく、簡単でもない (1) 会話や暗唱は苦手 (1) みんなの前で会話するのが嫌 (1)
D	発音ばかりで教科書が進まない (1) 問題集を一気にやるので困る (1) 速く読むことばかり、違うこともして欲しい (1) 静かすぎる (1)	会話が難しすぎる (1) 外国のお金の計算は分からない (1) 習っていないことを覚えてやらされる (1)
E	週ごとにテストがある (1) 発音分からない (1)	英語でしゃべる (1)

## 〔2年生男子生徒〕

2	a) 日本人の先生の場合	b) セシリア先生の場合
A	気軽に質問できる (1) 先生の人柄がよい (1)	外国に行ったような気になれる (1) フィリピンのことがよく分かる (1)
B	好きだから、楽しいから (3) 新しい知識を得られるから (2) いつも先生がみていてくれる (1) 物語が楽しいから (1) 先生の話が脱線するから (1) おしゃべりも少しは出来るから (1) 特になし	英会話が出来る (7) 役に立つし、友達と会話したり、楽しい (3) ゲームが面白い (2) ノートを取らないでよいし、楽だ (3) 英語が話せるようになりそう (2) 堅苦しくない授業 (1) 眠れる (1) 外国人と話すのは楽しい (1) 分かっているときに当てて欲しい (1) 特になし (1)
C	別に面白いと思わない (16) 雑談が面白い (2) 先生によって違う (2) 授業が分からないところがない (1) 1年生の時、授業はほとんど分からなかったが、今は分かる (1) 先生ひとり楽しそう (1) 将来必要になるから (1) 文法は嫌い (1) 眠ったらしかられる (1)	別に面白いと思わない (8) 英語が時々分からない (5) 少し難しいが、まあまだ (2) ゲームがあるけどよく分からない (1) 英語ばかりだから (1) よくわかる (1) 本物の英語が聞けてよい (1) あまり当たらないときがある (1) 日常会話が出来ようになる (1) まあまあ楽しい (1)
D	わけがわからない (3) 進度が速い、じっくり教えて欲しい (2) 1本調子の授業だから (1) 実際の英会話に役立たない (1) ユーモア性に欠ける (1) 1) 緊張し過ぎる (1) 小テストが多すぎるから (1)	わけがわからない (3) 難しい英語が出てくる (1) 進度がめちゃくちゃに速い (1) 楽しい (1) 面白くない (1)
E	進むのが遅すぎる (1)	特になし (1)



## 〔2年生女子生徒〕

2	a) 日本人の先生の場合	b) セシリア先生の場合
A	いろいろな話をしてくれて、分かりやすい雰囲気だから(1) ユーモアが楽しい(1) 先生の教え方がうまい(1) 質問しやすい(1)	外国人の先生の発音が聞ける(4) 発音がよくわかる(3) 生活に溢れた会話ができる(2) 教科書と違う自然な会話ができる(2) 勉強というイメージでなくリラックスできる(1) 自分の言いたいことが表現できる(1) 英語でしゃべってから、分からないところを日本語で補ってくれる(1)
B	先生が楽しい(7) 新しいことを知るの楽しい(5) 授業が分かりやすい(4) クラスの雰囲気がよい(3) 楽しいエピソードがきける(1) 英語を聞くのが好きだから(1) 英語が好きだから(1) 外国の話が聞ける(1) 教科書以外のことを教えてくれる(1) 発音分かりやすい(1) 丁寧な教え方だから(1)	会話は楽しい(14) 内容が面白い(5) 会話は役立ちそうだと実感できる(3) たまにゲームが出来る(2) 外国の日常生活がよく分かる(1) 英語をしゃべるのが好き(1) 分からないことを自由に相談できる(1) 楽しいエピソードが聞ける(1) 身ぶり手振りの劇ができる(1)
C	普通だから(6) よく理解できないから(2) 今のままで楽しいから(2) 英文法がつまらない(2) 授業が単調である(2) 知識を増やすだけ(1) 意味は分かるが覚えることが多すぎる(1) 授業も大体分かるし不満ない(1) 先生によって説明が違う(1) 統基礎ばかりである(1) 教科書は簡単だが、統基礎が難しい(1) 統基礎は楽しい(1)	面白いが高度すぎて分かりにくい(1) まあまあ話が出るから(1) よく英語が聞き取れないから(2) 説明がよく分からない(1) 何について学習しているのか分からない もっと遊び感覚でやって欲しい(1) 気分悪い時にべらべらされると嫌(1) プリントを見て、会話するだけ(1) 授業を楽しんでいるなんて思わない(1) 歌は楽しいが、覚えるのは苦痛(1) よく当てられるので緊張する(1)
D	面白い外国の話などしてくれない(1) テストに追われる(1) 進度が速い(1) 教材の種類が多く、先生の話が多い(1)	早口過ぎて英語がよく分からない(1) 当てられるのが嫌(1)
E	眠い、暇、分かっていることばかり(1) 当てられるのが嫌(1) 英語は大嫌い(1)	わけがわからない、無駄のような気がする(1)

11. 2年生に対して、昨年の授業との比較

	男子生徒	女子生徒
生徒がプラスタと感	当たる回数が倍増した (17) 授業が分かるようになった (13) 質問しやすくなった (8) 集中できてよい (4) 楽しい授業になった (3) 授業が受けやすい (3) 先生が目がゆきわたり、指導がゆきわたる (3) 先生との間が近くなった (2) 遊びにくくて騒がないのがよい (1) 発表しやすくなった (1) 2人に先生の個性が楽しめる (1)	当たる回数が倍増し、授業を真面目に聞く (17) 集中できてよい (12) 質問しやすくなった (12) 楽しい授業になった (8) 授業がよく分かるようになった (6) 指導がゆきわたる (6) 発表しやすくなった (5) 遊びにくく騒がないのがよい (4) 授業の効率がよく、進捗がスムーズ (4) 先生との距離が近くなった (1) 授業が受けやすい (1) これからも続けて欲しい (1)
生徒がマイナスと感	先生が目が行き届き、しゃべりにくい (4) 2人の先生の授業の教え方が違うのでテストの時困る (3) 教室移動が面倒 (3) 授業の進度が速い (2) テストが多くなった (2) 人数が減ると質問の数が減り、自分の知らないところに気づく分が少なくなる (1) 自分より理解度の遅い子が少なくなるので競争意欲がわからない (1) 騒がしくなった (1) 統基礎が面倒くさい (1) 先生がうるさい (1)	2人の先生の教え方が違うので、テストの時困る (9) 当たる回数が増え、つらい (7) 教室に活気がなくなった (4) 教室移動が面倒 (3) 先生が目が行き届きしゃべりにくい (2) 授業の進度が速い (1) 人数が少ないと質問の数が減り、理解する量が減る (1) ずっと同じ先生のほうがよい (1) 40人のほうが楽しかった (1) やかましすぎる (1) 発音練習が少なくなった (1) 授業が息苦しい (1) 余計に英語が嫌になった (1) 先生を選ぶ権利が欲しい (1) 4人クラスにときどきして、クラスの交流をして欲しい (1)

## VI. 研究内容 2 総合教科の創造

### 1. 総合学習の課題と展望

杉 峰 英 憲

#### はじめに

1975年(昭和50年)の教育課程審議会の「中間まとめ」に、いわゆる「合科的な指導」の文言が出現し、また、1977年より設けられた中学・高等学校での「学校裁量の時間」を利用した課題追求型の実践が試みられ、さらに、文部省研究開発指定校の「総合学習」の先導的試行の結果が、今日の学校教育の新しい教育課程改造の試みの成果と目されて以来、小学校では、体験を重視した生活学習的な「合科・総合学習」、また、中学校・高等学校では、特定の課題を多面的に追求する「総合・課題解決学習」とよばれるものが注目を集めるようになってきている。特に、1992年度からの、小学校低学年の「生活科」の新設は、現在の初等・中等学校教育における「合科・総合学習」の教科としての存在を、現代教育の主要な潮流として、より確実に認識せしめているようである。

本校の総合教科「環境学」は、現代のこの潮流の中にあるカリキュラム改造の試みである。しかし、本校では、こうした学校教育における合科化・総合化の傾向性を無前提的に認めようとするものではない。もちろん、「合科・総合科」の概念の歴史的・今日的意義が非常に多義的であることにも起因するが、無批判的に教科の総合化を押し進めることは、かつての歴史的総合化の試みにおける学校教育改造の遺産を継承することが難しいばかりでなく、各教科の学力の系統性と特殊性をなおざりにし、文化的・生活的基盤としての体系的な学校教育を無秩序なものにするという問題点を背負い込むことになろう。また、無批判的総合化の試みは、多様であるべきはずの価値観の客観的平板化を招来し、一元的に総合化された全体性のもとに生徒の個性を一般化し、ますます学校の脱人間化を助長することになろう。つまり、総合ということが、人類の文化遺産の個別的な特殊性と、その系統性や分類に対する信頼性を失うほどに融合せしめられたとき、また、総合が、生徒たちの多様な個性・興味・課題意識を包摂することができないほどに系統だてられ、同時に、教育にとって外的な一元的統一性によって彩られるとき、そこにはもはや人間教育の場としての学校は消失することになるのである。

ここでの課題は、むしろ、総合化の理論や形態がいかにも多様で多義的であるか、また、総合化の問題が、いかに重要な歴史的課題であるかを認識することにある。総合化は、古代より、学問的にも、文化的にも、政治的にも、また経済的にも教育改革の主要な柱として、理論的・実践的に挑戦され続けてきた問題なのである。われわれは、そうした分脈のなかで、現時点での本校の総合教科「環境学」の実践をあらためて検討しなおし、今後の総合教科についての具体的な展望を開く契機を見いだせることを課題としたいのである。

#### 1. 教科の枠を崩す力学

##### (1) 総合化の多様な形態

カリキュラム編成の課題を歴史的にみととき、相矛盾する二つの傾向性の論理的拮抗関係を認めることができる。第一の傾向性として考えられるものは、教科の枠組みを堅持し、教科の系統性を忠実に反映した教科中心の教育体系の構築である。そこでは、人間の文化や、大学における学問的な研究の深まりとともに体系性が著しく進展するとともに、生徒がそうした専門的文化を吸収し、学問的文化遺産の高みに立つことこそ、学校教育の課題であるとされるのである。もう

一つの傾向性は、総合化の傾向性である。社会における諸問題の絶え間ない出現により、人間は、知識と関わっていく新しい方法を要求し、それは、個別的な知識の枠組みを超え、社会的な問題の解決のための新しい総合的な知識の探究を希求するのである。そこでは、知識は探究と問題解決と知性的な行動を生み出すための道具であり、学校のカリキュラムは、固定された教科の単なるカタログではなく、よりよい生活を築く能力を発達させ、次の世代を担う人間を育て上げるための知的・情意的環境とされるのである。そうした傾向性の中にあっては、必然的に合科的・総合的カリキュラムが主要な学校教育の課題として要請されるのである。

第一の傾向性、すなわち教科の体系的・並列的・羅列的傾向性に対する第二の総合教科的な傾向性である教育改造計画の展開を、既存の教科の枠を崩す試みとすると、そこには多様な教科の枠を崩す力学の思想と崩し方の形態がある。そして、これらの教科の枠を崩す試みの類型化論としては、ホプキンス(T. Hopkins)の「カリキュラムの諸類型」をあげることができる。彼は、各教科相互の関係の質と程度に応じて、教科並列カリキュラム(The Subject Curriculum)、相関カリキュラム(The Correlated Curriculum)、広領域カリキュラム(The Broad-field Curriculum)、コア・カリキュラム(The Core Curriculum)、経験カリキュラム(The Experience Curriculum)、の諸類型を示している。\*

彼のいう教科並列カリキュラムは、伝統的なカリキュラムの形態であり、現代のカリキュラムにおいても、最も一般的なものであろう。そして、この教科カリキュラムの理論的・実践的宿命である教科の分立・羅列主義を問題とし、学習の方法や内容を相互に構造化し、生徒が学習した成果をできるだけ統合できるようにという観点から、教科間の関連を図ろうとするものが、相関カリキュラムである。このカリキュラムの形態にあっては、各教科は依然として従来の並列的組織化を保ちながら、各々の教科の内容や方法をお互いに関連させるために、教科内容の配列や時間的な配分が調整されるのである。つまり、地理と歴史、物理と化学といった教科の親近性は、相関の発想の起点であり、対象や方法に共通点を持つ教科を相互に関係づけようとする試みである。次に、関連した教科の枠を広げ、それを新しい学習領域として考えようとするのが、広領域カリキュラムとよばれるものであり、また、領域を広げるために教科の枠組みをはずし、新しい教科をたてるものは融合カリキュラム(Fused Curriculum)とよばれている。

さて、コア・カリキュラムとよばれるものは、こうした相関や融合の考え方に一つの核となる中心をもたせ、全体的な教育内容の構造化をはかり、論理的・心理的統一性を確保しようとするものである。伝統的には、ヨーロッパの中世キリスト教世界に典型的に現れた宗教や道徳に中心をおくカリキュラム、また、日本の幕末の和魂洋才的考え方を背景に、日本的(東洋的)倫理・道徳を本体として、その上に西洋の科学・技術を取り組んだものや、国民学校期のカリキュラムに見られるように、修身に中心をおく考え方は、古典的コア・カリキュラムの形態と見ることができよう。かくして、コア・カリキュラムの原型的なものは、まず精神と知識を二分しておいて、一定の精神的構造の側に中心をおき知識の統合を考える構造化の方法であった。そして近代では、地理、歴史等の非宗教的・非情意的教科による知識の論理的統合論へと中心教科の変化が見られ、人間の知性への信頼を基盤にした構造化論と世俗的中心教科への模索が見られる。

一方、経験カリキュラムは、経験を中心とするという意味で一つのコア・カリキュラムの形態と見ることができよう。しかし、経験カリキュラムと呼ばれるものは、教育の主体として学習者を位置づけたり、社会生活や職業生活を中心においたり、また、人間主義という形での教育方法を構想することにより、伝統的コア・カリキュラムにおける精神と知識の二元論や、ある一つの教科を中心とする考え方の基盤にある教科カリキュラムの形態の克服を試みたものである。

こうした分類から考えてみると、今日の我国の「生活科」の構想や、中等教育段階における総合化の試みは、経験カリキュラムとしてのコア・カリキュラムの系譜に属するものであろう。この総合化の課題を明確にし、問題点を浮き彫りにするためには、類型の極に位置する教科カリキュラムと、全体的な統合をめざしもう一方の極への体勢を形作っていったコア・カリキュラムの原理的検討が必要である。また、これらの理論的・実践的基礎を知る上では、19世紀の末葉から世界的な規模で展開された新教育・進歩主義教育運動の存在は注目に値する。特に、我国では、大正期の新教育・自由教育におけるさまざまな教育実践とその理論化、より生活科的・総合的な理論と実践としては、本学文学部附属小学校の前身である奈良女子高等師範学校附属小学校の木下竹次による「合科学習」の貢献は重要なものであろう。より直接的には、終戦直後の学習指導要領（試案）に見る社会科をめぐるカリキュラムの総合の原理、また、そうした「総合カリキュラム」の理論と期を同じくした「奈良プラン」、さらに、実践的・運動的には、1948年に結成された「コア・カリキュラム連盟」の貢献、また、「本郷プラン」や「川口プラン」に代表される地域教育計画の作成と実践も見逃すことができないであろう。

## (2) 伝統的教科並列カリキュラム再考

一般に、総合化がいわれるとき、教科並列カリキュラムにおける各教科間の関連のなさや専門主義、そして人間性の欠落がいわれがちである。しかし、教科カリキュラムの歴史には、人間性との関連で教科の専門性や並列性それ自体の有効性を認めることができるし、文化の論理の自然性も評価できる。そこで、ここでは、総合化の論理が、教科カリキュラムの一面的批判に陥らないために、また、そうした誤った理解を、総合化を構想するための批判の根拠としないためにも、教科並列カリキュラムの原理的・歴史的考察を試みたい。

教科並列的なカリキュラムの起源は、古代の文化的社会であるギリシア、ローマにおいて成立した「七自由科」である。ギリシア人は、円環的、完結的、総括的、普遍的なカリキュラムとして、それをエンキクリオス・パイテイアと呼び、古代ローマでは、一般教養の学問体系としてスツディウム・ゲネラーレと呼ばれた。このエンキクリオスは「エンサイクロペディア」の語源であり、ゲネラーレは、「一般教養」の語源である。

さて、そうした百科全書的・一般教養的意義をもつカリキュラム成立の背景には、ヘレニズム文化の多様性とコスモポリタニズムがある。当時の政治の世界化や、経済の世界的規模での発展は、古典時代の民族文化の壁を破り、世界主義文化への移行を意味していた。文化は、古代ギリシアのポリス精神の上に立つ民族主義的国家主義思想に代わって、世界主義的、国際主義的、個人主義的な多様な古典的思想が頂点に達していたのである。当時の人々が、民族文化への固執よりも、世界的文化への参加をあこがれたこと、すなわち、ある意味での「無中心的」「多方面興味的」「ヒューマニズム的」であったが故に、このカリキュラムは、人間的教養の完全な姿とよばれたのであった。こうした体系的百科全書的教科カリキュラムの完成は、数百年におよぶ学術文化の多方面化と豊富化の歴史を象徴しているのである。

この原型的教科カリキュラムには、当時のそれなりの心理学的根拠があった。ローマのクインティリアヌスは、「雄弁家教育論」において、子供たちの興味の自然性、つまり興味の多方向的傾向性を教育の基盤にすべく、「学科をいろいろと取り替えることは英気を新たにすると」として、同時平行的な多分野の学習活動を唱道したのである。子供たちの精神を新鮮にし、活動自身が疲労を回復させるものとしての教科並列・拡散の考え方である。また、教科自身の個別的性質からも、多様な全体にさまざまな形で注意を向けることによって、一つのものだけを学ぶことからくる弊害を避けることができるとも考えていたのである。考えてみれば確かにそうであろう。

ただ一つの教科ばかりを一日中立て続けに聞かされては、それに注意を集中し続けるのは無理というものである。人間の持つ好奇心は、論理的・系統的に出現するものではない。それはむしろ、全く別の事実や論理体系に触れることによってかきたてられるものである。つまり、知識の全体としての整合性それ自身は、子どもたちにとっては新鮮な魅力とはなりえないのではなからうかと考えられるのである。

かくして、教科並列カリキュラムの原型は、自然で自由な人間性への注目を基盤としていたことがわかる。思想的にも、本来的には、民族主義的国家主義的思想を超越した、世界主義的・国際主義的・個人主義的なものを構想していたのであった。この並列的で個別的な、そして無中心で拡散的な、それでいて文化や人間への好奇心や興味をかきたてる教科並列カリキュラムこそ、西洋の学校史上の標準的・支配的カリキュラムの基本となっていたものである。

### (3) 伝統的合科・総合カリキュラム再考

もちろん、無中心で、散漫な教科並列カリキュラムには、すでにホーマー時代からの問題提起と批判があった。ソクラテスが偏見・俗見の対象としてソフィストの懐疑論を批判し、徳を教養の中核としたのも、また、プラトンが、イデア論を展開し、「善」の実現を人間の最高の目的としたのもそれである。原理的には、かのクインティリアヌスも教科並列主義への批判を予想し、「世間には、たとえこれらの諸教科（百科全書的カリキュラム）を教えることが必要であるとしても、それらをはたして同時に平行して教えることができるかどうか、ということについて疑問をさしはさむ者が少なくない。すなわち世間には、そんなことをしたら、子どもは同時に多くの方向の異なった学科に立ち向かわなければならなくなって、その精神は混乱し、疲労するだろう、といって不可能論を唱える人があろう」\*2と述べている。

そうした伝統的教科並列カリキュラムに対する批判を背景に、中世においては、キリスト教信仰の原理と神学という心情的なものや知的教科的なものを中心にして、カリキュラムを統合しようという動きが現れたのである。それは、いわゆるコア・カリキュラムの形態の原型と考えられるもので、ヘレニズムの百科全書カリキュラムに神学とカトリック信仰という核を与え、七自由科は、このコアに隷属する諸教科の地位へと変質され、全一的な総体としてのカリキュラムとして構想されたのである。つまり、文法は聖書の比喩的表現の理解のためのものとなり、修辞術は僧職者より学ぶべきものとされ、弁証法は異教徒と戦いそれを克服するためのものとなった。さらに、数の中に宿る神秘を理解するための算術、聖書中に現れるノアの箱船の構造やソロモンの神殿の円形構成を理解するための幾何、高雅にかつ恭しく祭式を司るための音楽、定まった日に神を祭るための天文学、こうした変質こそ、中世における七自由科の存在理由になったのであった。そして、何にもまして強力な諸教科の統合の要因は、ヨーロッパ全域をカトリシズムによってかためつくすことにあったのであり、これがヨーロッパの伝統的な総合的・統合的なカリキュラムの原型となったのである。

さて、近代的総合教科への展開は、このヨーロッパ的伝統的な総合化の理論を受けて、多教科並列型のカリキュラムのもつ教育心理学的な欠点を指摘することからはじまる。ヘルバルト(Herbart, J. F.)は、「数学をやる場合の気分というものは、青春の情熱をもって哲学を考えたり、趣味をもって古代史を研究したり、詩に耽ったりする気分とは非常にちがったものである。そしてこうした気分というものは着物を着替えるように一時間ごとに入れ換えることのできないものである。……教材というものは、お互いに関係のないばらばらのものの寄せ集めであるというように考える考え方というものは、——教育者は理論的にそう考えてはいなくても、実際はそうした考え方に慣らされているものであるが——根本的に誤っている。……学習能力というもの

は一つの集中的なものであって、したがって、それは集約的な教授によって、確実な中絶することのない歩みによって持続的に充実されるべきものである。」<sup>3</sup>

ヘルバルトのこうした考え方の基盤には、子どもたちの多方興味の説があり、それは、教材の内部に執着する知的活動としてとらえられる。もともと興味というものは欲望や判断と同様に対象に対する関心であるが、欲望や判断が直接的に充足や選択に向かい、対象の内的なものにまで浸透していかないものであるが、彼のいう興味は、対象の中に踏みとどまり、その中心的活動を多面的に行うものをいうのである。ヘルバルトは、子どもたちの興味の多面的な構造を「人間への興味」と「自然への興味」という二大群に整理し、それを基盤として、教科を大きく人文的諸教科と自然科学的諸教科の二大領域からなることを示した。彼は、生徒の人格の統一性を保ちながら興味を多面的に発展させる方法として、静止的専心としての「明瞭」、前進的専心としての「連合」、また、多数のものを関係付ける静止的致思である「系統」と、他の関係へと発展的に前進する致思としての「方法」を考えたのである。そこには広い教養に裏打ちされた道徳的品性の陶冶の考え方がある。自らの行動を調和的にかつ自立的に選んで行ける人間をつくるのがヘルバルトのねらいであったのである。

彼の調和的・道徳的人間育成の考え方を「中心統合法」として継承し、全体的総合の観点から発展させたのは、ツィラー(Ziller, T.)でありライン(Rein, W.)であった。ツィラーの場合は、全教科の統一をはかるコアとなるのは、宗教と歴史のような中心教科であり、ラインの場合は「心情教科」としての宗教、歴史、文学であった。それらは、生徒の興味に非常に多くの比重をおいたものではあるが、しかし、道徳を教育の全一的な目的として掲げる体系であることはいうまでもない。そこには道徳的品性の陶冶としての全体的な知の構成と、主知主義的で合理的な人間存在の矛盾があったのである。

さて、そうしたヘルバルト派の「中心統合法」の矛盾の解消を、児童・生徒の生活の全一性と客観的文化の全一性ととの統合という観点から、公的なカリキュラムとして展開されたものにドイツでの合科教授(Gesamtunterricht)がある。その最初のもは、1920年の「ライプツヒヒ市小学校用教科課程」である。それは、基礎学校とよばれる小学校段階の教育を、すべて合科教授によって行おうとするものであり、「基礎学校(1年-4年)の教授は合科教授とする。したがって時間割による教科別の教授は廃止される」とされた。

ライプツヒヒの合科教授では、一日の学校生活を外的にも内的にも相互に無関係な諸教科に分割するのではなく、有機的に統合された全体として学ぶことを意味する。抽象的な並列的教科組織のもとにおいては、子どもたちは、ただいたずらに骨をおるのみで、多くの時間を費やしながらか、しかも直感的具体的な徹底した学習や内面的な理解をすることができないというのである。合科教授は、郷土的直感的なものを重視し、それを中心として行われるものであるから、それは最もよく郷土文化の理解とそれへの積極的協力に向かって子どもを教育することができるとされるのである。このライプツヒヒ・プランの現代的意義は、郷土科と自然科を中心として、これまでの宗教科や道徳科を周辺教科としたところにある。両教科は、これまでの保守的統合主義教育の牙城であったのである。

## 2. 本校における総合学習「環境学」への取り組み

### (1) 教科の壁を取り払う

そもそも、本校で教科の壁を取り払わなければならないという発想の出発は、「主体が対象に積極的に働きかける学習観」を構築し、「生徒一人一人の主体的姿勢を作り出す」<sup>4</sup> ことにあ

た。つまり、個々の教科の孤立的・隔離的アプローチのみであっては、生徒の学習観が、すでに知られ確定されている知識を覚え、個別的な事象にその知識を応用すれば事足りるといったような、決まりきった組み替えの手法に追われ、学習が、個別的手続き的知識の記憶に墮するという危険性があるのである。この問題を乗り越えるためには、生徒の学習観を、問題の全体的把握とその解決の方途へと導き、総合的判断力と実践的行動力をもった学習観へと改造しなければならないのである。

一方では、同じテーマを複数の教科で重複して扱うというカリキュラム編成上の問題もあった。つまり、複数の教科で共通の課題を各教科別に取り上げ、学習した結果の総合は、学習者の責任による学習者の側の努力に依存したカリキュラムのままでは、せつかくの共通課題がカリキュラム上の無駄として映ってしまうという問題である。生徒の反応が、それは理科で学習した課題である、あるいは社会で、また保健で学んだことであるということになってしまい、教科の壁を越えた斬新なアプローチとして学習が構成されず、また、各教科の特殊性の認識にはいたり得ないという問題である。環境問題という共通の課題に関して、多様なアプローチがあるという発想が生徒の側に欠落しているとき、また、多様なアプローチがお互いに関連しあっているのであるという発想に欠けるとき、そうした反応が出現するのである。

デューイ(Dewey, J.)は、教育課程における教科目の陳腐な繰り返しをカリキュラムの固定化ととらえ、生徒の知的発達の可能性が閉ざされている状態を次のように述べる。「はじめのうちは、子どもは新しくひらけた広い世界につれて行かれる喜びをかみしめているが、突如として視野を遮る壁がつくられて、自己の偏狭な世界に閉じこめられ、多かれ少なかれ反感をかざるをえないような細々とした事柄を詰め込まれる。新しいものに触れた満足感にひたっていた子どもは、古いものの際限のない繰り返しに急に切り換えられ、不満をつのらせるのである。今日、アメリカのどこへ行っても、機械的で無気力な雰囲気であまわれている。」<sup>5</sup> 彼によるこの状態の改善は、学校を子どもたちが本当に生活する場所であり、また子どもたちがそれを楽しみ、またそれ自体に意味を見いだすような生活経験がえられる場所にするのである。それはとりもなおさず、子どもがすでに身につけている能力を、新しい学習分野を修得させるように活用させることにあるのである。

新しい分野の学習の展開は、彼においては、生徒の状況の心理学的・社会学的理解を基盤にした教科の相関という形で考えられている。彼はいう、「教科の相関(the correlation of studies)に関する問題を手短かに述べれば、個々の人間性の具体的な研究をする心理学と、組織形態の中で人間性を具体的に研究する社会学とは、ハイスクールの諸教科を統合するための自然な基盤をなすということである。このことは、われわれが、ハイスクール期の生徒にとって圧倒的につよい興味や衝動に留意しても、また学習上の教材に着目しても、いずれの場合にもいえることである。私には、このことが、ハイスクールという有機的組織の中で、これら統合された諸教科が混乱ではなく秩序を、生徒の学業を困難にするのではなく容易にするという主張の有力な論拠になるように思われる。」<sup>6</sup> このことは、生徒の生活経験を主体的意欲や興味の側面からとらえると同時に、経験をより広い社会的分脈の中に導き、社会的価値の視点から評価することを総合的にとらえようとしており、それは、必然的に教科の相関を要求しているという構図になっているのである。

## (2) 「環境学」の構造化

主体が積極的に課題や対象に働きかける学習のプロセスをどう構築していくかということは、生徒のもつ多様な興味を包摂することのできる広領域の性格をもつ教科を内容的に構想するとと



もに、方法的には生徒の自主的な興味の追求が、個人的な自己満足に終わるのではなく、将来の自己の探究の発展に寄与するような形で展開されるように指導する方法の開発である。中・高等学校という組織を全体的に考えると教科の領域としての広がり是比较的容易に確保されよう。しかし、教科としての知識や観念の広がりといったものは、生徒たちの知的な探究活動や、体験を何等伴うことなく成立する。つまり、自己の行動に修正を迫られるような反作用を伴わないのである。広がりだけでは、たくさんの知識によって逆に思考にまとまりのない人間、せいぜいのところ物知りができることになるのである。

総合教科においては、教科の広領域を、生徒の個人的な興味を多面化する契機として理解しているのであり、それは同時に、生徒の興味を社会的な分脈において解釈し位置づける試みである。つまり、個別的教科のそれぞれの分野において個々の興味を価値づけるということは、一つの課題を深く掘り下げるといふ方向への努力として考えられるのであり、観察や実験的・研究的な研究によって、科学的な問題解決をすることは、社会的な方向性をもつ説得的・論理的な環境問題についての探究や思考方法への展開を意図しているのである。

一方、興味の追求が、生徒の統一的な人格を保ちながらなされるように、興味を内的に関係づける必要がある。生徒の個々の興味によって学習がふりまわされるのではなく、むしろ、個々の興味の発現の様態を生徒の発達を理解する手がかりと考えるような、興味の心理的解釈も必要である。そうした内容と方法の緊密な連関は、総合教科でいかなる人間を育成しようとしているのかという総合教科の目標の課題である。われわれは、総合教科で、広い教養によって自分自身の生活を深く反省しながら、自らの行動を調和的にかつ自立的に選んでいける、しかもそれをやり遂げる強い意志をもった人物をつくることを考えたのであり、超経験的な環境観念に魂を奪われた状態での、心情的な同情論ではなく、また、知識でもってのみ現存の環境を合理化することなく、しかも、理性的・知性的に思考でき行動できる人間の育成という観点から総合教科の目標をたて、内容と方法の構造化を考えたのである。

われわれは、環境学を、一つの総合教科として次のように構造化した。（118ページ参照）

#### ① 環境教育の目標

充実した自然観・人間観を基盤に、環境への主体的価値観を審美的に形成し、環境破壊と、人間・自然諸科学の環境に対する関係を認識するとともに、体験的・実験的な活動を通じて、環境諸事象への科学的知識と態度を確立し、環境問題への知的・情意的・実践的取り組みのできる人間を育成する。

#### ② 環境教育の基本的観念

自然と人間の観念、環境破壊・汚染の観念、環境研究の方法の観念、実践的・行動的センス

#### ③ 基本的観念へのアプローチ

認知的領域、情意的領域、実践的領域

#### ④ アプローチの内容

文明的・地理的・歴史的アプローチ、科学的・生態学的アプローチ、医学的・保健学的アプローチ、生活環境学的・総合的アプローチ、審美的アプローチ

#### ⑤ 環境教育の方法

講義、視聴覚教材の利用、観察・実験、見学、フィールド・ワーク、発表・討議、講演

### (3) 「環境学」実施の時期

本校の6年間一貫教育のカリキュラムのどのあたりに総合教科としての「環境学」を実施するのが適当であろうか。本校のカリキュラム委員松本博史は、「総合教科」に関する平成3年度の本校公開研究会の研究発表で、本校の中・高等学校の一貫教育のはじまりとおわりの部分を、小学校からの離陸と社会への着地とたとえていたが、彼の意図は、「総合学習」を、冒険と魅惑に満ちた離陸と着陸の部分ではなく、その中間にあたる比較的安定した時期に位置づけようとするところにあった。中間の安定した部分は、大きな変化の感じられないいわば退屈な時期であろうし、中だるみの時期とも目される。しかし、彼は、そうした時期にこそ、これまで教科の内容と枠に隠されてしまっていた生徒の主体性や人間性の本質的な成長が見えてくる時期であると考えているのである。つまり、「総合教科」は、決して中だるみ対策などではなく、いわば飛躍的な飛行距離の延びる時期でのその距離の実体験的なものであろう。

さて、着地が離陸のはじまりの部分をも形成すると考えると、一つの円環運動の構成としての6年間一貫教育が見えてくるであろう。ホワイトヘッド(Whitehead, A. N.)は、「教育におけるリズムの原理」(The Principle of Rhythm in Education)としてこの円環運動を説明している。最初は、ロマンスの行程であり、学習さるべきものが探検され、学習経験が感動的な調子を伴って響いてくる時期である。次の行程の主要な特徴は、厳密性に彩られた訓練と反復練習の時期ということである。それは、公式や法則や論理として経験がとらえられる時期である。第三の行程は、一般化の行程であり、そこでは、より広い地平での多様な関係が問われるのであり、関係性の広がりにおいて第二のリズムの出発であるロマンスの行程への出発でもある。

ホワイトヘッドのリズム論においても、第二の行程は、ある意味で無味乾燥であり、中だるみの生じ易い時期であろう。しかし、ホワイトヘッドは、このリズムは、どんな小さな問題解決にも、また非常に長い生涯という時間的スパンでも生じていると説く。たとえば少年期がロマンスの行程であり、青年期が厳密性の時期とすれば成人の時期は一般化の時期であり、社会へのロマンスの行程のはじまりであろう。また、ホワイトヘッドの示唆によれば、この総合的一般化の時期こそ学習者は自己の力の進歩を実感できる時期であるという。

われわれは、ホワイトヘッドのいうロマンスと一般化の行程を厳密性の時期に導入しようとしたのである。いわば6年間という一つのリズムの中に、1年間という相対的により短いリズムの導入をはかったのである。導入されるべきものは、必然的に、「主体が対象に積極的に働きかける学習観」によって「生徒たちが知識と行動を結び付け、実生活との関連を主体的につけ、個々の専門教科の学習への関心をいっそう豊かにしてくれる」\*7総合教科でなければならなかったのである。

### (4) 「環境学」の評価

学習の結果は、評価・測定の作業をぬきにしては語ることはできない。しかし、総合教科の性格は、個別的な諸教科に還元して評価できるものではない。環境教育の教育目的が、「環境問題への知的・情意的・実践的取り組みのできる人間を育成する」ところにあるのであれば、総合教科としては、そうした能力をこそ評価すべきである。既成の教科別の評価の手段や既存の評価の概念にとらわれていては、環境学の総合性の観点を見失うことになりかねない。環境学の評価には、そもそも既存の評価体系はなじまないものであろう。

評価自体は総合的であり、カリキュラム全体との総体性の中で成立するとしても、評価の分析は必要である。環境学にあっては、生活行動のレベル、環境への意識のレベル、知識のレベル、価値意識のレベル、構想力のレベルとして判断する必要があり、そうした判断の構造

化された準拠体系を用意することが、評価の主観性を払拭し、客観性・共通性を確保する鍵であると考えられる。また、アンケートによる評価は、生徒の実態を知るとともに、考える契機を作ることにもなる。そうした意味からアンケートは、かなり立場を明確にした主張を含んで構成されることになったのである。(123ページ参照)

われわれは、環境調査アンケートの項目構成表のレベルを、

- ① 生活行動のレベル、
- ② 環境への意識のレベル、
- ③ 環境に関する知識のレベル、
- ④ 価値意識のレベル、
- ⑤ 問題解決構想力のレベル

へと区分することにした。そして、各々のレベルにそれぞれの具体的な活動内容や事項、また、意見を振り当てることとした。

- ① 身近な環境問題への対処、行動、意識として身の回りの衣食住に関わる項目。
- ② 身近な自然の認識、緑、空気、水、生活意識に関わる項目。
- ③ 認知領域へのアプローチ、公害訴訟、公害用語、地球温暖化、熱帯雨林、原子力発電、洗剤等の問題に関わる項目。
- ④ 基本的観念をめぐって豊かさ便利さへの志向、人間と自然等に関わる項目。
- ⑤ 地球の将来、経済構造の変容、文明の構造、政治的コントロール、労働における生産と消費の関係、レジャーの質的変容 個的リアリティーから社会的リアリティーへ、社会福祉、現代重農主義等に関わる項目。

特に、⑤の問題解決構想力のレベルでのアンケート項目は、生徒の問題解決の発想と展開の様相がどのあたりにあるのかを知る目的であった。構造的には、環境教育の基本的観念をめぐって、基本的観念へのアプローチの有効性を組み合わせた形での項目を作成した。シェーマ的には、人間と環境問題に対して楽観的か悲観的か、人為的・科学的な改善を構想するか自然的治癒力を信頼するか、個人的責任として考えるか集団・国家の責任として考えるか、という枠組みを重ね合わせて、主義・主張という形で提出し、生徒の反応を待つことにした。実際のアンケートには科学主義、感性主義といった下記括弧内の表現は省き、選択は、各個人3つ以内の選択である。生徒によって選択されたものの多い順に並べると次のようである。

(環境保全主義) 55人

限りある資源を大切に自然を守り、人間と自然が調和するようになっていくと、環境問題は解決する。

(批判的哲学主義) 38人

科学は必ずしも人間の生活をよくするとは限らないので、科学が悪用されないよう、人間はしっかりした考え方を持たなければならない。

(性悪説的悲観主義) 35人

人間は、自分の欲望のために自然を征服してきた。やがて、人間は自然を破壊し、自然の復讐を受け、人間も滅ぶだろう。

(国民主導的実践主義) 34人

環境問題は、政治に期待していても良くならないので、国民が環境を良くする運動を起こさなくてはならない。

(実践主義) 32人

日常生活で自然を汚したり、傷つけたりしない実践を重ねていくことが環境問題の解決につながる。

(文明・進歩懐疑主義) 23人

人々が、自然界の成り立ちや人間の健康についての知識をもち、文明の欠点を批判する精神を身につければ、環境問題を解決できる。

(国際協力主義) 23人

経済、政治、文化など、多方面にわたって国際協力して開発をすすめると環境問題が解決する。

(進化論的悲観主義) 11人

地球の歴史からみると、環境に適した生物が出現し滅んだ。人間も同じ運命をたどるだろう。環境を破壊した人間は滅び、新たな環境に適した生物が出現するので、環境問題の解決は人間にはできない。

(国家主導主義) 10人

国が、企業の無責任な行為や、不当な競争を規制すれば環境問題はおさまる。

(科学主義) 7人

自然科学は自然と調和した理論を組み立てることができるので、環境問題を解決する方法は、自然科学の発達によってもたらされる。

(知性主義的楽観主義) 7人

人間の知恵は、いままで、さまざまな困難を解決して高度の文明を築いてきた。人間の知恵を信頼していれば、これからも環境問題は解決していく。

(自然主義) 7人

自然の法則や秩序にしたがって生活し、社会を作っていけば、自然と環境問題は解決する。

(禁欲主義) 6人

人間の物質への欲望を抑え、心を鍛えることが環境問題を解決する。

(感性主義) 2人

芸術に触れたりして人間の美的な感覚をそだてていくと、環境問題は自然と解決する。

(現状肯定的無責任主義) 1人

現代人は、現代の豊かな生活からぬけ出せないから、環境問題の解決は未来の人々に任される。

(自然主義的楽観主義) 0人

人間は新しい環境に適応するようになるので、やがて人間と自然の調和は回復するだろうから、何もなくてもよい。

環境学の評価は、生徒の環境問題への多様な観念やアプローチの構想力に求められるべきである。そうした構想力は、価値観の広がりや、論理的な一貫性や、体系的に関するものであると同時に、情意的実践的な行動力の評価も兼ね備えなければならないのである。われわれは、評価を、プロセスにおける変化としてとらえることにした。それは、アンケートによる生徒たちの反応のそれぞれに関する変化を解釈することによる評価の方法であった。心情的に環境問題を愁いていた生徒が、自己の発想の基盤を科学主義の限界の問題としてみる、あるいは、科学的な方法による問題解決に望みを託する等の変化である。生徒の現状では、現状妥協的な傾向性が、心情的な環境保全にあることは明かである。われわれは、いかにして人間の知性や、科学的・人間的知識

に裏打ちされた行動によって環境問題の解決への問題提起ができるか、また、いかに自己の課題を説得的に論理化し得るかに求めている。アンケートにおいて「科学万能主義」的な思考様式を持っていた生徒が、「国民主導実践主義」へと変化していった過程はどうであったのか、あるいは、自己の科学への情緒的傾倒性が、人間の感性への注目によって環境保全への実践の契機をいかにして取り込んだのかといった記述が評価の方法に値する。

本校の構想する学力観は、既存の教科別の学力観に比較すればむしろ新しい学力観、異質の学力観といえよう。生きた学力観、学ぶということはどういうことであるのかという学力観は、そうした生徒の個性的な学習活動のプロセスにおいて評価すべきであり、観念や知識の生徒にとっての独自の整合性や力動性構想力のありかたとして評価できるものと思われる。

一方、環境教育の評価は、生徒の評価のみではなく、環境学というカリキュラムの評価でもある。環境学がいかに生徒に効果的な影響力を与えたのか、いかに生徒の価値意識や行動力の変容に貢献したのかという評価である。こうした教育作用の全体の中に生徒の評価が組み入れられてはじめて環境学という総合教科の評価は成立し得るのである。

単純集計のみの現段階では、アンケートの結果を正確に考察することはできないのであるが、大枠として、環境学のはじまりの時点での集計を見てみると次のようなことがいえよう。(123ページ参照) 生活行動のレベルでは、個人的な衣食住については、相対的にかなりの配慮が認められ、食物や衣服を大切にしたり、集団の規律としてのゴミの出し方を守る等の傾向が見られる。しかし、ボランティアな側面、たとえば、いらなくなった衣服のリサイクルや、節水や節電、新聞紙や牛乳パックの回収、等に関しては低い。また、環境破壊に関する知識レベルではかなり高く、また、意識のレベルでは、環境問題は、人間の力で解決できると考える傾向があるが、心情的・情緒的な対応であり、具体的・長期的・政策的な発展へととはつながりにくい等の問題点を見つけることができよう。

また、構想力のレベルでは、反応の多いものは、「環境保全主義」「批判的哲学主義」「性悪説的悲観主義」「国民主導の実践主義」「実践主義」「文明・進歩懐疑主義」「国際協力主義」等であり、科学や文明の行方を監視し、政治に期待するよりは日常生活で自然を守ろうとする方向性が見える。同時に、人間性の環境への無配慮を宿命的な問題と考えつつも、なお国際的な協力へと望みを託する等のやや空想的環境保護観が見られるのではなかろうか。中でも、「環境保全主義」55人に対して「自然主義」は7人であることからみると、人類は、自然の法則や秩序に従うほどの強い期待はできないが、日常生活で資源を大切にすることは可能であり、それが環境問題の解決につながっていると考えていると見ることができよう。それは、資源を大切にすることは、「禁欲主義」が6人であり「性悪説的悲観主義」が35人という高得点とも関連しており、環境問題に関する人間の貢献の可能性はかなり低い評価を受けていることがわかる。

一般に、現状での人間の文明も、科学の論理も、人間知性への信頼も、自然の法則に従うことも、芸術的感性への信頼も、禁欲の可能性も、国家の政治への期待も環境問題の解決という点では否定されているとみてよいであろう。彼らは、生活や国民的レベルでの実践や、国際的な協力こそ大切であると考えているようである。それは、環境問題への教科の学習の貢献が十分に理解されていないことにも起因しているのではなかろうか。環境問題へは、学問的な多様なアプローチがあり、具体的にはどのような方策が可能であるのかということを経験し、生徒個人個人の反応がどう変化したかを見ることによって、環境学の教科としての意味が明確になることであろうと思われる。

### 3. 本校総合教科「環境学」の今後の課題

ここでは、本校の「環境学」の構成とアメリカにおいて展開された総合教科への構想を重ね合わせ、当時のアメリカの総合教科がかかえていた問題点を分析し、これからの本校の「環境学」の展望を得たい。

#### (1) ヴァージニア・プランと本校の「環境学」

まず、本校の総合教科のプロジェクトにとって示唆深い、アメリカの進歩主義運動の中でなされた典型的な中等カリキュラム改造であるヴァージニア・プランを検討する。

ヴァージニア・プランは、20世紀初頭の新教育が、思想的にも実践的にも完成期に達した1930年に、コロンビア大学教育学部とヴァージニア州との共同事業として出発したものであり、1934年から州内で実験的試行に移されたものである。そして、中等学校案は、1936年から1941年にかけて各学年用の「教授資料」として、また小学校案は1943年「ヴァージニア小学校学習指導要領」としてまとめられたものであり、これらは、我国の戦後の新教育、特に社会科の新設に特に大きな影響を与えたものである。

いくつかの本校の総合教科のプロジェクトと類似する点をあげてみると。

- ① ヴァージニア・プランは初等・中等学校を通じての11年間にわたる一貫したカリキュラムである。本校の場合は、中学校と高等学校の間には、生徒にもカリキュラム上にも連続と一貫性がある。また、本学文学部附属小学校は、大正期以来の「合科学習」の伝統に基づく実践を展開しており、教育の理論と実践において、本校の「総合学習」と密接な連関がある。また、完全ではないにしても附属小学校との生徒の連続は確保されている。
- ② ヴァージニア・プランにおける中学校段階のコアの内容は、社会機能をスコープとし、生徒の興味を中心にシーケンスとする単元系列による超教科的な総合コアであり、これまでの伝統的なコア・カリキュラム、すなわち、宗教的、情意的教科である宗教や道徳を中心としたものでもなければ社会や理科などの特定の教科を中心としたコア・カリキュラムではない。本校の場合も、特定の心情論や精神主義を中心としたものでもなく、また既存の特定の教科を中心にしたものでもない。
- ③ 合科・総合教授は、児童中心で心理的である場合が多いが、ヴァージニア・プランはまず詳細な机上のプランを作成し、そのあとでプランに従って教師が実験試行しつつこれを修正していくといった方法であり、また、分化的専門的な知識体系の要請としての教科並列的なカリキュラムと、総合的生活的な教育からの要請であるコア・カリキュラムが共存しており、論理的なカリキュラム編成の方法である。本学の場合も、「個別教科と総合教科との関連をカリキュラム編成の最初の段階から考慮し、それらの関係を有機的にすることをめざした」\*<sup>6</sup>のであり、超教科的な一つの思いつきにすぎない総合化ではなく、統制的合理的な自由主義的なものとして、バージニアプランに近いものである。

以上の3点に関わるヴァージニア・プランの当時の学校教育への貢献や、プラン自体の課題性や問題点は、本校の「総合学習」へ、次のような示唆を与えているように思われる。

- 1) 現在、本学では、小学校教育と中学校教育の間に完全な接続はない。ヴァージニア・プランに見るような小学校と中学校の一貫したカリキュラムは、世界教育史的に見て非常に画期的なものであったが、本校で本格的に総合教科を広く、かつ有機的・総合的に取り扱ってゆくためには、諸教科、諸教材の統合的構成という垂平的広がりと同時に、当然、中・高等学校全体を通じた総合学習の構想や、小学校からの一貫したカリキュラムを基盤にした全体計画が構築されてしかるべきであろう。

- 2) 本校のコアの内容は、社会生活的な課題を中心とする総合的超教科的学習活動であるが、生徒の興味と教科の内容との組織的研究による多様な総合教科のあり方に関する教育課程の展開は不十分である。将来的には、例えばライブッチヒ・プランに見るような生徒中心で心理的な側面を、生徒の主體的な探究能力の育成の課題として展開すべきである。その場合、コアの内容が、歴史的な展開と反省をへて宗教性や心情論や特定の教科からの脱皮を図っている経緯をコア観の遺産として生かすべきであり、中等教育段階での総合化の構想は、統制的合理的なものへの知性的・活動的自由として位置づけなければならないろう。
- 3) 超教科的な思いつきによる総合教科の構成は、体系を求めようとするならば教師たちは伝統的な教科カリキュラムの体系に帰るより他に道はないのである。ヴァージニアプランは、分化的専門的な伝統的教科カリキュラムの体系を選択課程、総合的な生活的単元の体系を必須教科として作り上げ、個別教科と総合教科との関係を調停している。しかし、この形は、総合教科の理念と個別的教科の等価性に関して問題を残したのであり、本校は、選択教科を増加させる形で各教科と総合教科の関係を調停すべきではない。「総合教科」に関するアンケートをてがかりに、教育の基本原理の究明、具体的な教育目標、具体的な知識の領域の精選、個別的教科との整合性・合理性、活動内容の編成、評価の体系等、構造的な研究による教科課程と総合教科の関係を追求することがこれからの課題である。

## (2) 8年研究と「総合教科」

1933年にはじまる8年研究は、進歩主義的教育を受けた生徒たちを追跡的に研究し、彼らの大学での学業成績や態度などを他の一般校からの卒業生と比較するとともに、大学入学のための資格要件が高校教育を支配し、自由にカリキュラムを開発することができないという、世界共通の学校教育の課題に挑戦したのである。研究は、「ハイスクール・大学間関係委員会」によって選ばれた30のハイスクール実験校と、委員会の計画に基づいて実験教育を受けたものに限り、一般志願者に要求される入学試験を免除するとの特別の提携を結んだ300校にわたる大学の参加によって行われたのである。

4年後の1936年には、第一回の実験学校卒業生が各大学に入学しはじめ、大学におかれた評価委員会は、一般入学者との詳細な比較検討をはじめたのである。1941年までには、約1万人の実験学校卒業生が約250の大学に入学し、そのうち無作為に抽出した1,475名が5年間にわたって追跡調査の対象とされたのである。

こうした結果は、1937年の「創造的文章記述の教育」を最初として、学業成績、知的好奇心、正確な思考力、課外活動等に関する膨大な報告書となって出版され、報告の内容からは、実験学校の卒業生の大学における学習能力に問題がないこと、また、彼らはほとんどすべての学科で一般入学者をしのぐ成績をあげていること、また、大学での学科の成績には直接反映されない知的探究心、集団活動への積極的参加、創作・鑑賞活動、新しい環境への適応能力、世界の動向への関心などでははるかに優れていることが実証されたのである。

ところで、実験学校卒業生に対する大学入学の保証は、一般校の入学者の学力との比較において、入学当初からの一定の差を生ぜしめたのではなかろうかという疑問があらう。しかし、30の実験学校は、大学入学が保証され得ていることと、生徒の個性を尊重し、共働的精神を培うことという教育理念が共通項であって、当時公表されたバージニア・プランにみる超教科的な総合教科をそのまま実施したのもあったが、同時にほぼ伝統的な教科の枠内で、教授法をなるべく活動的にしようとした程度の改善に終わったものもあった。報告書をより立ち入って検討してみると、伝統的なカリキュラムを思い切って捨て、バージニアプラン的なものを取り入れた学校と、

大した改革を企てなかった学校との両者における大学入学者の比較研究の結果として、思い切った改革した学校の卒業生が断然優勢であったとの報告があるのである。<sup>9)</sup>

8年研究が示唆するのは、まず、実験的研究の対象となった生徒たちは、あらかじめ大学進学の道が約束されていた事実の意義である。大学入学試験から解放されていたが故に、彼らは高校在学中に自由でありえたと進歩的でありえた。実験校となった高等学校も大学入学が要求する資格要件としての一定の教科目を一定期間履修しなければならないという枠組みから自由でありえたが故に思い切った統合教科への挑戦が可能であったのである。

さて、本校においても「世間一般の受験体制の浸透」が「避けて通れない問題」であり、それが「学校独自の独創的なカリキュラム編成を不可能にしている最も大きな原因だといえる」のである。<sup>10)</sup> 本校の「総合学習」は、まさに、そうした「後期中等教育を大学入試準備と見る見方に対する挑戦」であり、質的に異なった次元からの教育観の具現化であり、知識と行動、実生活と教科学習の統合の構想であった。現在の本校の場合は、8年研究で実現されたような接続、すなわち、大学入学資格を協定によって確保する方法は不可能であるので、「総合教科」を実施する時期を最も大学入学の影響を受けにくい時期である高校一年次を選んでいる。現行の大学入試制度の中で、中・高一貫教育の利点を最大限に発揮するための実験的方法としては十分に評価できよう。しかし、本学附属中・高等学校は、中高間での接続は完全であるが、小学校からの接続は約半数に留まり、また、大学への接続はないという現実依然として解決されないままに残っているのである。本校にとってより原理的な問題は、8年研究の対象となった生徒達が特約によって得た大学入学の資格を、幼稚園、小・中・高等学校、そして大学との一貫性においてどう考えるかにある。広くは、彼らのみならず与えられた自由な総合的学習の実施を阻む基本的な制約からの解放を、いかにして一般的な公立学校にも導入可能な形で構想するかということがこれからの課題となろう。

### (3) 学校区分と接続の問題

長期的「総合化の構想」を突き詰めると、学校区分の問題になろう。小学校、中学校といった行政的に区分された学校段階における隣接する学校間相互の調整問題を、ブリッグス(Briggs, T. H.)は、1910年代の中等学校改造運動の中で、「われわれがそれに従っているような分離された学校ユニットは、もちろん論理的なものではない。それらの学校区分は、歴史的にわれわれが民主主義の中で優勢であることを期待するような学校区分とは、著しくかけ離れた事情から由来している」<sup>11)</sup>と述べ、学校区分の非合理性、人間不在性を指摘する。また、学校区分の存在そのものに関して、デューイは、次のようにいう。「学校の区分単位への分轄は、最小限にとどめるべきである。すなわち、小学校からハイスクールまでさまざまな年齢の子どもたちが一緒に学習しているようないわゆる統一学校(unified school)であることが望ましい。ハイスクールにおけるジュニア年限とシニア年限との間に行政上の中絶的区分があってはならない。」<sup>12)</sup>

しかし、デューイのいっていることは、教育過程における学校区分の概念を否定するものではない。彼は、学齢段階に見合った独自性をもつ各学校が連続してあるべきであるとし、各学校の教育課題を明確にする必要から、そして、児童・生徒の連続性を確保するという条件から、「アーティキュレーション(articulation)」すなわち最小限の学校区分と生徒個人の発達の継続制を保証するための完全な接続を主張しているのである。

彼は、アメリカの旧学校制度である8・4制を批判し、6・6制を主張したのであるが、それは彼が、「現在のハイスクールは、それ自体の明確な課題もなければ特別な目的もっていない」と当時のハイスクールが4年間に限定されているという短すぎる区分を問題としている。彼は、



「6年間という教育期間であれば、ハイスクール自体の独特な問題に取り組むことができるだろう」という。その「問題」とは、「自然と社会に関する学習を進展させる方途を、生徒の心の中にひらかせるようにすることを目的にしているものである。それはまた、生徒の生活にかかわるそれらの領域についての知識に共感をおぼえるような能力——一言でいえば教養——を獲得させるという課題でもある」<sup>\*13</sup>と述べる。彼は、ハイスクール独自の教育目標を明確に設定しそれを実現するために4年間から6年間への期間延長を提言したのである。それはとりもなおさず、ハイスクール段階での総合学習の充実という観点からの6年生への提言であったのである。

一方、小学校の独自性として、初等教育では、子どもたちの本能と衝動を学習上の活動的な興味と道具へと系統的に組織していかなければならない。デューイは、「われわれに必要なのは、生徒が真理および真理に準じたものへの確かな活動的な興味を発展させることである。またある探究心を効果的に高める道具を意のままに活用しながら、その確かな探究心を発達させることである。さらに、観察、構成、表現、省察をとおして、確かな活動様式を生徒が系統立てていくことである」と述べる。この目的からすると小学校の8年間は長すぎるのであり、彼は、小学校期間を短縮することにより、より明確な小学校教育の課題を鮮明にしようとしている。

彼は、早い時期からハイスクール問題を、初等学校から大学に至る全学校体系における接続問題の視点からとらえており、ハイスクールは、小学校と大学とを結合する環としての役割を果たさなければならないという。しかし彼は、「十人委員会報告」の中で言明された、「大学進学に最適な準備教育は、生活のための準備教育としても最適である」ことを「おめでたい定式」(a happy formula)として皮肉っている。「そもそも大学進学者の要求をみたくすることに関連して計画されたハイスクールの課程は、生活上の職業に就こうとするものの要求にも適切なものであるとの仮定に立って計画されるべきものなのか？あるいは、ハイスクールはもっと総合的な意味で全生徒の生活準備のためにその教育力を傾注すべきではないのか？しかも、そのような生活準備のための学業をもって大学入学資格要件とされることが許されるべきものか？」<sup>\*14</sup>ということが彼の問いかけである。彼の解答は、すでに公にされていた「教育方法に及ぼすハイスクールの影響」(1895)に見ることができる。「ハイスクールは、一方において、小学校と大学との結合する環としての役割を果たしていかなければならないが、他方、踏み台としてではなく、つまり、大学に進学する意志のない人たち、あるいは大学に事実上進学しない人たちの最終段階として、それ自体が人々の大学(people's college)として役立たなければならない」<sup>\*15</sup>という。かくして児童・生徒の発達の観点からのハイスクールの区分の存在理由を考えると、それは必然的に独自の課題をもたなければならないことの論拠と重なっており、その課題が、人々の大学として成立するための総合学習の必然性、そして、総合学習の完成のために必要な延長された期間の主張であったことがわかるのである。

#### (4) 現代教育の課題

伝統的教科並列カリキュラムと、その羅列的並列主義を改善するための総合カリキュラムの多様な形での出現は、社会の多様な価値観と制度を背景に学校教育や学習指導の歴史の明暗を織りなしてきた象徴的な事柄であるといえよう。現代における教科の枠を超える多彩なカリキュラムや学習指導の方法原理は、加速度的に進展と老化現象を繰り返している人間文化と、これまでの伝統的な価値観の硬化と崩壊とともに、歴史的な議論の地平を超えて、新しい形での諸教科の系統性の論理と諸教科の総合の形態を要求しているのである。つまり、このふたつの傾向の並存の可能性こそ、紛れもなく現代教育の現実である。

1960年代のアメリカの学問中心カリキュラムにみられる教科の系統性の強調と、各教科の並列

主義が、各教科を既存の学問の体系性に基礎づけられ、教科としての枠組みを、鍵概念を基本とする説明と発見の論理で構築した。そうしたカリキュラムでは、生活の直接経験による具体性の限界を超えて、力動的にさまざまな学問的優位の条件を生み出すことができるだけでなく、現代社会の情報化、高度な文化化の潮流にも支えられて、高等教育が要求する学力にも直結するものとして評価され、教科カリキュラムの存在は、社会的承認を得るに到っている。しかし、抽象的な認識能力に依存する学問中心のカリキュラムは、現実生活からのますますの隔絶の方向をとり、教育作用の人間化の観点から、学校における人間不在の現象を引き起こすことにもなる。しかし、だからといって、教科カリキュラムの力が弱まるわけではないのである。

一方、最近の学校教育の荒廃を指摘するなかで問題になっている、いじめや登校拒否、校内暴力などの現象に対処するための、ゆとりと充実のカリキュラムの構想や、小学校低学年の生活科、また、ここで取り上げた本校での総合教科としての環境学の構想は、教科の枠を超える試みととらえることができよう。そうした試みは、古典的な学校教育の時代から精力的に押し進められていたのであり、教科カリキュラムのバラバラ主義と人間不在に対するあたかも抗生物質のように、副作用を含んではいるものの、教育の人間化を支え続けてきたのである。

現代的状況における教育内容の総合化の構想は、情報化社会や国際化、また、地球的規模における環境問題の学際的アプローチという発想を基盤として成立することから、一元的な発想や、国家的・心情的な統合性を拒否するという意味で、伝統的な合科、生活主義とは対立しかねないユニークな特質を帯びることになる。教科の領域への帰属を感覚として拒絶しながら、基本的には教科の学力で自己の存在を示している不思議な学習や行動の自由の余地は、今後とも教育界に広がることであろう。抽象的な学問と学歴社会だけで教科に縛られることを拒否する学習の感覚は、新しい種類の総合的学習活動のエネルギー源となっているのである。

しかし、このような合科・総合的発想は、あるべき総合の全体的なビジョンが打ち出されていないという点や、いかにしてそうした総合力を評価し指導するかという方法論を確立していないという点、また学校教育体系の分節と連続の原理が不透明なままでの局所的対応という点で、現在の総合化傾向には実に問題的で流動的な課題をはらんでいる。そして、教科の伝統的な評価体系優位の時代にあって、この問題性はより深刻なものとなるであろう。しかし、それにも関わらず、趨勢としては、教科の枠を崩す動向は、教育現実のいたるところでますますつよまるものとみられているのである。

いずれにしても、学校教育において、教科をめぐる通念は、いま、世界の各地で急速に崩れつつある。そして、より深化した形の教科像と総合化を求める知的模索が試みられている。その点、合科を学習指導要領で強いられているわが国の初等教育や、総合化の潮流の中にある中等教育にあっては、総合教科の進路への展望や、固有の教科論と総合化の試みを進展させる論理的基盤の形成が不十分な状況であり、このままではいずれ深刻な事態を迎えることにもなりかねない。教育現場における合科・総合教科の問題は、おそらくこうした課題をめぐって発生することになるであろう。

(註)

\*1 Hopkins, T., *Integration*, 1937.

\*2 クインティリアヌス、「雄弁家教育論」、1巻、p.190.

\*3 Herbart's *Padagogische Schriften*, Bd. II, S.101ff.

\*4 奈良女子大学文学部附属中・高等学校、公開研究会発表要旨、1991年、pp.16-17.

- \*5 Dewey, John, : The Influence of the High School upon Educational Methods, The Early Works of John Dewey, Vol.5, 1972, pp.273-274.
- \*6 Dewey, John, : The Influence of the High School upon Educational Methods, The Early Works of John Dewey, Vol.5, 1972, pp.280.
- \*7 奈良女子大学文学部附属中・高等学校、公開研究会発表要旨、1991年、pp.16.
- \*8 奈良女子大学文学部附属中・高等学校、公開研究会発表要旨、1991年、p.15.
- \*9 倉沢剛、「近代カリキュラム」、p.209.
- \*10 奈良女子大学文学部附属中・高等学校、研究紀要第33集別冊、総合教科「環境学」、1991年、p.1.
- \*11 Briggs, Thomas H., : Articulation: Some Fundamental Purposes and Its Ideals, NEA Journal of Proceedings and Addresses, 1912, p.581.
- \*12 Dewey, John, : General Principles of Educational Articulation, School and Society, Vol. XXIX, No.744, March 30, 1929, p.400.
- \*13 Dewey, John, : "Discussion" in "Shortening the Year of Elementary Schooling", The School Review, Vol. XI, No.1, 1903, p.19.
- \*14 Dewey, John, : Current Problems in Secondary Education, The School Review, Vol. X, No.1, 1902, p.20.
- \*15 Dewey, John, : The Influence of the High School upon Educational Methods, The Early Works, 1882-1898, Vol.5, 1972, pp.270-271.

## 2. カリキュラムと総合教科

松 本 博 史

### 1. 本校における総合教科

元本校副校長松村正樹氏は論文「自由教育運動から学ぶこと」（1979年校内研究会で発表、本校紀要第22集1981年に掲載）において、奈良女子大文学部附属小学校の教育を大正自由主義教育運動の枠組みの中で歴史的に考察している。

氏は附属小学校卒業後の生徒達の本校に於ける状態から逆照射する形で附属小学校の教育を考察している。だが、氏は決して、附属小学校の教育を批判する言葉は書き連ねていない。あくまでも自由主義教育の持っていた長所を現在に生かし、短所を克服するかたちで<その何をどこに生かすか>ということを考察している。それは、附属中高が附属小学校の教育から継承・追求して行くべきものはなにかを我々に提示していると受けとめられる。（以下<……>の部分は、上記松村論文からの引用である。）

松村氏は、大正自由主義教育が「何を」をぬきにした「いかに」の追求にばかり走ったために、技術主義に陥り、当時上から課せられてくる国定の教育内容との対決を避け、それと癒着した反省から<やはり何といっても「方法」がすべてであるという考え方を修正して、教育「内容」をそれから切りはなして正しく位置づけることが必要であろう><「内容」(何を)と「方法」(いかに)は車輪の両輪のごときもので一方が駄目なら他を殺してしまう関係にある><その両面において科学的なアプローチが必要であろう。教育の仕事や人間の理解が科学だけで全部割り切れるとは思わないが、可能な

限り科学の基盤に立ち、主観主義や相対主義の道にふみ込まぬようにとの自戒がなければならぬ」と教育「内容」の重要性を強調している。これは、附属小学校から本校に入学してくる子供達の知識の片寄り、基礎学力―読み・書き・算―の定着不足にたいする批判である。彼らの担任の教育方針で教育の中身が変更され、附属小学校からの子ども達の教科内容についての知識はバラバラということになる。

次に、松村氏は教師と生徒のかかわり合いについて、大正自由主義教育が子供中心で子供の活動を教師が「助長的」に指導しがちであったことについて「教師の指導性と子供の自発性とは二律背反的にとらえられるべきものでなく、そのぶつかり合いが教育なのではないだろうか。いわば教師の指導性・教育内容の論理とこどもの論理（自発性・興味・意欲）の相克が教育の場なのであろう。そして教師には、必ず身につけさせなければならぬ教育内容について、こどもの内部に「学びたい」という自発性と意欲をほり起こすという難しくきびしいしごとがある。」

教師の指導が前面にでて、教え込み、注文的になるのはもっての外であるが、「子供の自発性の尊重」という美名のもとに、教育内容とその方法迄を子供達に選択、決定させるのは間違いである。教師の指導性は、教師の教材に対する系統性や何をどれだけ身につけたかと言う到達目標的な観点の設定となって表れるべきである。上の氏の主張は、本校のこれまでの「注入主義」「教え込み」教育に対する批判でもある。本校の教師は、中学生を対象に授業するときにも高校生にする授業態度で臨んだり、高校生に対しては大学生対象の講義とあまり変わらなかった。教師の「教えたいこと」をどのようにして、生徒の「学びたいこと」に転化するかという教育の醍醐味、教師の勝負所についての言及であり、本校教師の最も改善すべき点の指摘でもある。本校の教師は教材の「ネタ」や、その教材についての学問的裏付けには優れているが、その教材をいかに生徒達に「食べさせるか」については弱かったのではないだろうか。

最後に、「方法」として（自由教育運動）の復権と題して次のように述べている。「教育「内容」は思いきった精選と、本当にこどもの認識能力の発達段階に沿うような再編成・系統化を要求されている。「方法」の面ではこどもの自発性と意欲をどのように引き出すかが最大の課題であり、そこで自由教育運動の主張が復権されたことになる」

我々は今回のカリキュラム編成の作業に際し、まず、各教科の「内容」と「方法」を同時に考察することから始めた。カリキュラム編成過程の議論で「精選」という点では議論がかみ合わず、結果も失敗であった。「少なく教えて多く学ばせる」という原理が、「教育の原理」としてよりも精選が可能でできない教科があるという「教科の原理」としての認識に終わってしまった。

「復権」のための具体的方策を次の3つの点について述べている。「コトバ主義」「操作主義」などの名で批判されるようになったこの風潮は、教科の背景にある学問の系統性と抽象性を上から下へとストレートに教育内容に持ちこみ、学ぶ側の発達段階に応じた「教育的」系統性と、生活体験とのつながりとなる具体性の両方を欠くところから生じた「高校・大学での順次専門化の進む学習であっても、時々立ち止まって、いま学んでいることの生活とのつながりを考えること、それを考えるように指導することが必要である。」

「第3の点がこれとかかわっている。合科学習をどう生かすかの問題である。合科は就学前後のある段階においてのみ、系統的合科学習のためのレディネス形成のために有効だと考えるが、小・中・高と進む間にも、とかく避難して相互のつながりの見失われがちに分科学習を補強し、主役の系統学習を支える横木あるいは梁（はり）のようなものとして、ところどころに入れることが必要ではないだろうか。教科と教科をつなぐ総合学習的な単位として、それを学習したことが次の教科別学習への動機づけとなるような内容を設定して行えば、大きな役割を果たすだろう」

く上にあげた三点は、特に教科セクトにとじこもって学校教育の全体構造と生徒の全体像を見失いがちな中学・高校の教師につきつけられた課題だとも言える。

自分の専門をバックに、教科書を柱にして「講義」することになれた教師にとって、この課題に応えるのは生やさしいことではない。しかし、それに挑戦することなしには、半世紀前の自由主義教育運動の遺産から何も学びえなかったことになるのではないかと

以上が本校の教官の体質、弱点、力量を熟知し、副校長として本校の進むべき方向と可能性を模索した松村氏の大正自由主義教育の伝統を現時点で本校に生かす為の具体的な提案と受けとめることができる。今回の教育改革では、辛うじて最後の合科学習の設置だけは実現できた。

## 2. 青年期にふさわしい教育の課題とは

今日の日本の一般的な学力論は<受験学力>に象徴される。「端的にいえば、指導要領には扱うべき事項は示されているが、その事項の獲得水準は示されていないのである。それは、受験体制下の無限拡大的傾向を持つカリキュラムに対して何等歯止めをかけるものとはなっていない。比較され、序列化され、選抜される土俵を設定し、提供しているのである。そのことによって、指導要領は、受験をある意味で支えることになっている。」「受験学力は、非常にとらえどころのない、無方向な、いわば極めて無政府的（アナキー）なものであるという点である」「受験学力は、他者と比較され、序列化されることの中で、初めてその意味をもつ」「受験学力は、それを獲得しようとするものにとっては、非常に威圧的で暴君的、いわば専制的なものとなっている。受験で試されようとしている学力について、受験者は異議をはさむことができない」「受験学力は、それを獲得しようとするものの主体的な契機を失わせ、学力そのものの中からその学力の意味や価値を引き出すことができないものになっている。受験学力が本当の知育につながって行かない」（長尾彰夫『新カリキュラム論』有斐閣1989年）いま学校は本来の機能を失い、次の段階の学校の準備教育機関・工場になり、教師、生徒、保護者は、入口と出口のみに熱い視線を注ぎ、途中は風景の見えないトンネルの中を闇雲に走り抜けているのが現在の学校教育の漫画的な姿であろう。

それでは、学習者が学力そのものの中にその価値や意味を主体的に見つけ、学力形成における主体的な契機となるような学力とはいかなる学力であろうか。

教育とは直接的な経験から出発し、これを絶え間なく再構成・拡大深化していく過程であるとか、学校は社会の縮図である（Dewey）といわれる。生徒達が日常おかれている現在の社会そのもの、生活そのものが発達課題として示されなければならない、ということであろう。もちろん、<社会>をそのまま<学校>へ持ち込むのではなく、教師が教材として、<社会>を単純化し、順序づけ、純化、理想化して生徒達に提示しなければならない。（Dewey）そうすることによって、学校が現実社会の維持と再生産に双方向的に関与して行ける。

堀尾氏は、今日の青年期にふさわしい教育の課題として<三つのセイ：性・政治・生産>以外に『自然と人間』『戦争と平和』等もあるとして次のように述べている。「人間と自然の関係、或いは人間と環境の関係をどのようにとらえるのか、その環境を地球規模においてどのようにとらえているのか。そこでは資源エネルギーの問題を含んでの、環境の認識、ないしは世界の認識が求められている。世界認識というより地球の認識と言った方が適切でもあるような、まさにグローバルな認識が求められている。そして、そういう自然、あるいは環境の認識を通して、人間と自然の関係を再認識していくことが求められている。」「このような人文・社会科学的そして自然科学的な認識を含んだ教養の内容が青年期の発達課題として結びつけ問われているのである」「人類的課題を自分たちの問題として考えることを通して、青年は人類の一員としての自分が同時にかげがえのない存在であると自

覚していく。アイデンティティの確立の道筋も、このような認識と教養をわがものとするを通し  
てしかないのではないか」（堀尾『教育の原理Ⅰ』）

このような見方を一般化すれば、「充実した生活とは、できるだけ多くの知識によって意味づけら  
れた過程を生きることだといえるだろう。そして、そのことは、人類の経験を共有し、その意味を自  
分の生活によってたしかめながら生きるということなのである」「もっとも充実した生活こそ、結果  
的に見て、もっともよい教育になるのだ」（松野安男デューイ著『民主主義と学校』訳者解説）とい  
うことになる。本校の〈奈良学〉〈環境学〉はこのような観点からも、青年期にふさわしい課題と  
言えるであろう。

中・高校での教科の学習は、専門的分科的知識・技能の系統的羅列となりがちである。その様な中  
では学習の意味や目的がとらえられにくく、当面の学習は大学入試のためのシャドウワークとなり文  
字通り〈勉強〉となる。また、教科別の学習では、まるで道具ばかり作り（習い）、実際の場面でそ  
の道具を役立て、応用する場面がすくない。そこで、それぞれの教科を使いこなし、受身の学習から  
自主的に考え行動する主体を育成するような学習場面を準備する必要がある。また、〈問う→調べる  
→考える→知らせる〉という〈学習の方法・学び方〉を学ぶ学習、それが本校における総合教科のフ  
ィルドワークである。フィールドワークの実践を通して、生徒達は、各自のテーマに従って、現実社会  
と出会い、教師以外の人々から学ぶ機会をもち、学校の外での厳しいルールに直面する等様々な体験  
をする。これら諸々の複雑に絡み合った体験を単純化し、順序づけ、純化し、理想化することによっ  
て〈人類の経験を共有し、その意味を自分の生活によってたしかめながら生きる〉ことができる。

学校教育での知識や教養については、質と量の二つの側面からの吟味が必要であるが、上で述べた  
ことは〈質〉に関することである。先ほどの受験の学力では、点数化、尺度化、序列化される〈量〉  
の側面のみが評価される。本校の教育をこの〈点眼鏡〉（遠山 啓）の観点からのみ見ると、本校の  
目指す教育が見えてこない。保護者にはこの点についてのご理解とご協力をいただかなければ本校の  
教育が十分に成果を挙げることはできない。

### 3. 本校における総合教科の意味と位置づけ

#### (1) 教育課程の自主編成の過程から

カリキュラムとは、生徒・教師・保護者が学校において経験する教育活動の全体と定義できる。  
このカリキュラムが先ず存在し、そこへ適当なテーマを設定し総合（合科）教科を設置する、と  
いうのは本来の総合教科のあり方ではない。本校では、カリキュラムを編成する際に、本校での  
諸活動を関連づけ〈主役の系統学習を支える横木あるいは梁のようなものとして〉全体をまとめ  
あげ、個別教科を支えて行くための核となるものが総合教科であり、「本校の教育の目指す〈も  
の〉の具体化が総合教科である」との観点から教育課程の編成に取り組んだ。だから、個別教科  
と総合教科との関連をカリキュラム編成の最初の段階から考慮し、それらの関係を有機化する事  
を目指した。

総合教科を実施するためには、そのための時間を確保しなければならない。そのためには各教  
科は教材の精選が迫られる。その結果、教科内容に対するより一層の検討が必要とされる。しか  
し、現実には総合教科の実践のための時間は精選からは生み出すことができずに総時間数の増加  
という形になった。これは今後、解決すべき問題点の一つである。

過去の本校でのカリキュラム編成は、教科の要求（必要単位数）を教科主任会議で調節し、全  
体会議で決定する〈時間の争奪戦〉であった。しかし、今回のカリキュラムは本校の教師集団の  
全員の長期間にわたる共同作業として編成された。本校の教育目標の作成から始まり、各教科の

内容と方法を同時に構成し、全体の中で他教科の内容にまで踏み込んで、不十分ながらも討議されたことは意味があった。

## (2) 教育観・知識観の変革

カリキュラム編成の際に、本校の教育が避けて通れない問題がある。それは、世間一般の受験体制の浸透である。これは、学校独自の独創的なカリキュラム編成を不可能にしている最も大きな原因だといえる。〈大学入試にでる〉からという理由から教科内容と領域は無限に拡大していく。だから、〈少なく教えて、多く学ばせる〉という教科内容の精選などは、夢のまた夢となる。

入学試験の本質は選抜にある、だから受験体制下のカリキュラムも同じ価値観をもつことになる。

すなわち、他者との比較、序列化という相対的な価値基準を持つことになる。これらは本校の価値観と反するものではあるが……。本校のカリキュラムでも知識中心詰め込み主義や評価の序列化を避ける努力はしたが、十分に果たし得なかった。それは、大学入試に直接影響される高校での授業だけではない。生徒達は、小・中学校の日常のテストや入学試験問題においても、制限時間のわりに解くべき問題数が多すぎるテストを受けさせられている。また、中間・期末考査のように一定期間中に多くの知識項目を学習する－というより詰め込む－事を要求される。このような教育は、〈隠されたカリキュラム〉として、与えられた問題を、一定の手続きに従って、効率的に、迅速に解決することが社会的な成功に最短距離的に結びつくということを生徒達に、暗黙の内に教え込むことになる。このような状況に繰り返し出会う生徒達は〈少数の基本的な原理（ないし概念的知識）を十分習得しておくことが大切で、あとはそこから演繹（構成）することによって問題は解けるはずだ、という知識観を持ちにくくなるであろう。つまり、多くの個別的手続的知識の記憶こそ重要である、知識は大人から伝達されるもので、自分はこれをおぼえて適応さえすればよい〉（現代基礎心理学 7 思考・知識・言語 P.201 東京大学出版会）という知識観を身につけることになる。

われわれは、その様な知識観とは質的に異なる教育の具体化の一つが総合教科であると位置づけた。それは、また後期中等教育を大学入試準備と見る見方に対する一つの挑戦でもある。もちろん進路保障のため、受験のための学習も必要であるが、それに終始するならば、高校における学習は視野の狭い、魅力に乏しいものとなる。総合教科を体験することによって、生徒達が知識と行動を結び付け、実生活と教科学習との関連を主体的につけ、個々の専門教科別の学習への関心をいっそう豊かにしてくれることを我々は期待している。この様に主体が対象に積極的に働きかける学習観に支えられてこそ、進路選択などに際しても自主的な決定が可能になるものと考えられる。

## (3) 教科間の連携

総合教科は、生徒達が主体的に教科学習と実生活を結びつけ、実践的な知識を身につけ、この専門教科別の学習への関心をより豊かにすることをめざしたものである。従って、総合教科の対象を現実社会の中に求め、現実的問題を学習課題とすることをその目的とした。また、〈総合〉というところから、その内容が自然科学と人文・社会科学の融合するところに求めた。それは、従来の個別的な教科の枠組みでは扱えきれない。また現在では、現実的問題の解明には、多面的な知識、方法、考察を必要とするので、教師個人の力では如何ともし難く、教師の専門性・学問的能力の壁を打ち破り、複数の教師が協力せざるを得なくなってきた。

## (4) 教科間の枠と連携の問題

総合教科と言うのは、本来、小学校低学年での生活科のように教科の枠を取り外すことが原則

であろう。しかし、中・高校生の段階になると教科専門的な要素が濃く残る。中学3年生での《奈良学》は社会科・国語科・英語科・美術・工芸科で担当し、各教科の分担領域では教科固有の「内容」と「方法」がそのまま出ている。学習の対象だけが共通のテーマ〈奈良〉であり、奈良についての多面的・個別的な学習や理解を通して、奈良についての統一的な理解を得させることを目標としている。

高校1年生では《環境学》を社会科・理科・保健体育科で担当するが、総合教科を実施する以前は、環境問題については、いろいろな教科の環境に関わる学習場面で、それぞれの教科の教師が環境問題を独立に教科独自の視点から取り上げてきた。例えば、大気汚染について、理科では、汚染物質の発生やそのメカニズムについて、保健体育科では、その人体への影響を中心に、というように。生徒にとっては、本来一つの現象であるものが、あたかもTVのチャンネルを次から次へ切り替えるように、別々に違った機会に別々の知識として与えられてきた。それを一つのものとして総合化し、融合されるには至らないのが実状であった。

生徒達が環境問題を全体的に理解し、その解決の途について考察し、生徒一人一人の主体的姿勢を作り出すためには、今までそれぞれの教科でやっていた内容を一度解体し、教師自身が環境問題を改めて学習し直す必要があった。そして、生徒達に環境問題の構造的な理解をあたえ、実践的な倫理観を身につかせ、体験学習を総合的な学習とするためには、教科の枠を可能な限り取り払った新しい教科として教材化しなければならないと考えた。

#### (5) 教師の共通理解

教師の共通理解の第1点は、カリキュラムにおける総合教科を、本校の教育のアイデンティティの1つにするということである。これは、総合教科を継続的に実践するためにはぜひ必要である。高校においては、演習や実験の時間が必要であるという理由で、教科内容の精選の努力よりも、総合教科のように受験に関係ない〈めんどろな教科〉の時間はつぶされ易い。

もう一つの共通理解は、総合教科を担当する教科間での理解である。本校では環境学については、実施の1年前から研究を始め、最低一月に一回は3～4時間、大学の教官をも含めた共同研究を行ってきた。実施の今年度についても、授業の進捗に合わせて連絡会を授業前後に持っている。共同で教材を構成する経験を通して他教科の特質を知り、自分の教科についての理解のし直し、実験教科と非実験教科の交流等の教師の学び合いは、貴重な体験であった。

#### (6) 担当者と教材の作成

総合教科を実施する教科の担当教師が、芸術科や工芸科のように一人しかいない場合は問題は少ない。しかし、理科や社会科のように複数の教師がいる場合は総合教科の担当者が固定化したり、特定の担当者の〈名人芸〉に依存する事に成りがちである。しかし、本校では担当教科内で、総合教科の内容や方法について十分討議し、担当教科のすべての教師が総合教科を担当できるようにしている。また、誰が何時担当しても一定の学習成果が得られるように教材の内容と方法を一定するようにしている。そのために、教材の一定化―資料を年々更新するということはあるものの―と同時に、担当教師個人のパーソナリティを生かせるような柔軟な教材・プリントを作成することにした。

#### (7) 学校教育全体の中に総合教科を生かす

##### ① 個別教科が総合教科の成果を取り入れたり補充する。

総合教科の〈内容〉そのものや、問題解決的な学習〈方法〉を個別教科に取り入れる。逆に、個別教科が総合科の内容を補充したり、発展させたりすることも可能である。



- ② 学校行事や教科活動を総合教科の視点から見直し、行事や活動を再編成する。

学園祭、生徒会活動等の教科外活動に総合教科の成果を生かす。一泊行事、遠足、水泳訓練、写生会、音楽会、見学会、修学旅行等の学校行事を総合教科の視点から見直す。

文化系のクラブ活動の衰退は本校だけの問題ではないが、総合教科の学習を継続的、発展的に追求していく生徒の自主的活動としてクラブ活動を再編成していかななくてはならない。

#### 4. 総合教科のねらい

[内容]

生徒の主体的な活動を通し、自然環境と人間の作った環境の絡み合う現実的問題についての追求や社会的行動に役立つ内容・現象を直接観察し、認識を拡大・深化・発展させ、環境と人間についての全体的な展望を持たせる。そして、問題解決の過程に生徒達一人一人をまきこみ、奈良や環境に〈ついて学ぶ〉ことで終わらず、〈奈良から学ぶ〉〈環境から学ぶ〉ことをめざしたい。それは〈奈良〉や〈環境〉を構成しているシステムの一部が自分であるという認識を持たせ、生涯にわたって追求する態度を形成させたいからである。

[方法]

総合学習の方法論的な目標は、〈学び方を学ばせる〉ということに尽きる。既習の個別教科や総合教科での学習を生かし、グループ毎に自分達で課題を設定し、協力して課題の解決を図るためにフィールドワークを取り入れる。自発的な探求心により、生徒達一人一人が主体的に追求していくことをめざす。

主体的な追求には、

〈問い（興味・関心）・触れる・調べる・読む→調査・発見→証明・実証〉というような科学的アプローチの方法によって、物事の原理的な理解をめざす方法的な側面と、  
〈現実の問題→歴史的・社会的・自然科学的な学際的考察→自己の生き方を問う→生涯学習〉のような社会的態度の形成をめざす側面もある。

#### 5. 留意点

##### (1) 時間の設定

生徒達の中から、ホームルーム活動や教科外活動として自発的な取り組みとして〈環境〉や〈奈良〉についての学習が提起される可能性は極めて少ない。たとえ提起されたとしても、担任が一人で指導することは非常に難しい。また、一つのテーマを継続的に探求していくためには定期的、長期的に時間を確保することが必要である。だから、カリキュラムの中に時間を確保する必要がある。副次的には、時間を確保するためには関係教科からの時間の〈吐き出し〉が必要となり、教材の精選という問題を解決する必要がある。

##### (2) 発達段階：内容と方法の両面について発達段階を考慮する。

3年生（中学）では、地域的、身近的で具体的な対象〈奈良〉を、見学・調査・作品を作る等の具体的な方法で研究する。4年生（高校1年生）では、社会的、理論的、学際的で抽象的な対象〈環境〉を、科学的思考法－実験・観察・思考実験等－で考察する。

##### (3) 課題の具体性と一般性

ここでの具体性とは、学習の原理としての〈具体性の原理〉である。教科での授業展開と同様に、総合教科での展開も、導入段階は時間的・空間的に身近な地域や話題（教材）を扱い、自分に関わる問題、接近しやすいという認識をもたせたい。授業の展開の段階にしたがって、近傍→

遠隔、具体→抽象と推移させ、総合教科だからといって、具体的問題にのみ終始すべきではなく学習結果を一般化させなければならない。

(4) 自然科学と社会人文科学の交錯する課題

教科を総合することの意味、個別教科との差異を明らかにするためには課題の学際性は当然のことであり、自然認識と社会認識を統一的に与えるためにも課題の設定には十分留意する必要がある。

(5) メディアスキルの達成

総合学習では、学習の成果を発表する機会を設けるべきである。そして、学習した内容、実験や調査の結果を人に分かりやすく、簡潔にしかも効果的に伝達する方法と技術を身につけさせた。発表手段や方法—OHP、VTR、写真、掲示等—の学習（メディア講習会のようなもの）も適宜行う必要がある。

(6) 資料の整理

総合教科では、生徒達が自主的に学習を進める際の参考文献や資料のコーナーを図書館、資料室などに設置したり、公共の施設、博物館、研究施設、企業の研究所等についての情報や資料を整えておく。

## 6. 評 価

(1) 能力の多様性

総合教科の学習には、展開の各段階にそれぞれ異なる様相をした評価の対象となる多様な局面や活動が含まれている。その局面のどのような部分を評価の対象として取り出すかは難しい。ただ、教室での個別教科の学習とは異なる個性と能力が発揮されることは確かである。フィールドワークなどでは個々の生徒が、日常の教室での場合とは違う形で、グループ活動に寄与することが期待できる。また、個性の多様性の発見と相互理解の場であり、他者との比較ではない、自己の肯定につながる可能性がある。だから、評価に当たっては、個別教科の評価とは異なり、＜点数＞によらない柔軟なゆるい多様な評価形式をとらなければならない。

(2) 集団的活動

総合教科では、グループ毎に課題を設定し、フィールドワークに取り組む。そのグループの中で各自の役割を分担し責任を果たす、このような体験は普通の授業ではすくない。しかも、グループの中での活動を評価することは希である。それだけに評価が難しいと言える。評価の視点を定めて、生徒達相互の評価や自己評価を取り入れることも考えられる。

(3) 記録・作品を残す

評価に際して、調査報告、スライド、模型、VTR、実験結果、観察結果等を残すようにする。

(4) 情報活用能力 — 収集と表現 —

すべての学習活動に、情報収集や情報分析能力は必要である。とくに、総合教科のフィールドワークでは、教師の側からの働きかけや指導が比較的少ないので、生徒達が主体的に様々な情報の中から必要な情報を収集し、選択し、処理する能力、それらから得られた新しい情報の効果的な送り手としての能力も必要とされる。このような情報活用能力の評価方法を考えなければならない。

(5) 評価方法

総合教科の評価方法については十分討議が出来ていない。暫定的に以下の方法による。

- ① 学年末にのみ評価を行う。  
 担当者は評価の観点を定め、学年の終わりに、A～Cのランクをつける。  
 A：2割程度までとする　C：若干名　B：AとC以外の者  
 《奈良学》の場合  
 Aが2つ以上あるもの = A　Cが2つ以上あるもの = C  
 《環境学》の場合  
 奈良学に準ずる（フィールドワークのやり方などに関連して若干の変更あり）
- ② 通知表の総合学習《奈良学》《環境学》の欄に、A～Cの評価をつける。
- ③ 指導要録には、総合学習《奈良学》《環境学》の欄に、A～Cの評価をつける。
- ④ 原簿は、教務で保管する。（コピーは総合学習担当者及び総務で保管）

### 3. 基本的な考え方と性格付け

#### (1) カリキュラムに組み込む

教科としての時間を設定する。（平成2年度は、6、7限に設定する）  
 担当教官（4人）を固定、授業時間数に算入する。

平成2年度総合教科<奈良学>担当教官

社会科：勝山元照　芸術・技術科：吉澤榮敏、上浦一道

国語科：澤田享子　英語科：水町律子

平成2年度総合教科<環境学>委員会

社会科：吉田　裕　理科：屋鋪増弘　保健体育科：出野上良子

カリキュラム委員：中道貞子　松本博史

運営指導委員会：奈良女子大学　杉峰英窓　高知大学　菊地るみ子

平成3年度総合教科<奈良学>担当教官

社会科：武田　章　芸術・技術科：吉澤榮敏、上浦一道

国語科：芳村昭男　英語科：加藤　勇

平成3年度総合教科<環境学>担当教官

社会科：吉田　裕　理科：藤田周子　保健体育科：出野上良子

カリキュラム委員：中道貞子

運営指導委員会：奈良女子大学　杉峰英窓

#### (2) 自然科学と社会・人文科学の交錯する課題を設定する

3年（中学）地域的、身辺的課題：奈良学（芸術科・技術科、社会科、国語科、英語科）

4年（高校）時事的、理論的課題：環境学（社会科、理科、保健体育科）

\*従来の教科の枠にあてはまらなく、それぞれの教科では、孤立的、隔離的に別途に扱われることが多く、統一的認識<自然認識と社会認識>を与えることができなかった領域を総合する。

\*総合化することで、担当者の専門性、学問的力量的限界を超えることが可能。

#### (3) 自主的学習方法の修得

\*講義と自らの学習をフィールドワークで結合させる。

\*具体的課題の<問題解決>を通して、その解決方法を習得させる。

\*結果の発表を通して、media-skill の達成を図る。

- (4) 言葉主義的教育からの脱皮  
抽象的な知識と現実社会の具体的な問題を結合する。
- (5) 地域社会との連携を図る  
\* 地域性と課題。  
\* 地域の施設資料の活用。  
\* 保護者・専門職の退職者・一般社会人の多様な能力を学校に吸収。
- (6) 評価  
\* 可能なかぎり具体的な作品を残す。  
\* 生徒たちの自己評価、相互評価、担当教官の合同評価を総合する。学年末に総合評価する。  
(文責 松本博史)

## 4. <奈良学> について

### 1. <奈良学> のめざすもの

武 田 章

「奈良学」とは耳慣れないことばだと思う。体系だった学問としても現在のところ存在していないし、将来も存在しないかもしれない。「奈良学」とは既存の学問体系に基づいた教科ではないのである。では学校教育における教科としては成立するのかといえば、それもこころもとない。将来的に教科として成立する見通しがあるのかというと、それも「わからない」というのが正直な所である。あえて「奈良学」の定義をするなら「郷土奈良を多面的に知り、考えることによって、奈良についての認識を総合的に深める教科」ということになろうか。とにかく奈良についていろんなことを、いろんな側面からアプローチしてみよう、というのが「奈良学」なのである。

現在奈良学に参加している教科は国語科、社会科、美術・工芸科、英語科の4教科である。「多面的、総合的」とは言うものの、ふだんは独立している4つの教科が寄り集まって、それぞれの教科で奈良に関連することを扱うことで「成立しているように見える」というのが実状に近い。言い換えれば、現在のところ4教科の「寄所帯」なのである。本来は各教科が有機的に結びついて、各教科での学習の相互作用や相乗効果があるべきなのだろうが、それは短時間に成果が期待できるという性質のものでもなく、なかなかうまくいかない。また、方法論的にも暗中模索の段階である。

「わからない」「うまくいかない」など否定的なことばかり述べてきた。それはすでに切り開かれた道を歩いているのではなく、手探りで道を探しつつ進んでいる以上、ある程度は必然ともいえるだろう。むしろ「奈良学」はどのような理念のもとに生み出された教科なのかについて述べたほうがわかりやすいかもしれない。

本校は6年一貫校であり、6年間を2年ずつに分けた2-2-2制カリキュラムをとっている。そして3~4年生の中学年では、「自主的・体験的・実験的学習を取り入れ、幅広い学力を身につけ、学習意欲を高める」ことを指針としている。この指針を受け、ともすれば受け身の態度で参加しがちな授業以外の場で、生徒たちが自分たちで考え、行動する機会-自主的な活動の機会-として「総合学習」が設置され、3年生では「奈良学」がおかれたのである。したがって「奈良について学ぶ」とはいつでも、教室で教師の講義を受けるだけではなく、自らテーマを設定し、能動的に学習していくことを通じて、将来の社会認識の育成を視野に入れつつ、身近な郷土奈良への認識を深めていくこと

を「奈良学」では目標としているのである。ではなぜ「奈良学」なのか。

生徒の親のうち、昔からの奈良県民は三分の一弱、親子三代が奈良県民というのは一割にも満たない。そのようなことも相俟って、本校の生徒は奈良県に住んでいながら意外に奈良のことを知らない。とはいえ自分たちが現在住んでいる奈良についてもっと知りたいと思っていることは言うまでもないし、それを学校教育で正面から取り上げることはたいへん重要で意義があることも大方のご賛同を得られることと思う。

つまり郷土奈良について学び、奈良の抱えている課題について考えていける力を養うことは、社会認識や世界認識を培うための土台となるはずであり、それは現在声高に叫ばれている「国際化」の内実を高めることにも結びつく。そのような意味において「奈良学」は「国際化」教育の第一歩であると言えるのではないだろうか。

なお、生徒たちは3年生になって初めて奈良についての学習を開始するわけではない。従来から各教科では次のような取り組みをしてきたことも「奈良学」誕生の母体になっている。

〔社会科〕1年生「地形図を片手に奈良を歩こう－地図歩き－」

2年生「東大寺観光ガイドブックを作ろう－東大寺フィールドワーク－」

〔理科〕1年生「身近な植物－校庭・奈良公園の植物の野外観察－」

2年生「身近な動物－校庭の動物などの野外観察－」、「気象観察－奈良の気候－」

3年生「地表の変化と地層－奈良の岩石と地層の野外観察－」

理科は「奈良学」には直接的には参加していないが、以上のような取り組みを通じて、広い意味において参画しているといえる。

〔技術家庭科〕2年生「大和ハウスの見学」

3年生「シャープ天理工場の見学」

## 2. 教科と〈奈良学〉

### (1) 国語科と〈奈良学〉

#### 【総合教科《奈良学》とのかかわり】

万葉以来の奈良という文学風土に直に触れること、古語の名残りを留める方言（奈良弁）を知ること、奈良に伝わる民話・伝説を調べることで、その他奈良の民俗風習等に目を向けることなど、いわゆる国語科の授業の中だけでは学びきれない《奈良》を、《奈良学》として追究してみたいというのが、国語科の《奈良学》参加への出発点であった。方法としても、ともすれば受け身な態度で参加しがちな教室授業以外の場で、考え、行為する機会 — 自主的活動の機会 — を生徒に与えることは有意義なことであると思われるので、できるだけ生徒たちの自主的活動を中心に据えた取り組みとするよう心がけた。

初年度においては、「ききとろう奈良のくらし」と銘打ち、生徒たちが経験したことがないであろう以前の奈良の人々のくらしざまを、一連の課題を通して探らせてみようと考えた。テーマの決定・資料集め・老人ホームへの「ききとり」訪問・発表パネル作りと段階的に取り組んだわけであるが、その中で最も重きを置いたのは、いうまでもなく老人ホームでの「ききとり」調査である。自分のテーマを持ち、未知のお年寄りと人間関係（それはかりそめのものであるかもしれぬが）を結びながら、問いかけ、受け答えをし、メモを取り、またさらに問いかけるといった仕方ですべてのテーマを追究していくという行為は、単に「ききとる」という技術的なものだけではない何かを育てる機会となったのではないかと思う。

人間的にも、また学習の上でも「充実期」にあたる中学年（3年生）において、このような試み

が、その「充実」に資するところがあったとすれば幸いである。

#### 【平成2年度の実践】

前述したような意図のもとに、国語科では初年度の展開として、今日ではほとんど地方色を失いつつある奈良の人々のかつてのくらしざまを老人から「ききとり」という作業を中心に取り組むことにした。その中で追究するテーマとして次のようなことがらを例示し、生徒たちに選択させた。（グループごとに話し合っって複数のテーマを選択し、さらに「ききとり」に際しての具体的な問いかけの言葉も考えておく。）

テーマ例（別冊資料集33ページ参照）



（老人ホームでの「ききとり」）

- ア 奈良のことば・方言
- イ 奈良のわらべ歌・遊び歌
- ウ 奈良の祭り
- エ 奈良の物売り
- オ 今はなくなった仕事・少し前まであった職業
- カ 小さいころの遊び
- キ 小さいころよく食べた物・なつかしい味
- ク 昔、流行っていたもの
- ケ 奈良はどう変わったか
- コ 戦争の時、奈良は……

グループ編成 各学級とも6班に分け、各班に班長・副班長・カメラ録音係り・記録係り・パネル編集係りを置いて、各人の任務と責任を分担させた。

なお、老人ホームへの「ききとり」訪問に先立って、各々のテーマにかかわる資料集めとして、図書館や観光センター等に出かけて、予備知識を得ておく作業を義務づけた。

訪問する老人ホームは、奈良市内にある「万葉苑」と「和楽園」の二つを選んだ。しかし行ってみてわかったことであるが、必ずしも小さい頃から奈良に在住する人たちばかりではなくて、奈良のことを十分にきき出せないグループもあったのは不注意であった。

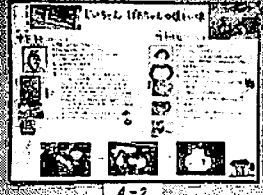
「ききとり」を中心とした調査研究報告は、発表を兼ねて各班ごとに一枚のパネルにまとめさせた。イラストや写真なども加え、そのデザインは生徒の創意工夫にまかせた結果、大へんユニークな18枚のパネルができあがり、それらを廊下の壁に展示して、生徒全員に審査させた。次ページに、各班の全パネルを写真掲載しておく。（別冊資料41ページ参照）

#### 【初年度の反省と今年度の取り組み】

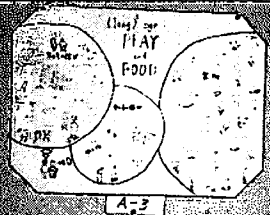
初年度（平成2年度）においては、「ききとり」に重点を置き過ぎたため、老人ホームに出かけて行って答えを得て来るというやゝ安易な取り組みに陥ったきらいがあった。新聞報道にもなり、それはそれで最初に述べたような意味合いがあったとは言えるが、奈良で育った老人たちとは限らなかつたり、こちらの対応の仕方もまづかつたりして、必ずしも所期のねらいどおりにはいかなかったうらみもある。老人にきくというだけにとどまらず、もっと多様な角度から「奈良のくらし」にリサーチする視点が大切だったと思われる。また時間の関係もあって、調査研究の発表はパネルにまとめるという方法をとったが、一枚のパネルに収め得る内容量にはおのずから限度があり、一考を要するところである。ともあれ、そうした技術的な問題は今後の課題とするとして、《奈良》に一定迫るなかで、生徒たちが授業では得られぬ何かを得たであろうことを確信して、この試みをいっそう充実する方向で推進したいと思う。



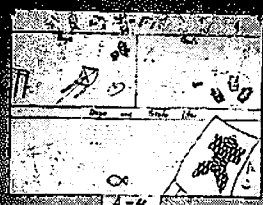
A-1



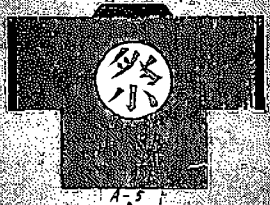
A-2



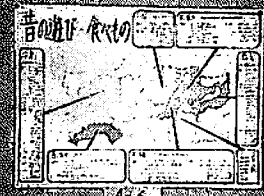
A-3



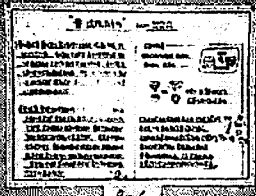
A-4



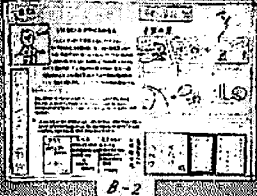
A-5



A-6



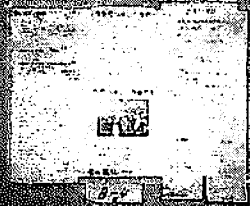
B-1



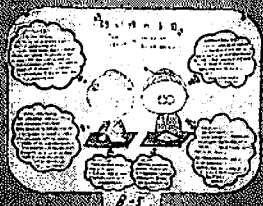
B-2



B-3



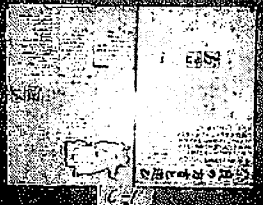
B-4



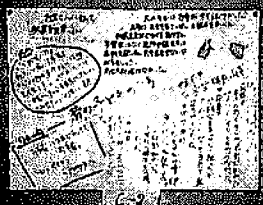
B-5



B-6



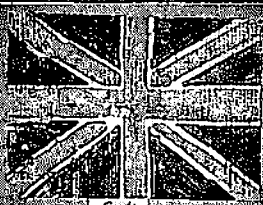
C-1



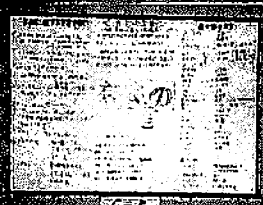
C-2



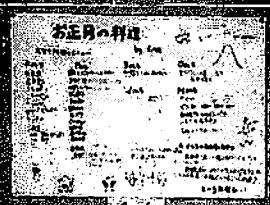
C-3



C-4



C-5



C-6

今年度（平成3年度）の《奈良学》では、「くらし」から「文学」に視点を移して、「奈良の文学風土に触れよう」をスローガンとして、次のようなテーマで取り組むことにした。

テーマ（平成3年度） ア、「万葉集」と奈良 イ、松尾芭蕉と奈良 ウ、志賀直哉と奈良  
エ、会津八一と奈良 オ、正岡子規と奈良 カ、奈良の歌枕と校歌  
キ、奈良の民話・伝説

ア～オについては、奈良市内をはじめ県下に数多く散在する歌碑や旧居や作品ゆかりの地を自分の足でフィールドワークしてスケッチや写真に収め、在りし日と現在の景観を自覚させることを意図した。カでは、奈良市内の小・中学校を手分けして訪れて校歌を集め、その歌詞に詠み込まれている歌枕を拾いあげて、奈良の地の文学・歴史的風土の認識を深めることを試みたものである。キは、生徒の要求を受けて加えたもので、現地調査を条件として認めた。なおこのほかに、高浜虚子や保田與重郎・上司小剣・その他近世文学関係も考えたが、中学3年生という発達段階を考慮して除外した。

一・二学期中に図書館等での文献調査や現地フィールドワークもほぼ終わり、三学期での原稿執筆に向けて、やり残した作業をそれぞれ追究中である。今年度は各人のレポートを報告文集として仕上げる予定である。

【付記】 初年度（平成2年度）の直接の担当教官が退職したため、初年度の実践については残された記録と教科内での報告・協議をもとに執筆したものである。指導過程での具体的な詳細については尽くさない点もあるが容赦されたい。

## (2) 社会科と〈奈良学〉

### 【はじめに】

社会科では1年生の夏休みに「地図歩き」という宿題を課している。奈良の地形図に従って3時間以上歩き、その紀行文を提出するというものである。

2年生では、奈良に初めて来た人が片手に持って歩けるようなガイド・ブックを作成する「東大寺フィールド・ワーク」を実施している。その手順は、

- ① 6～7人の班をつくり、各係（班長、副班長、スケッチ係、資料係、執筆係等）をきめる。
- ② 東大寺の何を重点的に調べるのか、焦点を何にするのかを相談してテーマを決定する。
- ③ フィールド・ワークに出掛ける前に、図書館等で文献調査をし、現地へ行ったときに何を見たり調べたりするのかを調査しておく。
- ④ 現地へ行って班ごとに取材活動をする。
- ⑤ 事前・事後の文献調査や、現地で集めてきた資料やスケッチをもとに「ガイド・ブック」（本物の本のようにすることを指示してある）を作成する。ただし、必要があれば再度現地へ足を運ぶ。

というものである。フィールド・ワークに行く前には「活動内容・予定表」を、活動後には「活動報告書」を提出することを義務づけている。目的を持って現地へ行かせるためである。

普通の教室授業とは違った校外での活動なので、生徒はたいへん楽しみにしているようだ。毎年提出されるレポートも力作が多い。生徒たちはこのようなフィールド・ワークを経験したうえで3年生の「奈良学」に臨む。



## 【平成2年度の実施】

### 《実施状況》

初年度である平成2年度はフィールド・ワークとして平城宮跡を選んだ。比較的近くにあるので行きやすく、生徒にも馴染み深い。また平城宮跡は史蹟公園としても整備されており、資料館（入館無料）もあるので調査活動には適している。一回目の授業は、動機づけとある程度の材料提示も兼ねて「平城京ものしり度チェック」と称して平城京と奈良時代に関するクイズをした。その後は「東大寺フィールド・ワーク」と同様の手順を進めた。

生徒がはじめに選んだテーマは「木簡について（あるいは木簡に関連して役人の生活や仕事）」と「奈良時代の料理（食事）」などが多かった。そこでテーマ変更を勧めた結果「古代のお金について」「寺院の瓦」「長屋王の家と暮らし」等のテーマも出てきた。

全員一斉のフィールド・ワークは平城宮跡と資料館のみだが、テーマに応じて班ごとにさまざまな場所へフィールド・ワークに出掛けていった。その成果はレポートとして各班が提出した。

また「平城京フィールド・ワーク」が終わったのちに、クラスごとに「ならまちウォーク」を実施した。生徒にとって「ならまち」は通学路の一部だが、景観保存の問題を抱えていることを知っている生徒は多くない。そこで普段無意識に歩いている「ならまち」を問題意識を持たせようとして歩かせたのである。ただし「ならまちウォーク」ではレポート等の提出はさせなかった。

### 《実践を終えて》

レポート作成過程の様子や提出されたレポートを見てみると、「東大寺フィールド・ワーク」でフィールド・ワークというものにある程度慣れていることもあって、失敗も少なかったようだ。また1年間の成長もあって、班によっては工夫が凝らされた作品が提出された。

とはいえいくつかの課題も残った。ひとつは、方法的に「東大寺フィールド・ワーク」と大差がなかったことである。たとえば大きな史蹟地図や模型等の作成などの創作・作成活動もある程度入れることができれば良かったと思う。そのようなものがあれば、文章やイラスト等のみのレポートを越えたものができたのではないだろうか。

また「東大寺フィールド・ワーク」は「（現存していて）目に見える“物”」を調べていくのに対して、「平城京フィールド・ワーク」では「目に見えにくいもの」を調査の対象としている。そのため、生徒にとってはとっ付きの悪さを感じさせ、多少戸惑いを持たせたようだった。

## 【平成3年度の実践】

今年度は「平城京フィールド・ワーク」と「現代奈良リサーチ」に取り組んだ。

### 《平城京フィールド・ワーク》

実施手順については昨年度と同様だが、いくつかの点で工夫を加えてみた。

ひとつは、「もの」を作ってみることを生徒に勧めてみたことである。その結果、「奈良時代の料理」のように昨年と同じテーマを選んだ班も「蘇（古代の乳製品）」—料理研究家に作り方を聞きに行ったり、本で調べたりして—を作った班も出てきた。また調理教室を借りて「赤米（古代の米。奈良パークホテルで販売している）」を炊いてみて飲食したり「乳粥（牛乳で炊いた粥）」を作った班などもあった。

また、他の班がしないようなテーマを選ぶことがオリジナリティを発揮する秘訣であることを強調したところ、「奈良時代の育児と教育」や「古代の遊び—けまり—」などユニークなテーマに取り組んだ班も出てきた。「けまり」の班は『古事類苑』などの文献にも挑戦したり（結局難しすぎてよく理解できなかったようだが）、年中行事として「けまり」をする京都の神社へ聞き取り調査をしに行くなど、こちらの予想以上の活動をした。

## 《現代奈良リサーチ》

「ならまちウォーク」に替わるものとして、今年度は「現代奈良リサーチ」を実施した。

「平城京フィールド・ワーク」が歴史的に奈良を探究するのに対して、「現代奈良リサーチ」は現代的視点から奈良を見つめてみようというのである。これは高校1年生の現代社会で過去十数年にわたって実施してきたフィールド・ワークの縮小版である。今年からは高校1年生で環境学が導入されたため、現代社会のフィールド・ワークは割愛されることになったため、「奈良学」の理念に引き付けた形で現代社会的フィールド・ワークを実施したのである。現代の奈良が抱えている問題は何か、それを解決するためにはどのようにすればよいのかを考えさせることがその目的である。レポートには次のことを必ず入れるように指導した。①そのテーマを選んだ理由、②調査活動の経過、③資料やデータの整理、④浮かび上がってきた問題点とその考察である。

生徒たちが選んだテーマは、“観光都市奈良”に関連することが多かった。たとえば「観光客に聞く」「土産物屋さんに聞く」「旅館・ホテルの抱える問題」などである。それぞれの班がテーマに応じて奈良公園に来ている観光客、修学旅行生、外国人客、ホテルや旅館、土産物屋などに聞き取り調査活動（アンケートといったほうが適切かもしれない）をした。

すぐれた作品としては「文化財の落書」が挙げられる。これは寺社の建造物のらくがきに注目し、寺院や神社の聞き取り調査や落書の写真撮影等の活動をレポートとして提出したものであった。これなどは、まさに現代奈良の課題である文化財保存の問題に迫っている。和菓子の老舗を訪ねて、和菓子づくりを見学させてもらい、粘土で代表的な和菓子を作って提出したユニークな班も出た。

「現代奈良リサーチ」にあてることができた時間が少なかったこともあり、奈良の抱える問題やその解決等について深く考察できているレポートは数多いわけではなかったが、こちらの予想以上に生徒たちは精力的に活動をしていったことを十分に感じとることができた。

### (3) 英語科と〈奈良学〉

#### ① はじめに

英語科では、中学1年生から2年生までに習得した表現力の発表の場として総合教科〈奈良学〉に取り組んできた。他教科で学習した内容を参考にして積極的に外国の人々に奈良を紹介できるようにすることを主な目的とした。国際化社会の中では、外国の人々とのコミュニケーションが求められてきているので、日本の文化、生活、習慣を外国の人々に理解してもらうためにも身近な事項を再認識し、それらを伝えていく力が必要であると考えからである。

基本方針は、他教科で得た知識、情報を積極的に生かし、これまでに習得した英語力によってふるさと「奈良」を紹介する。自分の住む地域社会を再認識し、日常生活の中でなにげなく見過ごしてきた事項について改めて考える機会となるようにしたい。日本の伝統、文化を伝える代表的地域のひとつである奈良を育ててきた人々の歩みや、日々の暮らしなどを知ることによって、生徒ひとりひとりが奈良との関わりを深め、自分の身のまわりの事柄を大切にすることが育つようにと願う。

本校は、奈良公園に近い所にあるので、日頃下校途中などに外国からの観光客をよく見かける。生徒の中には、積極的に話しかける者もいるが、話してみたい希望は強くても、英語力に自信がないのと、自分と異なった考え方や習慣を持った人々との交わりが自然にできない心理面での不用意などのために、どうしても引っ込み思案になってしまう。国際社会の中で、すぐ身近に外国

の人々とのコミュニケーションができる機会があるので、これを活用していきたい。

2年目にあたる平成3年度については、時間配当、活動時間などは第1年目と同じである（研究紀要第32集及び研究紀要第33集別冊参照）。ここでは初年度の反省点を踏まえて、2年目の生徒の活動の様子、教師の目からみた成果と問題点に触れたい。

## ② 今年度の取り組み

### (i) 生徒の活動内容と教師の指導上の留意点

英語の取り組みは次のように大きく分けられる。

- 1) 英文シナリオを読み、英文のビデオを見る
- 2) 班分けと任務分担、英文シナリオ作り
- 3) 現地でのリハーサルとビデオ撮影
- 4) ビデオの編集
- 5) ビデオの作品の上映と生徒による相互評価

最初の段階では、英文シナリオ（『ふるさと奈良』奈良県教育委員会制作、奈良県及び奈良市発行の英文パンフレット、平城旧跡の英文パンフレット）を読んだり、英語のビデオ（『ふるさと奈良』奈良県教育委員会制作）を見て、英語として奈良学ではどういうことをするのか見通しを立てさせた。英文を読んでからビデオを見たので、生徒達はビデオの内容をかなり理解できたようである。嬉しそうに、「先生、結構聞き取れたで」と教師に語りかけてくる場面もあった。

班分けの段階では、1クラスを6班に分け、一つの班の撮影箇所を3カ所とした。班内の任務分担は、班長、副班長、記録係、演出係、カメラ係とし、全員が必ずどれかの係をする事にした。班分けと任務分担はすんなり決まるが、問題は英文シナリオ作りである。既成のシナリオと大体同じ場所を選び、模倣した班は英文を書くことにそれほど苦労しなかった。墨、筆作り、うわなべ古墳、奈良の菓子、仏像、春日大社のなぎ林、志賀直哉邸、新薬師寺の十二神將、奈良漬け等を紹介した班は相当苦労したようである。シナリオの原稿のチェックは、まず日本人の担当教師が眼を通し、最終的にはAETにも見てもらったが、意味の通るところはそれほど修正しないことにした。

シナリオを読む練習、現地でのリハーサル、撮影などは基本的には生徒に任せた。教師は、ビデオカメラの使用方法を説明し、使用日程の調整についての指示を与えた。カメラの台数不足のためにこの日程の変更、調整は大変であった。現地での撮影の際に、恥ずかしさを克服して、大きな声でしゃべっている班はうまく録音ができたが、声の小さい班はまわりの雑音に混じってほとんど聞き取れない状態であった。

そのために今年は、編集の段階で工夫をした。BGMやアフレコを入れた。しかし、またこの段階でも、機器の不足や古さのために苦労が絶えなかった。この点に関しては、指導上の問題点と課題の項に後述する。

ビデオ作品の完成後は、上映して、みんなで鑑賞し、審査表（研究紀要33集別冊 p.54 参照）をもとに審査し、高得点の班は表彰した。なお、奈良学の時間配当については、公開研究会の指導案に述べてある。

### (ii) 公開研究会（平成3年11月22日）の報告

- 1) 当日の授業展開（別紙の指導案参照）
- 2) 班長の感想から

A君：どうして僕の班がこのビデオの舞台に大仏殿と飛火野と興福寺を選んだんかという、そこは景色がとても良いと思ったからです。奈良のパンフレットを参考にして、辞書も何

回も引いてやりました。一生懸命頑張ったけど、結局暗唱できなかったので、カンニングペーパーを作って撮影したけど、カンニングペーパーが写ってしまって、駄目になりました。鹿を撮るのに苦労しました。6回くらい撮影をしました。鹿煎餅を買ってきて鹿をおびき寄せただけど、こんなのは僕たちの班だけだと思う。

編集が大変でした。アフレコをしなければならず、口を合わせるのに、1時間以上練習しました。学校のビデオになれるのに苦労して、結局Kさんの家で編集しました。大仏殿のところだけで2時間もかかりました。格好いいタイトル画面を作り、私服で感じを出しました。班のみんなが頑張ってくれました。

奈良学は、やる前はしんどそうだったけど、やっぱりしんどかったです(笑)。これからも何かの役に立つと思いました。

Oさん：春日大社と奈良公園と興福寺を選んだのは、奈良の良さがいちばん良く分かると思ったからです。みんなでやって、構想から英文にいたるまで1時間くらいかかりました。実際に撮影に行くと思ってもかけないことが起こりました。カメラが故障したり、春日大社の森の中では、暗くてきれいに写っているかどうか心配でした。興福寺では、人が多くて、雑音が入ってしまいました。でもきれいな奈良の風景を撮って奈良の良さを伝えることが出来たと思います。アフレコが大変でした。

奈良学をやり終えて、とても面白かったです。一人一人が自分の仕事をやってくれました。もうひとつ演出があれば、と思いました。班のみんなが頑張りました。私の班のいちばん良いところは、みんなが楽しそうに、にこにこしているところです。もし奈良で外国人が困っていても、これからはちゃんと道案内が出来ると思います。

M君：僕たちが、大仏殿、飛火野、興福寺を選んだのは、奈良を訪れた外国人がいちばん訪れそうなところだと思ったからです。

1学期のおわりにシナリオを作りました。社会の奈良学で学んだことを生かして作っただけでも、短い文になったので、加藤先生に直してもらいました。他の班は私服でやっていただけ、僕たちの班は制服でした。撮影はマイクの不良で3回もやりました。観光客に笑われたけれど、「失敗は成功のもと」という気持ちでやりました。岸田君が木に登って撮るという高等技術を使いました。全員が恥を捨てて大きな声を出しました。BGMもよかったです。

奈良学の英語は大変だったけど、新しい表現を覚えることもできました。実際にはこううまく対処できないかもしれないけれど、やってみたら出来て、今は満足感でいっぱいです。

### 3) 研究協議の場での討論から

第一に、ビデオに登場した生徒も含めて、概して、日本人の生徒は英語の声が小さいことが問題となった。AETからは、「文化の違いによるところが大きいのではないか」という発言があり、また、「中3という年齢になって、他人の眼が気になってくるという発達上の特徴にも原因がある」という指摘もあった。教師はこれらを念頭に置いて、発声の訓練を施すべきだということであろう。その意味では、平成3年度からは20人学級も導入したし、全員が参加する暗唱大会も長年やってきているので、かなり改善できるのではないかとと思われる。また、英語の教科以外の場でも、討論や意見発表をする訓練がもっともっと重視されないといけないのではないかとと思われる。

第二に、「外国人に道で出会ったときに、その人が話しかけてきた場合でなければ、何か手伝ってあげたい一心であっても英語で話しかけるのは失礼になるのだろうか」という質問

が出された。AETは、「私にはたくさん外国から来た友達がいるんだけど、彼らが言うのは、そうした場合、多くの日本人は、まるで英会話の練習相手としてしか話しかけていない。もっと、I want to help youという気持ちを表して話しかけて欲しい。そうでないと、やっぱり相手が傷つくと思います」という回答であった。他の参加者からは、「留学生には日本語で話すようにしている。英語で話しかけるといのは却って失礼ではないか」とか「生徒を奈良公園等に連れて行って外国人がいると、生徒はすぐに『あの外国人と話してくれ』ということになる。そんな時、私は、『日本にきているのだから、必要があれば日本語で話せばよい』と生徒に言っているのです」などの発言もあった。

第三に、「6年一貫校なのだから、中3で奈良学、高1で環境学と分ける必要はないのではないか。なぜ全教科参加しないのか」という質問があった。これには、「奈良学を始めるときに、理念でなく、無理せず、参加できる教科だけでもやって行こうということを出発した」という回答があった。

第四に、協議に入ってからすぐに、助言者の方から、「奈良学が新しい試みなので、この場で何を協議するのが難しい。授業のことなのか、奈良学全体のことなのか。奈良学全体にはいろんな課題がある。国際化と地域の問題、奈良学を合科ですることの意義、英語教育と奈良との関連、奈良学は特設すべきものなのか、平素の授業に組み込む余地はないのか、学校全体でどう取り組んでいくのか、などなど」の問題提起があったのだが、このことについては、時間不足で残念ながら、ほとんど話し合われずに終わってしまった。

### ③ 指導上の問題点と課題

#### (i) シナリオ作成に関して

生徒が既成のシナリオ（英文シナリオ『ふるさと奈良』奈良県教育委員会制作）の内容にとられる傾向がある。参考になる英文シナリオの種類が少ないので、上記のシナリオを模倣した班は、それほど苦労しないで作成できたが、独自のシナリオを作ろうとした班は苦労したようである。

シナリオの内容は、作成前に奈良学で何を習っているか、さらには英語の表現力などにもかかわってくる。これからの大きな課題である。

#### (ii) ビデオ撮影及び編集に関して

シナリオを読む練習、現地でのリハーサル、撮影などの段階での問題は、ビデオ機器の不十分さであった。

初年度は3クラス（18班）が同時進行する場合が多かったので、学校のビデオカメラの台数では、撮影に困難をきわめた。学校のビデオカメラは2台しかなかった。従って、カメラを借りてきたりもしたが、班毎のカメラを使用する日程の調整が大変であった。例えば、雨が降ってくれば、予定が狂ってしまい、生徒達の予定があったりして、日程の再調整が必要になった。カメラの不足は録音の失敗につながり、何度も取り直しに出かけなければならないことになった。

平成3年度は、カメラを1台増やし、マイクも2台増やしたにもかかわらず、1クラス全員が撮影に行けるわけではなかったため、日程の調整は今年も大変であった。1班1台のカメラが必要と思われる。

編集については、使える機器が1～2台しかなく、英語の割当時間も少ないので、日程の調整に苦労した。

#### ④ おわりに

奈良学の授業の時間は、1年目も2年目も6限と7限で、終わると4時頃になった。また、それだけではとても時間が足りず、放課後を使って、何度も撮影に出かけたり、編集に取り組んだ。その労力は大変なものだった。それにもかかわらず、生徒達は結構楽しそうに活動していたようだ。それは、

1) 奈良に住んでいると外国人に道などを尋ねられることが多いし、東大寺や春日大社などでよく外国人に出会い、今回の取り組みが彼らにとって役立つことがはっきりしていた

2) ビデオの撮影をしたり、編集したりするのが新鮮な経験だったこと  
などによる。

成果としては、おもに、

1) 生徒にとって身近な名所について、新たな発見をしたり、それを幾らか英語で表現できるようになったこと

2) 奈良を見なおす機会となったこと

3) ビデオ機器の使用、いろんな場所へ行ったことなどから多様な経験が得られたこと

4) 生徒同志の人間関係のつながりが深まったこと

などである。

### 総合教科「奈良学」指導案

指導者 加藤 勇

1. 日 時 11月22日(金曜日)

2. 対象生徒 中学3年C組

3. 「奈良学」における英語の目標

自分達の住んでいる奈良の歴史や文化を再認識し、積極的に外国の人にも奈良を紹介できる力をつけることが英語の「奈良学」の目標である。

4. 時間配分 (木曜日6, 7限を「奈良学」にあてる)

(第1回) 4月18日 「奈良学」オリエンテーション

(第2回) 6月20日 英文シナリオ『ふるさとの奈良』を読み、ビデオを見る。

(第3回) 6月20日 英文シナリオ『ふるさとの奈良』を読み、ビデオを見る。英文シナリオの作り方説明。

班分けと仕事分担。案内場所、撮影の仕方を決定する。

\*シナリオ書き……夏休み前までにシナリオ提出。

(第4回) 9月26日 奈良在住の外国の方の話を聞く。(セシリア先生、留学生)

英文シナリオを読む練習。カメラ係、ビデオの操作の練習。

(第5回) 10月3日 リハーサルをしに撮影現場に行く。

(第6回) 10月31日 ビデオ撮影に出かける。

(第7回) 11月7日 ビデオの編集

(第8回) 11月22日 作品の発表会 No.1「本時」

(第9回) 11月28日 作品の発表会 No.2

\*『ふるさと奈良』は、興福寺・東大寺・春日大社の巻」と「奈良公園の巻」がある。奈良教育委員会制作

## 5. 本時の目標

本時は、生徒達の取り組みの発表、および審査の時間である。共同の作業が相互に批判や共感を呼び合う中で、意欲を育てまた集団としての力もつけたい。

## 6. 展 開

(1) はじめに (3分)

(2) ビデオの上映と各班の苦勞の発表、及び審査

1) 1班 (10分) ビデオ上映「大仏殿、飛火野、浮見堂」  
発表 班長……東

2) 4班 (10分) ビデオ上映「春日大社、奈良公園、興福寺」  
発表 班長……大門

3) 6班 (10分) ビデオ上映「大仏殿、興福寺、飛火野」  
発表 班長……森尾

(3) まとめ (7分)

C組 6班……東大寺大仏殿 (菊地、玉置、大槻)

F: Excuse me. Would you mind taking a picture of me?

J: Not at all. Say cheese.

F: Thank you. May I ask you some questions?

J: Sure.

F: How long has Todaiji Temple been here?

J: About 1,200 years.

F: How tall is the Great Buddha?

J: About 14 or 15 meters tall.

F: Who built this temple?

J: Emperor Shomu built it for the welfare of the nation.

F: Thank you very much. We have learned a lot from you.

J: You're welcome. Have a nice trip. Good-bye.

C組 6班……興福寺 (岸田、仁木、森尾)

F: That is the famous five-storied pagoda of Kofukuji Temple.

F: This pagoda is very tall. How tall is it?

J: It is 51 meters tall. But it isn't the tallest pagoda in Japan.

F: Is that so?

J: The pagoda of Toji Temple in Kyoto is the tallest in Japan. This is the second tallest.

F: When was this pagoda built?

J: It was built in 730 A.D. It is an old pagoda.

F: I see. Thank you very much.

J: You're welcome. Have a nice trip. Good-bye.

F: Good-bye.

C組 6班……飛火野 (森尾、仁木、菊地、大槻)

F: Excuse me.

J: What can I do for you?

F : Will you tell us the way to Tobihino?

J : I'm going in the same direction, so I'll take you there. Follow me, please.

F : Oh, what luck! How long does it take from here?

J : It takes only about five minutes by bus. Let's take a bus.

[ They arrive at Tobihino. ]

F : Oh, I see a lot of deer everywhere. They are very cute. How many deer are there?

J : There are about 1,120 deer.

F : How large is this park?

J : About 650 hectares.

F : That's large. Well, thank you very much.

J : You're welcome. Have a nice trip.

#### (4) 美術・工芸科と〈奈良学〉

##### ① 指導のねらい

美術・工芸科の「奈良学」への参加は、教科の学習内容と大きく関わり、重要な意味を持つものと思われる。本校は、奈良県下でも文化財に恵まれた環境にあり、殊に、現場実習による社寺の建築・仏像、文化財等の鑑賞や研究、作品制作や模造制作を通して、奈良を総合的に再認識し、郷土愛を育むと期待される。

##### ② 初年度（'90年度）の取り組み

このことについては、昨年度の研究紀要（第32集）に報告しているので、参照されたい。

##### ③ 平成3年度（'91年度）の取り組み

###### (i) 計画の概要

平成3年度は、初年度と同じく、「奈良の社寺・奈良の伝統工芸」をテーマとして実施した。美術・工芸分野の性格から、・制作を通して理解する。・現地、工房を見学して理解する。・資料等を収集して理解する。ことを活動内容として指導計画を立てた。なお、初年度の反省から、今年度は、2学期の後半から実施することとした。指導計画の概要は、次のようである。

## 奈良の美術・工芸

### I. 学習内容の概要

- (1) 内容の1：新薬師寺の建築、仏像 2：赤膚焼 3：一刀彫 4：楽面 5：奈良墨のうち、自分に興味・関心のあるものを1つ選ぶ。
- (2) 同じ内容を選択した者で、班をつくる。
- (3) 班ごとに研究テーマを決め、見学、調査、考察した内容をまとめレポートする。内容の2、3、4、5については、個人でも作品を制作する。

### II. 実施計画の概要

#### (1) ガイダンス（大教室）

- ① 国宝への旅「新薬師寺」 NHK編《ビデオ》
- ② 「奈良の伝統工芸」 奈良市役所商工課編
- ③ 一刀彫、楽面と舞楽や能、狂言《スライド、ビデオ》

※この日、どの内容を選択するか希望調査をします。



(2) 班、テーマの決定 (HR)

- ① 希望調査により、1班8人の班を編成する。このうち、班長1名を互選する。
- ② 選択した内容から、各班で研究(レポート)テーマを決定する。内容の2、3、4、5については作品を制作するが、1についても、制作を伴うテーマを考える。
- ③ テーマや班活動の内容から、資料係、記録係、スケッチ・写真係など必要な係をつくり、担当者を決める。
- ④ 図書室で下調べをする。

(3) フィールドワーク(見学・資料収集)

- |        |        |          |          |        |
|--------|--------|----------|----------|--------|
| 1:新薬師寺 | 建築・仏像  | 奈良市高畑町   | 拝観料 300円 | (武田先生) |
| 2:赤膚焼  | 古瀬壺三先生 | 奈良市中町    |          | (吉沢先生) |
| 3:一刀彫  | 鎌田麦風先生 | 奈良市鹿野園町  |          | (上浦先生) |
| 4:楽面   | 石津玉秀先生 | 奈良市御所馬場町 |          | (加藤先生) |
| 5:奈良墨  | 呉竹精昇堂  | 奈良市大宮町   |          | (芳村先生) |

※ 現地集合、現地解散の予定です。

※ 内容5の人は、この日、「にぎり墨」の制作をします。

(4) 班活動(作品制作・レポート作成)

- ① 奈良学の時間は、制作が中心になる。レポートの作成は、課外も活用すること。
- ② 班長は、活動内容を「報告書」に書いて提出する。課外に活動した場合も同じです。
- ③ 作品、レポートの提出期限は、2月10日(土)です。レポートは、B5版を1ページとすること。
- ④ 内容によって、少額制作費が必要です。

(5) 日 程

1	A組:11/14 B組:10/31 C組:10/17	ガイダンス(大教室) " ( " ) " ( " )
3	A組:11/21 B組:11/7 C組:10/24	班分け・テーマ決定(HR) " ( " ) " ( " )
5	12/5	フィールドワーク(現地)
6		"
7	1/9	班活動:作品制作、調査研究、レポート作成
8		"
9	1/16	"
10		"
11	1/23	"
12		"
13	1/30	"
14		"

《場所》

内容1:美術教室 (武田先生)

内容2:各HR (芳村先生)

内容3:技術工作室(上浦先生)

内容4:技術工作室(加藤先生)

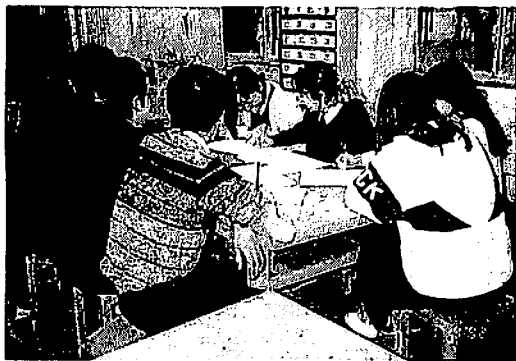
内容5:各HR (芳村先生)

※内容2の赤膚焼の班は、都合で11月16日(土)の午後、大塩昭山窯で、作品を制作します。

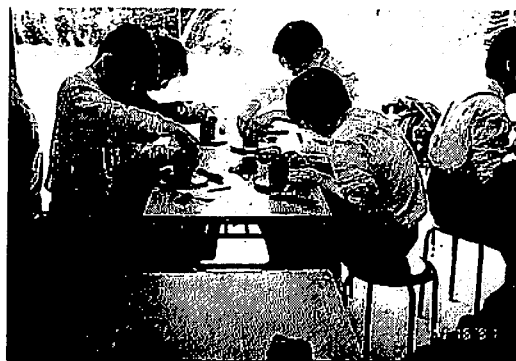
(ii) 活動内容

(1) 制作例

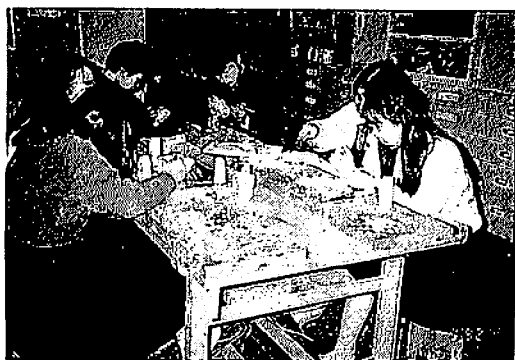
美術・工芸分野の「方法」として、作品制作も生徒の主体性に期待するところが大きいですが、奈良学の限られた時間内ではそう簡単なことでなく、従って、内容の3、4については、担当で制作題材を設定した。



内容1 新薬師寺  
・「十二神将の二十四の瞳を探る」制作風景



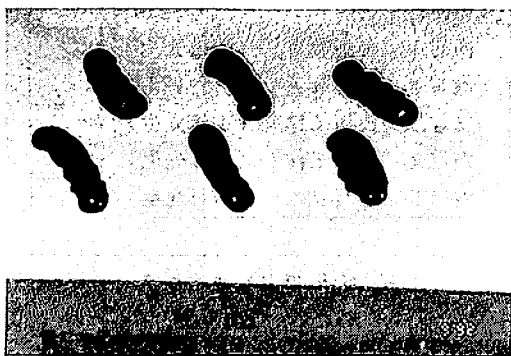
内容2 赤膚焼  
・初年度と同じく、大塩昭山窯で制作した。



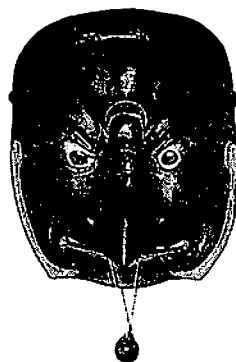
内容3 一刀彫  
・「立雛」を制作 彫り、彩色とも苦勞が多い。  
桂材



内容4 楽面 こゝろばせ  
・今年度は、舞楽面「崑崙八仙」を制作  
「割型」を使って作る。石塑粘土



内容5 奈良墨  
・呉竹精昇堂のご協力で「にぎり墨」を制作した。



舞楽面「崑崙八仙」

(2) 研究のテーマ

各内容について、各班ごとに話し合いをさせ、研究のテーマを設定し、最終的に収集した資料をまとめさせ、レポートとして提出させるものである。次の表は、今年度の研究テーマの内容である。

奈良の美術・工芸 研究のテーマ

A 組

- 1 班（班長 浜村新一） 十二の謎
  - ・十二神将について ・十二支について ・十二神将と十二支の関係について
- 2 班（班長 四方 充） 赤膚焼の現状
  - ・赤膚焼の特徴 ・どのようにして値段がつくのか ・どんな作品がよく売れるのか
  - ・後継者はたくさんいるのか
- 3 班（班長 羽原崇至） 森川社園
  - ・社園の生涯について ・社園の作品について ・社園の作風について
- 4 班（班長 有本真紀子） 奈良にゆかりの能楽
  - ・奈良にゆかりの能楽資料集 ・楽面「八仙」の制作の過程 ・見学記
  - ・まとめと感想
- 5 班（班長 山本寿子） イカにも墨にも
  - ・なぜ、奈良にしか墨はつくられていないのか ・日本最古の墨と墨の歴史
  - ・墨のつくり方 ・墨の職人になるにはどうしたらよいか

B 組

- 1 班（班長 加藤奈緒美） 新薬師寺「伐折羅大将」について
  - ・伐折羅大将像の構造 ・「伐折羅」の名前の由来とその意味
  - ・十二神将における伐折羅大将の意味や役割 ・制作「伐折羅大将のマスク」
- 2 班（班長 野間礼子） 赤膚焼の歴史
  - ・いつごろからつくられ始めたか ・どこから伝わったか、だれが始めたか
  - ・土はどこの土を使うのか ・どのようにして焼き物をつくるのか
  - ・今の赤膚焼の現状は？
- 3 班（班長 仲野純章） 一刀彫の制作過程
  - ・一刀彫の歴史 ・一刀彫の制作過程（材料、彫り方、彩色など）
  - ・鎌田さんの作品紹介（インタビュー） ・制作の感想（全員）
- 4 班（班長 上山泰幸） 源氏物語と能楽
  - ・能楽「葵上」のあらすじ ・登場人物について ・能面の種類
  - ・各ストーリーについての感想
- 5 班（班長 嶋田容子） 奈良墨の歴史と現在
  - ・どうして奈良に墨がつくられるようになったのか ・墨の原料について
  - ・墨のつくり方について ・これからの問題点

C 組

- 1 班（班長 天野千尋） 新薬師寺本堂の調査と研究

- ・新薬師寺の歴史 ・本堂の建築様式について ・新薬師寺の仏像について
- ・制作「十二神将の二十四の瞳を探る」
- 2班（班長 森上竜彦） 赤膚焼の歴史のつくり方
  - ・赤膚焼の歴史 ・焼き物の種類 ・焼き物のつくり方 ・全員の作品紹介と感想
- 3班（班長 藤村俊明） 「立びな」のできるまで
  - ・制作の工程と解説 ・一刀彫の題材と解説
- 4班（班長 中村浩章） 楽面のルーツ
  - ・楽面の由来と歴史 ・日本の楽面 ・世界の楽面 ・楽面の種類と解説
  - ・まとめと感想
- 5班（班長 竹中竜一） 墨の歴史を教えて「わっちゃん」
  - ・奈良墨の歴史 ・墨の種類 ・墨のできるまで ・奈良墨と後継者問題

### (iii) 感想、今後の課題

- ・ガイダンス後の希望調査では、一刀彫と赤膚焼に希望が多かった。そのため、十数名の生徒は第2希望に回り、班を再編成した。
- ・ガイダンスなどは、もう少し時間をかけ、充実したものにしておくべきであった。内容的に、授業の延長上で実施するというわけにいかない面もあり、事前に、多くのことを知らせた方がより効果的ではなかったかと思う。
- ・各内容とも、つくることに強い関心を持って制作できた。体験的に理解することの大切さもわかってくれたものと思う。  
 ただ制作にはどうしても時間がかかる。足りないときは、課外を活用したり、個人指導をするしか方法はなかったが、このことについて、特に内容の1、3については、制作の題材も含め、今後の課題として残る。
- ・班ごとのレポートの作成は、教科として初めての試みであった。各内容とも奈良の歴史や文化と広く関わり、また制作と並行してのレポート作成は、これも簡単なことではない。しかし、フィールドワークの内容をまとめたり、資料や文献からまとめたりして、具体的に内容を理解しようとする努力が見られ、期待以上の成果があった。これまでの他教科の学習方法がうまく生かされた結果でもあると思われる。
- ・フィールドワークでお世話になった奈良県工芸協会の方々、奈良市役所商工課、能楽の金春欣三先生に資料を提供していただき、参考にしたり、活用させていただいた。

### 3. 平成3年度〈奈良学〉年間計画表

月 日	内 容			備 考
4 / 18 25	奈良学オリエンテーション（奈良学とはなにか） 平城京ガイダンス			大教室 大体育館 大教室, 各教室
5 / 9 16 30	平城京フィールドワークの班分けなどについて 平城京フィールドワーク（Ⅰ） 平城京フィールドワーク（Ⅱ）			
6 / 6 13 20 27	A 組 英語の奈良案内 " " 奈良ゆかりの文学 "	B 組 奈良ゆかりの文学 " 現代の奈良リサーチ フィールドワーク(Ⅲ) "	C 組 現代の奈良リサーチ フィールドワーク(Ⅲ) 英語の奈良案内 " "	
9 / 12 19	現代の奈良リサーチ フィールドワーク(Ⅲ)	英語の奈良案内 "	奈良ゆかりの文学 "	
9 / 26 10 / 3	奈良在住の外国の方の話を聞く 英語による奈良案内リハーサル			大教室
11 / 7 17 24 31 14 21	A 組 奈良案内VTR撮影 奈良案内VTR編集 文学フィールドワーク " 奈良の美術・工芸 "	B 組 文学フィールドワーク " 奈良の美術・工芸 " 奈良案内VTR撮影 奈良案内VTR編集	C 組 奈良の美術・工芸 " 奈良案内VTR撮影 奈良案内VTR編集 文学フィールドワーク "	
22 28	（公開研究会）各班の「奈良案内」VTR発表 各班の「奈良案内」VTR発表			大教室 大教室
12 / 5 1 / 9 16 23 30 2 / 6 13 20 27	工芸フィールドワーク " " " " 文学フィールドワーク " " "			

#### 4. 〈奈良学〉教科別時間配当

月日	内 容			備 考
4/18	奈良学オリエンテーション			全体のオリエンテーション
25	社 会 科			
5/9	社 会 科			
16	社 会 科			
30	社 会 科			
6/6	英 語 科	国 語 科	社 会 科	
13	英 語 科	国 語 科	社 会 科	
20	国 語 科	社 会 科	英 語 科	
27	国 語 科	社 会 科	英 語 科	
9/12	社 会 科	英 語 科	国 語 科	
19	社 会 科	英 語 科	国 語 科	
26	英語科：奈良案内			
10/3	英語科：奈良案内			
17	英 語 科	国 語 科	美術工芸	
11/7	国 語 科	美術工芸	英 語 科	
14	美術工芸	英 語 科	国 語 科	
22	英語：生徒VTR発表			公開研究会
28	英語：生徒VTR発表			
12/12	美術・工芸			
1/9	美術・工芸			
16	美術・工芸			
23	美術・工芸			
30	美術・工芸			
2/6	国語			
13	国語			
20	国語			

## 5. 〈奈良学〉教科別指導計画

### I. なるほど・ザ・奈良 — 平城京と現代の奈良 —

目標：平城京を多角的に調査研究、レポートを作成することで、郷土の歴史に親しみ、同時に調査活動方法や報告・発表能力を養う。

内容：

1 (4/25)	平城京ガイダンス (平城京とは?調査テーマの紹介)	①
2	(PTA 学級会のため6限のみ)	
3 (5/ 9)	班わけ、役割分担、先輩の作品を見る、テーマの決定	②
4	フィールドワークの方法について、事前調査、班・各人のスケジュール表作成	①
5 (5/16)	フィールドワーク (I) (雨の場合は文献調査)	④ (③)
6	"	
7 (5/30)	フィールドワーク (II) (雨の場合は文献調査)	④ (③)
8	"	
9 A(9/12) B(6/20)	現代の奈良リサーチ (テーマ、調査項目、スケジュール決定)	②
10 C(6/ 6)	(可能な班はフィールドワーク)	② ④
11 A(9/19) B(8/21)	フィールドワーク (III)	④
12 C(6/13)	"	

実施場所 ①大教室 ②各教室 ③校内 (図書室)  
④校外 (平城京・奈良公園・県立図書館ほか)

### II. May I help you ?

目標：奈良には毎年、外国の方々が大勢見えます。下校時、公園などで何か尋ねられたら、すぐに答えられるようにしておきたいですね。奈良について、まとまった紹介ができれば国際親善に大いに役立つことでしょう。

内容：

1 A(6/ 6) B(9/12)	奈良の歴史・文化・伝統・環境等について書かれた英文資料を読む	②
2 C(6/20)	ビデオ「英語で親しむふるさと奈良」を観る	②
3 A(6/13) B(9/19) C(6/27)	グループ毎に計画を立てる (①役割分担②テーマ③調査・資料集め④の方法⑤「案内」のシナリオ作り⑥作業の手順と日程)	②
4	グループ毎の計画を報告し合う	②
5 (9/26)	奈良在住の外国の方に奈良についてのお話を聞く	①
6	代表グループが「案内」(シナリオの立読み)を試み、外国人講師からアドバイスを受ける	①
7 (10/3)	グループ毎に案内場所に行き、シナリオに従って「案内」リハーサルをする	④
8		
9 A(10/17) B(11/14) C(10/31)	グループ毎に現地で「案内」をビデオに撮る	④
10	"	
11 A(10/24) B(11/21) C(11/7)	グループ毎にビデオを編集する	①
12	"	
13 (11/22)	発表 グループ毎のビデオ放映	
14 (11/28)	"	

実施場所 ①大教室 ②各教室 ③校外

### Ⅲ. 奈良の文学風土にふれよう

目標：奈良と文学の関わりを広く知る。

内容：

1	A(6/20)	奈良に関係の深い文学事項について	②
2	B(6/6) C(9/12)	ガイダンス・調査研究テーマを考える	
3	A(6/27)	班わけ	②
4	B(6/13) C(9/19)	班別に調査研究計画を立てる	
5	A(10/31)	現地調査：写真撮影・ききとり	④
6	B(10/17) C(11/14)	資料収集	③,④
7	A(11/7)	〃	④
8	B(11/21) C(11/21)	〃	③,④
9	(2/6)	文献調査・資料整理	③,④
10		報告文執筆分担	③
11	(2/13)	報告文原稿執筆	②
12		(班ごとの作業)	
13	(2/20)	報告文集編集・製本	②
14	(2/27)	(班ごとの作業)	

実施場所 ①大教室 ②各教室 ③校内(図書室など)  
④校外(現地・図書館など)

### Ⅳ. 奈良の美術・工芸

目標：奈良の社寺・仏像、伝統工芸の造形的生命にふれ、郷土のよさを知ろう。

内容：

1	A(11/14)	ガイダンス：奈良の文化財、伝統工芸について	
2	B(10/31) C(10/17)	〃	(大教室)
3	A(11/21)	班分け 1. 新薬師寺(建築・仏像) 2. 赤膚焼 3. 奈良人形	
4	B(11/7) C(10/24)	4. 楽面 5. 奈良墨	(教室)
5	(12/5)	フィールドワーク(現地見学・資料収集)	(現地)
6		〃	
7	(1/9)	各班ごとに *調査・研究 *作品制作 *レポート作成	
8		実施場所 1:美術教室	
9	(1/16)	〃	2:各教室
10		〃	3:技術工作室
11	(1/23)	〃	4:技術工作室
12		〃	5:各教室
13	(1/30)	〃	
14		〃	

\*内容の2・3・4・5は、個人で作品を制作する。

(文責 中道貞子)



## 6. 〈奈良学〉の評価

中道貞子・松本博史

### I. アンケートのまとめ

#### ①【学習前アンケート】

平成2年4月、〈奈良学〉オリエンテーション実施直後に下のようなアンケートを実施した。  
《奈良学アンケート》

\*今日のオリエンテーションの話を聞いて感じたこと、考えたことを答えて下さい。

I. 次の(ア)～(エ)について、当てはまるところの数字に○をしてください。

	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
(ア) やってみたい	5	4	3	2	1
	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
(イ) わかりやすい	5	4	3	2	1
	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
(ウ) 興味もてる	5	4	3	2	1
	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
(エ) うまくやれそう	5	4	3	2	1

II. 奈良学とはどんな学習だと思いますか。

III. 奈良学と普通の教科との違いはどんなところだと思いますか。

IV. 奈良学のうち、どの内容に最も興味を持ちましたか。

V. この学習をやっていく上でどんなことが心配ですか。

VI. こんなことを調べてみたいということがあれば書いて下さい。

#### ②【学習後アンケート】

<奈良学>終了後の平成3年3月に、以下のようなアンケート調査を実施した。

《奈良学アンケート》

\*奈良学を終わって、感じたこと、考えたことを答えて下さい。

【I】奈良学の4つの内容について、次の(ア)～(オ)の当てはまるところの数字に○をしてください。(カ)以後については、各問いに答えて下さい。

A：平城京を再現しよう

(ア) 積極的に 取り組めた	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1
(イ) わかりやすかった	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1
(ウ) 興味もてた	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1
(エ) うまくやれた	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1
(オ) 時間は十分あった	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1

B：奈良の美術・工芸

(ア) 積極的に 取り組めた	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
	5	4	3	2	1

- |              |          |           |          |           |           |
|--------------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| (イ) わかりやすかった | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (ウ) 興味がもてた   | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (エ) うまくやれた   | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (オ) 時間は十分あった | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
- (カ) 自分が選んだ(与えられた)テーマで、しんどかったことは何ですか。  
 (キ) 美術・工芸としてのテーマは、他にどんなものをおくとよいと思いますか。  
 (ク) 学園祭の奈良学展示について、どう思いましたか。  
 (ケ) 個人として負担した材料費は、いくらですか。

C: ききとろう奈良のくらし

- |                   |          |           |          |           |           |
|-------------------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| (ア) 積極的に<br>取り組めた | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (イ) わかりやすかった      | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (ウ) 興味がもてた        | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (エ) うまくやれた        | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (オ) 時間は十分あった      | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
- (カ) 次のどれにいちばん熱心に取り組みましたか。(当てはまるものに○)  
 ①聞き取り訪問 ②資料収集 ③パネルづくり  
 (キ) 来年の中3生にも、この「聞きとろう 奈良のくらし」をすすめますか。  
 ①はい 理由: ②いいえ 理由:  
 (ク) 個人として負担した材料費は、いくらですか。

D: May I help you ?

- |                   |          |           |          |           |           |
|-------------------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| (ア) 積極的に<br>取り組めた | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (イ) わかりやすかった      | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (ウ) 興味がもてた        | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (エ) うまくやれた        | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
| (オ) 時間は十分あった      | すごく<br>5 | まあまあ<br>4 | ふつう<br>3 | あんまり<br>2 | ぜんぜん<br>1 |
- (カ) 印象に残ったことは、どんなことですか。  
 (キ) やりにくかった点や困ったことはどんなことですか。  
 (ク) (キ)について、どのように改善すればよいと思いますか。  
 (ケ) "May I help you?"として、新しい企画を提案して下さい。

【Ⅱ】奈良学とはどんな学習だと思いましたか。

【Ⅲ】奈良学と普通の教科との違いはどんなところでしたか。

③【アンケート分析】

(a) 学習前アンケートと学習後アンケートの比較

調査はすべて同じ生徒に、<奈良学>実施前後の、異なる条件下で二度計算されているから両者に相関がある。例えば、(ア) Aの表では、学習前は [3 普通・2 あまり・1 全然] であって、学習後には [5 すごく・4 まあまあ] に変化したものが、6 名おり、そして、学習前 [5 すごく・4 まあまあ] であって、学習後は [3 普通・2 あまり・1 全然] に変化したものが24名いることが分かる。この変化が統計的に有意かどうかを検定する。

一般に、最初ある特性を持ち、その後持たなくなったものの数 p、逆に最初ある特性を持たず、後にその特性を持つようになったものの数 q とする時、その臨界比 CR を次の式で計算する。

$$CR = \frac{|p - q|}{\sqrt{p + q}} \quad (p + q \geq 40)$$

$$CR = \frac{|p - q| - 1}{\sqrt{p + q}} \quad (p + q < 40)$$

臨界比 CR が両側検定で 2.58 以上なら 1% の (\*\* で表す)、1.96 以上なら 5% の (\* で表す) 水準で近似的に有意差が認められる。

たとえば、(ア) A では、CR = 3.47 であるから、1% 水準で、授業の前後で生徒達の反応に有意な差がある。

それぞれの数値を、次のよう定める。

5 = すごく 4 = まあまあ 3 = ふつう 2 = あまり 1 = ぜんぜん

縦 : 学習前 (奈良学全体について) 横 : 学習後 (各教科毎)

(ア) <学習前> やってみたい → <学習後> 積極的に取り組めた

A : 平城京を再現しよう\*\*

B : 奈良の美術・工芸

		後				
		5	4	3	2	1
前	3	1	0	21	2	2
	2	0	5	9	2	0
	1	0	0	3	0	1
	4	2	21	14	2	1
	5	2	6	5	2	0

CR = 3.47 > 2.58 P < 0.01

		後				
		5	4	3	2	1
前	3	2	14	8	6	4
	2	4	5	4	3	0
	1	0	1	3	0	0
	4	4	17	8	10	1
	5	6	6	1	1	1

R = 0.577 < 1.96 P > 0.05

C : ききとろう奈良のくらし\*

D : May I help you ?\*

		後				
		5	4	3	2	1
前	3	5	13	12	4	0
	2	1	9	5	1	0
	1	0	4	0	0	0
	4	9	17	7	7	0
	5	6	6	2	1	0

CR = 2.14 > 1.96 P < 0.05

		後				
		5	4	3	2	1
前	3	2	14	16	2	0
	2	1	13	2	0	0
	1	1	1	1	1	0
	4	7	17	11	5	0
	5	6	7	2	0	0

CR = 1.98 > 1.96 P < 0.05

[考察] <ききとろう奈良のくらし><May I help you ?>は、やってみて予想していたよりは積極的に取り組めた。これは、総合教科の授業の中身と日常の授業の内容との隔たりの大きさに関係していないだろう。

(イ) <学習前> わかりやすい → <学習後> わかりやすかった

A : 平城京を再現しよう

	後				
	5	4	3	2	1
5	3	2	1	0	0
4	2	24	17	4	2
前3	0	16	18	8	0
2	0	5	9	2	1
1	0	0	3	0	1

CR = 0.45 < 1.96 P > 0.05

B : 奈良の美術・工芸

	後				
	5	4	3	2	1
5	3	1	2	0	0
4	7	14	17	10	1
前3	0	17	14	10	1
2	4	5	4	3	0
1	0	1	3	0	0

CR = 0.39 < 1.96 P > 0.05

C : ききとろう奈良のくらし

	後				
	5	4	3	2	1
5	2	1	1	2	0
4	7	17	14	10	1
前3	2	9	18	11	2
2	1	9	5	1	0
1	0	4	0	0	0

CR = 0.41 < 1.96 P > 0.05

D : May I help you ?

	後				
	5	4	3	2	1
5	3	1	2	0	0
4	9	14	19	6	1
前3	0	16	21	5	0
2	1	13	2	0	0
1	1	1	1	1	0

CR = 0.52 < 1.96 P > 0.05

[考察] どの課題も「分かりやすさ」には大きな変化はなかった。

(ウ) <学習前> 興味もてる → <学習後> 興味もてた

A : 平城京を再現しよう

	後				
	5	4	3	2	1
5	2	8	3	1	0
4	10	13	9	9	2
前3	2	10	12	12	1
2	0	4	2	7	1
1	0	0	0	0	1

CR = 1.26 < 1.96 P > 0.05

B : 奈良の美術・工芸\*

	後				
	5	4	3	2	1
5	3	5	4	2	0
4	3	15	15	8	2
前3	3	8	13	12	1
2	2	3	2	6	1
1	0	0	0	1	0

CR = 2.18 > 1.96 P < 0.05

C : ききとろう奈良のくらし

	後				
	5	4	3	2	1
5	5	6	1	1	1
4	8	11	16	8	0
前3	2	7	15	11	2
2	0	6	3	4	1
1	0	0	1	0	0

CR = 1.85 < 1.96 P > 0.05

D : May I help you ?

	後				
	5	4	3	2	1
5	6	4	3	1	0
4	5	19	8	7	4
前3	1	14	11	11	0
2	0	5	5	3	1
1	0	1	0	0	0

CR = 0.30 < 1.96 P > 0.05

[考察] 「興味」については、<奈良の美術・工芸>のみが有意な変化を示している。これは、オリエンテーションの段階では、授業の内容が抽象的でやるべきこと明確でなかったが、実際の学習は、工房の見学や自らが作品を製作するという体験等によって、変化したのではないだろうか。

(エ) <学習前> うまくやれそう → <学習後> うまくやれた

A : 平城京を再現しよう\*

	後				
	5	4	3	2	1
5	1	0	0	0	0
4	3	9	13	4	0
前3	1	21	17	12	0
2	1	8	10	3	1
1	0	1	2	1	0

CR = 2.14 > 1.96 P < 0.05

B : 奈良の美術・工芸

	後				
	5	4	3	2	1
5	1	0	0	0	0
4	4	7	9	8	2
前3	7	16	12	7	9
2	3	3	7	9	1
1	0	1	1	1	1

CR = 1.57 < 1.96 P > 0.05

C : ききとろう奈良のくらし\*\* D : May I help you ?\*\*

	後				
	5	4	3	2	1
5	0	1	0	0	0
4	3	13	10	4	0
前3	5	17	18	10	1
2	1	9	9	4	0
1	0	3	1	0	0

CR = 3.00 > 2.58 P < 0.01

	後				
	5	4	3	2	1
5	1	0	0	0	0
4	6	8	9	6	1
前3	6	18	13	14	0
2	2	6	7	6	2
1	0	1	1	2	0

CR = 2.43 > 1.96 P < 0.01

[考察] 達成感については、<奈良の工芸・美術>以外は、有意な変化を見せている。それなりに課題に取り組み、巧くやれたと感じていると評価することができるであろう。  
<奈良の工芸・美術>は作品が結果としてのこり、具体的な作品の出来映えとして評価が目に見える形になる。(ウ)の分析結果と合わせて考えると、作品が思い通りに出来なかったのだろうか。

(b) 「奈良学とはどんな学習だと思いましたか」という問に対する回答から生徒の生の声を挙げておく。

(ア) <郷土学習>と捉えているもの

奈良人を作ろうとする、奈良県民として必要最低限の知識を身につける、  
奈良の町を勉強しながらいろんな事を学ぶ、奈良の文化をよく理解するための学習、  
奈良の歴史を知る学習、ふだん知らないことを勉強できる、奈良について習う、  
奈良についてよく知り、奈良を再認識する、  
奈良に住んでいても知らないことがいっぱいあったけどそれを知ることができた、  
私達の住んでいる奈良をより多く知り、将来の奈良の発展に協力できるような人になるための学習、奈良についての風俗学、

奈良について知らなかったことをどんどん知って郷土への愛(?)を深める、奈良の事をよく知り、それを知らない人に教える事ができるようになる学習、やる価値はある、奈良に親近感を持つ、身近な事から国際的な人間を育てるため、いろんな面から奈良をとらえて身近な存在にしていく学習、

(イ) <学習形態・方法>について触れているもの

様々な教科からなる総合学習、この学校独自の授業で良かった、校外に出て体験する、いろんな方向に目を向けることのできる機会、机にじっと座って話を聞くじゃなく「する」「やってみる」学習、いろんな人との交流を深める授業でもあるなと思った、はじめはただの息抜き授業かな?なんて思ってたけど、私達にとって内容の濃い、また生かすことのできる学習だと思う、自分達で考えたり協力したり、奈良についてもよく分かってよい学習だと思う、枠にはまっていない広々とした学習、積極的にやらないといけない、自分達で計画して自分達で実行しないといけない、グループ学習、身近な事を調べる学習、皆が協力してしないと何も始まらない、班活動だから頑張る子と怠慢する子がいる、書いたりするよりももう少し体験するようなことを増やしたほうがいい、

(ウ) <批判的意見>

奈良学は良いこともあったけど、あんまり面白くなかった、やり方が悪いんだと思う、もっと一つの事にテーマをしぼっていくべき、はじめ思っていたこととは大違いでどれもこれもなんとなく中途半端で期待はずれだった、あまり利点はないが楽しい学習、あまり役に立たないと思う、関心のない人にはつまらない、よく分からない、気むずかしいもの、すごくせかせかせかしてた、奈良のことをよく知る事は出来なかった、もう少し内容を固くすればよいと思う、奈良について知ることだと思うが、あまり意味のある事だとは思わない、聞き取りや英語は特に奈良についての知識は増えなかった、木曜日に7限まであってちょっと嫌な学習、

(c) 「奈良学と普通の教科との違いはどんなところでしたか」という問に対する回答から

(ア) <自主的学習>に関するもの

自分達でやるところ、毎回いろんな所に行って何かをする、自主学習的、自ら足を踏み入れてその地で学習できるのが奈良学のいいところだと思う、自分で行動し資料を作ること、HRっぽい、自分達で疑問、調べたいことを見つけ自分達で積極的に学ぶ、面倒なところ、直接的に先生が加わらないところ、自主的にやらないければならないところ、だから先生が決めた班では仲のいい子同士がたまってまとまりがつかなかった、奈良学は疲れる、

(イ) <学習形態>に関するもの

いろいろな教科が混ざってあるのでそういうところが面白い、どれも班でやるからみんなと一緒に考えたり工夫したり出来る点が良かった、

ふだんできないことをする、自由にできる、実際に行動するところ、  
校外に出たりテーマがたくさんあっていい、課外授業が多かった、  
おもにグループ活動、先生に教えてもらうことが少ない、  
気楽にできる、教科書がない、教科書と違って伸び伸びできる、テストがない、  
みんなとの協力がいちばん大切だということ、  
机に座るんじゃなくやってみるという点で新しいと思った、実習が多い、  
奈良学はリラックスできるし、友達の輪も広がる、  
どうして学習してるのかはっきりしている、ぼーっとしてられない、  
授業の形にとらわれずできる、テストなどにしばられずにのびのびできた、

(ウ) <学習内容>に関するもの

ある人の体験談を聞いたり、また、いろんなことを体験すること、  
班毎で調べたり自分で実際に聞き、見、触れること、生活に密着性があると思う、  
自然な感じがする、答が一つでない—幾らでも調べるほどに答が見つかる、  
授業で習ったことの応用になったりしている、これからまたどこかで生かせる内容、他の  
授業より 吸収しやすい、授業とは思わなかった、レクレーションかと思ってた、実用的  
な感じがする、  
日常生活の中であまり深くかんがえないようなことをやったのが奈良学だと思う、

(d) 奈良学の内容についてのアンケート回答から

<奈良の美術・工芸>について (数字は回答者数)

★自分が選んだ(与えられた)テーマでしんどかったことは何ですか。

手作りなので頭の中で思っているようにうまく行かなかった、  
すごく時間がかかり細かい所を彫るのが難しかった 4、  
彫刻をした時に2つも人形を彫ったこと、粘土で作って色を塗ること、  
デザインを考えること 2、あまり資料がなかった 3、  
赤膚山まで行くのが遠かった 2、  
班長だったが時間がなくてみんなが全然集まってくれなかった、  
時間がかかった、放課後残ったりしてしんどかった、時間が少なかった 2、  
仲間が手伝ってくれない、自分からすすんでやる人とやらない人がいたこと、  
調べることがあまりなかった、興味なかったのでやってること自体しんどかった、  
テーマの中で何をするか決めること、赤膚焼きの見学、  
作品を作るのに時間がなくて夏休み中忙しかったこと、模型を作るのに学園祭のクラスの  
仕事もあったのに模型がなかなかできなくて時間的にしんどかった、

★美術・工芸としてのテーマは、他にどんなものをおくとよいと思いますか。

筆作り 15、墨 12、うちわづくり 7、瓦 2、扇子作り、  
奈良の料理の美を求める、奈良以外の美術も調べる、漆器、  
もっと彫刻や陶芸などの項目を増やしてほしい 2、奈良の美術品等の見学、  
奈良の伝統的なもの 2、和紙、奈良の古くからの店を見学したりする、  
民謡、いろんな作品を見る(鑑賞) 2、奈良時代の服の再現、  
もう少し楽で身近なもの、ビデオどり、ガイド作り、奈良食べ歩き、  
歌舞伎について、もっと一般的なもの、建設(寺など)、

- 班の人数を多くして実物くらいの大きいものをつくる 3、  
★個人として負担した材料費はいくらですか。  
2000円位 9、1500円位 8、1000円位 23、700円～40 円位 14  
300円～100円位 18、30円 4、負担なし 10、他は不明

<ききとろう奈良のくらし>について

- ★来年の中3にも、この「聞き取ろう 奈良のくらし」をすすめますか。

(7) 「はい」の理由

勉強になるから、色々なことが知れて自分のためになる、  
知らないことがどんどん分かってなんか昔がなつかしいような気になるから、  
奈良のこととかよく知ることができる、聞き取り訪問はなかなか楽しかった、  
奈良の暮らしの他にも戦争の事とか色々なことが聞けるから、  
奈良の暮らしを知るにはまずは生活からと思う、人に対する接し方の勉強にもなる、  
お年寄りとの交流も深まるし自分の知らない事を知る機会だから、  
老人とのつながりの場を持てるから、老人と話してみてもその方達のくらしや時代を見るこ  
とができて良かった、昔の暮らしを直接聞けるのはよいこと、  
みんなでパネルを作ったり結構楽しかった、楽しい、いろんな体験を聞ける、  
老人と話をすると意外なことも教えてくれるし世代をこえた交流も必要なので、  
面白いし、授業がつぶれるから、老人の人達が喜んでくれるから、  
お年寄りが好きになったから、老人とのコミュニケーションがとれる、  
老人ホーム訪問という福祉のようなものも兼ねているしこれが一番奈良学って感じだから、  
奈良に興味を持てるから、滅多にできることでないから、  
楽ではないがそういう話を耐えて聞くのもたまには我慢の練習になるはず、

(4) 「いいえ」の理由

放課後遅くまで残されて面倒だった、あまり奈良のことが聞けなかった、  
老人ホームの方に奈良出身の人が少ない、奈良の暮らしより奈良の歴史の方がよい、  
テーマに沿った話をしてもらえなかった、あんまり興味がわかかなかった、  
聞くのは大切だけど恥ずかしい、聞きづらい、敬語を使うのはしんどい、  
ただの老人のなぐさめ相手です昔を知る聞き取りにはなっていない、  
聞き取りが少しいへん、老人達の話はあっちこっちへ飛んで混乱してしまう、

- ★個人として負担した材料費はいくらですか。

約880円 2、600円～400円位 2、300円～100円 19、50円位 3、他は不明

<May I help you? >について

- ★印象に残ったことはどんなことですか。

[英語に関わること]

みんなの話す英語がさっぱり聞こえない、英語は学習「ペーパーテスト」と体験「しゃべ  
ってみる」との違いがあって案外うまく行かなかった、調べたことを英語に直したこと→  
外国の友人に紹介できた、英語で道案内するのは大変だと思った、シナリオづくりが大変、

[ビデオに関わること]

一生懸命作ったビデオが消されたときの絶望感、ビデオ撮りをしたこと、



人前でビデオを撮ったこと、ビデオ撮影するときNGとかがおもしろかった、何回も撮り直したこと、ビデオで1位だったこと、3位に入賞できたこと、あんなに本格的なことはやったことがなかったから「すごい」という感じがした、

〔体験に関わること〕

外人と英語でおしゃべりしたこと、外国人にあって話をしたこと、オーストラリア人の人がせりふを読んでくれたこと、

恥ずかしかったこと、やることなす事初体験ものばかりでとまどったがそれなりにできたこと、1回目はよく頑張れた、自分が顔を真っ黒にぬって外人をやったこと、資料の確認、現地へ行っての行動が楽しかった、劇の間違いが一つもなく良かった、寒い風が強いしでつらかった、6時まで寒中やったこと、せりふが「OH!」ばかりだったこと、おもしろい演技を友人がしたこと、せりふを沢山覚えなくちゃいけなくてしんどかったこと、奈良とは訪ねようとするといくらでも質問のできる謎の多い県である、東大寺にただで入ったこと、春日大社などで劇をした、

★やりにくかった点や困ったことはどんなことですか。

〔教師に関わること〕

先生も生徒も初めてのことなので何をやったらいいのか分からないとどうしようもなくなること、先生の指示が不十分、色々な場所に移動しなくてはならなかった、先生にビデオを消されたこと!!

〔実施上のこと〕

1つ1つの場所が遠かった、寒い、人の多いところでビデオを撮るのはやりにくい、手順が悪かった、計画通り行かない、時間がなかったこと、現地の待ち合わせの時間がうまくいかなかったり終ると思ってた時間をだいぶオーバーしたこと、一部の班員があまり積極的でない、劇の練習、外人の表現、演技が難しかった、英語が覚えにくかった、店の中で撮らせてもらったこと、リハーサルが多すぎる、鹿が思うように動いてくれなかった、自分の英単語のしらなさ、積極的なところがなかった、撮影の時観光客の人にじろじろ見られてやりにくかった、新聞を作ったこと、日本人同士だから実際に外国の人に通じるのか分からない、班の中で行き方を3つ違うのにしなくてはいけなかったのでむりやりタクシーにしたらちょっと不自然だった、地図の矢印の方向があいまいだった点、

〔ビデオに関すること〕

撮影するとき待たないといけなかったこと、2班合同で長かった、ビデオを家から持って来るのが嫌だった、文字を入力するとき何がどこにあるのか分からず時間をロスした、声が自動車の音で消されてしまったこと、雑音（風の音）が入ったりした、ビデオテープを一班づつにしなくてケチったこと、ビデオの使い方がいまいち分からなかった、カメラにズームが付いていなかった、ビデオ編集、声が8ミリにうまく入らない、ビデオを撮すとき笑ってしまったこと、まちがえたところの編集がたいへん、

★上のことをどのように改善すればよいと思いますか。

〔準備に関すること〕

場所の統一、生徒の事を考えた計画を立てる、社寺や名所、特産物について調べる”奈良学”をいければよい

〔実施上のこと〕

奈良に在住している外人の人に頼む、

時期を暖かいときにする、分からないことなどを調べる時間がほしかった、先生が学校に待機していて、いつでも連絡がとれるようにしてほしい、先生のプリントだけでは不十分、教室で読む時間をビデオどりにまわす、もっと練習時間を増やす、ひたすら経験をつむ、シナリオはもともと3種類程作っておいたものを与えればよい、1つ1つのせりふを短くする、会話プリントを配る、

〔ビデオ撮りに関するもの〕

静かなところで撮影する、バス道から離れたところで撮影、早い時刻に撮る、もっとまとまった所で集中的に内容を深くすればよかった、近くの変所に変える、バックミュージックやタイトルをつける、まちがえた所を1回1回消していく、もっと沢山ビデオカメラを用意する、学校で試しどりをする、ビデオの管理者がもっとしっかりしてほしい、1班に1本のテープを、もっと機材の勉強をする、ビデオにマイクをつける、レンタルカメラはもう少し良いものを借りるべき、

★〈May I help you?〉として、新しい企画を提案して下さい。

各班で調べたい国を決めて、その国の人をさがして色々聞かせてもらう、本当の外人と話す(多数)、ビデオに協力してもらう、留学生との交流、実際に外人と話してみたり、外国の学校とのビデオ交換  
班ごとに外人の人を実際に1人いてもらってその人とどこか行って楽しむ、もっと外人役の人に工夫を加える(金髪など)、もっと大きい班でする、奈良の食べ歩き、バスに乗ってみんなでガイドする、形式は同じでもっとタイプする所を増やす、一冊の英語のガイドブックを作る、寺や仏像について詳しく説明したのをビデオにとるとかしてもいいのでは、

## 2. 公開研究会における〈奈良学〉の発表

11月22日に実施した平成3年度公開研究会は、「中学校及び高等学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発-2-2-2 年制カリキュラム編成と総合教科〈環境学〉〈奈良学〉の創造」が主題であった。その中で、〈奈良学〉の内容は次のようである。

〈奈良学〉の授業の公開、並びに、研究協議

〈奈良学〉の分科会は、中学校教諭18名、高等学校教諭7名、大学教授4名、小学校教諭1名、一般参加者7名、本校PTA会員14名、本校教諭18名で行われ、参加者数もさることながら、多方面からの参加を得られ、多くの貴重な意見が集められ活発な討論がおこなわれて成果の多い会議であった。

① 公開授業：総合教科〈奈良学〉 “May I help you ? ”

—英語で奈良を案内しよう—、中学3年C組

授業者：加藤 勇

公開授業のようすについては、ページの英語科と〈奈良学〉の項に述べている。

② 〈奈良学〉の取り組み経過の報告…発表者：勝山元勝

・〈奈良学〉の目指すもの

・〈奈良学〉の内容 I 平城京・奈良町を再現しよう、II 奈良の美術・工芸

III 聞き取ろう奈良の暮らし、IV “May I help you?”

③ 研究協議：指導助言者 鈴木 良（立命館大学教授）  
セシリア・ロレンゾ（本校英語外国人講師）

—〈奈良学〉担当者からの報告—

- ・芳村（国語科担当教官）：聞き取ろうという発想以前にいろんなことができると思うが、初年度は老人ホームにグループで訪れて、昔の奈良を聞こうとした。しかし、老人の方が奈良の人だとは限らなくて、当初の思惑とはズレてしまった。そこで今年度は、奈良と文学ということで、次のような柱を立てた。まず、万葉集と奈良で、万葉歌碑を調べる。それから松尾芭蕉が奈良に幾度か訪れていて、その句碑を調べる。日頃から、見慣れているものもあると思うが、これを意識的に調べる。それから、奈良に住んだことがある志賀直哉の日記や手紙の中にどの様に奈良が出て来るのか、あとよく出て来るのは会津八一と正岡子規。それから、これは私の趣味もあるが、本当は奈良県全体に広げたいのだが、奈良市内の学校訪問を生徒がして、校歌の中で奈良の歌枕がどのように使われているかを調べている。中には迷惑がっておられる学校もあると耳にするのだが……。
- ・上浦（技術科・工芸科担当教官）：何をさせたらよいか難しい点もあるが、社寺の建築と仏像、奈良の伝統工芸ということでやっている。製作を通して、そして工房見学をする。奈良学の目的からすると、生徒自身が課題を見つけるのがいいが難しい。今調べているグループの中には「十二神将と二十四の瞳」というのがある。赤膚焼では大塩先生に協力してもらっている。また、一刀彫で立ち雛をつくるが、これなどは私がやっても難しい。私は若い頃から楽面に興味を持っていて、こんなものを作って部屋に飾ってあったが（面を取り出す）、中1ではこれを見るときかっぱみたいやといい、中3になると「一体、どういう意味があるのか」といった質問をするようになる。資料やレポートが別室に展示してあるので見てほしい。
- ・武田（社会科担当教官）：社会科では、フィールドワークで中1では地図歩き、中2では東大寺の観光案内、中3の奈良学では平城旧址で、奈良時代の育児というテーマでレポートした生徒もいる。また、現代奈良リサーチで観光都市としての奈良、お土産屋さんやホテルを調べたり、お寺の落書きを調べに行き、あるお寺でここにはどんな落書きがあるかを聞き、この寺にはそんなものはないと怒られた者もいる。英語の案内でも、他教科で習ったことが生きて来るのは難しい。外国人の役をするからサリーを貸してくれといってきた生徒がいる。中2のときに地理でインドを教えるときに教室へ着て行ったサリーを思いだして貸してくれと言いに来たのだと思うが、長い蓄積があって、ポッと出るという感じだと思う。

— 研究協議の内容 —

- ・セシリア・ロレンゾ（英語担当外国人講師）：ビデオの生徒達はとてもよく頑張ったと思う。歴史的事実を説明することはとても難しい。それに問題は、日本人の生徒はすぐに上がってしまって、ちゃんと口が開いていないことがある。もう一つ、奈良公園の鹿が一千何十何頭というのは、余りに細かすぎ変だと思う。ふつう、観光客に聞かれたら、many deerとかa lot of deer が普通だと思う。授業はとても良かった。
- ・鈴木（立命館大学教授）：意見がでないのは、奈良学というのが新しい事柄なので、授業のことを協議するのか、奈良学全体のことを協議するのか、戸惑いがあると思う。奈良学全体にはいろんな課題があると思う。例えば、国際化と地域の問題、奈良学を合科ですることの意義、英語教育と奈良との関連、奈良学を特設することの意義、学校全体でどう取り組んでいくのか。私は昔、ここで歴史を教えていて、今は立命館にいて、そこの高校の校長をしているが、

立命館は国際化では戦陣を切っていて、カナダから留学生もきたりしているが、生徒に国際化をどう教えるかが課題である。セシリア先生に質問がある。この間、うちの学校でAETの授業を見たが、生徒が蚊の鳴くような声しか出ていない。それに対して、今日の生徒達はとても大きな声でできていた。これは日本の英語教育ということになるのだろうか、どうして日本人は大きな声にならないのだろうか。

- ・セシリア・ロレンソ（英語担当外国人講師）：文化の違いが大きいのではないか。日本は遠慮を尊ぶし、英語では意見をはっきり言って初めて英語になる。いずれにしても、使わないとだめではないか。
- ・鈴木（立命館大学教授）：私の学生の時と全然英語教育が変わってきた。私の頃は、自分がまるでアメリカ人になりきって話さなければならなかった。ジャックアンドベティという教科書があり、英語は単に受験の一教科だという感じがあった。でも今では、文法だけでなく、奈良のことをしゃべるということだ。
- ・（司会）本校では、今年度から中1と中2で20人学級を実施していて、週5時間のうち1時間をセシリアさんにしてもらっているが、そのあたりのことはどうか。
- ・荒木（本校教員）：今の中1、2は本当に声大きい。NHKの番組がセシリアさんの授業を取材にきたときも、生徒がどんどん発言していた。授業でもパターンを覚えて、前に出てきて芝居のようにしてやるのだが、みんな恥ずかしがらないでやる。今の中3は20人学級の経験がないが、今の中1、2がビデオを作ればもっとよいのができたのではないか。
- ・勝山（本校教員）：中1、2だからしゃべる。中3になるとしゃべらないということではないか。大人の社会でも日本では、言いたい放題の人間の評価は高くない。
- ・（参会者）：今日は最初の投書のことだけでもすごい勉強になったと思う。外国人が歩いてきたら、関心があると思う。なにか外国人に力になるときはどうしたらいいのか。そんなときでも話しかけるのは失礼になるのか。私の中学はとて田舎で、阪奈道路の端の方だが、それで外国人なんかあまり見ないし、でも遠足で二条城に行くと、英語の説明を見ると、ふすまはsliding doorというのかなあ、と思ったりする。教科書以外の英語を教えたいということで、東大寺の案内を試みようとしていたりしているが、本当は奈良公園でできたらいいのにとっている。今日の案内を見て、同じようなことをやっているところがあると思って来てビデオを見たら、何や、練習で終りかって感じだ。本当に外国人に力になりたいとき、そんなときでも話しかけたりしたら、失礼になるのか。
- ・セシリア・ロレンソ（英語担当外国人講師）：私にはたくさん外国から来た友達がいるが、彼らが言うのには、話しかけられたら、まるで、自分の練習相手としてしか話しかけていない。もっとI want to help you, I want to be help という気持ちを表わして、そうでないと、やっぱり相手が傷つくと思う。
- ・鈴木（立命館大学教授）：今、タイから来ている学生の日記の指導を毎日しているが、日本語だけしか使わせない。そうすると、こっちの日本語もいかに怪しいかわかる。それに、カナダから来た学生には、日本語しか使わせない。日本人が向こうに行ったら英語しか使わないのだから。私がそう言ったから、留学生を受け入れてもよいということになったのですが。外国から来た人に、英語で話しかけるといのはかえって相手の期待を裏切ることになる。
- ・（参会者）：生徒を奈良公園に連れて行って、外国人がいるとすぐ生徒はあの外国人と話してくれという。私は、日本にきているのだから向こうに必要があれば日本語でしゃべればいいと生徒に言っている。もちろん、こまっていれば力を貸すのは当然だが、このような総合教科

の取り組みが公立でできるかわからない。やっぱり learning by doing で AET を呼んで勉強させたい。それには本当に自分が必要なものがないとしゃべれない。受験学力を否定するわけではないが、やっぱり生きて力になって行く学力の追求が大切だと思う。

- ・(参会者)：本当に地の利を得ていいテーマがあって羨ましいが、逆にあまりに資料が多すぎて、オリジナルなものにならない。一貫教育なのに、どうして中3で奈良学、高1で環境学とわかる必要があるのか。それからなぜ、全教科参加しないのか。
- ・勝山(本校教官)：奈良学を始めるときは、とにかく、無理をせずに、理念でなくて、参加できる教科だけでもやっていこうということになった。私も区切る必要はないと思っているが、今はどこに行くのかわからない、過渡的な段階だ。
- ・加藤(本校教官)：先の授業は私が最後に少し口を出しただけで、あとはみんな生徒がやってくれたが、最後に質問に答える形で言いたい。最初の阪本ミリアムさんの投書の件は私の責任である。中1の担任の時、学園祭の時に戦争を取り上げて、太平洋戦争についてパール・ハーバーについてどう思いますかというのを私が英語で書いて、外人さんに聞いて来いと持たせた。あの投書呼んでショックを受けた。それで、日本の子供は外人さん、外人さんと言って騒ぐことがあるが、やっぱり相手が日本人だったらどうするのか、というのが原点だと思う。

それから、奈良学の本質に迫るのは難しい。私自身、奈良学をやるまで、志賀直哉邸に行ったことがなかった。行ってみるといろんなことがわかる。志賀というのは住居にこんな手間をかけたのかとか、こんなに子供のことを考える男だったのか。私の中で統一できていないところがあって、生徒にもどうやって統一してやったらいいのかわからない。さらに、金の問題があると思う。

子供の声だが、確かに、中1、中2と中3の年齢の問題があるが、それは皆の前でどれだけ経験させるかだと思う。今日の授業でもぶっつけ本番で当てても堂々としていてびっくりした。英語は自分を押し出すことが大切だと思う。

#### — 当日参会者へのアンケート「分科会に関する内容についての意見より —

- ・奈良で生まれ育った子に深く奈良を知り、郷土を愛して行ってほしいと小学生時代より奈良の伝統工芸や社寺、わらべ歌、木簡等子どもとともに楽しんで調べてきた。中3で英会話も取り入れて集大成されればと願う。(附小保護者)
- ・今の所模索段階のように思えるが、一つ一つは生徒にとってよい経験で、総合的によい方向へ向くことを希望する。(中1保護者)
- ・一年間子供達が取り組んで来ている奈良学の様子を見せてもらい素晴らしいと感じただけに、先生方、生徒達の苦勞を感じた。教科学習との組み入れに子供達にとっても負担を感じる時もあったのではないかと。(中3保護者)
- ・奈良一般のことを知ることはとても良いことだと思う。自分の住む地域への関心が高まることにもなり、自分を見つめることにもつながる。国際社会に生きることになるだろう子供達の生き方の一つだと嬉しく思った。あとは、知った内容をもとに、自分の考えをいかに相手に知らせるか、論理的に表現できるかが、また相手の意見を聞けるかといった訓練が日本人には必要なことだと思う。(中3保護者)
- ・大変今日的課題だと思う。が、公立中学の者には初めての提案で、もっと資料検討して協議したいことが多くあった。(中学教諭)

- ・奈良に住んでいながら奈良のことを勉強する機会がないまま中高時代を過ごした私にとって、この生徒がとても羨ましく思った。(中学教諭)
- ・総合学習としての、教師間の協力体制(年間指導体制、打ち合せ)生徒達の自主研究的側面、発表・表現活動、環境学との関わり、高校でのフィールドワークとのかかわりなどがもう少し聞きたかった。(中高教諭)

## 5. < 環境学 > について

### 1. 環境問題の本質と「環境教育」の課題

吉 田 裕

最近の新聞には環境問題に関するたくさん記事が載るようになった。環境の危機を訴えるものから、環境問題に取りくんでいる市民運動や企業の記事、さらに企業の広告にも“環境”“地球”“人と自然”という文字が目につくようになった。教育や自治体の活動にもゴミ問題や環境に対する関心が払われ、「環境」・「エコロジー」がかってないほど注目されている。

それらの騒がしさは、工業社会における大量生産と大量消費という人間の“饗宴”の後始末のようでもあるし、さらに豊かな生活を演出するために反省のジェスチャーをしているようでもある。政府や企業は本気になってやっているのだろうか。これら環境問題は、やがて、地球の上の一過性の現象、一つの事件として人々に忘れられ、新聞から環境という文字がいつの間にか消えているのだろうか。環境教育もいずれ流行おくれになり、文部省も知らぬふりをするようになるのだろうか。豊かさを追求して止まない社会を見ていると、この“環境ブーム”が怪しくさえ見えてくる。そんな中で、本校で始めた「環境教育」のあり方と現在の環境問題の本質とを考えてみたい。

戦後、水俣病・四日市喘息等が公害問題として、初めて取り上げられた。それらの公害は、重化学工業化が進む中で、企業倫理の欠如や行政の経済優先政策の結果として現れたものであった。企業はみずからの廃棄物をちゃんと処理をし、行政がそれを厳密に監視すれば、公害はやがて改善されるだろうと考えられた。つまり、「汚染者負担の原則」の確立と環境行政によって公害問題の解決をはかろうとした。一方、それらの犠牲は、工業が発展し生活が豊かになるためにはやむを得ないという見方もあり、いまから思うと、ずいぶん楽観的であった。

1972年スウェーデンのストックホルムで国連環境会議が開かれ、環境汚染は、一国の一地方の出来ごとでなく、地球全体の問題であり、人間文明の問題であることが明確にされた。「ONLY ONE EARTH」という人類に対する警告がなされた。地球をモニターし、環境を見張るUNEP(国連環境計画)という国際機関が設立された。

しかし、それから10年、地球環境はあらゆるところで汚染がひどくなった。UNEPは、森林破壊・砂漠化・種の激減・水や土の汚染など、貧困・浪費・戦争など人間のあらゆる活動によって、環境の破壊が進んでいることを世界に警告した。そしてUNEPのムスタファ・ドルバ事務局長は世界の若者一人一人に環境を守る行動を提案した。だが、1980年代、情報化が進み世界中のことが即座に見られ、技術革新により多種多様な商品が生産され、先進国の人々の生活はますます豊かで便利になっていった。われわれは、ものの豊かさと時間的速さを追い求める文明の中にひたりきった生活を享受するようになった。一方、世界の半分の人々は貧困の中で生活している。それらの国々もまた、先進国の豊かさをめざして開発を進めていると同時に、生活を支えるために自然を破壊している。この地

球に生活する54億の人々は、豊かな人々も貧しい人々も、自然を汚し、痛めつけ、その上に自らの生活を支えていることが明らかになった。

1990年代になり、世界の政治家も、企業家もやっと地球規模の汚染に対する共通認識に達したようである。地球サミットや環境のための国際会議が頻繁に開かれるようになった。しかし、われわれは、この豊かさを維持しながら自然を守る方法はもちろん、現在の物質と情報のあふれる豊かな文明を捨てる覚悟も、それに代わる生活も見つけてはいない。

現在の環境問題は放置しておいても、地球自身の持つ作用で浄化されるだろうか。それは、まだ、よくわからない。しかし、現在の環境汚染の深刻さは、次のようにまとめることができる。

- ① 環境汚染が、熱帯雨林から極地まで、地球全体に及んでいること。
- ② 人間だけでなく全ての生物の生命の維持に基本的に必要な空気・水・土が汚染されていること。
- ③ 生産活動だけでなく、日常生活の行動が、慢性的に環境を汚染していること。
- ④ 環境汚染によって失われた種や森林、病んだ身体はもとにもどらないこと。

われわれの日常生活とそれを支える生産活動が、環境汚染の根元であり、それが地球全体に及び、空気・水・土には危険な物質が混ざるようになった。このことは、われわれ人間にとって、一体何を意味するのだろうか。真剣に考えると、“ぞっと”するような恐ろしい状況にいてのではないだろうか。もし人間が滅びにいたるとすれば、その条件は揃ったように思われるし、聖書になぞらえると、神の怒りにふれる寸前ではないだろうか。

21世紀は、人間のサバイバルをかけた闘いの世紀になるのではないか。その敵は人間の欲望という、人間自身の内部にある。人間の歴史を振り返ってみると、人間は生存のための闘いにつねに勝利をおさめ、その度に、より大きな危険も同時に背負ってきた。しかし、人間が自らの欲望に打ち克ったという記録はない。人間はその欲望によって、困難に打ち克ち、文明を切り開いてきた。今度は、その欲望自身が敵である。この矛盾を、人間の理性が解きほぐすことができるだろうか。人間は、地球の支配者であり、地球の財産を食いつぶし、そして地球と一緒に滅んでいく生きものだと開き直るのはやさしい。

われわれの生活は、もう後戻りができないほど豊かになった。われわれは、毎日の生活を変更できるだろうか、生産の方法を変えることができるだろうか、自動車や飛行機を捨てるわけにはいかない。コンピュータなくして企業は成り立たない。人間の理性と英知は欲望に勝てるだろうか、人間の切り札である科学は、新たな環境汚染を起こすことなく、現在の状況を改善できる方法をみつけ出せるのだろうか。

人間は、もっともっと自己の行為の結果に悩み続けなければならないだろう。だが、多くの課題をこのまま放置することはできない状況にあることは明らかである。一人一人、まず、自分のできるころから始める以外にないようである。しかし、現代日本の社会が抱えている問題は、環境問題だけではない、あらゆるものの都市への集中化、過労死、過剰な受験競争、家庭崩壊、大量の農業散布と農村の過疎、貿易摩擦・・・などそれぞれの局面では放置できない重大問題がたくさんある。それらは、現在の企業の生産至上主義、利益追求第一主義によって生み出された大量生産、大量消費の豊かな生活の片側である。

これら状況を前にして、教育の中でできること、しなければならないことを、〈環境学〉でのこの1年間の取り組みを踏まえて整理してみると、次のようになる。

- ① 汚染の現状－地球環境の汚染がどのように進んでいるのかを知る。  
さまざまな環境汚染・破壊の現状、汚染を起こす物質
- ② 汚染とは何か－環境を汚している構造を科学的に明らかにする。

### 環境基準と測定、物質循環、工業社会の循環

- ③ 汚染と人間—環境汚染が人間の体、生活や社会にどのように影響しているか。  
公害の人体への影響、公害病、工業社会と人間の生活
- ④ 汚染はなくせるか—汚染改善のための科学的方法、汚染改善のための社会的方法をさぐる。  
リサイクルの科学的方法、リサイクルの社会的条件、リサイクルの経済的条件
- ⑤ 人間と自然—汚染を改善し、人類の未来を模索する思想とは何か。自然と人間との共存が可能か。  
環境問題は、個人、家族、企業、自治体、政府、これらの在り方に関係している。それぞれのあり方が、自然と人間自身に謙虚で、自然と人間の共存を前提にしているのか、その倫理観が根底になければ、現在の環境問題は解決していかないように思われる。環境教育は、人間の環境観、生きる価値観を変更していくささやかな試みかも知れない。環境問題の真の解決は、世界や地球を認識することではなく、人間のあらゆる局面での行動以外にないのだが……、環境教育はそれへの第1歩としたい。

## 2. 教科と環境教育

### 【社会科と環境教育】

社会科では、環境問題は地理、歴史、現代社会それぞれの分野でばらばらに扱ってきた。

- A. 世界史では、近代社会の工業化の進展と戦争による環境破壊を取り上げてきた。例えば、
  - ① 19世紀、「世界の工場」イギリスでは、ロンドンのスモッグ・テムズ川の汚れ・スラム街の悪臭など環境汚染が発生した。「霧のロンドン」とはロマンチックな町でなく公害の町であった。
  - ② 20世紀になると、戦争で新兵器が使用され、戦闘機・戦車・毒ガスによる大量破壊がおこなわれた。
  - ③ 第2次世界大戦及びその後、核兵器の開発で核による世界的規模の環境破壊が進んだ。広島・長崎の原爆投下、ビキニ環礁の核実験、チェルノブイリ原発事故などいずれも現代史の重大問題である。
- B. 日本史では、歴史の中で環境問題の位置づけ、視点、教材化は立ち遅れていると言える。
  - ・従来の歴史認識は、生産力の発展が歴史の原動力として社会を発展させ、社会変革に導くということに重点が置かれていた。生産力の発展が人間社会にどんな矛盾を作りだし、それがどのように社会を変えていったかが歴史教育の中心課題であった。それは人間中心主義的であり、自然との接点にはあまり触れてこなかったと言える。そのため、前近代社会での耕地や新田開発、農業技術の進歩は人間と自然との接点であるが、自然環境をどのように変化させ、社会にどんな影響を与えてきたのか、まだ十分に研究されていない。
  - ・近代社会になり、「足尾銅山鉱毒事件」がほとんど唯一環境問題として出てくるが、これは日本の近代工業化と環境問題という視点からよりも、「田中正造による政治的事件」として扱われることが多い。
  - ・戦後史の中では、高度経済成長による水俣病にはじまり新幹線騒音公害にいたる環境破壊は、一つ重要なテーマである。
- C. 「現代社会」では環境問題を多角的、総括的に次のような学習計画を立てて授業を行ってきた。
  - ① 人類の歴史は自然破壊の歴史だった。—狩猟・農耕・工業時代の人間の活動と環境破壊
  - ② なぜ地球が危ないのか。—地球規模の環境破壊。環境汚染の日常化
  - ③ 地球はたった一つなのだ。—人間環境会議から環境サミットへ
  - ④ カナリアはどんな歌をうたっている。—日本の公害と公害裁判



⑤ 公害はなくせるか。－政府・自治体・住民運動

環境学が設置され「現代社会」からのかなりの部分を移した。とはいえ環境学が出来たからといって、社会科で環境問題を取り扱わなくなるのではない。

- ・人間社会の発展と自然環境の環境変化
- ・生産活動と環境
- ・環境問題と政治
- ・環境と人権
- ・環境の悪化と人間社会の対応

など社会科で扱う問題はたくさんある。社会科から環境学へ、環境学から社会科へ、環境問題をより深めるために、相互に協力することはたくさんある。今後、これらの問題を社会科で整理、研究してゆきたい。

【理科と環境教育】

本校理科における環境教育の取り組みは、各科目の授業担当者それぞれが、個人のやりかたで進めてきた環境教育から、理科全体の環境教育カリキュラムの検討へと発展していった。その内容は、研究紀要第30集(1989)にまとめている。〈環境学〉では、環境問題をいくつかの教科が集まって、限られた時間の中で講義やフィールドワークを進めていくのであるから、今までの理科での取り組みをすべて取り上げるだけの時間はない。〈環境学〉で環境問題を多面的にとらえる中で、理科では、自然科学の立場から環境問題にアプローチする。すなわち、我々を取り巻く現在の自然界の状況を、データから客観的に考えさせるよう配慮する。また、フィールドワークを通し、自ら実験観察をすることにより、現状をとらえさせたい。

〈環境学〉で扱える内容には限りがある。〈環境学〉で学習する背景として、理科カリキュラムの中で関連した学習内容がでてきたときに、生徒の意識を高めるような配慮をする。すなわち、1年の「身の回りの物質」の学習では、二酸化硫黄と関連して酸性雨の問題があることを知らせる。3年の「酸とアルカリ」のところでは、pHを意識的に取り上げる。また、「生物と環境」の学習では、生態系の構造について、その基礎知識を与える。

さらに、4年での〈環境学〉が終わった後も、選択理科の各科目において、環境に関わる問題に積極的に取り組んで行きたい。具体的には、選択物理では放射能汚染の問題、選択化学では有機塩素化合物の問題、選択生物では生物濃縮・森林破壊などの問題、選択地学では大気汚染の問題などがあげられる。

【保健体育科と環境教育】

これまで保健体育科では、4年、5年の「保健」の授業で、環境問題を大気、水、土壌などの汚染と、それが我々人間に及ぼす影響を中心に据えておしすすめてきた。まず、汚染物質や、汚染発生のメカニズムなどを科学的に説明し、それが現代文明社会においてなぜ引き起こされたか、また、健康破壊やいわゆる公害病が社会的に（行政的にも）阻止できなかったのか、という面からも考察させた。同時に患者の被害や慢性的症状について講義を展開した。この部分は、〈環境学〉における「公害病は治らない～環境と健康」「空気と健康の裁き方教えます～保健編」「サイクルを見直そう～全てはめぐる→何か狂った、人体への影響」へ移した。人間を支える環境には、自然環境の他に、衣類、住居、冷暖房などの人為環境や、家族、友人、地球社会などの社会環境がある。自然環境を利用し、人為環境を広げて、人類はいま高度な文明社会に到達した。文明の進歩は平均寿命の延長をもたらしたが、反面、文明病という新たな健康問題を生み出した。「健康に生きるとはどういうことか」という視点を中心にして、人間を取り巻くさまざまな環境と健康の関係を扱っている。

### 【技術家庭科と環境教育】

技術家庭科、家庭科においても、生活を対象としているので、環境教育はたいへん重要であり、各領域において授業で広範囲にわたり取り扱っている。深く追求すれば理科、社会科、保健科等の内容へと結びついていく。教科としては、生活者の目で、家庭生活、地域の生活及び社会全体との関連を考え問題意識を持ち、生活の場で実践できるように授業を通して指導したい。そして、4年の〈環境学〉へと発展させ、深めることを願っている。なお、それらを土台にして、5年の家庭一般で発展させたい。また、興味・関心に応じて、課題研究でテーマとして設定し、グループ研究をする事も可能である。

教科では、価値観と私達の生き方・科学の発達と生活・資源問題と生活・くらしとエネルギー問題・生活の中の環境破壊・住民運動と暮らし・食品の安全性・公害と被害・ゴミ問題と私達にできることなどについて、取り扱っている。教科で主に扱う環境教育の内容については、本校研究紀要第32集にまとめた。

### 3. 環境委員会の活動について

中道 貞子

環境学は一つのテーマを多面的に捉える必要がある。しかし、それを扱うそれぞれの教科では、内容と方法が異なる。そこで、環境学を可能な限り一つの科目として統合、融合することを目指し、教科間の連絡、調整と具体的内容を構成する為の環境委員会を設置した。活動期間は平成2年4月から平成3年3月までであった。

#### 環境委員会メンバー

松本博史・中道貞子（カリキュラム委員）

吉田 裕（社会科）・出野上良子（保健体育科）・屋鋪増弘（理科）

杉峰英憲（運営指導委員・奈良女子大学助教授）

菊地るみ子（高知大学教育学部助教授、第2回委員会より参加）

#### ◆第1回 6月20日

どの様に総合して行くかの方法論と今後の進め方について検討

各教科の考え方について説明

理 科：水を中心に扱うことを1つの案として考えている。大気汚染、その他も扱いたい。

保健体育科：前段階は理科的内容を、その後で保健の立場から進めたい。

労災、ロボットなど文明社会の抱える問題も導入して行きたい。

社会科：10年ほど前からグローバルな問題を取り上げてきた。その中の1つとして、環境を問題としたい。現在では身近な問題が地球規模に関係することを認識させるのが社会科の大きなテーマ、最後をどう生きるかという生き方に関わってくる。

杉峰先生：基本的には人間と文化の矛盾、自然と人間の共存関係をどう考えるか。対象を何に選ぶか、どのようにみるか。

自然をどう破壊していったかの共通の認識を通して、どんな風に対応するか、対応の仕方が見えて来るのではないか。

次回は総合の仕方のモデルを「水」で考えてみる。

◆第2回 7月4日

今回から参加して下さることになった菊池先生（高知大学）から環境教育の概要について、資料をもとに説明を受ける。

松本：本校の取り組みの経過報告。いままで各教科で独自にやっていたが、各教科で扱えない部分ができたので、全体に関わる環境教育を考えようとしている。

吉田：環境問題を十分に扱う時間がない。入試の問題の部分が変わらないと何もできない。

「水」について何ができるかを各教科より報告する。

環境学の2単位、50時間をどう配分するか。

「水・空気・緑」を中心に考える。

どんな教材から、どのような展開の仕方をするか。

「水」をどんな流れで教えるか。

子どもの常識をひっくり返すような状態で組み立てられないか。

教師の論理でなく、子どもに毎時間、自分に関わりがあると認識させるにはどのような展開方法があるだろうか？

構成の仕方 全体から部分へ

単純なものから複雑なものへ

歴史の時間軸に沿って

原理的なものから応用へ

環境破壊は地球的規模まで行くべき。

水と空気をグローバルに結びつけていく。

遊びが必要。

最初は冒険的 → 生徒の問題としては、鍛えられた興味が必要  
訓練の領域の類別が大事

◆第3回 9月1日

「水・空気・緑」をテーマに据える。

各教科より、資料の説明

杉峰先生：各教科の内容は告発である。ネガティブ。もう少し〈よい〉ことを対象にできないか。

環境はこんないいところがあるといった面はないか。

文句ばかりでは、自分が何をすればいいかのエネルギーにならない。

こんな風にしたら、こんな風にきれいになったといった実験も必要。

環境のいいところを積極的に守るといった面が必要。

事実の積み重ねだけでは思想にならない。

菊池先生：「蛍光増白剤に着目した被服領域の教育の試み」の紹介

その他の意見：環境破壊の側面、歴史の側面、環境の積極的側面、環境をどんな場面で考えているのか。

自分がいま何をやっているのか、をおさえておかなくてはいけない。

自然の中に生きているという実感を確かめられないか。

人間と自然の共存は工業社会になって危なくなった。

なぜ汚してはいけないのかにきちんと答えなければならない。

◆第4回 10月18日

\*50時間をどう構築するかについて、各自案を提出

いろいろな意見：

フィールドワークの時期が問題

クラス毎の講義の間にフィールドワークを入れるのがよいのでは？

講義は筋を通したい。

担当教科に関係なく、誰がやってもできる内容になっていくことが望ましい。

教科内容との関わりも検討しておく。

柱になるものは？いつも一つの事に引っかけておくような事はできないか。

座標軸になるようなものを設定した方がよいのでは？

\*フィールドワークの具体例

川の調査、鹿への影響、低周波公害、臭い（膠、でんぶん工場）ゴルフ場、  
農薬、環境課を訪ねる、ゴミ、騒音、など学校の周りの環境、空かんの状況、  
家庭での取り組み

\*くらしの点検表にまず取り組むのがよいのではないか。

車の利用、ごみの量等も加えるとよい；トータルでとらえていく。

オリエンテーションの前！週間くらい点検表をつけてみるのは？

地球的規模でどう関係しているかの質問項目を設ける。

\*どうやったら教材として構造化できるか。

自然と人間が基本。

ばらばらに取り上げる事のないよう。

人間と自然をいろんな面からみる。

環境汚染対策と我々にできること。

自然と人間の純粋なメカニズムがどんなところで狂っているのか。

いろんな面からのアプローチ。

各科目の構造化—何か具体的な対象を据えての構造化。

\*何が基本観念か：「自然と人間」

\*その他の意見：

医学・科学・歴史文化的アプローチが必要。

知性への信頼 悪い事実をたくさん集めても、どうするかがでてこない。

倫理的側面がある。いずれ滅ぶけれどがんばろうということはいえる。

子供の人生観をむりやり引き出すのも一つのやり方。

生徒を2-3グループに分けて討論させては。

◆第5回 11月7日

\*環境教育構造化 杉峰先生よりプリントにて説明

\*50時間をどう構築するかを検討 概ね全員のコンセンサスが得られる。

・川の見学会下見報告 アンモニア、リン、DO など

・考えておかなければいけないのは、9時間の進め方が、クラスにより違うこと

・教材のバック化、具体的な対象がある、生徒に考えさせる、討論させる部分がある。教師が話をする、実験をする。あまり他教科の知識を必要としない自己充足的なもの。

・最初に生徒にアンケートをとっておき、最後に意識がどう変化するかを調べるとよい。

◆第6回 12月15日

\*前回の確認 (50時間を25回に分けて考える。1~20の数字は実施順序)

- 1 : オリエンテーション
  - 2~5 : 2グループに分けて (2組×2回)
    - 川の見学会 1 ; まとめ 1
    - その他 1 OR 2
  - 6~11 : クラス単位の講義 (3組×6回)
  - 18~20 : クラス単位の講義 (3組×3回)
- 残りの時間は、FW (フィールドワーク) 及びその発表会

\*講義内容の検討

・水について、中道案を説明

意見：飲み水の基準も必要。世界の飲料水を調べる (FWで扱う?)。

ダムの話も必要。治水の話、分水嶺 など。

水を大切にしようという考えは?

何故、水を少なく使わなければならないか。何故、水を大事にしないといけないのか。

1時間目にきれいな水・汚い水をやる動機は?

川の見学会とどう結びつけるか。

きれいさ=蒸留水ではない、人間の視点 飲める水。

・大気汚染について、屋鋪案を説明

酸性雨; オゾン層の破壊; 地球温暖化

意見：水からどの様につながっていくか。

温暖化の原因：化石燃料の消費量増加; 緑色植物の減少 (?)

この3つが、今、騒がれている。

CO<sub>2</sub>の削減は本当にできるのか。

・保健の立場から、出野上案を説明

大気と健康; 緑と健康; 水と健康;

意見：今、いちばん問題は、食糧・水?

医学の発達、生化学あたりが進展していくことを取り上げる必要は?

むしろ、人間にとって健康とは? の話が必要ではないか。

いつも、吸ったり・飲んだり・食べたりしたものがどんな影響があるかの話をしてほしい。

1時間くらいは、ディスカッションを取り入れてほしい。

現在の医学の抱えている問題?

保健でしか扱えないものを扱ってほしい。

平均寿命が延びたのはいいことなのか?

体が壊れていく病気が生じている。

当面は、自然環境と健康の問題を扱う。

個別科学について批判的にみていく視点がほしい。

本当の健康とは? をふまえないといけない。

それを環境教育の前に言わないといけないのか?

環境問題には色々ある。

共通に取り上げるために、個別の特色がなくなるとはいけない。

「環境学」というのはない、環境は諸科学で迫るしかない。

保健は、保健の方法でアプローチしないといけない。

・社会の立場から、吉田案を説明 4つの視点から

意見：節約はうまくいったためしがない。

動物の世界との違い 対比があれば。動物には、ストップの構造がある。

人間の知性のいいところであり、悪いところである。

政府側の学者と被害者側の学者の相克、独りだけでは公害裁判を聞えない。

水俣はまだ終わっていない。

1つだけを取り上げて詳しくやった方がよいのでは？

経済構造の話は？

何故、経済的構造でなく、経済構造になっているのか？

経済そのものだから。

話が一般的 水・空気・緑との関連は？

<奈良と水>の歴史などは？

トータルにとらえないといけないと思う。

総合学習としての環境とは？

ミクロな問題とグローバルな問題とのつながりのつけ方は？

#### \*今後の検討課題

今回の資料をもとに、50時間の構成の各自案をもってくる。

美的センスがはいらないか。

自然が如何にきれいな秩序の循環をもっているかを認識することは必要。

生まれたところがいちばん自然という感覚がある。

自分らがやったというものがなしんどいと思う。

FWの具体案を出してくる。

#### ◆第7回 1月17日

##### \*環境教育の各時間の内容について検討

##### 1. オリエンテーション：～今、地球が危ない～

生徒の現状：意識調査（→最後にどうなるか？）

環境家計簿的なものにチェックさせ、自分の現状を点数化させてはどうか。

今、どんな環境問題があるかを認識させる。

講義・発表・討論などの様な形式にするかを考えてくる。

川の見学会について：見学会の目的、生命環境としての水を感じさせたい。

##### 2. 川の見学会（バス利用：奈良交通バス2台）

###### ・見学の観点

1つの水系の現状を知る

川の様子 水量、ゴミ、水質検査、水生生物

周りの環境 村落、畠、田、雑木林、人工林、その他

他の川の流入、川を含む景観

###### ・実施する川：岩井川・鹿野園の上流または佐保川・鶯の滝

##### 3. 川の見学会のまとめ

データの処理と実験の追加

班でレポートの作成

4～5. VTR 汚染の現状を、グローバルな立場でとらえたもの → 感想文  
6～11; 18～20. クラス単位の講義 (前回資料参照)

12～17. フィールドワーク

\*フィールドワークテーマの例

- ・川の水質検査 いろいろな川の現状 (科学的アプローチ)
- ” (地理的アプローチ)
- ・家庭で使う水 (用途と量)
- ・奈良の水
  - 水道水の作られるまで
  - 下水の行方 (科学的アプローチ、地理的アプローチ)
  - 過去の水と現在の水 歴史的アプローチ
- ・産業・農業と水 ・世界の飲料水 ?
- ・大気汚染の現状 車の排気ガス、フロンガス使用の現状調査
- ・大気汚染と健康被害の調査
- ・雨の pH 調査 (雨が降らないとできないという問題あり)
- ・わりばしは本当に森林破壊か? ・ゴルフ場と農薬 農薬と健康
- ・ゴミの問題 学校や家庭で出るゴミの量と内容、ゴミの行方
- ・リサイクルの問題
- ・エネルギーの問題 電気の使用量と用途、水力発電: ダム、原子力発電の問題

◆第8回 2月23日

\*オリエンテーションの内容について

- ・VTR (15分程度)
  - 地球の美しさの認識と、環境に対する危機感を持たせる。
- ・私にとっての環境 環境学担当者1人 5分位問題提起
  - ストーリーをもたせ、司会者←→スピーカーとの対話の形で進める。
  - 司会 松本先生 → 枠組みを考えてもらう。
  - 杉峯先生にも参加してもらう。
- ・最初、お説教では面白くない。
- ・アンケートは、先に実施する (3月中)。
  - 意識の変化を見られるようなものにしておく。
- ・2時間目は、これからの内容について、説明する。
  - 川の説明も含む 2つのグループに分けて説明。

\*川の調査について

概要はについて、別紙資料説明  
1つの川について調べる。

\*アンケートについて、各自、資料説明

意見: 結果を分かりやすいものにする。「桐」に入れやすい形にする。  
生活の実態、環境についての意識、バックボーンになる意識  
アンケートの原案作成  
杉峯先生と菊地先生の方で、素案を作成してもらう。

\*今後の日程について

- ・下見 3月22日 9:00 学校集合 (ハイキングスタイル)  
準備 パックテスト 藤田、DOメーター他 中道、  
25000分の1 地図コピー 吉田
- ・バスの交渉 松本
- ・アンケートの項目の決定  
28日は大学 (杉峯・松本・屋鋪・中道) で、26日の案をもとに作成  
→ コピーを各先生にみてもらって修正
- ・オリエンテーションのVTR検討  
吉田先生・屋鋪先生を中心にして作成  
美しい自然 壊れた自然
- ・講義内容の検討 宿題

◆第9回 3月30日

\*講義内容について〈理科分野講義内容〉

1. 河川の水

(1) きれいな水と汚い水

① 川の生物による水質判定

②人間にとってきれいな水とは? 尺度: 透明度、臭い、色、PH、  
BOD、COD、アンモニア、水の温度等

(2) 河川水の現状と汚染の原因

(3) 日本の川、奈良の川

2. 奈良の上水と下水

(1) 私達の飲み水はどの様にしてつくられるか

水源 → 浄水場 → 配水 → 家庭

(2) 生活に使っている水の排水 トイレの水、洗浄水

(3) 下水処理 下水処理の仕組み

3. 水の循環と酸性雨

(1) 自然界における水の循環と自然の浄化作用; 森、土の保水性

(2) 酸性雨 原因: 大気汚染も関連、影響: 森林破壊にも関連

#### 4. 本校における環境教育の構造化

##### 【1】環境教育の目的

充実した自然観・人間観を基盤に、環境への主体的価値観を審美的に形成し、環境破壊と人間・自然諸科学の環境に対する関係を認識するとともに、体験的・実験的な活動を通して、環境諸事象への科学的知識と態度を確立し、環境問題への知的・情意的・実践的取り組みのできる人間を育成する。

##### 【2】環境教育の基本的観念

自然と人間の観念 自然観・地球観・生命観・人間観・生活観・共存観・幸福観・倫理観・  
価値観・審美観・芸術観

環境破壊・汚染の観念 環境の破壊観・相互依存関係の破綻観

環境研究の方法の観念 環境問題の研究と諸学問・諸教科の方法との総合的・構造的関連観

実践的・行動的センス 関心と感受性・環境管理への参加



【3】基本的観念へのアプローチならびに領域

A 認知的領域（教科別）

- ① 文明的・地理的・歴史的アプローチ 社会科
- ② 科学的・生態学的アプローチ 理科
- ③ 医学的・保健学的アプローチ 保健体育科
- ④ 生活環境学的・総合的アプローチ 家庭科
- ⑤ 審美的アプローチ 芸術科

B 情意的領域（全教科）

- ① 興味・関心・感受性 環境保全・破壊問題への敏感性
- ② 態度・意欲 環境問題を、知的・実験的に探究する意欲
- ③ 価値の意識化・個性化 内的・外的に一貫した体系へと組織化する努力
- ④ 美意識 自然の偉大さ、美しさの感得

C 実践的領域（全教科）

- ① 環境の評価能力                      ② 問題解決の技能
- ③ 環境の保護と改善に積極的に参加する行動能力
- ④ 環境作りへの行動能力

【4】アプローチの内容（認知的領域）

A 文明的・地理的・歴史的アプローチ

自然観・人間観・価値観と現代文化、風土・生活と自然開発、人口・資源・エネルギーと環境問題、環境汚染の経済的・文明的構造、環境汚染と企業・行政・住民運動、環境汚染の責任と裁判、環境汚染と世界的行動

B 科学的・生態学的アプローチ

太陽系空間と地球の存在、生物の進化と絶滅、科学技術の発達と生態系の破壊、物質の循環、水質汚染、大気汚染、放射能汚染、新しいエネルギー、人工的環境との調和、科学技術の発達と展望、

C 医学的・保健学的アプローチ

人間の誕生、文明と健康、水質汚染と健康被害、大気汚染と健康被害、放射能汚染と健康

D 生活環境学的・総合的アプローチ

生活・生産様式の革命、生活の中の環境問題、住環境の構成、環境汚染とわれわれにできること、一人一人の責任

E 審美的アプローチ

海・山・民族・人類・生命の調和、未開と開発の調和、生命の存在に対する畏敬、生活環境の芸術的構成、

【5】環境教育の方法

- A 講義 全体に関わるオリエンテーション、各項目に関する講義
- B 視聴覚教材の利用 VTRの利用、OHPの利用
- C 観察・実験 水質調査、車の排気ガス成分の検出など
- D 見学 川の見学
- E フィールドワーク ゴミ問題、水問題など
- F 発表・討議 フィールドワークのまとめの発表、意見交換
- G 講演 外部講師による講演

### 5. 平成3年度<環境学>年間指導計画

平成3年度の指導計画については、研究紀要第33集別冊に述べたとおりであるが、以後、若干の変更もあるので、1年間のカリキュラム表を次にあげておきたい。

月日	内 容			備 考
4/16	環境学オリエンテーション ～ 地球が危ない ～ い 班 　　　　　　　　　　　　　　　 ろ 班			大教室 全員
4/23	川の見学会 VTR「フイッドロム」視聴			い班は校外へ
4/30	川の見学のまとめ(7限のみ) 豊かさは破壊、でも…… ～アンケート結果から～			(バス)
5/7	VTR「フイッドロム」視聴 川の見学会			ろ班は大教室
5/14	豊かさは破壊、でも…… 川の見学のまとめ ～アンケート結果から～			ろ班は校外へ (バス)
6/4	A 組 河川の水 ～きれいな川ってどんな川?～	B 組 河川の水 ～きれいな川ってどんな川?～	C 組 空気と健康の裁き方教授～西淀川公害裁判～	い班は大教室
6/11	飲み水のゆくえ ～奈良の上水と下水～	空気と健康の裁き方教授～西淀川公害裁判～	河川の水 ～きれいな川ってどんな川?～	4/30, 5/14 6限目は5限目と同じ授業
6/18	酸性の雨が降る ～酸性雨と大気汚染～	公害病は治らない ～環境と健康～	ゴミはいりませんか? ～現代社会とゴミ～	
6/25	公害病は治らない ～環境と健康～	ゴミはいりませんか? ～現代社会とゴミ～	飲み水のゆくえ ～奈良の上水と下水～	5/28 体育大会
7/2	空気と健康の裁き方教授～西淀川公害裁判～	飲み水のゆくえ ～奈良の上水と下水～	酸性の雨が降る ～酸性雨と大気汚染～	
9/10	ゴミはいりませんか? ～現代社会とゴミ～	酸性の雨が降る ～酸性雨と大気汚染～	公害病は治らない ～環境と健康～	
9/17	フィールドワークオリエンテーション			大教室
10/1	班毎のフィールドワーク			11/7 全レク
10/8	"			雨天のとき延期
10/15	"			
10/29	"			11/22
11/12	"			公開研究会
11/19	フィールドワーク中間発表会			フィールドワーク
11/26	班毎のフィールドワーク			中間発表会
12/3	A 組 今、サイカを見直そう ・全てはめぐっている	B 組 今、サイカを見直そう ・全てはめぐっている	C 組 今、サイカを見直そう ・全てはめぐっている	
12/17	・狂いだしたサイクル	・狂いだしたサイクル	・狂いだしたサイクル	
1/14	・目指そう サイカ社会	・目指そう サイカ社会	・目指そう サイカ社会	
1/21	フィールドワーク発表会 討議			大教室
1/28	フィールドワーク発表会 討議			
2/4	講演 阪南病院 森 久美子氏(本校生徒保護者)			
2/25	フィールドワーク発表会 討議 発表会			

オリエンテーションでは、担当者各自の考えをシンポジウム形式で述べた後、美しい地球環境と汚染された環境のビデオを対比してみせた。また、川の見学会について説明した。

川の見学会は、学校の近くを流れる岩井川の上流から下流への観察を通して、水が汚れていく現状を生徒自身の目で確かめさせ、汚染の原因について考えさせるきっかけとした。

前半の講義においては、「水・空気・緑」を中心テーマに、3教科それぞれの立場から、現代社会のもつ環境問題について展開した。また、後半の講義では、「いま、サイクルを見直そう」をテーマに、自然と社会のサイクルを3教科それぞれの側面から考え、それらを融合する教材を作ろうと努力を重ねた。毎週1回、数時間にわたる学習会や討論のおかげで、総合的・多面的にとらえたカリキュラムを作り上げることができた。この段階で、同じ事柄を社会科・理科・保健体育科それぞれが今までどの様な取り上げ方をしてきたかがわかって面白かった。

総合化により、時間的なゆとりが生まれる面もあった。例えば、「保健」の授業では、「自然環境の汚染による健康被害とその防止」を取り上げるのに約10時間を必要としたが、〈環境学〉の中では、半分の時間で指導可能となった。

2学期になると、「ゴミの問題」「水の問題」「エネルギーの問題」「環境と健康」など、いくつかの大テーマを示して、生徒各人の関心あるテーマを調べ、その結果をもとに班わけをした。班毎に具体的なテーマを決め、9月から11月にかけてフィールドワークを実施した。11月22日に行われた本校の公開研究会では、フィールドワークの中間発表会を公開した。フィールドワークの一つの班は、5～8人で構成し、17班ができた。授業担当者4名の各人が、4～5班を分担し、中心となって指導する体制をとった。その内容を原稿用紙50枚以上のレポートにまとめさせた。各班のフィールドワークの概要は、次ページの表の通りである。

3学期の授業は、フィールドワークの発表会が中心となった。フィールドワークの活動を通し、自分の目で実際の問題に触れ、与えられた情報を正しく読み取り、考える能力を養うと共に、その内容や自分の考えを他人に正しく伝え、表現する能力も養うことを目指した。また、保護者で、環境問題に造詣が深く、ベトナムのダイオキシン被害の現状などについても自分の目で見てきた方に、講演を依頼した。

こうした学習の中で、①生徒一人一人が、自分の考えを打ち出すための判断材料を、できるだけ正確に伝える。②今後、環境問題に関心を持ち続け、何が正しいのかを見きわめ、自分の意見をはっきりと主張できる生徒を育てる。ことに留意した。

最終的なまとめは、次号に譲るが、実施しての問題点や今後の課題としては、次のようなことがあげられる。

#### \*カリキュラム上の問題点

6、7時間目に入っていることで、生徒の疲労度が大きく、クラブ活動や生徒会活動に忙しい4年生にとって放課後も拘束されることがあるので、「余分なことをやらされている」という不満がある。また、従来の教科と違った本校独自の教科であり、細かい成績がつかない、あるいは、受験に直接関係がないということから、真剣に学習に臨むという態度に欠ける者もいる。

#### \*授業を実施する上での問題点

- ① 新しい観測、測定データの入手が困難である。他方、情報が氾濫する中で、どれが正しい情報かを判断することが難しい。場合によっては、いろいろな立場からの情報を与える必要がある。
- ② 実験の開発は、今までの積み重ねがないだけに、多くの時間を費やし大変である。
- ③ 啓蒙書は多く出版されているが、基礎的な専門書は少なく古い。

各班のフィールドワーク内容概要

I-A ゴミのリサイクル	ゴミのリサイクルの方法とその問題点について、リサイクルショップや県の衛生課を訪ねてその現状と問題点について調査した。
I-B 学校のゴミ	学校のゴミ問題について、本校生徒指導部の先生や用務員の方、また他校の先生に聞き取り調査を実施した。さらに、本校全生徒への意識調査も行い、結果をまとめた。
II-A 飲料水を調べる	奈良の飲料水について、資料や浄水場を訪ねた結果を中心にまとめた。また、京都・大阪・奈良の水道水についても比較した。
III-A 電池	電池は資源、エネルギーの浪費という点、使用済電池の環境汚染という点で問題を含んでいる。一般消費者および販売店ではこうした点にどの程度の意識を持っているか、また、行政の対応について調査した。
III-B 大気を汚す色々な物質	大気汚染の原因について資料を集めて調べた結果をまとめた。また、交通量とその場所の大気汚染について、ガス検知管を用いて調査した。
IV-A クリーンカー	クリーンカー開発の現状と問題点、今後の方向などについて、各企業の取り組みの姿勢を調査した。
IV-B 原子力発電	チェルノブイリ事故が起きた当時から今までのようすを見直し、もし奈良にも同じような事が起きたらということを考え、より具体的な問題としてとらえた。
IV-C 原子力発電	原子力発電所に関する構造と安全性についてまとめた。
IV-D 原子力発電	原発事故について、関西電力を訪ねてその安全性について聞いた話とチェルノブイリ事故について調べたことをまとめた。
IV-E 太陽エネルギー発電	太陽エネルギー発電が実用化できない背景を探った。実際にソーラーシステムを取り入れた人や太陽電池生産をめざす企業の人から現在の問題点を聞き出した。
V-A ゴルフ場の農業問題	ゴルフ場問題について、資料で調べた。また、ゴルフ場を訪問して聞いたことや、キャディさん・ゴルフ場利用者へのアンケート結果についてもまとめた。
V-B 奈良公園のゴミ	奈良公園のゴミの処理方法について、公園事務所、春日大社などを訪ねて調査した。
VI-A 食品添加物	食品添加物の種類、効能、毒性などについて書物で調べた。無添加食品を扱う生活協同組合を利用する人達の添加物に対する関心の度合をアンケート調査した。
VI-B 食品添加物	食品添加物の種類、効能、安全性などについて書物で調べた。主婦の添加物に対する意識調査（アンケート）をした。スーパーで実際に売れる商品から添加物への関心度を調べた。
VI-C 酸性雨	環境汚染が及ぼす被害の中で、「酸性雨」とその原因となる「大気汚染」について調べた。「酸性雨」では、実際に8つの場所で雨を採集し、pHを計るなどの実験をして、その結果をまとめた。
VI-D 農業と健康	農業は人間にどのような影響を及ぼすのか、本当に危険なのか、それとも安全なのかについて、農業試験所、農協、県庁などで集めた資料をもとに考えたことをまとめた。
VII-A 農薬	農薬の及ぼす悪い影響、よい影響を、現在の人口増加問題などに結びつけて考えた。一方、書物や製薬会社の人の意見、消費者の意見も取り入れ、農薬の是非を問う。

\* <環境学> の内容・方法の充実

今年度は、「水・空気・緑」を中心において、最近クローズアップされているゴミ問題なども取り上げたカリキュラムを編成した。しかし、その全てが十分な形で取り上げられているわけではない。方法は、講義、フィールドワークを中心にして行ったが、その是非や時間配分についても検討していく必要がある。1年間のカリキュラムを実施し終えた段階で、生じた問題点を再検討し、内容・方法について改善を加えたい。

\* 評価方法の研究

<環境学> は、他教科と違ったさまざまなアプローチの仕方を含んでいる。それぞれにふさわしい評価方法を検討し、また、全体としての評価についてもさらに、検討していく必要がある。

\* <環境学> と他教科及び特別教育活動との関連

環境教育は、<環境学> で完結というわけではない。1～6年生にわたるカリキュラムの中の、他の領域との関わりについても十分検討し、連携をはかっていく必要がある。また、今年度<環境学> に参加した教科以外の教科（とくに、技術家庭科）の視点からも<環境学> を見直す必要がある。また、行事や特別教育活動との関わりなど、学校生活全体を環境教育の立場から見直していくことも必要である。

## 6. 環境チェックアンケートについて

<環境学> を通し、生徒達の意識がどのように変容するかを調べるため、授業を始める前の3年生3学期に、環境チェックアンケートを実施した。その結果は次のようであった。

環境問題チェック・アンケート 集計結果 (数字は回答人数)

	大変よく	よく	普通	殆どない	全くない
1. あなたの食生活について答えて下さい。					
①インスタント食品、ファースト・フードや缶飲料を利用する。	8	24	56	20	5
②ドリンク剤やビタミン剤を利用する。	0	7	10	41	51
③食品添加物の少ない食品を選んでいる。	9	21	60	14	4
④塩分、糖分、脂肪分の取りすぎに気をつけている。	11	21	48	19	9
⑤伝統的な主食・主菜（蛋白質）・副菜（野菜）のそろった食事をしている。	21	31	48	7	1
⑥食べ物を大切にしている。	21	40	44	3	0
⑦食事の支度や食器洗いをてつだう。	16	27	28	25	12
2. あなたの衣生活について答えて下さい。					
①一度買った衣服は、使えなくなるまで着る。	11	34	48	12	3
②いらなくなった衣服は、リサイクルに出す。	0	6	19	35	44
③服装は、流行に遅れないように気をつけている。	7	15	70	11	4
3. あなたの住生活などについて答えて下さい。					
①節水や節電に努めている。	15	16	49	23	3
②新聞紙や牛乳パックなどを回収に出している。	27	22	26	18	12
③自治体で決められたゴミの出し方をきちんと守っている。	64	32	10	0	0
④近所迷惑になるような音を出さないように気をつけている。	22	30	40	7	0
⑤平均してどれくらい髪を洗うか。	1日2回以上	1日1回	2日に1回	3日に1回	4日に1回以下
	0	5	35	63	0

4. この3日間に、あなたが使った電気機器（電池で動くものを含む）はどれですか。  
 選択数 20 : 1    16 : 2    15 : 1    14 : 4    13 : 6    12 : 7    11 : 10    10 : 15  
           9 : 12    8 : 19    7 : 18    6 : 5    5 : 3    4 : 4    2 : 2
5. 現在、周辺の野山がゴルフ場やレジャー・ランドに変わっていくことについて、どう思いますか。  
 ア. [2] よいことである。  
 イ. [12] やむを得ないことである。  
 ウ. [89] よくないことである。  
 エ. [4] なんとも思わない。
6. 現在、住宅開発によって、山林や田畑が減少しています。このことについてどう思いますか。  
 ア. [0] よいことである。  
 イ. [37] やむを得ないことである。  
 ウ. [68] よくないことである。  
 エ. [1] なんとも思わない。
7. 大気汚染や河川の汚れについてどう思いますか。  
 ア. [1] 豊かな生活のためには、大気や河川が汚れてもしかたがない。  
 イ. [0] 一部の地域に限られた現象であるので自分には関係がない。  
 ウ. [59] 人体や生物に悪影響があるので、汚染をくい止めるべきである。  
 エ. [69] きれいになるようにみんなで努力すべきである。  
 オ. [1] なんとも思わない。
8. 日頃のあなたの考えに近いものに、すべて○をつけてください。  
 ア. [11] いつも自分のことだけを考えて生きている。  
 イ. [10] 自分の趣味、友達、家族、勉強のこと以外は興味がない。  
 ウ. [51] 地球や社会のことを考えなくてはいけないと思っているがほとんど考えない。  
 エ. [67] できるだけ社会や世界、地球のことに関心を持ちいろんなことを知りたい。  
 オ. [54] いろいろなことを知るだけでなく、行動したい。  
 カ. [82] 他人には思いやりを持つとうと思っている。  
 キ. [23] ほしいものは何でも手にいれるように努力している。  
 ク. [25] 質素節約を心がけている。  
 ケ. [60] ものを大切にしている。  
 コ. [70] 心を強くして、困難に負けないようにしたい。  
 サ. [53] 体を鍛えて、薬にたよらないようにしたい。  
 シ. [72] 自分を満足させるのは、心の豊かさだと思う  
 ス. [19] 自分を満足させるのは、ものの豊かさだと思う。  
 セ. [95] 勉強だけでなく、遊び、運動、趣味、読書などいろいろなことをしてみたい。  
 ソ. [59] 今の日本の豊かさはどこか変だと思う。
9. 次にあげたもののうち、よく知っている（内容を説明できる）ものはどれですか。  
 ア. [47] 大阪空港騒音公害訴訟    イ. [15] 名古屋新幹線騒音公害訴訟  
 ウ. [2] 土呂久ヒ素公害訴訟    エ. [0] 安中公害訴訟    オ. [0] スモン訴訟  
 カ. [84] 四日市喘息    キ. [90] イタイイタイ病    ク. [91] 水俣病  
 ケ. [16] ダイオキシシン    コ. [8] トリハロメタン    サ. [99] フロン  
 シ. [98] 赤潮    ス. [17] 窒素酸化物    セ. [2] バード・サンクチュアリ

- ソ. [11] グリーンピース    タ. [2] ナショナル・トラスト運動    チ. [16] エコマーク  
ツ. [3] 圏央道(首都圏中央連絡道路)    テ. [73] 生物濃縮    ト. [1] 生物指標  
ナ. [0] 環境アセスメント    ニ. [9] 人間環境宣言    ヌ. [8] 国連環境計画  
ネ. [4] 汚染者負担の原則(P. P. P)    ノ. [13] 空カン条例  
ハ. [48] ワシントン条約    ヒ. [0] モントリオール議定書
10. 地球の温暖化現象の主な原因は何だと思えますか。  
ア. [ 0 ] 太陽の活動が活発になっているから。  
イ. [109] 大気中のCO<sub>2</sub>量が増加しているから。  
ウ. [ 34] 人間が石油や石炭を燃やして熱を発生させているから。  
エ. [ 6 ] 地球が砂漠化しているから。  
オ. [ 0 ] わからない。
11. 熱帯のジャングルについてどう思えますか  
ア. [ 3 ] 未開のジャングルを開発して、耕地・工場や住宅地にすればよい。  
イ. [ 3 ] ジャングルの木を切って、日本の杉の山のように、役に立つ木に植えかえたらよい。  
ウ. [101] 開発しないでそのままにしておくべきである。  
エ. [ 4 ] なんとも思わない。
12. 原子力発電の賛否についてどう思えますか。  
ア. [21] 原子力発電は危険だからやめるべきである。  
イ. [75] 石炭・石油資源には限りがあるから、原子力発電はやむをえない。  
ウ. [12] わからない。
13. 家で使っている洗剤(洗濯・台所用)について答えて下さい。  
ア. [47] 合成洗剤を使っている。  
イ. [ 8 ] 石鹼を使っている。  
ウ. [35] 合成洗剤と石鹼の両方を使っている。  
エ. [18] どんな洗剤を使っているか知らない。
14. あなたの考え方にあてはまるものに、すべて○をつけてください。  
ア. [13] 便利さは、人間を賢くし、新しい文化を作り出せる。  
イ. [43] 暇やゆとりのある生活で、人間の新しい能力が生まれる。  
ウ. [50] 気楽で楽しい生活を送る。  
エ. [ 8 ] 便利さはエネルギーの消費を補って余りある。  
オ. [ 3 ] 現在のエネルギーを消費してしまえば、新しいエネルギー源が見つかる。  
カ. [ 4 ] 豊かな生活は一次的に自然を破壊するが、自然はまた回復する力を持っている。  
キ. [ 6 ] 人間が自然を支配して、生活を豊かにするのは、地球の運命である。  
ク. [ 1 ] いま、人間と自然との調和がとれている。  
ケ. [19] 現代の環境の汚れは、やがて科学によって解決される。  
コ. [ 1 ] 環境が破壊されているのは自然の一部なのに、自然保護運動はおおげさに騒ぎすぎる。  
サ. [ 7 ] 地球や人類の未来は予言できないので、いまの生活がよければ、未来もよくなるだろう。  
シ. [ 6 ] 広大な自然の前では人間は無力なので、自然は破壊され尽くすはずはない。  
ス. [59] 豊かで便利な生活は、人間の能力を退化させる。  
セ. [92] 豊かで便利な生活は、地球の資源を消費し、環境を破壊してしまう。  
ソ. [60] 豊かで便利な生活は、一方に貧しい生活を生み出している。

- タ. [44] 便利さの追求は、いろいろな事故が起こり、生命の軽視につながる。
- チ. [74] 自然とともに生きることが、人間の豊かで正しい生き方である。
- ツ. [28] 現代の生活は、豊かで便利なものとはいえない。
15. 人間と環境について、あなたの考えに最も近いもの（3つ以内）に○をつけてください。
- ア. [4] 自然科学は自然と調和した理論を組み立てることができるので、環境問題を解決する方法は、自然科学の発達によってもたらされる。
- イ. [2] 芸術に触れたりして人間の美的な感覚を育てていくと、環境問題は自然と解決していく。
- ウ. [23] 経済・政治・文化など、多方面にわたって国際協力して開発をすすめると環境問題が解決する。
- エ. [55] 限りある資源を大切に自然を守り、人間と自然が調和するようにしていくと、環境問題は解決する。
- オ. [38] 科学は必ずしも人間の生活を良くするとはかぎらないので、科学が悪用されないよう、人間はしっかりした考え方を持たなければならない。
- カ. [23] 人々が、自然界の成り立ちや人間の健康についての知識をもち、文明の欠点を批判する精神を身につければ、環境問題を解決できる。
- キ. [10] 国が、企業の無責任な行為や、不当な競争を規制すれば環境問題はおさまる。
- ク. [6] 人間の物質への欲望を抑え、心を鍛えることが環境問題を解決する。
- ケ. [32] 日常生活で自然を汚したり、傷つけたりしない実践を重ねていくことが環境問題の解決につながる。
- コ. [7] 自然の法則や秩序にしたがって生活し、社会を作っていけば、自然と環境問題は解決する。
- サ. [0] 人間は新しい環境に適応するようになるので、やがて人間と自然の調和は回復するだろうから、何もしなくてもよい。
- シ. [7] 人間の智恵は、いままで、さまざまな困難を解決して高度の文明を築いてきた。人間の知性を信頼していれば、これからも環境問題は解決していく。
- ス. [11] 地球の歴史からみると、環境に適した生物が出現し滅んだ。人間も同じ運命をたどるだろう。環境を破壊した人間は滅び、新たな環境に適した生物が出現するので、環境問題の解決は人間にはできない。
- セ. [35] 人間は、自分の欲望のために自然を征服してきた。やがて、人間は自然を破壊し、自然の復讐を受け、人間も滅ぶだろう。
- ソ. [1] 現代人は、現代の豊かな生活からぬけ出せないから、環境問題の解決は未来の人々に任せられる。
- タ. [34] 環境問題は、政治に期待していても良くならないので、国民が環境を良くする運動を起さなくてはならない。

★食生活についての問に対し、インスタント食品の利用は、普通と答えたものが50%、ほとんどまたは全く利用しないものは22%となっている。しかし、「普通」ということの基準があいまいなため、アンケート作成者の考える「普通」とは違っている可能性もある。多くのものが食生活全般についてよく気をつけ、食べ物大切に、食事の後片付けなども手伝っているという意識で生活している。

★衣生活についての問に対し、一度買った衣服は使えなくなるまで着るという回答が多いが、リサイクルに出しているものは殆どいないという結果が得られた。



- ★住生活などについては、節電や節水に努め、新聞紙や牛乳パックの回収に協力し、ゴミの出し方を守り、近所迷惑になるような音を出さないといった回答が多く、日頃の生徒達の行動と考え合わせると意外であった。
- ★周辺の野山がゴルフ場やレジャー・ランドに変わっていくことについて、よくないという回答が83%であるのに対し、住宅開発によって、山林や田畑が減少していることについて、よくないという回答は64%である。
- ★大気汚染や河川の汚れについて、汚染をくい止めるべきが54%、きれいになるように努力すべきが63%となっていて半数を越えているが、少ないように思う。大気や河川が汚れてもしかたないと答えたものは1名だけである。
- ★日頃のあなたの考えに近いものにすべて○をという問に対しては、「勉強だけでなく、遊び、運動、趣味、読書などいろいろなことをしてみたい。」「他人には思いやりを持とうと思っている」「自分を満足させるのは、心の豊かさだと思う」が上位を占め、ここでも優等生的な回答が目立った。
- ★環境問題に関する知識では、「フロン」「赤潮」「イタイイタイ病」「水俣病」「四日市ゼンソク」をよく知っているのに対し、「安中公害訴訟」「スモン訴訟」「環境アセスメント」「モントリオール議定書」を知るものは0であった。基礎的な知識の学習も必要ではないだろうか。
- ★地球の温暖化現象の主な原因は殆ど全員が大気中のCO<sub>2</sub>量が増加したためということを認識している。熱帯のジャングルについては、ほとんどが開発しないでそのまましておくべきであると答えているが、原子力発電の賛否については、やめるべきという回答が19%であるのに対し、69%は、やむを得ないと答えている。家庭で使う洗剤は、合成洗剤が一番多く、次に合成洗剤と石鹼の両方がそれについている。洗剤はいろいろ問題になっている割には関心が低いようだ。
- ★あなたの考え方にあてはまるものにすべて○をという問に対しては、「豊かで便利な生活は、地球の資源を消費し、環境を破壊してしまう。」が非常に多い。また、「自然とともに生きることが、人間の豊かで正しい生き方」「豊かで便利な生活は、一方に貧しい生活を生み出している」「豊かで便利な生活は、人間の能力を退化させる。」という回答が次いで多く、豊かさに懐疑的であると同時に、「気楽で楽しい生活を送る」がそれに次ぐのも本音と建前の違いによるものなのだろうか。
- ★人間と環境について、あなたの考えに最も近いもの(3つ以内)に○をという問に対して多かった回答は、「限りある資源を大切に自然を守り、人間と自然が調和するようにしていくと、環境問題は解決する。」の他、「科学が悪用されないよう、人間はしっかりした考え方を」「政治に期待していても良くならないので、国民が環境を良くする運動を起さなくてはならない」「人間は自然を破壊し、自然の復讐を受け、人間も滅ぶだろう。」といったマイナスイメージの回答が多い。「やがて人間と自然の調和は回復するだろうから、何もしなくてもよい。」は0、「環境問題の解決は未来の人々に任される。」1名、「人間の美的な感覚を育てていくと、環境問題は自然と解決していく。」2名となっている。「自然科学の発達」「や「心を鍛えること」で環境問題が解決すると思っているものはほとんどいないことがうかがえる。

全体に言えることは、回答は非常に模範生的であり、生徒達の本音はどうなんだろうとってしまう点も多い。

なお、今回の報告では、〈環境学〉がまだ途中のため、〈環境学〉を始める前に実施した調査結果だけをまとめたが、〈環境学〉が終った段階で同じ意識調査を実施し、学習による意識の変化についても検討する予定である。

## 7. 公開研究会におけるフィールドワーク中間発表

11月22日に実施した平成3年度公開研究会は、「中学校及び高等学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発－2-2-2年制カリキュラム編成と総合教科〈環境学〉〈奈良学〉の創造」が主題であった。その中で、〈環境学〉の内容は次のようである。

〈環境学〉の授業の公開、並びに、研究協議

〈環境学〉の分科会は、中学校教諭20名、高等学校教諭25名、大学教授7名、小学校教諭1名、教育センター指導主事5名、一般参加者5名、本校PTA会員14名、本校教諭18名で行われた。参加者数もさることながら、多方面からの参加を得られ、多くの貴重な意見が集められ活発な討論がおこなわれて成果の多い会議であった。

### ① 公開授業：総合教科〈環境学〉「地球にやさしい生き方を探ろう」

－生徒のフィールドワーク中間発表－ 高校1年

課題研究指導者：出野上良子、中道貞子、藤田周子、吉田 裕、

公開授業の内容：発表テーマ (1) 原子力発電 (2) 太陽エネルギー

(3) 農薬と健康 (4) 学校のゴミ

4つのテーマについて生徒(天野)の司会で、各班がフィールドワークとして取り組んだ経過を順次発表する。各班の発表の概要は次のようなものであった。

- \*原子力発電所の仕組みについて調べたが、そのことを説明する。単純に原子力発電所を否定するのは良くないと思う。関西電力(株)にいて話を聞いたときの感想としていえば、事故が起こらないという態度は疑問だと思った。
- \*原子力発電所の事故について調べた。ソ連の原子炉と日本の原子炉の違いについても調べた。原子力発電についての正しい知識と意見を持たねばならないと思った。
- \*太陽エネルギーについて太陽電池の利用状況などについて調べた。問題点として分かったことは、発電コストがまだ高いこと、太陽発電で余った電力を商用電力として融通するには、法律面での問題があること。
- \*農薬と健康－現代の抹茶を調べると残留農薬が多いことを調べにいて知った。残留農薬の基準は安全なのか疑問に思う。農薬の相乗効果については疑問点が多すぎる。農薬を減らすには、消費者の意識の変革が必要だ。有機農業についても話を聞きに行った。農薬を全く使わないときは、虫の被害が大きい。
- \*学校のゴミについて－可燃物ゴミ、不燃ゴミ、ジュースのびん、缶の処理などについて現状を調べた。びんを持ち込んだら返すことになっているが、守られていない。学校は本当にきれいか。

### ② 〈環境学〉の取り組み経過の報告…発表者：中道貞子

- \*社会科、理科、保健体育科、家庭科などでの環境教育にかかわる部分での取り組み経過の報告
- \*環境委員会の設立とそこでの取り組み経過の報告
- \*本校における環境教育の構造化－総合教科としての〈環境学〉

### ③ 研究協議：指導助言者 鈴木善次(大阪教育大学教授)、杉峰英憲(奈良女子大学助教授)、細木邦子(環境庁企画調整局、環境教育専門官)、

－〈環境学〉担当者からの報告－

- ・出野上(保健体育担当教官)：教科の壁を取り除くのは難しいが、生徒の立場に立てば、教科の違いによる重複の無駄が取り除かれたのではないかと。教師自らが学ばなければならないと思った。環境に対する問題意識をもった生徒を育てることが大事だと思う。

- ・藤田（理科担当教官）：生徒に事実を正確に伝えるために、実験・実習を多く取り入れようとしたが、新しい実験の開発に手間がかかった。環境というのは対象が常に動いているので、2、3年前のデータはダメで、新しい情報を得る必要がある。いかにして最新の情報を得るのが問題だ。フィールドワークでは、生徒が聞きに行った先の人は好意的であったが、生徒の方が迷惑を掛けているのではないかと思った。生徒に自主学習をさせて頂いているという姿勢が必要だと思う。
- ・吉田（社会科担当教官）：現代社会は終わりに近づいているので、その準備と覚悟が必要と考えている。将来のために何をしなければならぬかを考えさせたい。日常生活が地球に関わっているという認識を生徒とともに持ちたい。環境問題は社会科だけで取り組めないが、教科の壁という問題もある。フィールドワークは下手をするとやらせになってしまう。生徒自身の力でやり遂げられるようにしたいが、教師はジーと我慢するしかない。

－研究協議の内容－

- ・日下（大阪キリスト教短期大学教授）：教科間の壁の具体的な内容を説明して貰いたい。
- ・中道（本校教官）：例えばリサイクルの問題を取り上げると、理科として物質の循環の基本的なところを押さえたいと考えるが、社会科ではゴミの問題が表面に出てくる。また、保健と、このリサイクルの問題とを噛み合わせるのが難しい。
- ・吉田（本校教官）：オゾン層の破壊に関していうと、理科で習ったことと社会科で習ったことが生徒の中でうまくつながらない。
- ・徳井（名古屋大学附属中・高等学校）：評価の方法を説明してほしい。
- ・中道（本校教官）：それぞれの担当者が評価の観点を定め、3段階の評価を考えている。〈奈良学〉とだいたい同じだ。また、これまでの講義の知識の定着度をみるため、環境の常識テストを行ったが、出来は良くなかった。
- ・西川（甲南大学名誉教授）：科目としての評価、つまり目標を立ててその目標がどの程度達成されたかを調べるのが大切である。
- ・吉田（本校教官）：学習の前後の生徒の意識の変化も重要であるが、学習したことを生徒の行動にどうつなげるかを重視したい。学習したことを行動にどう表すかが問題だ。
- ・西川（甲南大学名誉教授）：人間も環境の一部であるというような幅の広い認識が必要だ。学習したことが行動にどのように表れるかが問題で、その行動に対する反省も必要だ。
- ・日下（大阪キリスト教短期大学教授）：「地球が危ない」というテーマの設定は、高度すぎるのではないか。自分が本当にそう思っているのか。教師が本当に思っていないことは教えることは出来ない。いきなり「地球が危ない」でよいのか。テーマの設定の経緯を説明して欲しい。
- ・吉田（本校教官）：担当者の意識はばらばらである。問題意識を持たせるためのインパクトを与えようとした。「地球は本当に危ないのか」という設定でもよかった。
- ・出野上（本校教官）：現にこの地球上で様々なマイナスの面が現れている。このままではいけないと本当に思っている。地球の将来は人間の生き方、暮らし方に関わっている。
- ・鈴木（大阪教育大学教授）問題意識にはいろいろな価値観がある。ある価値観に基づいてアプローチよりも、疑問符をもっていく必要がある。結論を押しつけるのは良くない。価値観を持つ能力をつけるのが教育だ。
- ・杉峰（奈良女子大学助教）：「地球が危ない」というのは、価値観の押しつけではない。問題提起の一つの在り方だ。価値観や思想性の対決の姿勢が重要で、アンケートにも思想性を含

めている。

- ・祐岡（高田東高校）：フィールドワークの題材の選び方の説明をしてほしい。
- ・田村（岩手県立葛巻高校）：環境学の時間の設定について教えてほしい。
- ・中道（本校教員）：エネルギー問題の希望が多かったが、実際に行ける所が少ない。もっと身近な問題を題材に選ぶほうが良かった。
- ・長野（佐賀県教育センター）：先生方は教科の内容を環境で教えようとしているのか。「伝えたい」「教えたい」ということが先行しているようだ。生徒の興味・関心を生かせるように生徒主導にできないのか。また、3、4年と縦割りに組めないのか。
- ・中道（本校教員）：今の意見を今後の参考にしたい。縦割りにすると週1時間になってしまうが、それではやりにくい。
- ・角田（筑波大学附属高校）：発表要旨の文章に出てこない悩みをどうするかが問題だ。新しい学力観をつくる必要がある。子どもは勉強を強いられているが、学ぶことを獲得させることが大切だ。仕掛け過ぎ、やり過ぎと言う感じがする。生徒は学び方を本当に学んだのか。
- ・杉峰（奈良女子大学助教授）：学び方の系統と教科の系統をどうするかが課題だ。27ページ（当日資料、本紀要 118ページ）に本校の環境教育が構造化されている。
- ・細木（環境庁環境教育専門官）：知識を単に覚えるだけではしょうがない。自分で判断して行動できる人づくりが大切だ。環境教育を生涯学習として位置づけたい。自由意思で考え、いろいろやってみる事が大切で、そこから答えが出てくると思うが、それに対して行政がどの程度応えられるのか、行政の体制はそれに十分対応出来ていない。

ー当日参会者へのアンケート「分科会に関する内容についての意見」よりー

- ・環境学については、幼稚園や小学1年生から（小さければ小さいほどよい）高校生まで一貫して系統立てて、それなりの理解できる範囲で学ぶ体制が必要と思う。それほど地球に生きる人間として大切なことであると信じている。（中3保護者）
- ・評価問題についていまだ少し深まった話し合いがなされてもよかったと思う。総合教科を進めるに当たり、教科の壁は当然あると思うが、教科性をあまり強く考えず、総合教科のねらいは学び方を学ばせることを第一目標としたらと思う。（中学教諭）
- ・完全な「総合学習」ではなく、「数種類の教科をまとめた学習」である気もした。どの程度の「総合」が必要なのか、また、「総合」とは何を総合するべきものなのか、改めて考えてみたい。（中学教諭）
- ・長期に渡っていろんな角度からちょっと指針を与え、問題意識を育てていくのは大変だと思う。しかし、今の時代にあって、是非とも下地を養っていくべきだと思った。（中学教諭）
- ・教科の壁を取り除くことは、一般の中学校では現在不可能に近い。しかし、環境学のような総合的な教科は必要だと思う。本研究のねらいや実践が全国に広がっていくことを望んでいる。（中学教諭）
- ・フィールドワークを中心に、足と目と耳で実際に感じられることは素晴らしい。（中学教諭）
- ・生徒の質疑応答、意見交換など行われていれば、もう少し、生徒間での受け止め方、反応の程を見せてもらえたものという感想をもった。（高校教諭）
- ・教科間、先生方個人の意識の差、これらをうめ、まとめ、生徒に働きかけ、生徒に行動させ、生徒の奥底の意識を目覚めさせ、変革していく……生徒達の発表、先生方のお話を聞きながら、教育の妙味を味わった。（高校教諭）

- ・生徒が班毎にあれだけの発表をできるということは、その陰に指導の先生方の大変な苦勞があったと思う。分科会の質疑応答の中で、「地球が危ない」というテーマは？をつけたり、結果として生徒達の結論の中に導き出せたらいいのではという意見もあったが、私は、指導に当たる教師がある程度の価値観をもってやっても良いのではないかと思った。(高校教諭)
- ・公開授業が良かった。中間発表に至るまでの学習が本当の勉強であることを改めてよく教えられた。(大学教官)
- ・熱心で中身のあるよい研究会でした。(大学教官)
- ・生徒の発表はしっかりしていて良かった。特に司会の生徒の能力は素晴らしい。このような学習は公開授業にするのが難しく、日程の調整などで苦勞されただろう。
- ・現実問題として、教科として、これからどの様にしていくのが難しい。生徒の負担をどうするか。(環境保全協会)
- ・カリキュラムの組み方などについて鋭い質問、意見がでたと思うが、時間の制約で、掘り下げて議論する時間がなかったのは残念。評価方法などについても論議があると思える。(新聞社)
- ・中だるみの対処のために環境教育をやる、「地球が危ない」ということを与えるというのはどうもいただけない。環境教育は、小学生～高校生～大人まで、それぞれの段階でいつでもやるべきものではないか。

1991年(平成3年)12月14日(土曜日)

# 実地調査生かす「環境学」

奈良女子大付属中・高校で高1生対象に



奈良女子大付属中 高1生 大西 真子

奈良女子大付属中・高校で今年から、四年生(高2)・高1生(高1)を対象に環境学第一の調査が始まった。理科、社会科、保健体育科の別で、計四人分科別のグループを編成して、フィールドワークを取りながら、この冬に再び調査が実施される。この調査は、環境学第一の調査として、自主的にやる力を付けさせる目的で、二年生までで済ませず、高1生も参加させている。この冬は、公開授業が行われたのを機に、理科の一人、理科の調査員(高1)に調査員が加わった。

主体的な活動に重点

調査は、本校の教育課程の最優先の所、カリキュラムを履修している高1生も参加している。調査は、理科、社会科、保健体育科の別で、計四人分科別のグループを編成して、フィールドワークを取りながら、この冬に再び調査が実施される。この調査は、環境学第一の調査として、自主的にやる力を付けさせる目的で、二年生までで済ませず、高1生も参加させている。この冬は、公開授業が行われたのを機に、理科の一人、理科の調査員(高1)に調査員が加わった。



## 教科を超えて総合的に

将来の意識・行動変革を期待

行政の存在を、また保健体育科では人権への影響を、という。本来この現象でも、その調査は、理科、社会科、保健体育科の別で、計四人分科別のグループを編成して、フィールドワークを取りながら、この冬に再び調査が実施される。この調査は、環境学第一の調査として、自主的にやる力を付けさせる目的で、二年生までで済ませず、高1生も参加させている。この冬は、公開授業が行われたのを機に、理科の一人、理科の調査員(高1)に調査員が加わった。

別科の調査員も、この冬に調査員が加わった。理科、社会科、保健体育科の別で、計四人分科別のグループを編成して、フィールドワークを取りながら、この冬に再び調査が実施される。この調査は、環境学第一の調査として、自主的にやる力を付けさせる目的で、二年生までで済ませず、高1生も参加させている。この冬は、公開授業が行われたのを機に、理科の一人、理科の調査員(高1)に調査員が加わった。

調査員は、理科、社会科、保健体育科の別で、計四人分科別のグループを編成して、フィールドワークを取りながら、この冬に再び調査が実施される。この調査は、環境学第一の調査として、自主的にやる力を付けさせる目的で、二年生までで済ませず、高1生も参加させている。この冬は、公開授業が行われたのを機に、理科の一人、理科の調査員(高1)に調査員が加わった。

# 6年制一貫を2-2-2年制

1991.10.14 (金曜日)

奈良女子大  
付属中・高校

新カリキュラムを編成

## 「奈良学」「環境学」を創造

### 来月22日に公開研究会

中学・高校の六年制一貫教育に取り組む奈良女子大文学部付属中・高校(山田校長、奈良市東区町町)は、学校教育を担うなかで2-2-2年制の新カリキュラムを編成。総合教科「奈良学」と「環境学」をつくり出し、中学三年、高校一年を対象に週二時間実施している。文部省の研究開発学校として、中・高連携の新たな教育課程を構築してきたもの。十一月二十日に総合教科の採を公開。カリキュラム開発の取組を報告する。



文献調べからスタートした「環境学」のフィールドワーク

同校の六年制一貫教育は一九七三年にスタート。県下有数の進学校から部活の五校へ要するなかで、新たなアイデア、テーマを確立しようという学校改組の機運が生まれ、六年一貫を2-2-2年制の三段階に分ける新カリキュラムが編成された。

その方針は、低学年(一、二年)で基礎学力の定着を図り、中学年(三、四年)で多様な自主的学習方法を創り、高学年(五、六年)で生徒の能力・個性・進路に応じた大膽な選択を取り入れるというものだった。

また、中学年で二以上の教科を総合した科目を新設。生徒が知識と行動を結びつけ、フィールドワークを通じて課題に迫り、問題解決の主体的態度の育成を図ることにした。



低学年 基礎学力定着を図る  
 中学年 自主的な学習法を  
 高学年 大幅な選択制導入

実施した。  
 二科目ともに生徒の自主活動を通じて、身近な自分の周りに見つけ出すというものを、「奈良学」は、住んでいる奈良をどういった角度から学ぶ。

新設された総合科目は「奈良学」と「環境学」。単なる合科学習でなく、教科の枠をできる限り破り払い、新教科として創造。「奈良学」は中学三年で昨年度から、「環境学」は高校一年で今年度から

昨年度は老人ホームで聞き取りなどを行い、今年度は平城京、文学、工業フィールドワークを通じて、奈良県内のVTRを製作。十一月二十二日の公開授業で発表する。

「環境学」は、同校が従来から取り組んでいた環境教育をベースにして環境学、社会科、理科、保健体育科の教師が年間約五十時間を担当するが、既存教科の枠を超えて「環境」というグローバルな課題に立ち向かった。

初年度の今年は、まず環境学オリエンテーション「地球が危ない」からスタート。学校の近くを流れる宮井川の見学観察、環境問題のチェック・アンケートを行い、個性、飲み水の行方、ごみ問題、問題川公百裁判などについて学習。「奈良学」の学習方法を生かしながら、グループごとにフィールドワークを行う。公開授業はその中間発表を行い、環境学、リサイクルなども学んで三学期に総まとめ。劇、ビデオ、紙芝居、スライドなど自由な形式で発表する。

十一月二十日は公開研究会として、授業公開するほか研究発表・発表を行う。全体協議会は高田町議事部の大方町町長・坂本義孝氏を招いて「ハードからソフトへ」自然とともに町を「...」の題で話しても。

研究会への参加申し込みは十一月九日までに同校へ074-999-5511。

## Ⅶ. 運営指導委員による評価

### 1. 国語科カリキュラムについて

国語科運営指導委員 小谷 稔

はじめに国語科カリキュラムの研究開発に当たられた国語科教官の長期にわたる御努力とこの成果に対して心から敬意と讃辞を呈上したい。

冒頭の「国語科の指導方針」の『国語の目標』に述べてあるように国語による理解力と表現力・思考力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、国語を尊重する態度を育てるという目標は基本的には不易なものである。それゆえに本カリキュラムがどこに力点を置いているか、という点に注目した。

本カリキュラムは、教育課程審議会の答申（62年）や学習指導領の「国語の目標」を踏まえるのは当然として、その一方で「自由で自立した人格」・「社会的責任の自覚」という本校の教育目標の実現にあたっての国語科の使命を表明している。学校挙げての教育目標を個々の教科が支えるという学校教育のあるべき姿が形骸化しがちな今日、これが力強く表明されていることをまず喜びたい。そこに至るまでには全教官の長期にわたる討議と熱意があったと確信するからである。

指導方法の基本としては、「A表現」・「B理解」及び「言語事項」という3本の柱を総合的に進めながら生徒の受動的な授業でなく、一字一句こだわりをもち、問題点を発見し、さらには自己の思想形成までを目指して視野広く教材を選定し利用させるということである。教科書に束縛されずに教師が納得する教材を自主的に発掘することは、必ずや生徒の自主性の育成につながることはまちがいない。

次に「国語科教育の視点」では、「表現」・「理解」・「言語事項」の各領域における諸能力を段階的というのでなく螺旋的に向上させるように教材を配置し、中高の6年間を、低学年（1・2年）、中学年（3・4年）、高学年（5・6年）と2年ずつ3段階に分ける。これは「国語科における2-2-2制」というタイトルのもとに詳説されているが、低学年で基礎期としての情感性・感覚性の育成に重点を置く、つまり感受性の解放から能動的な思考や創造の基礎力を養うことは古典の入門も含めて活気のある国語学習が期待できる。次の中学年（3・4年次）は、低学年の「感じる」を受けて「考える」を伸長させ、次の高学年の「創造」へつなげるという構想である。4年次に古典文法の体系的学習をするのはいわゆる高校1年であるから適切である。私学の6年制では中3で古典文法を教えるのが一般的であるが古文への親しい慣れが不足しているので棒暗記に陥りやすいようである。高学年（5・6年次）は高校国語学習の最終段階である。生徒の適性や進路に応じてA B C Dの4コースの選択制が導入された苦心のカリキュラムである。これは形式的にはいかにも現実的な進路対策に見えるが、これまでの学習の上に立って、その「国語総合力」のより発展を図るという理想が追求される。こうして同一の学校で6年間学ぶ生徒にとっても6年間指導する教師にとっても充実感、達成感が確認できるにちがいない。

奈良学については、まさに生きた実践的国語学習の場でもある。地の利に恵まれたテーマを見ただけで筆者も胸が躍るような魅力がある。中学3年という発達段階からくる制約はあるが大いに成果が期待される。この総合教科にしても国語の教材の自主的編成にしても出発期は意欲に満ち満ちて実践するがやがてはマンネリズムの陥穽が待っている。その時も教師の積極性・創造性が生徒の積極性を育てるという原点に戻って新しい創造を進められることを切に期待したい。

## 2. 中・高6年一貫教育の数学カリキュラムについて

数学科運営指導委員 重松 敬一

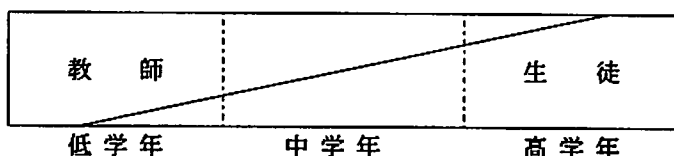
平成元年に改訂された学習指導要領はいろいろな点で注目されている。これは、20世紀最後の学習指導要領であるとともに、21世紀最初の学習指導要領であるという時代的な意味をもつことに象徴されよう。1980年代ぐらまでは国民共通の基礎基本の習得を主目的に学校教育が展開されてきたのであるが、とくに今回の改訂あたりから、国際化に対応した、多様化への対応が迫られることとなった。それは、一人一人の国民が自立すると共に、日本人として世界の中でいかに協調するかということが指向されているといえよう。

このような変化にあっても、6年一貫教育は、ともすれば基礎基本の習得に終わるようなカリキュラム展開を指向していることが多い。そのために、なるほど大学への進学にはかなりの効果をあげるにしても、例えば、大学において自らの専門のレポートすら満足に書けない、あるいは、自分の考えをもって議論することができないといったことになりかねない。

このような状況に対して、奈良女子大附属中・高等学校でのカリキュラム開発研究は、数学科に見る限り、基礎基本の習得から、多様化への一つの試案を示していると言える。とくに、非常に難しいことであるが、いかに学習態度を着実に身につけ、自らの力で学習し、積極的に未知への世界へチャレンジしていくかということが追究されている。最近、世界的にもこのことが注目されているが、たとえば、A. Brown やF. K. Lester, Jr. らも、《自分の学習は自分で責任をもつ》ということを教えることの大切さを強調している。

カリキュラムの展開では、低学年で教師による学習のモデルが示され、中学年においてこのモデルを生徒自らが習得し、自らのドライブ・ホース(Driving Force)として、その後の学習を積極的にこなえるようになる様に考えられている。

- 低学年(中学1～2年段階) : 基礎基本と学習方法・態度の習得
- 中学年(中学3～高校1年段階) : 自主的学習方法の習得、多様化への準備
- 高学年(高校2～高校3年段階) : 能力・適性・進路に応じた学習の発展



ただ、このカリキュラム試案では、目標と具体的な内容の展開との関連が必ずしも明確でない。例えば、内容的なモデルとして学習するのなら、小学校から学習し始めている関数が、1年と3年になく、せっかく関数をモデルに数学的な学習方法のモデルを示し、生徒が自主的に学習活動するにも学年の関連が必ずしもうまく行くとはいえられない。

また、課題学習が3年生から始まっているが、教師がよい数学学習のモデルを示すには課題学習がよりふさわしいと考えられる。というのも、従来のような、数学的内容を細切れに学習するのではなく、課題学習では、学習態度の習得を目的にした展開がより可能だからである。そのためにも、内容的な学習展開との関連を図りつつ、どのようにこの課題学習を具体化するかも今後のカリキュラム開発研究の一つのテーマとなろう。

従来から、日本の生徒の数学的学力は高いといわれてきた。例えば、第2回IEAの結果。しかし、



例えば、アメリカからみれば、時間を十分使い、計算だけを強調するからこそ成績がよいのであって、多民族のアメリカでは、いろいろな文化的背景を踏まえて、いかに学力を高めるか…と言う点では参考にするところは少ないと考えられかねない。アメリカの抱えている問題は一人アメリカだけでなく、世界に共通するところが多いといえる。また、今後の日本の社会、教育環境を先取りしているともいえる。それだけに、今後のカリキュラム開発においては、例えば、次のようなことが大学の数学の目的として指摘され、教師、学校、教育界、政府への提言がなされているが、これはひとり大学だけの問題ではなく中学校、高等学校にもあてはまり、カリキュラムの展開を研究するときに考えておかなければならないことであろう。このような広い視野からの研究と実践をして初めて、世界からも注目されるカリキュラムの提言が出来よう。

1. 全ての生徒のための効果的な数学指導を確立する。
2. 女性、少数民族、学習が遅れている者の隠れた数学的才能を最大限活用する。
3. 大学にいる数学者が協力して、とくに、将来数学の教師となる生徒の養成にあたる。
4. 指導や研究、専門性を敬い、これに報いるような数学者の文化をつくる。

## 参考文献

1. F. K. Lester, Jr. : Reflections about Mathematical Problem-Solving Research, Research Agenda for Mathematics Education :  
The Teaching and Assessing of Mathematical Problem Solving, NCTM, 1988(115-124).
2. Committee on the Mathematical Science in the Year 2000,  
Board on Mathematical Sciences, Mathematical Sciences Education Board,  
National Research Council :  
Moving Beyond Myths ; Revitalizing Undergraduate Mathematics,  
National Academy Press, 1991.

## 3. 環境学への取り組みについて

理科運営指導委員 森 井 実

過去、十五年間お世話になった奈良女子大学文学部附属高・中学校の、新しいカリキュラムの研究開発に際して、運営指導委員という大役を拝命したことは、身にあまる光栄であり、その責任の大きさを痛感しているところである。

学校現場には、避けて通れないタテマエとホンネがある。「人間形成への理念」と「現実の進路への願い」とにどう応えるかであろう。附中・高では、過去の「普通の学校」への転換以後吹き出した矛盾への克服に取り組みつつ、更に教育内容において、奈良学、環境学などを含む新カリキュラムの開発に学校挙げて研究を続けられた教育的情熱には、深い敬意を表する次第である。

さて、こうした環境学などのいわゆる総合的な教科の展開には、克服しなければならない基本的な問題点がある。それは中学、高校生にとって、学習上、「基礎・基本のおさえ方と総合的、応用的な学習」との関連をどう図るかであろう。

私が担当してきた「生物」についても、その悩みは常にあって相当大きいものがあった。例えば、

生態系や、生物進化の取り扱いにおける地理、地学との関係、物質交代とエネルギー交代における化学や物理とのかかわりであった。生物学そのものが総合・応用科学的性格をもつからであろうか。環境学についても同じことがいえるのではないだろうか。

しかも履修学年が4年次であれば、実際の指導上苦慮されるところであり、体験的な学習やいわゆるお話しに終わってしまい勝ちになる。根本的に環境学が、学問的に体系づけられているかどうかである。その意味でも高校での扱いは環境学ではなく「環境」でよいのではないかとも思うのである。

戦後間もない頃、理科教育において、生活単元学習が華やかな時があった。学問の体系を離れ、例えば「身のまわりの生物」という取り扱いがあった。観察し、採集し、分類し、考察するといった展開が要求され、指導者の力量が問われるとともに、どのように生徒に体系づけるか、基本的概念をどこにおくかなどで苦労したことがあった。

今回の環境学にしても、開発と保全の対立するなかで、どのような教育的視点を持つか、現象の把握にとどめるのか、合理的な生活との対応をどう考えていくのかなど困難な問題点が基本として横たわっているように思う。

それにしても、「水・空気・緑」を中心として構成されたカリキュラムには、教育の視点、探究の過程を重視した授業展開など学ぶべきことが多い。また、カリキュラムとして、同じ4年次で「総合理科」4単位をおかれているのも、中・高6年制の学校という特色が生かされたものであろうし、偏りのない人間形成を目指すという意図が感じられ、誠に心強い限りである。

ところで、環境学は2単位である。主役となるフィールドワークなどでは、連続した時間が欲しい。2単位の授業では、フィールドワークの断絶、継続観察の中断など授業展開の支障となる。思い切った、環境学と総合理科の合科は成り立たないだろうか。そして6・7限授業、ぶらさがりの授業という弊害をとり除いてはどうだろうか。

理科全体のカリキュラムで気になるのは、総合理科の設定である。一つの科目には、一つのコンセプトがあり、それに基づく指導が必要であって、一人の教員が指導することが望ましい。そうした観点にたつとき、総合理科の経営はどう展開するのがベターなのか。他の選択理科との関連をどう図るのか。特に環境学との連携も重要であろう。

また、環境学の評価については、今後の課題とされているが、教育のあるところには必ず評価はあるはずである。ペーパーテスト、フィールドワークの成果、共同で取り組む姿勢、探究の過程の取り組み方など、学力とともに評価を組織化、総合化されることを期待したい。

カリキュラム全体については、新学習指導要領の趣旨をいかされ、個人選択を多く取り入れ、高校1年生にはゆとり（総合理科、現代社会の導入）2、3年生で国立個別試験、私立大学試験に対応する2次重視カリキュラムとされ、あき時間の設定など公立高校のモデルとなるプランであろう。

しかし、学校規模によるが、とくに3年生では総ての生徒の希望を満たす時間割り作成は、厳しい条件をつけなければ、例えば自由選択では週3回以上7限授業などがあって、かなりの困難さがある。また、教員定数・講座開設の場所の確保、大量の生徒の自習室の用意、中間期末考査の実施期間の拡大などの課題や、生徒指導では、途中登校・下校、週3日登校の問題、出欠確認の困難などの課題も出てくるように思われる。

研究の運営に十分な参加もしないで、求められるまま研究紀要、別冊などを一読しただけで、問題点や課題を上げるのにとどまったことをお詫びして、ささやかな所見とさせて頂くことにする。

## 4. 家庭科カリキュラムについて

家庭科運営指導委員 梁 瀬 度 子

1987年12月に教育課程審議会から「幼・小・中および高校教育課程の基準の改善について」の答申が出され、「女子に対するあらゆる差別の撤廃に関する条約」の批准に伴う国内措置として、中・高校家庭科の履修のしかたを大幅に改善する必要があるとして、その方向が示された。それを受けて時代の要請に応えられる家庭科教育を行うため、学習指導要領が30年ぶりに改訂された。

新指導要領による技術・家庭科の男女共学実施に先立って、当校の3年間にわたる中・高一貫教育におけるカリキュラムの研究開発プロジェクトにより、家庭科教育のありかたについての課題の検討、ならびに新カリキュラムによる実践指導を通じての検討案の検証が行われたことは、まことに時宜を得たものといえよう。

以下に報告書にもとづき、本研究開発の評価および若干の意見を述べたい。

1. まず履修時間について、中学校の技術・家庭科の指導要領で定められている必修2・2・2～3を、男女共学による授業内容の広域化や同一内容を共に学習させることにより調和的な発展を促すという点から、3・2・3と大幅に増やしたこと、さらに高校においても男女共学で必修2・2合計4単位とらせるようにしたことは、人間として豊かな生活をする上に必要な考え方を学び、価値観をつくる能力を養う上でも大変有効であり高く評価できる。
2. 当校のめざす中・高一貫教育を家庭科においても実践することは、指導内容に一貫性が保たれ、生徒の学習経験が一連の系統性をもって矛盾なく継続して行われることを意味している。学習の成果を実生活の中で考え活かすことのできる教科の特殊性を、効率よく実践できることになる。
3. 改善の基本方針として、男女共学を前提とする家庭科のカリキュラムが検討されたことは大きい実績につながる。その一例として、新指導要領では被服は選択領域となっているが、男女ともに生活者として自立できることを目指して中学一年で被服領域を男女共学必修とし、その後の学年で生徒の興味、関心、個性に応じて選択学習できるよう考慮している点があげられる。また、男女共学で継続して実施できる唯一の領域である食物を、中2から高2までの4学年にわたって継続男女共学とした点にも工夫のあとが認められる。
4. 実験実習を伴う教科の学習効果をより高めるために講座編成の1クラス30名を基準とした点は、付属学校の特殊性もあるが、生徒の役割分担が相互に認識され安全性の面からも重要な条件である。
5. 中学、高校の5年間を通じて学習した中から、生徒が主体的に課題を決めて問題解決をはかるグループ研究として設定されている課題研究（自主研究）は、当校独自のカリキュラムであり問題解決に取り組む課程で自主性、創造性、社会性、協調性などが育まれ、家庭科教育の真のあるべき方向を示唆するものといえよう。

技術革新の進む社会の未来においては、人間生活の基盤である家庭機能の変化も激しく家庭生活も多様化していくことが予測される。とくに家庭と社会とのつながりは大きく、環境問題を始めとする社会問題から受ける影響や情報化社会、さらに国際社会への対応などが重要な問題となるであろう。このような社会変化に対応して自立した生活者として問題解決をはかり、国際人として広い視野で問題を捉えていくことが要求される。そのような中で家庭科教育では、今後ますます幅広い領域にわたって問題解決をはかる家庭の管理者としての能力を育成する必要性が高まるであろう。それゆえ従来の食物、被服領域偏重から家庭経営や住居領域への更なる拡大が課題である。また、地域、国、世界レベルで家庭生活を考える必要性が増し、学習対象の拡大をはかるとともに関連する他教科（社会、保健、理科など）との連携を図る総合学習により、学習効果を高めていくことも必要であろう。

## 5. 技術科カリキュラムについて

技術科運営指導委員 岡 俊 博

技術科のカリキュラムに付いて、検討した感想を率直に記述すると以下のようである。

中学校における技術・家庭科の時間配当は、1年3時間、2年2時間、3年3時間で、新指導要領と比較しても1時間の増加である。技術・家庭科が実習を含み、スパイラル形に学習するために授業時間数を現状よりも多く配当されるよう努力され、全校的に理解されたもので、この件に付いては高く評価される。また、技術科のカリキュラムに付いてのみ考えたとき、1年の製図を含めた「木材加工」で33時間、「金属加工」で12時間、2年生の「情報基礎」で12時間、「機械」の18時間、3年生の「電気」で30時間、選択「機械」で30時間を設けている時間配分は適切で、その苦心の後がうかがわれる。

しかし、一次試案において、高等学校教育のカリキュラムが「生活技術」を男女共学で必修科目として取り上げられるということであった。「生活技術」への取り組みは、いまだ他の高等学校で行なわれている例が稀少であるので、実験校として今後の他の高等学校に参考になる研究開発計画であると期待していたが、二次試案において「生活一般」も断念し、最終的には、従来から行われている「家庭一般」を選択されたことは、中・高一貫の教育ができる生徒と教員を擁する附属中・高において、私の期待に反するものであった。体育科と芸術科と家庭一般の組合せで、高等学校のカリキュラムを展開するなら、家庭科領域はスパイラルに展開されても、技術科領域は中学校教育の3年間でぶつりと尻切れの状態になると感じられた。これなら、授業時数が多いだけで、新カリキュラムの領域構成は、市中中学校が実施すると予想されるカリキュラムと大差なく、高等学校教育においてもまた同様ではなかろうか。

コンピュータの利用に関しても、中学校教育の2年生で「情報基礎」学習を、「機械」学習の前に行なうことにより、技術科的なコンピュータの利用方法が見つけだされると期待できるが、コンピュータの利用における生徒の熟練度は格差が激しいので、生徒の熟練度の差を少なくするためにも、1学年に履修する「木材加工」の学習の前に積極的に「情報基礎」を展開する計画を立てるべきで、1年生の「金属加工」と入れ換えたほうが良かったのではないかと考えている。全教科的にも、コンピュータの利用についてはその取扱い方の学習の重複を避けるよう利用計画を立てられ、利用計画表を作成して表示する事が望ましい。

次に、総合学習としての「奈良学」は、英語学習や社会・歴史学習として評価されるが、国際観光都市の奈良として欧米の客のみを予想しているのは少々残念である。アジアとくに歴史的に関係の深い隣国の客に対しても、どのような内容で応対をすべきか考えておく必要がある。なぜなら、歴史・風土・慣習の異なる欧米人にとってはエギゾチックな奈良の文化かも知れないが、隣国の人々にとっては単なる自国の模倣文化と映るかも知れない。この時こそ、より深い歴史的事実の学習が必要である。総合学習としての「環境学」は、実生活を基本とする技術科と家庭科が中心になってもおかしくない。科学技術の発達とともに発生する身の回りの公害に注目するとともに、近くにある官民一体となって自然を破壊している学園都市造成や科学技術大学院大学の造成を見学させれば、いかに人間が自分の都合で自然環境を簡単に破壊していくかを、生徒は実感として把握するであろう。

## 6. 運営指導委員会から

英語科運営指導委員 吉田幸子

### (1) 英語科のカリキュラムについて

平成元年度に編成された英語科の新カリキュラムは、国立大学の附属校として、既に六年一貫教育の長い経験を持つ当中・高等学校が、さらに実り豊かな教育の実践を目指して、画期的な一歩を踏み出したものとして、注目に値する。中高連携の教育を基本構想とした2-2-2制のカリキュラムは、生徒の希望、能力を十分に生かすように配慮されている。

思い切った予算措置に基づいて、今まで実現にほど遠いと思われていた20人学級を実現させていることは高く評価されるべきである。少人数学級は、語学教育においては、当前のことにもかかわらず、日本の公教育の場ではなかなか実現されていないことであり、このカリキュラムに基づく教育の成果を見守りたい。ただ、この少人数制の教育が、基礎を充実する低学年にのみ置かれたことは、予算上の制約からであろうが、残念なことであり、将来は語学教育全体において実現されることを望むものである。中学年において、自主性を重視するという視点に立って、英語劇や暗唱大会などの行事を積極的にカリキュラムの中に組み込み、コミュニケーション能力の育成をはかっている点は、国際化社会へ向けての対応として、評価されるべきものであろう。さらに高学年になると、大幅に選択制を導入して一人一人の生徒を大事にしようとする教育の姿勢がうかがえる。

学習者の個性を尊重し、多様化への試みとして、英語科のカリキュラムは、教育の原点に立ち返った教育を行おうとするものであると思われるが、これは国立大学の附属であり、六年一貫教育であるからこそ可能なのであろう。

### (2) 奈良学 英語 “May I help you?” について

奈良学が外国語（英語）教育に寄与した大きい要素は、「読む」「書く」「聴く」「話す」、即ち、思考とコミュニケーションの手段である外国語を習得するにあたり、現実の「場」をつくりだしたことであろう。これは、公開研究会当日に発表された生徒作成の三本のビデオがよく示している。奈良公園を訪れた外国人観光客に接した日本の中学生という設定の同一テーマであるため、三本のビデオの同時上映は、それぞれの班の創意、工夫、着想、美意識を見事に浮かび上がらせ、見る者、（そして勿論それを制作した生徒たち、教官たち）を、まず第一に楽しませた。

外国語学習にあたり、話す訓練を行う困難さは、目下学習しつつある言語を話す「場」の設定が日本の現状では、今なおきわめて困難であるという点にある。「読む」「書く」「聴く」ことはひとりでもできる作業であるのに対し、「語る」ためには、相手が必要で、この相手が同じ日本人であれば、自意識が鋭敏になる中学二、三年生からは、「日本人の級友と英語でしゃべる」というのは、いかにも人為的で、気恥ずかしいという感覚を持つのは無理からぬことである。これを実際に身近な奈良公園に出て、しかも日本文化と文明の根底にある神社、仏閣、彫刻、また自然との接触を主題にした「場」を見出したことは、「英語を習っている」というよりは、「奈良をよく知らない人に奈良のことをもっと知っていただく」という体験となり、その道具がたまたま英語という外国語であったということになり、自然な「場」の中で、英語を用いたという感覚を生徒達は味わったのではないだろうか。

英文で書かれた資料を読み、基礎資料を集めることから、最終段階のビデオ放映に至るまでの指導教官の割かれた努力と時間は並外れたものであろうと察せられる。それ故、この企画は平常カリ

キュラムにおいて常時実施可能なのであろうかという疑問が沸く。また、外国人教師、講師の数が今よりも多く、生徒達が英語を母国語とする教師に接する機会がもっと多ければ、「奈良をよく知らない人」に毎日、(あるいは毎週) 接触する機会がいっそう増すであろうし、英語を用いる必要性に迫られることも多くなろう。「奈良学」のもとに、総合が試みられた国語、社会、美術、いや全教科、全生活が「英語」という教科の素材になりうることを、ビデオの成果は示している。

生徒の目がとらえた奈良の自然および文化 — 鹿の大きい眼、太陽光線が印象派の絵画のようにゆらめく池の水面、恥ずかしげに春日大社の前でカメラに向かう姿、言語のない沈黙が続く場面と、ひたむきに語られる英語と快い緊張をかもした印象的なシーンでこのビデオはあった。他校との交流の素材にもなるように思われる。

細分化された知識追求に追われがちな学校教育が、手造りの暖かさを生むことを知らせた企画であった。“education”の根源に立ちかえり、生徒の全人格を引き出した成果がビデオ作品として結実したのであろう。

六年一貫教育であるという余裕もここにはあろうし、また同時にこれは現状では大学入試とのかかわり合いという現実問題を、しばし、視点の外に置くことにより可能なプロジェクトであるということもできよう。

## 7. 「奈良学」について

社会科運営指導委員 鈴木 良

まず感じられることは、「奈良学」という名称についてである。合科(総合教科)の対象として地域を選び、社会、英語、国語、美術、工芸といった教科の協力で奈良をあらためて見つめさせるということと理解する。しかし「奈良学」というと、万葉学や古代大和についての考古・歴史学が連想される。

むしろ、学というような気どりは止めにして「奈良」でよいのではなかろうか。

第二に、奈良をフィールドワークの対象とし、生徒が自主的に調査する社会科の実践はかなり早くから取り組まれてきた。私が記憶するのでは、約十数年前にはきちんとした形になっていたと思う。しかしこのフィールドワークは社会科の一環として位置づけられていた。大切な点は、生徒に実地に調べることの重要性を知らせ、そこから課題を見付けさせようとする点にあったと思う。「奈良学」という総合教科にした場合、生徒の自主的調査というテーマが弱められる危険はないだろうか。実地に調べるということは、何を調べるかという課題を発見させる点に最大のポイントがある。教師の側の課題のおしつけを避け、ねばりづよく「何を」を見出させることが指導の重点である。そのためには、かなり長い時間をかけた、生徒の自主的とりくみの育成が必要であると考えられる。社会科の立場から東大寺などの歴史・文化財について考えさせ、「何を」調べるかをみつけ出させることは、英語で奈良を案内させることとは異なることではなかろうか。私は生徒の自主活動であるという原則をあくまで重要視していただきたいと思う。

第三に、総合教科としての「奈良学」を成立させる根拠は何かという点である。社会、国語、英語、美術、工芸といった教科が総合されるのは、私の考えでは、明確な理由なしにやられると生徒の負担が増すだけに終わる可能性がある。この点の討論を十分にお願いしたい。蛇足までに申し上げると、

私は奈良のよさ、奈良に生きる誇りといったことが主題なのではないかと思う。しかし、これほど難しい課題はない。奈良には、皆が知っている通り、いやなところがいっぱいある。にもかかわらず、奈良のよさを生徒が自覚するのはどうしたら出来るのだろう。根も葉もない奈良の美しさの強調は絵そらごとであって、生徒たちはひとつも関心を示さないだろう。

そのためにどうするのか。合科の実践と合わせて教員同士の討論が必要であろう。

私が「奈良学」について思うことの大意は上記のとおりだが、生徒が自主的に取り組む教科という性格をぜひ強めていただきたいと思う。今のカリキュラムを見ると、教師側が作った枠という感じがいなめない。形を整えることを急がず、本来の目的を実現するために前進してほしいと願っている。本来の目的とは、総合教科を置くことで、学習の持つ意味のルネサンスをはかることなのだろうから。

## 8. 保健体育科カリキュラムについて—感想—

保健体育科運営指導委員 丹羽 劭 昭

教師と生徒が共同して教材の学習に取り組むのが授業であると考えたと、その授業のあり方を示すものがカリキュラムであり、そこには具体的な形で教育方針が示されている。

さて、今回作成された保健体育科のカリキュラムも、他の学校のカリキュラムと同様に、最も基本的な、生徒のからだの調和的発達という課題に応じた学習内容から、生涯スポーツ・生涯健康の基盤づくりという視点からの学習内容へと段階を追って準備されている。しかしその内容や方法にはいくつかの特徴がみられるので、感じたままを記してみたい。

第一に、中学から高校まで6年間の一貫性のあるカリキュラムということである。どこに一貫性をもたせるかは、教育者の立場によって異なるが、ここでは本校の教育目標に即して「自由で自立した人格、社会的責任を自覚した多様な能力を伸ばす教育」を軸にしている。方法的には、中・高6年間で2年単位に区切り、重点を低学年では、多様な運動経験により調和のあるからだの発達を促すと共に基礎的能力の定着に、中学年では、生徒の能力・進路に応じて多様な自立的学習法や選択制を取り入れ高学年では、生涯スポーツを見通して大幅な選択制男女共習授業を取り入れた。さらに教科外活動へとつなぐため、教材単元と行事単元の連結や学習形態としてグループ学習を計画した点に特徴がみられる。従来、中・高校間のカリキュラムに一貫性がないと言われてきたが、その課題を教科の枠内で時間軸と空間軸共に克服しようとした努力がみられる。

第二は、教科の枠を越えなければ対応できない課題に取り組んだ点である。すなわち、理科と社会科と保健分野が連帯して、新しく総合学習として「環境学」を設置した。われわれは、地球規模で人間も他の生物との共存を考えなければ生きられない時代になったことを知った。たとえば、スプレーを用いる生活や車社会を現出して部分的な豊かさや便利さを享受していたら、オゾン層の破壊や酸性雨による樹木の立枯れ、地球温暖化等、生物全体が生きられなくなるという自滅のサイクルをつくり出していることを知った以上、必要な知恵を出し努力しなければならない責任を負ったのである。こうした視点に立った時、従来の教科を越えた新しい総合教科的発想にならざるを得ない。しかも、こうした問題は、健康、エネルギー、長寿社会等数多く横たわっているのである。

第三は、運動文化に対する理解についての希望を述べたい。各種のスポーツ種目の技能については細かい配慮がなされている。そこでは技術の科学的認識と習得、主体的実践者の育成という視点が当





## Ⅷ. 本校生徒の生活・意識実態調査

### — 生徒達は“今” —

#### 生徒と保護者のアンケートから

出野上 良子

#### 1. はじめに

中高併設校であり6年一貫教育の実施校でもある本校は、どういうわけか養護教諭が中学に1名しか配置されていないため、養護教諭の仕事を側面から補佐、援助するよう他教科の教諭が健康部として組織されてきた。赴任以来、今日でかなりの間、健康部に属し、養護教諭の傍らで多くの生徒と接し、彼等をながめ見つめてきたが、最近の生徒達の心身の“疲れ”や精神的発達の“ゆがみ”など気になる点が多い。

全国的にみても、無気力、無感動、学校嫌い、登校拒否、怠学、ノイローゼ、いじめ、過食や拒食傾向の生徒の増加など、精神的な問題が中高生におしよせている。本校でも、多くの生徒達は登校拒否や心身症、ノイローゼにまでならなくとも、朝から“疲れた”“しんどい”“おなかが痛い”“頭が痛い”“眠い、寝かして下さい”などと保健室まで訴えにくる。また、友達関係も一見、仲がいいようでも希薄な感じがし、信頼関係が築かれているのかどうか、教師の目から見てもわかりづらくなっている。クラブ活動の面でも、積極的に参加している生徒もいるが、勉強との両立がなかなか難しくなっており、クラブに属していても会員として消極的ないわゆる“うれしい部員”が多くなっている。放課後すぐ帰りたがる“帰宅部”の生徒が増えているし、彼等のスケジュールは予備校や塾や習い事で埋められているのだろう。しかし、勉強で忙しい生徒達の学習態度は受身的で、将来の目標や進路も高3年生になってもあいまいで、なりゆきまかせの生徒も多いと聞く。自由に活気のある学園生活はどこにいったのだろうか？

このような現状の中で、本校生徒の性格傾向やその特徴、心理的な不安傾向を知るために、昨年度、全生徒を対象にY・G性格検査とCAS不診断検査を実施し、生徒理解の足掛かりとした。

(その結果は本校研究紀要第33集に掲載)

次に、生徒達の学校や家庭での生活が一体どうなっているのかを具体的にとらえたいためアンケートを作成し、実施した。これまで、本校の生徒達の生活の実態や現状、彼等の考え方などについて包括的にとらえられたことはほとんどなく、(学年毎や中高別に、習い事や塾通いの実態調査や健康調査、進路についてのアンケートなど実施されたことはあったが)大がかりな調査になったが思い切って、全校生を対象に実施した。また、生徒の生活の実態や考えは親の考えにかなり影響されることも考慮に入れ、親に対してもアンケートを作成し、実施した。以下はその報告である。

#### 2. アンケート作成にあたって

アンケート作成の前に、さまざまな先行の研究や調査方法、調査項目に目を通し、参考にした。先行の研究の多くは対象が小学生のみ、中学生のみ、高校生のみ6・3・3制に基づいたもの、義務教育の小学生・中学生を同時に対象にしたもの、高校生のみを対象にしたもので、中学生と高校生を同時に対象にしたものは少なく、作成に手間どった。まず、生徒達の現状の問題点をさぐり、浮き出させるためには、彼等の生活全般にわたって調査する必要があると思われ、生活の領域を学校生活、予備校や塾での生活、家庭生活の3領域におおまかに分け、質問項目をできるだけ精選し

た。また中学生にとって、難しい質問項目にならぬよう、理解できる表現に努めた。

## 1. 質問事項の作成にあたって考慮にいたれた領域とその項目

### A. 生徒用アンケート

#### ① 学校生活について

- i) 学校の楽しさ、楽しい理由
- ii) 授業の理解度
- iii) 好きな教科
- iv) 友人関係
- v) 信頼できる本校の教師の存在
- vi) 悩みや心配事
- vii) クラブ活動への参加、活動の活発さ、クラブ活動と勉強との両立

#### ② 予備校や塾について

- i) 学校以外の勉強の場や手段
- ii) 塾などの通学の理由
- iii) 塾などへの評価
- iv) 塾などの通学の頻度
- v) 塾などで習っている教科

#### ③ 家庭生活について

- i) 生活時間
  - ・家庭での学習時間
  - ・家事手伝いの時間
  - ・遊びや趣味などの種類、テレビなどの視聴時間
- ii) 親との関係（子供からみた）
  - ・親の教育熱、教育的関心
  - ・親子の対話、対話の内容、対話の時
  - ・親のしつけの内容
- iii) 健康
  - ・毎朝の目覚めの良さ
  - ・心身の疲れは何処から
- iv) 人生観
  - ・人生において自分にとって大切なもの
  - ・自分の将来の夢
  - ・未来社会への展望

### B. 親用アンケート

#### ① 本校への評価

- i) 本校の教育についての満足、不満の理由
- ii) 本校の選択の動機

#### ② 親子関係

- i) 子供の勉強にたいする関心、教育的関心
- ii) 親子の対話、対話の内容
- iii) 子供に対するしつけの内容

### ③ 人生観

- i) 人生において自分にとって大切なもの
- ii) 人生において子供にとって大切なもの
- iii) 親の期待する子供の将来の職業
- iv) 子供を大学に進学させる意義
- v) 子供の未来に対する想い、不安や心配、その内容

上述したように生徒に対するアンケートでは、おおまかに学校生活、塾などでの生活、家庭生活に分け、特に塾などの実態についてはかなり詳しく問うてみた。現に、“4時からの学校”などという塾の名前や日曜日の朝の9時から12時間も子供達の生活を拘束する塾の存在からもみられるように、塾は“第2の学校”であるかのように機能しているし、その功罪について様々な識者が考えを述べられているが、学校の学校5日制（週休2日制）がもうすぐ導入されようとしている昨今の情勢からも、生徒の生活にあたる影響について探ってみたいと思う。また、家庭生活の領域では単に従来のような生活時間の質問にとどまらず、親子関係や子供達の自分の人生や将来にたいする想いや社会に対する展望など、精神的、心理的側面からも探ってみた。

親に対するアンケートでは、まず本校の教育に対する信頼感をさぐるため、子供を入学させた動機やその後の満足や不満点についても問うてみた。親の学校に対する信頼が薄ければ、いかなる学校側の先行的な試みもその成果をあげることは難しいし、また厳しい批判があれば、それらの問題が何処から起因するのか真摯に受けとめ、解決するてだてを追求することが必要である。

また、親子関係については、子供からみた親子関係と親からみた親子関係に大きなズレがないかどうかをさぐるため、子供に対するアンケートと、ほぼ同様の内容で問うてみた。次に、親の人生観や社会観もさぐってみた。いつの世も子供の姿は社会の現実の反映であるし、子供の現実にみられる様々な“ゆがみ”は親達が形成している社会の“ゆがみ”のあらわれである。おとなの社会の“ゆがみ”からまったく逸脱した子供の問題行動などありえないと思われる。そういう意味からも親の人生に対する考えや想いが子供の人生観や将来に対する夢の形成などにどう関わっているのかさぐりたく思う。

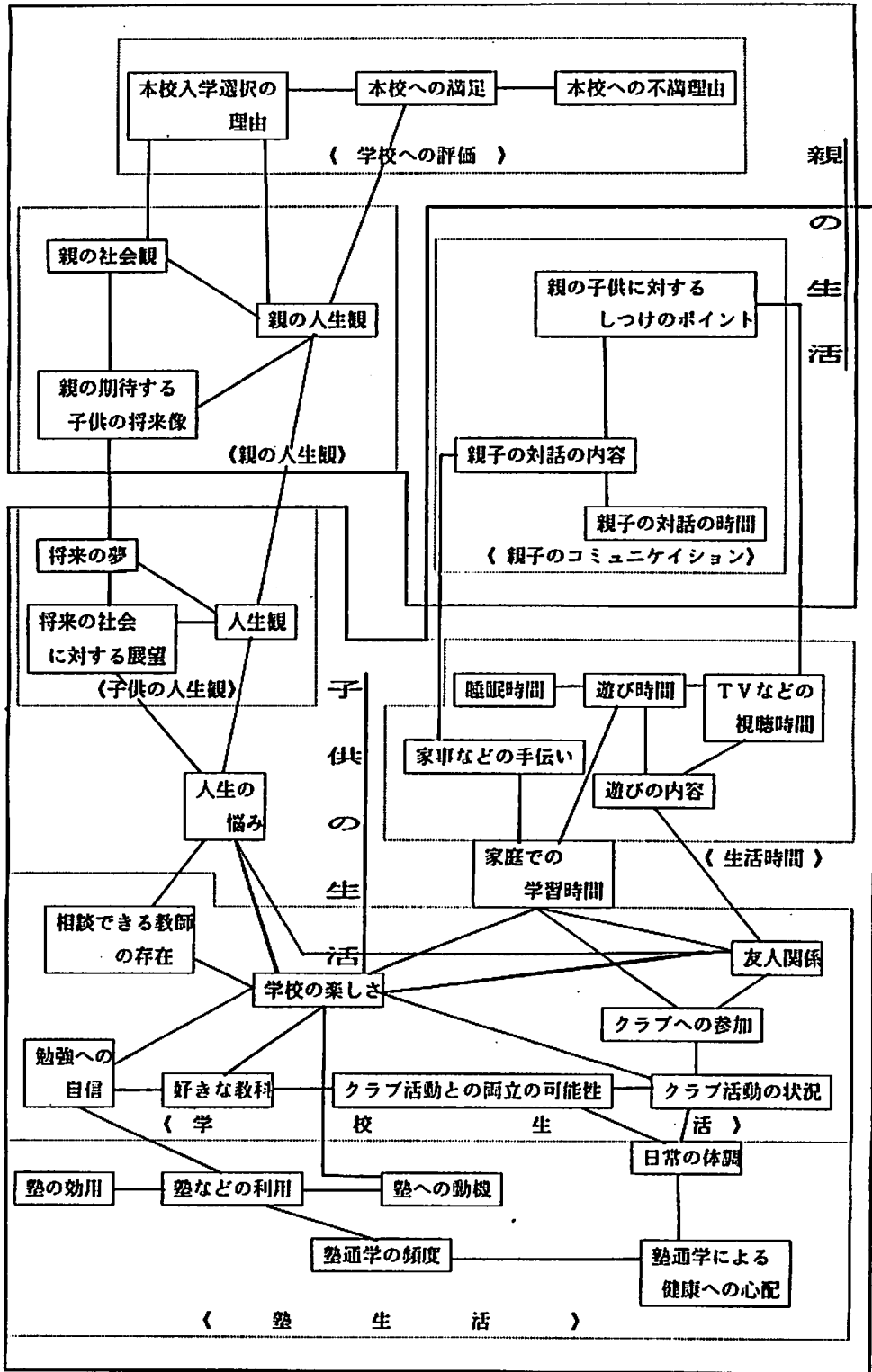
## 2. アンケートの実施に際して

昨年6月から7月にかけて、中高全学年6学年を対象にHRの時間内に実施した。本校は1学年3クラス(約40名×3クラス=120名、男女ほぼ同数) 中学全約360名、高校全約360名、全学約720名の生徒構成である。当日欠席を除くほぼ全員の回答が得られた。

親に対するアンケートは同じ時期に自宅まで生徒に持ち帰らせ、ほぼ85%以上の回答率が得られた。

## 3. 子供に対するアンケートと親に対するアンケートのそれぞれの項目の関係

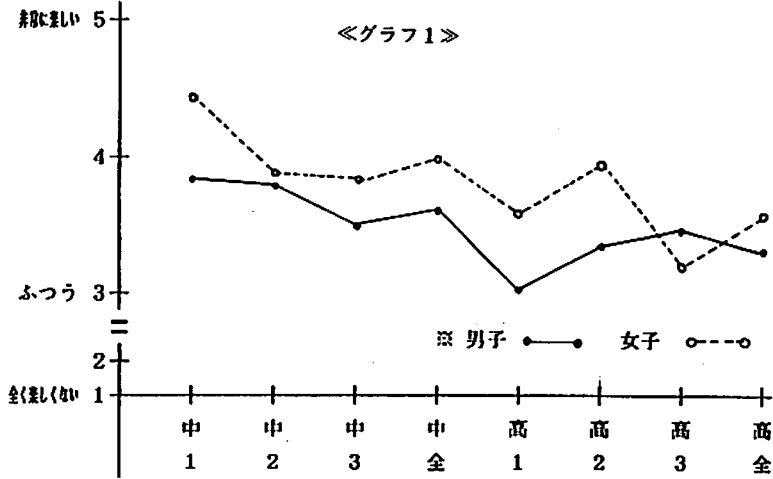
アンケートの質問項目をおおまかに、それぞれの領域別にくくり、項目間関係をあらわすのだいたい次のようになる。



### 3. アンケートの結果

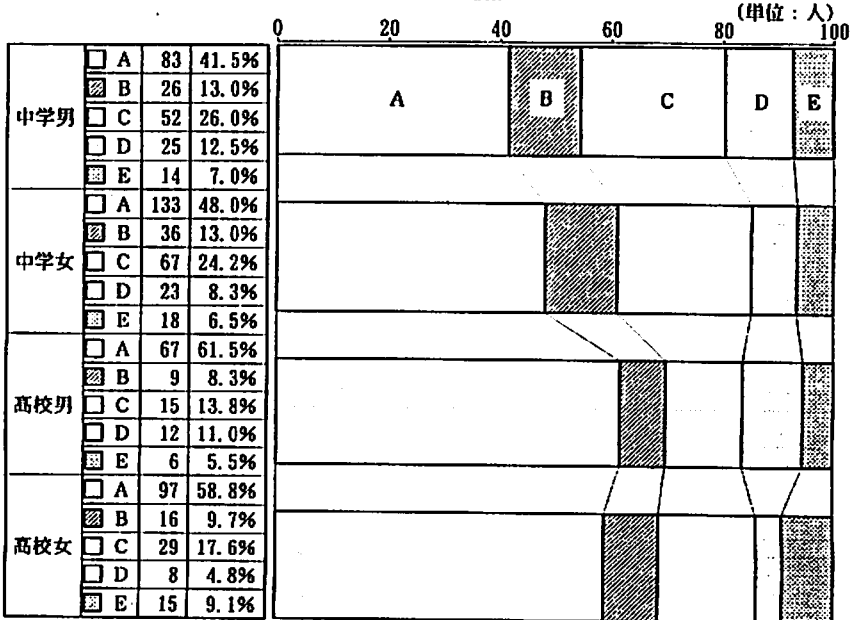
#### 1. 生徒用アンケートの結果

(1) 学校生活の楽しさ⇒ 学校生活は楽しいですか。



(2) (1) でふつう以上に楽しいと答えた人に (4, 5 と回答した人) に対して  
⇒ 楽しい理由は何ですか。(複数回答可)

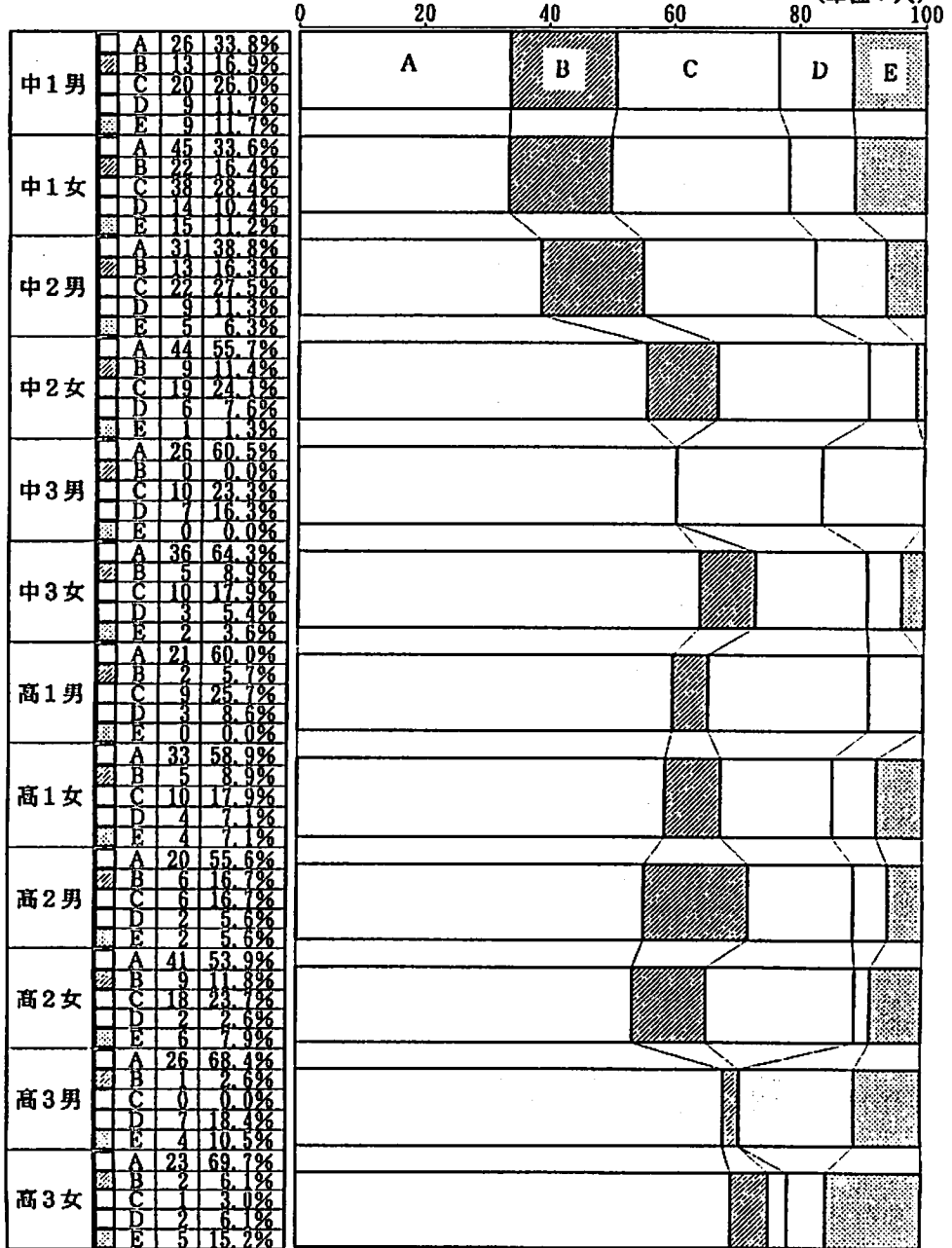
<グラフ2> 学校が楽しい理由



- |            |                       |
|------------|-----------------------|
| A: 友人がいるから | C: クラブ活動ができる          |
| B: 授業が面白い  | D: クラスのまとまりがよく、雰囲気が良い |
| 好きな授業がある   | E: 先生がいいから            |

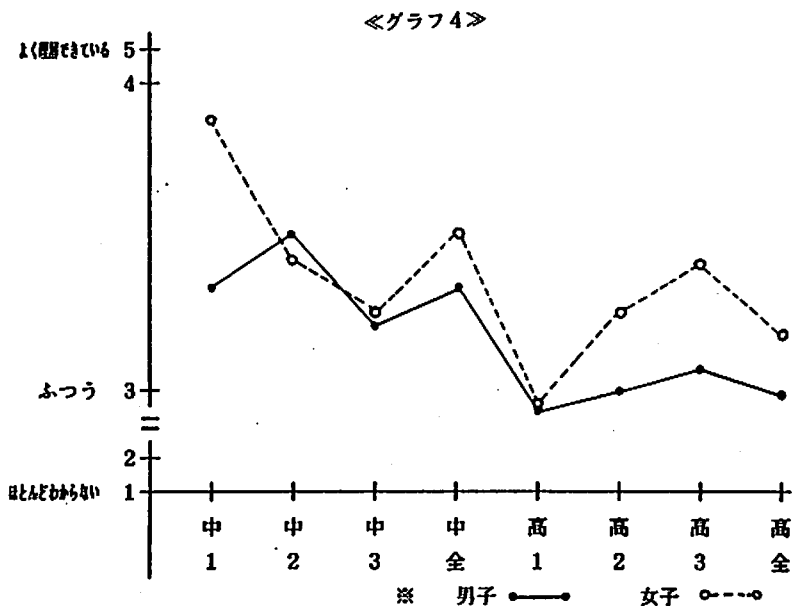
《グラフ3》 学校が楽しい理由

(単位：人)

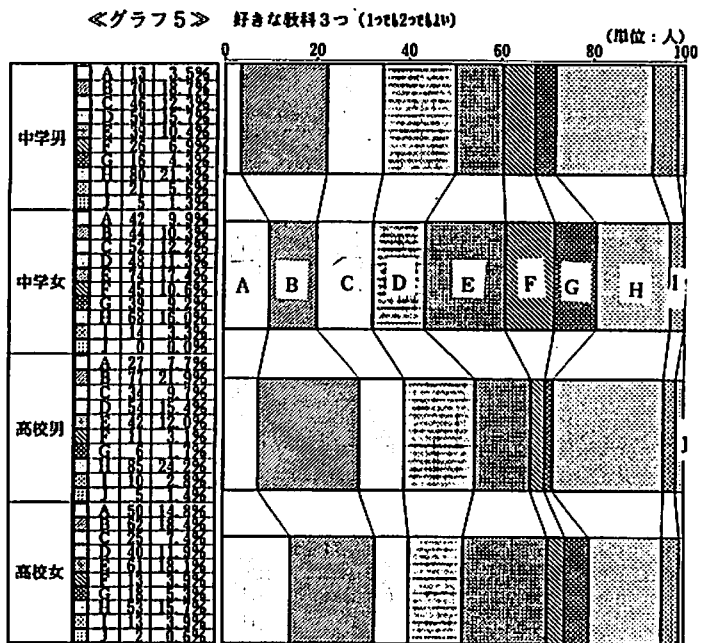


A : 友人がいるから  
 B : 授業が面白い  
 C : クラブ活動ができる  
 D : クラスのまとまりがよく、雰囲気がいい  
 E : 先生がいいから  
 好きな授業がある

(3) 授業の理解度 → 学校での授業はよく理解できますか



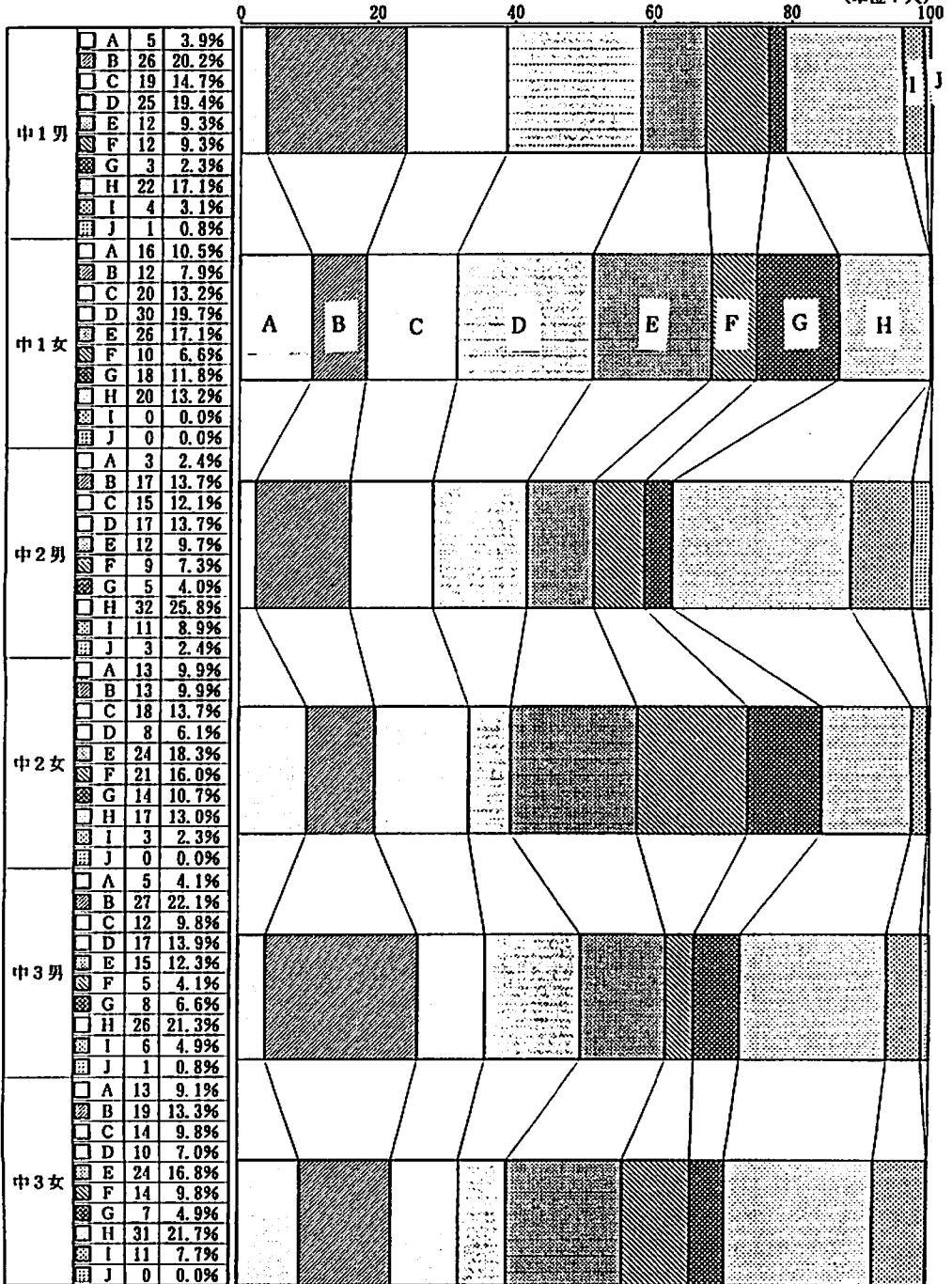
(4) 好きな教科 → 好きな教科を3つあげてください。(1つでも2つでも構いません。)



A: 国語 B: 社会 C: 数学 D: 理科 E: 英語 F: 美術 G: 音楽  
H: 保健体育 I: 技術家庭 J: その他

＜グラフ5＞ 好きな教科3つ (1976年度)

(単位：人)

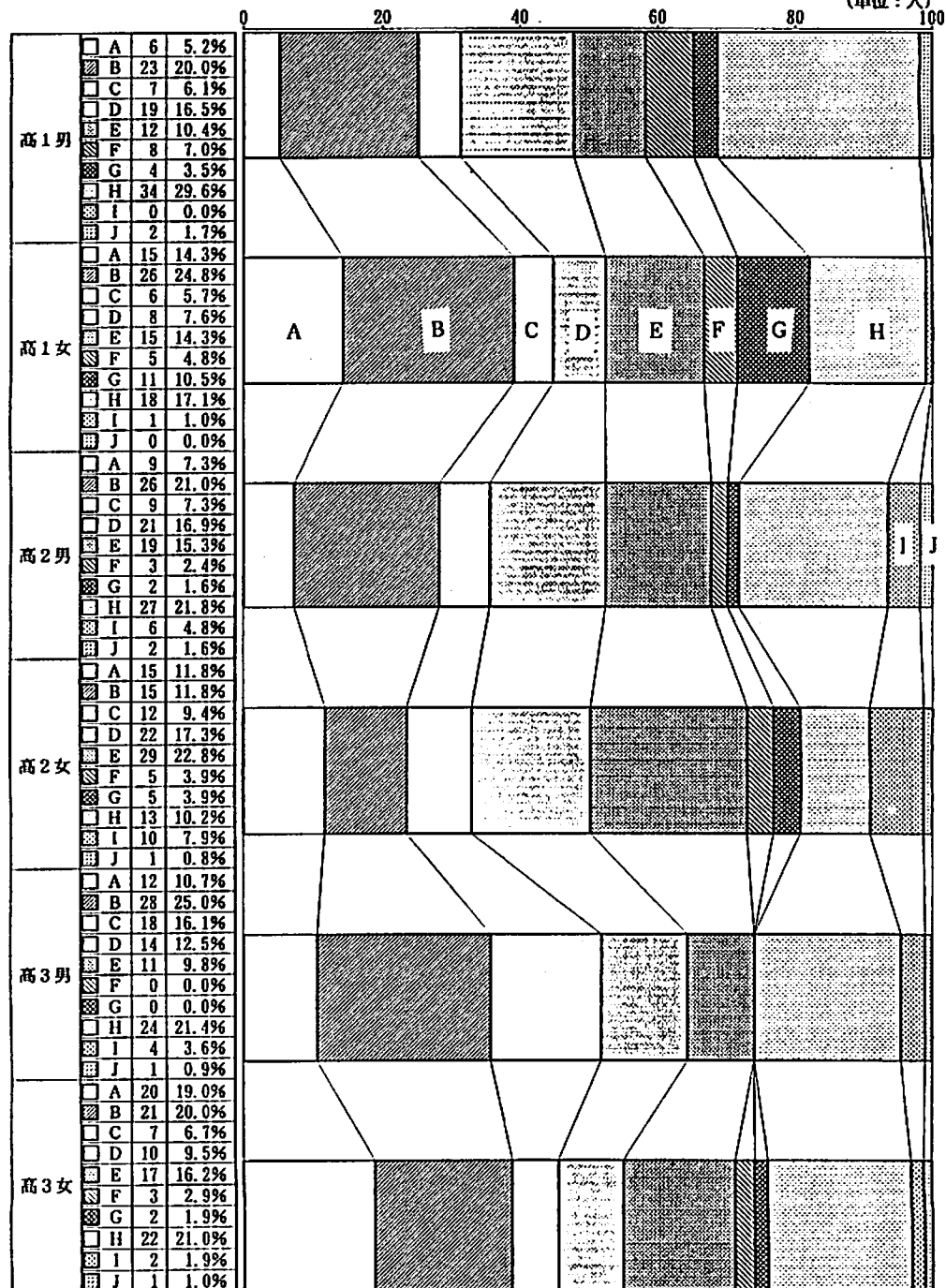


A : 国語 B : 社会 C : 数学 D : 理科 E : 英語 F : 美術 G : 音楽 H : 保健体育  
I : 技術家庭 J : その他



《グラフ5》 好きな教科3つ (100%)

(単位:人)

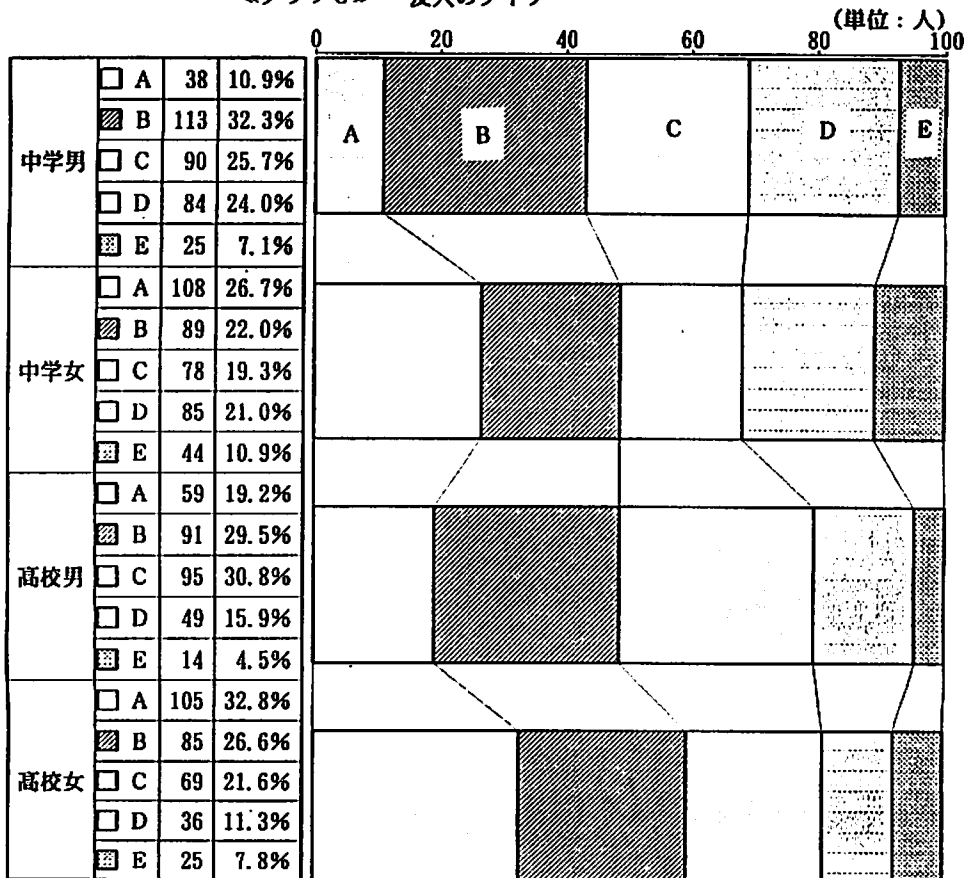


A: 国語 B: 社会 C: 数学 D: 理科 E: 英語 F: 美術 G: 音楽 H: 保健体育  
I: 技術家庭 J: その他

(5) あなたの友人は次のうちのどのタイプですか。(複数回答可)

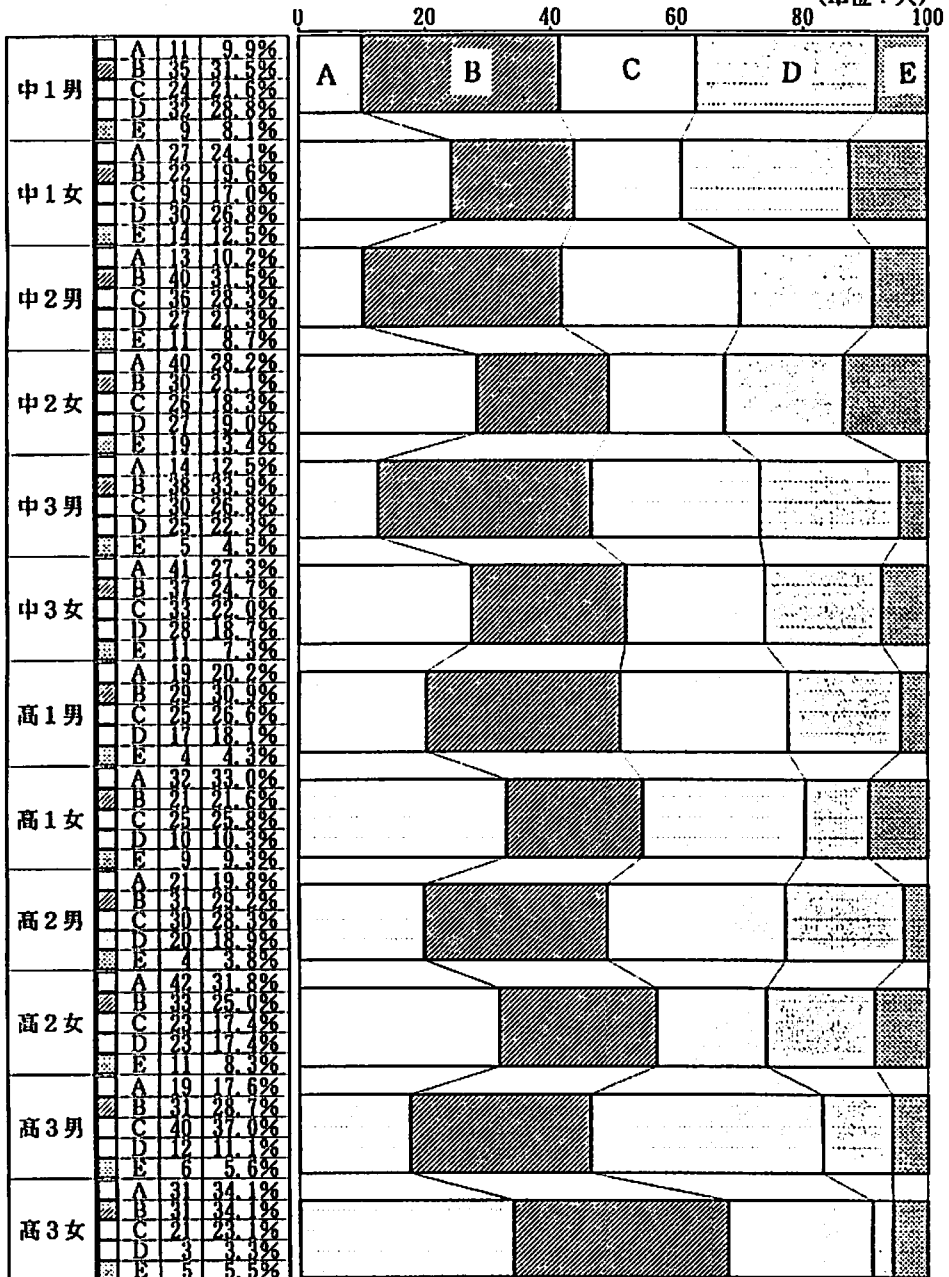
- A. 困ったときや悩み事のあるときに、相談できる友人
- B. 休み時間や放課後になんとか雑談する友人
- C. 遊ぶときに自然に集まってくるタイプで、趣味などがあう
- D. クラブ活動などで仲間としてやれる人
- E. 何事でもうまくやれるから尊敬できる友人

《グラフ6》 友人のタイプ



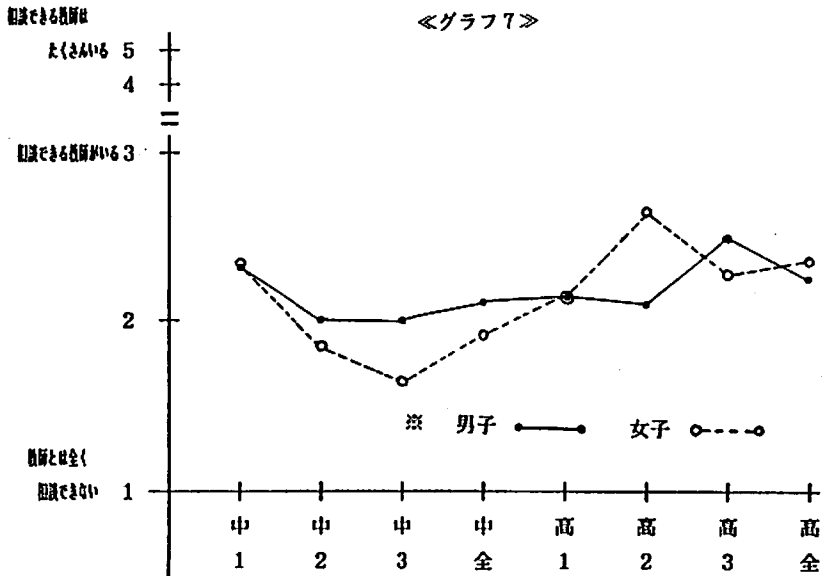
《グラフ6'》 友人のタイプ

(単位：人)

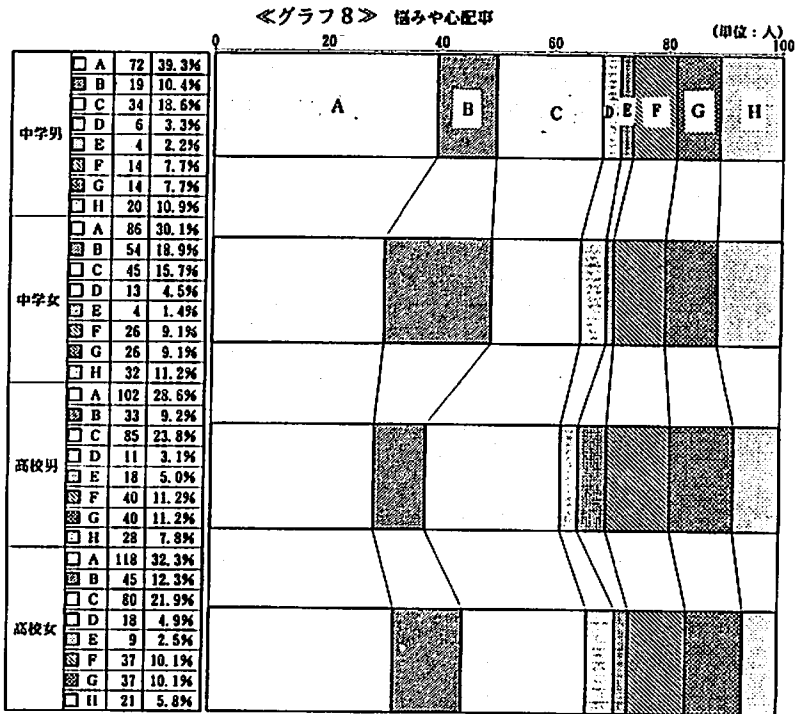


- A. 困ったときや悩みごとのあるときに、相談できる友人。
- B. 休み時間や放課後に何となく雑談する友人。
- C. 遊ぶときに自然に集まってくるタイプで、趣味などがあう。
- D. クラブ活動などで仲間としてやれる友人。
- E. 何ごとでもうまくやれるから尊敬できる友人。

(6) 信頼できる教師の存在⇒自分のことを相談できる本校の教師がいますか。



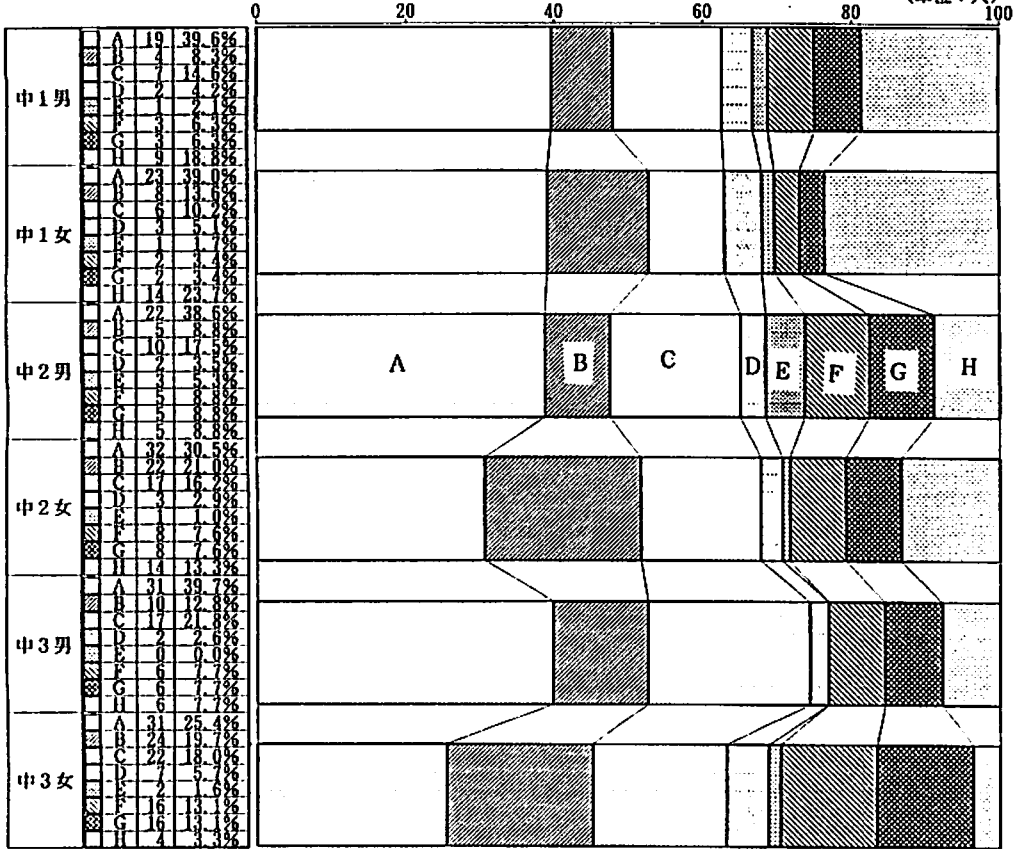
(7) 悩みや心配事⇒悩みや心配事は主に何ですか。(複数回答可)



- A: 勉強や成績のこと    B: 自分の容姿や性格のこと    C: 自分の将来のこと  
D: 友人関係がうまくいかないこと    E: 家族関係がうまくいっていないこと  
F: 自分の健康が気になること    G: 異性や恋愛のこと  
H: 趣味や自分の好きなことをするゆとりがないこと

《グラフ8'》 悩みや心配事

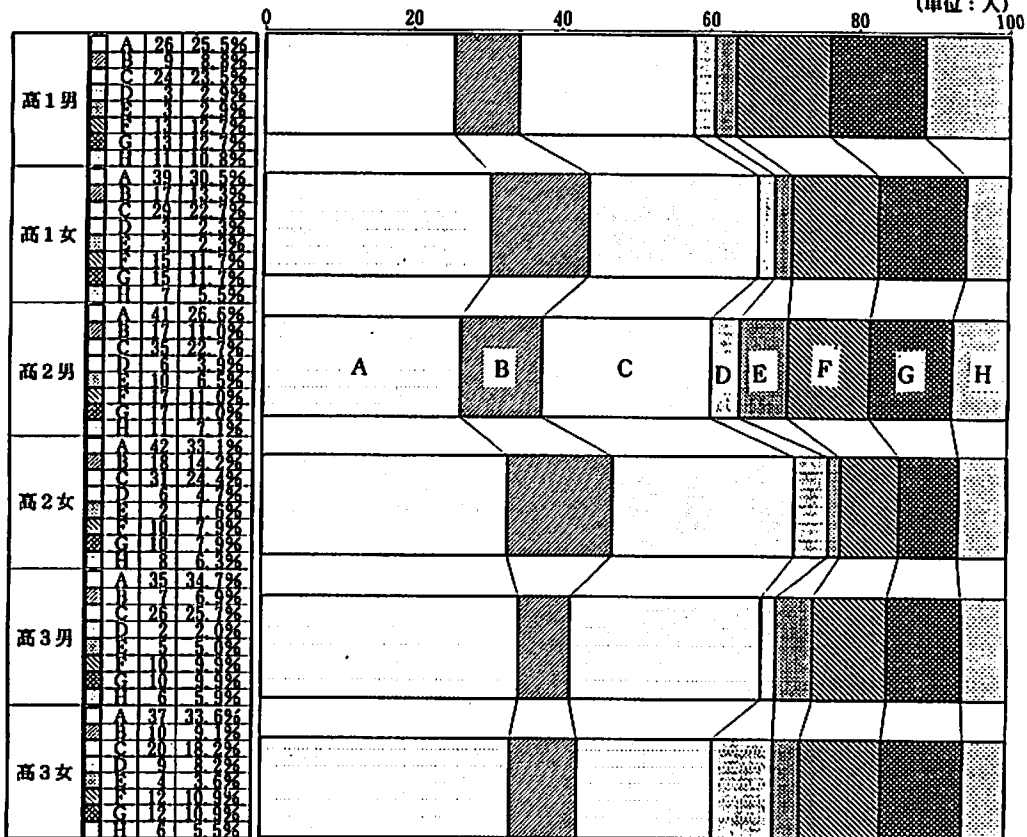
(単位：人)



- A. 勉強や成績のこと
- B. 自分の容姿や性格
- C. 自分の将来のこと
- D. 友人関係がうまくいかないこと
- E. 家族関係がうまくいってないこと
- F. 自分の健康が気になること
- G. 異性や恋愛のこと
- H. 趣味や自分の好きなことをするゆとりがないこと

＜グラフ8＞ 悩みや心配事

(単位：人)

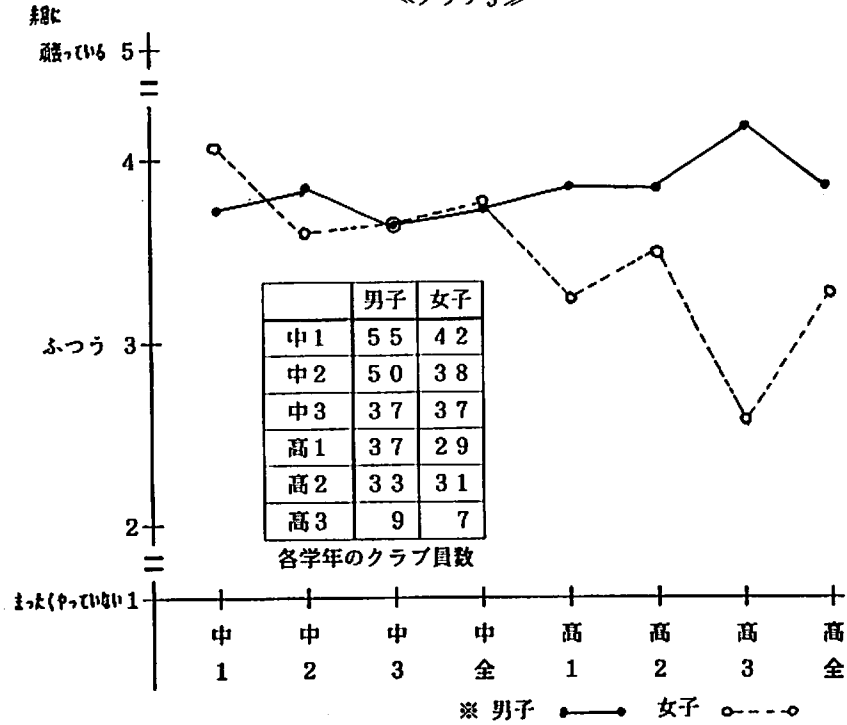


- A. 勉強や成績のこと
- B. 自分の容姿や性格
- C. 自分の将来のこと
- D. 友人関係がうまくいかないこと
- E. 家族関係がうまくいってないこと
- F. 自分の健康が気になること
- G. 異性或恋愛のこと
- H. 趣味や自分の好きなことをするゆとりがないこと

(8) クラブ活動への参加⇒ クラブ活動にどの程度参加していますか。

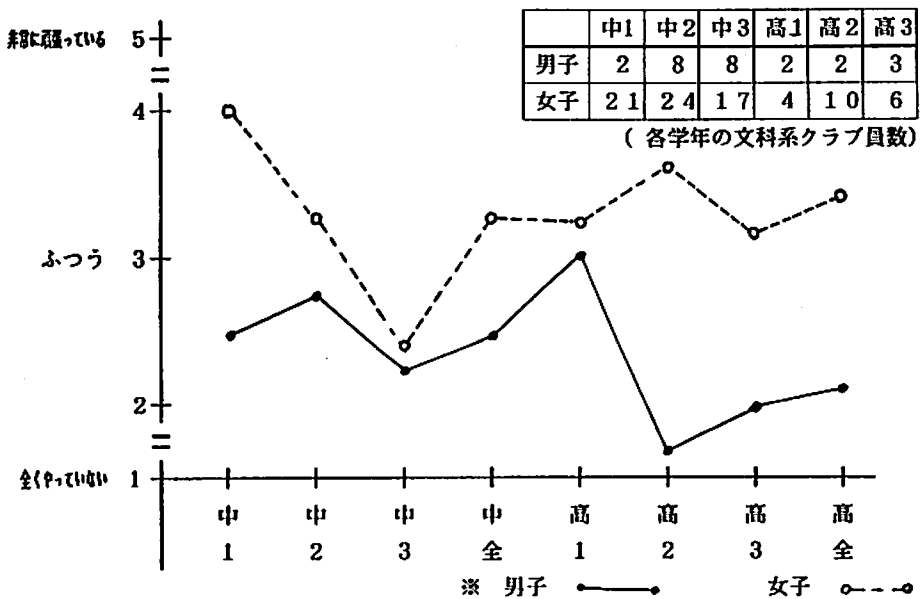
〈 運動系クラブの人〉

《グラフ9》

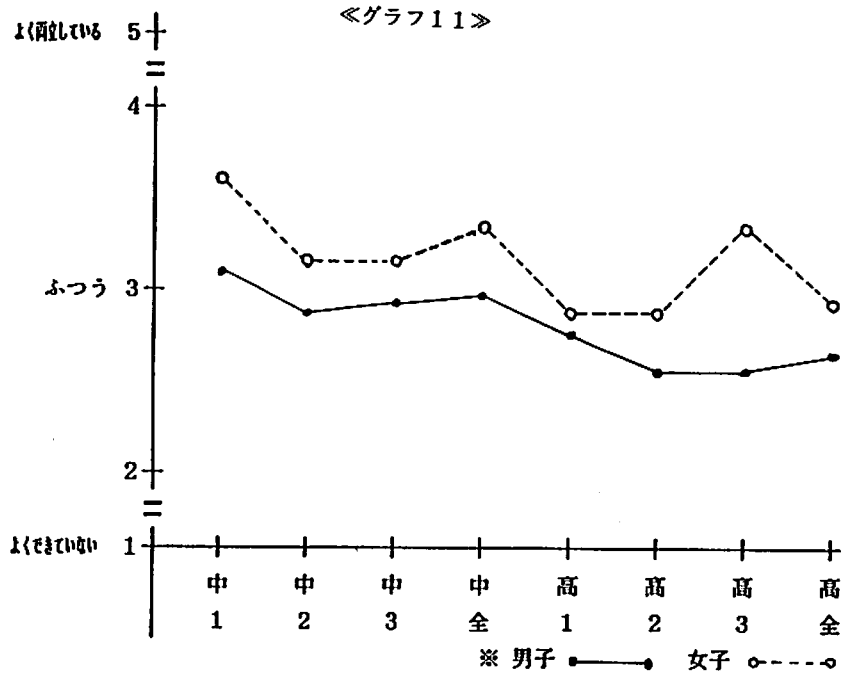


〈 文科系クラブの人〉

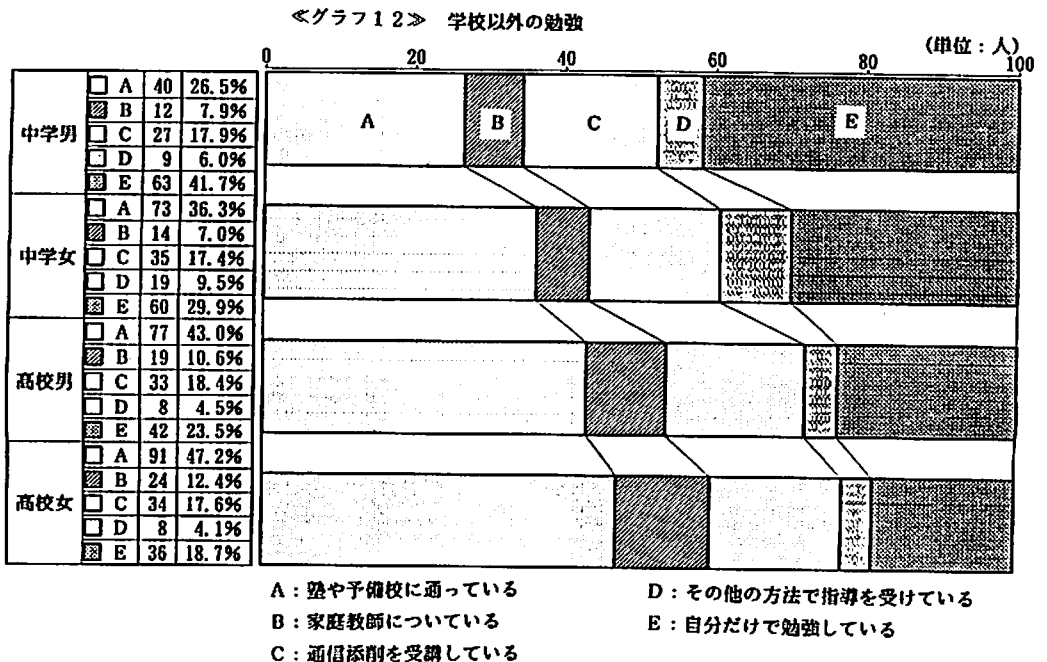
《グラフ10》



(9) 勉強とクラブ活動との両立⇒ 勉強とクラブ活動は両立できていますか。

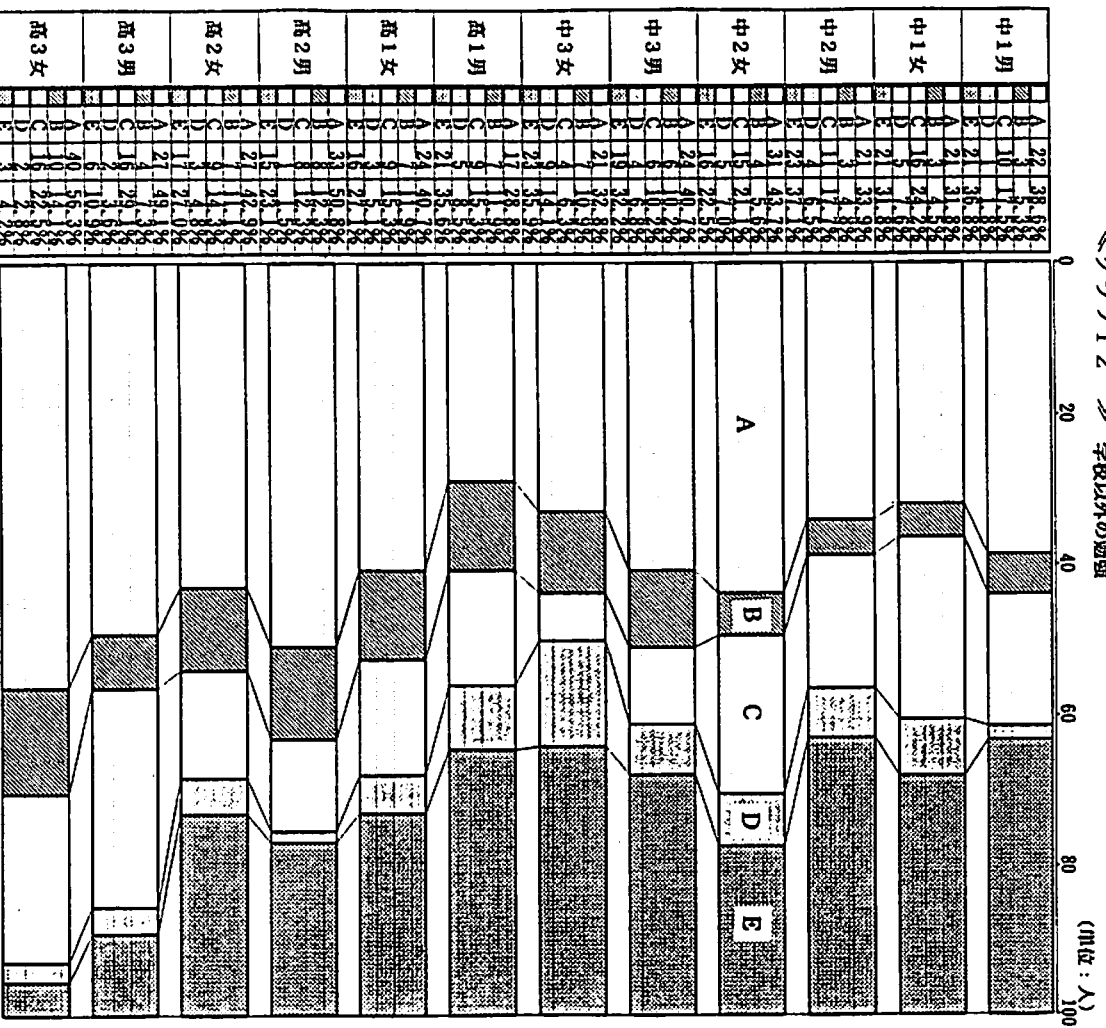


(10) 塾などでの学習の実態⇒ 学校での学習以外に塾などで勉強していますか。(複数回答可)





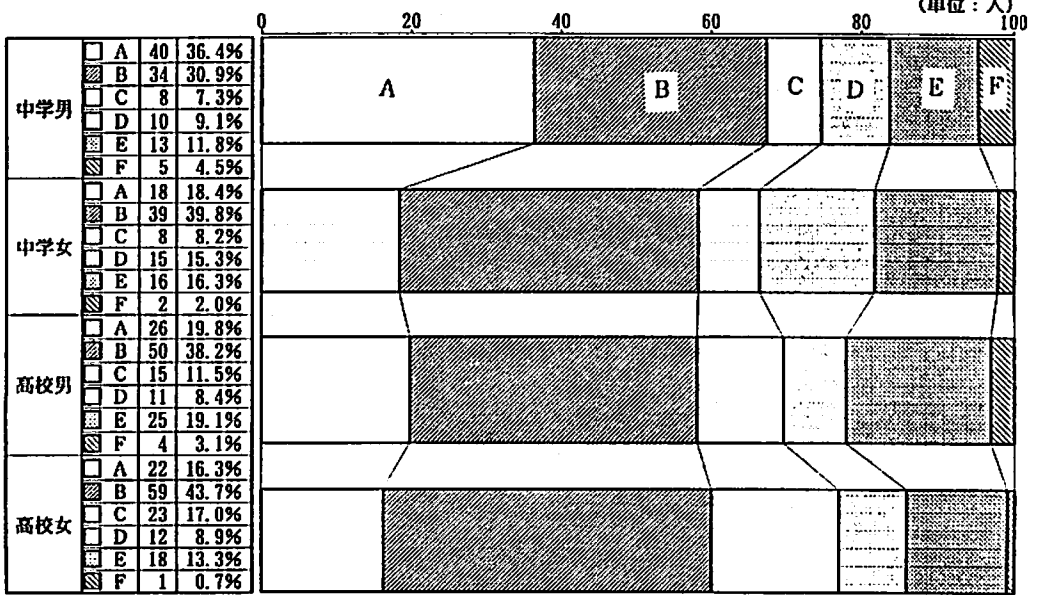
《グラフ12'》 学校以外の勉強



- A : 塾や予備校に通っている
- B : 家庭教師についている
- C : 通信添削を受講している
- D : その他の方法で指導を受けている
- E : 自分だけで勉強している

(11) 塾などに通う理由⇒ 塾などに通うことになった理由は何ですか。(複数回答可)

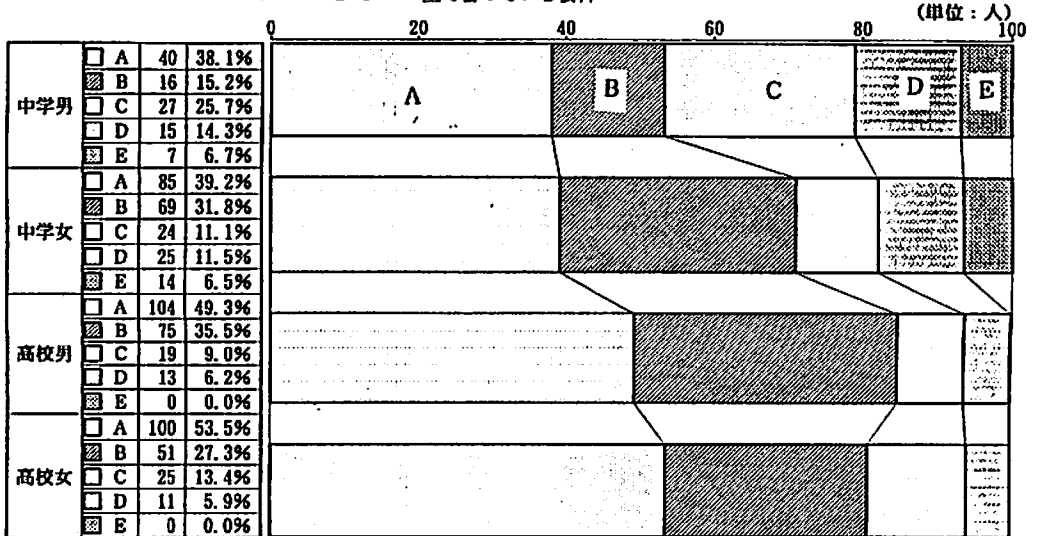
《グラフ13》 塾に通う理由



- A : 成績が下がったため  
 B : 自分の意欲だけでは勉強できない  
 C : 塾などに通わなかったら将来が不安である  
 D : もっと勉強したいから  
 E : 学校の勉強だけでは不満である  
 F : 友人に誘われたので

(12) 塾などで習っている教科⇒ 塾などで習っている教科は何ですか。(複数回答可)

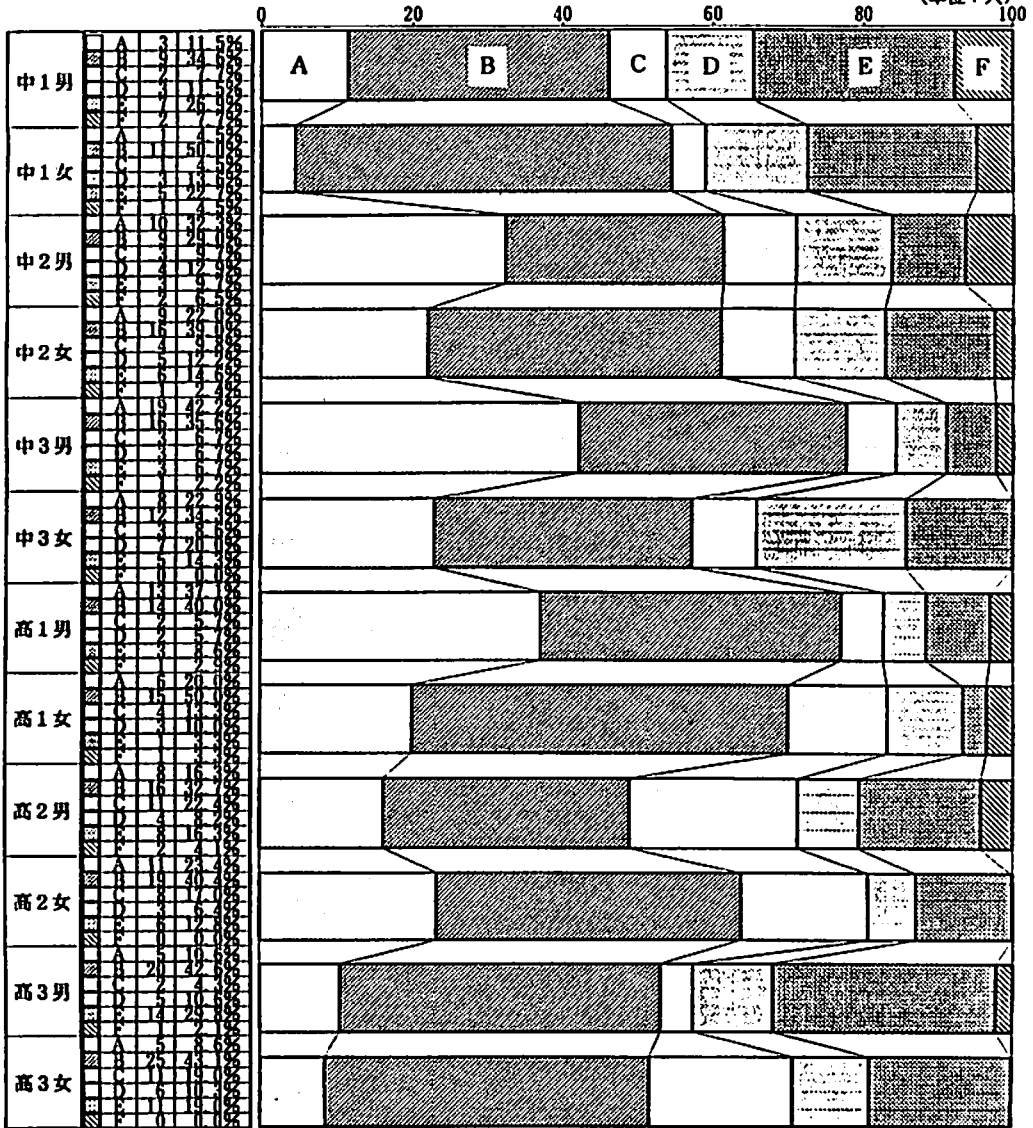
《グラフ14》 塾で習っている教科



- A : 英語 B : 数学 C : 国語 D : 理科 E : 社会

<グラフ13' > 塾に通う理由

(単位:人)



A : 成績が下がったため

B : 自分の意欲だけでは勉強できない

C : 塾などに通わなかったら将来が不安である

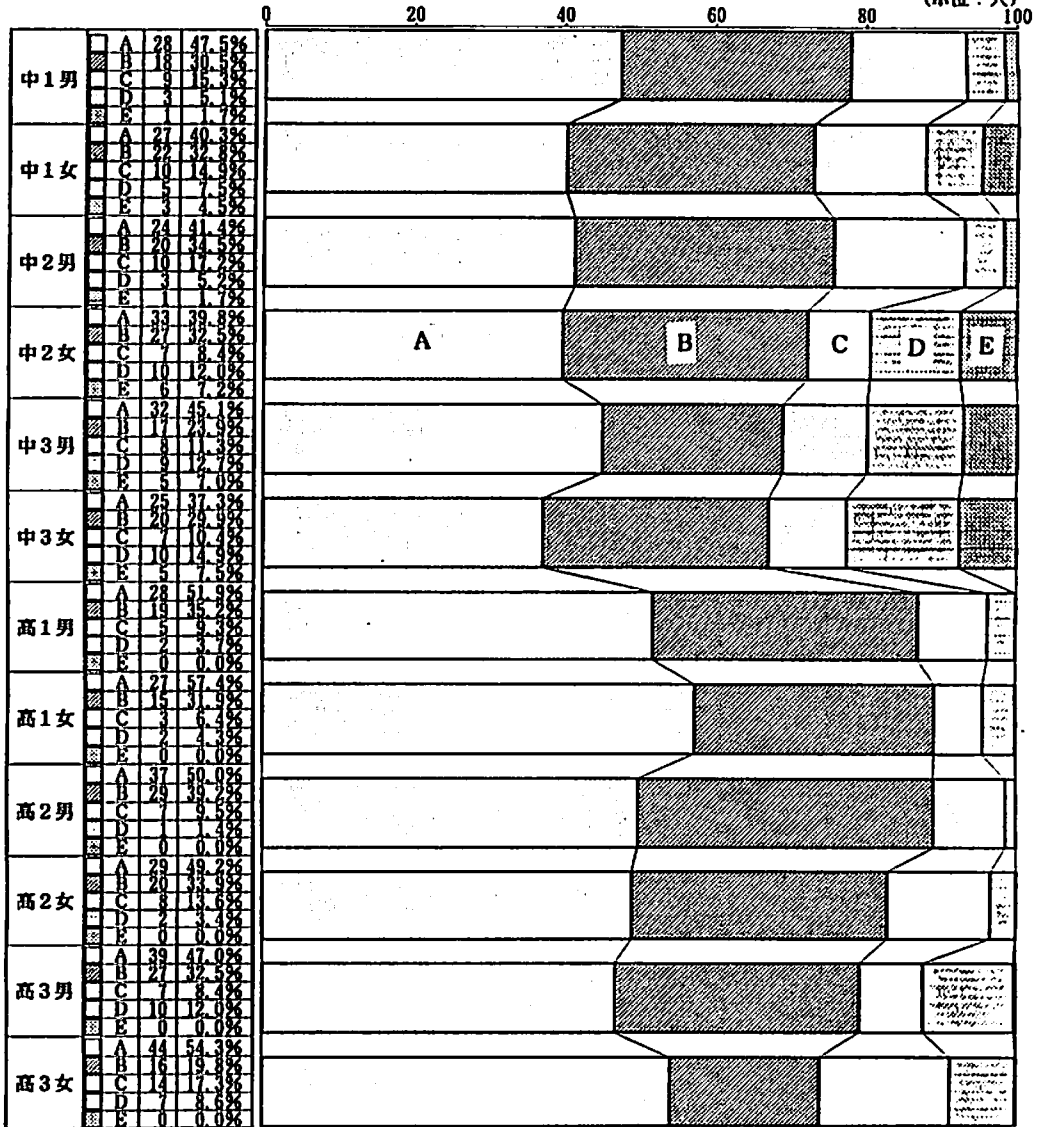
D : もっと勉強したいから

E : 学校の勉強だけでは不満である

F : 友人に誘われたので

《グラフ14'》 塾で習っている教科

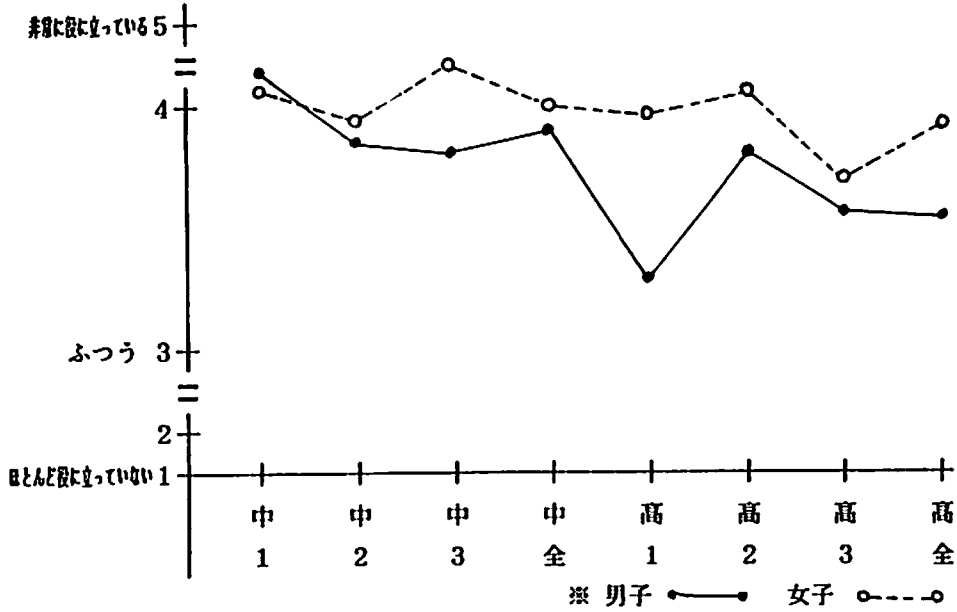
(単位:人)



A : 英語 B : 数学 C : 国語 D : 理科 E : 社会

(13) 塾などの学習への評価⇒ 塾などでの勉強は自分にとって役立っていると思いますか。

《グラフ15》



(14) 塾などの通学の頻度⇒ 一週間に何回ぐらい塾などに通っていますか。

《表1》

学年	性別	人数	最低 ~ 最高	平均回数
中1	男子	27	1 ~ 4回	2.07
	女子	25	1 ~ 3	1.84
中2	男子	25	1 ~ 3	1.96
	女子	38	1 ~ 4	2.00
中3	男子	33	1 ~ 4	2.18
	女子	33	1 ~ 4	2.03
高1	男子	27	1 ~ 3	1.78
	女子	30	1 ~ 4	1.60
高2	男子	41	1 ~ 4	2.12
	女子	34	1 ~ 4	2.00
高3	男子	44	1 ~ 6	2.36
	女子	47	1 ~ 5	2.45

※ 全学通学平均回数

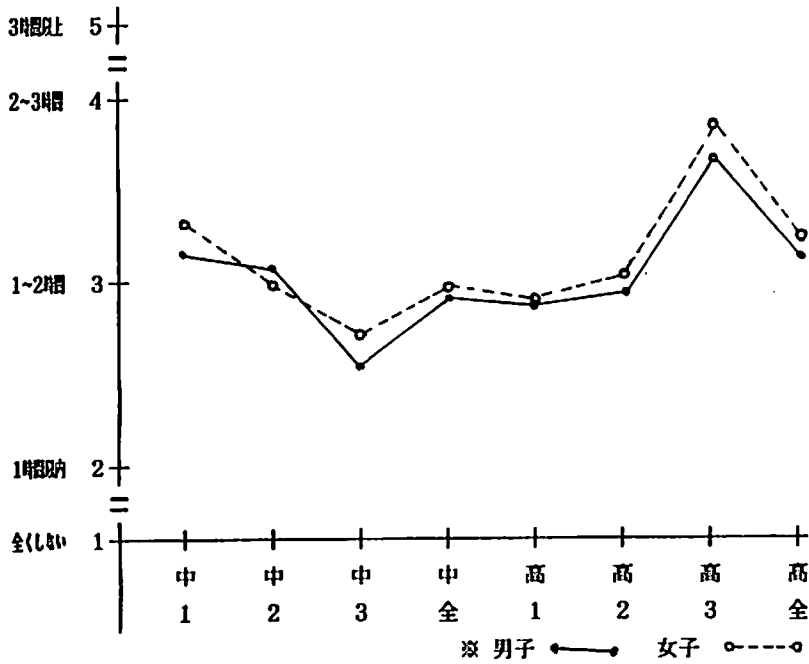
2.07

男子全 2.11

女子全 2.03

(15) 家庭での学習時間⇒ 家庭での(塾、予備校なども含む)学習時間は1日に  
約何時間ですか。

《グラフ16》

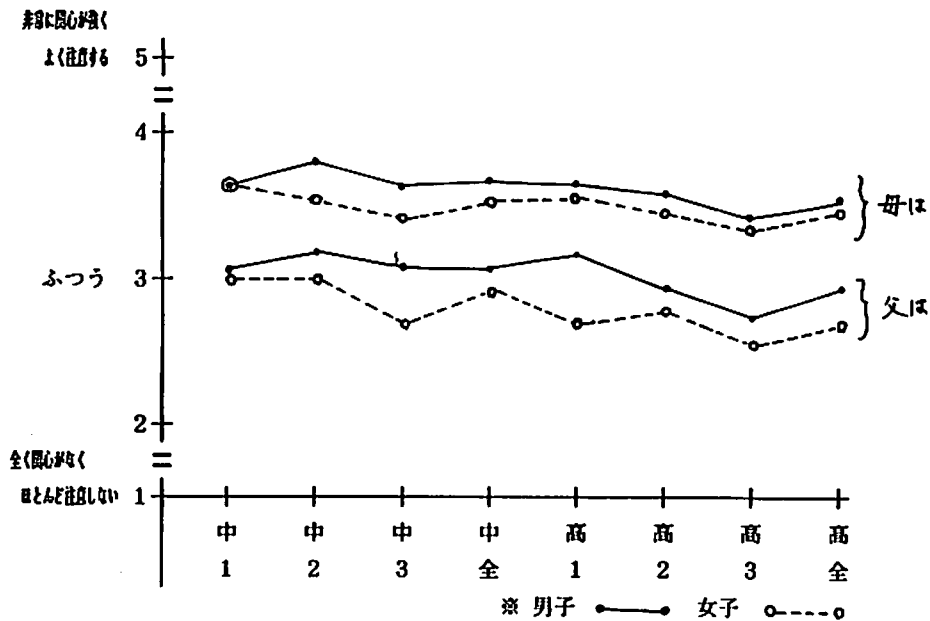


(16) 親の教育的関心⇒ 親は勉強についてよく注意し、関心が深いほうですか。

(父は)

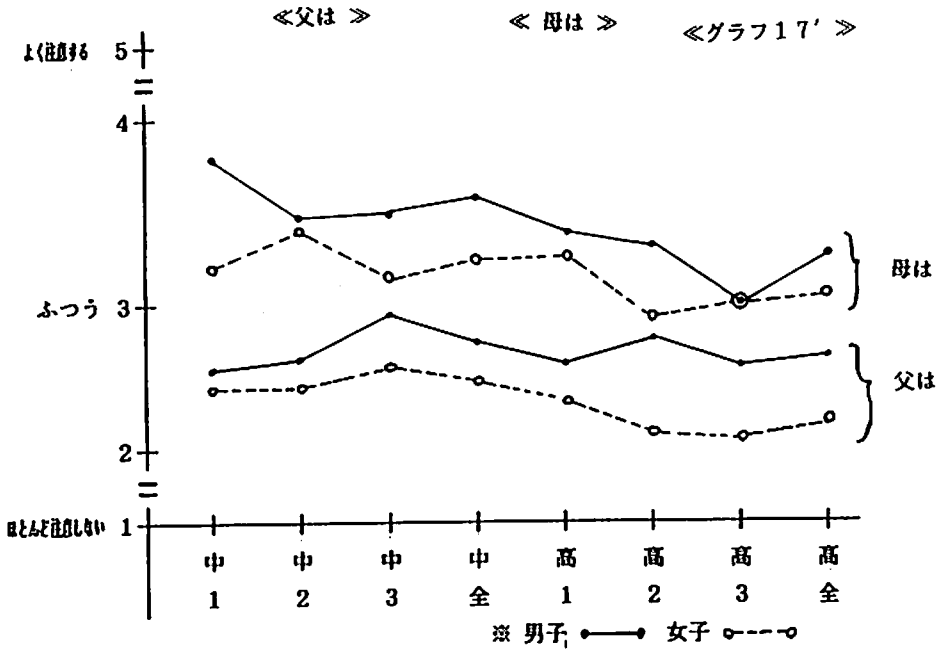
(母は)

《グラフ17》

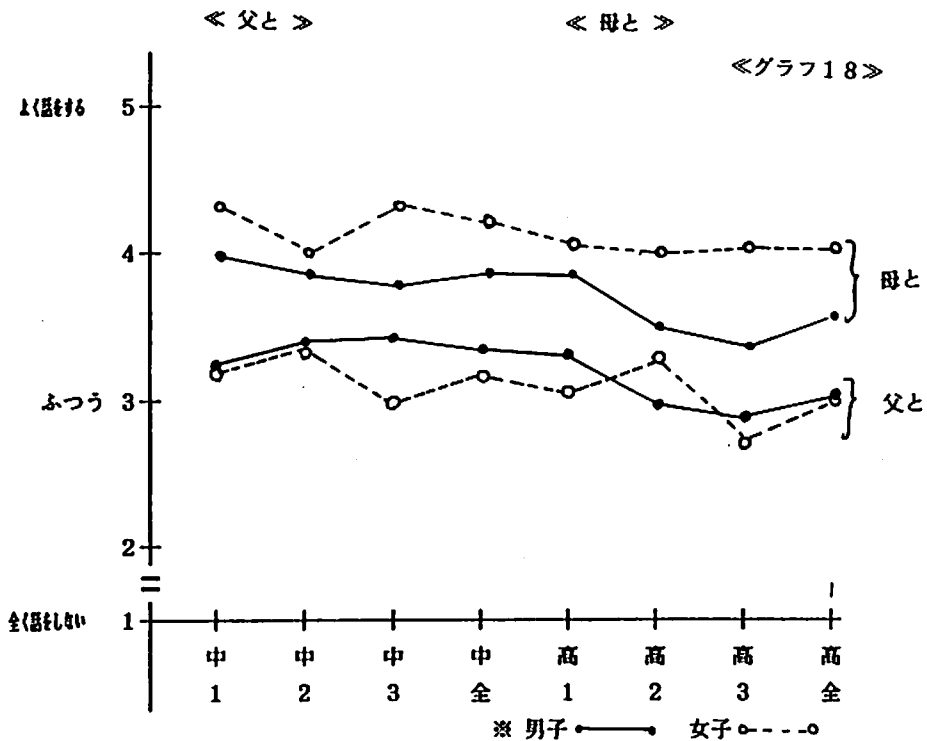


※ (16) の設問に対する〈親用アンケート〉より参考

子供の勉強に対する関心⇒ 子供の勉強に対して、よく注意するほうですか。

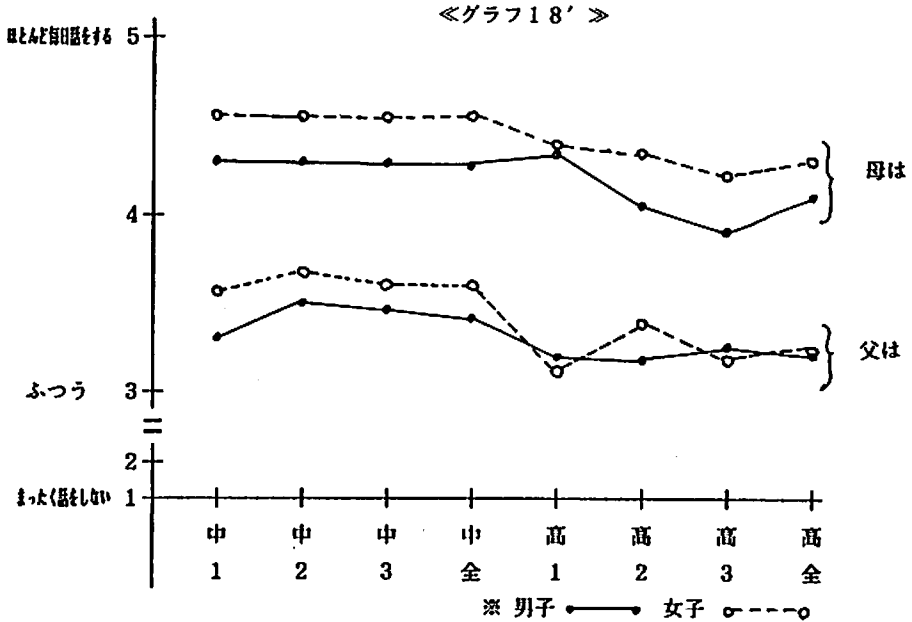


(17) 親との対話⇒ 親とよく話し合いますか。



※ (17) の設問に対する親用アンケートより参考  
 子供との対話⇒ 子供とよく話し合いますか。

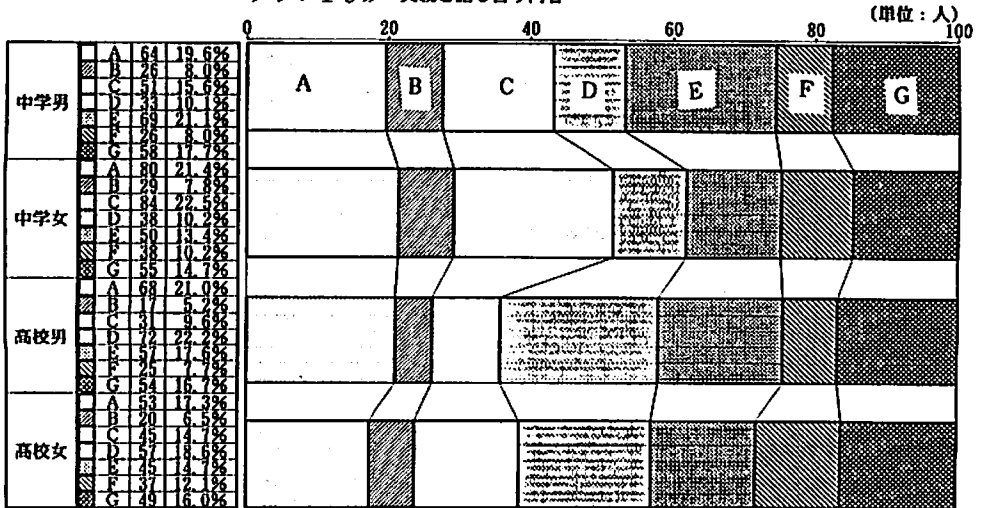
＜ 父は ＞      ＜ 母は ＞



(18) 親と話し合う内容⇒ (17) でふつう以上に親と話し合うと答えた人に対して  
 話し合う内容は主に何ですか。(複数回答可)

a. 父親と

＜グラフ19＞ 父親と話し合う内容

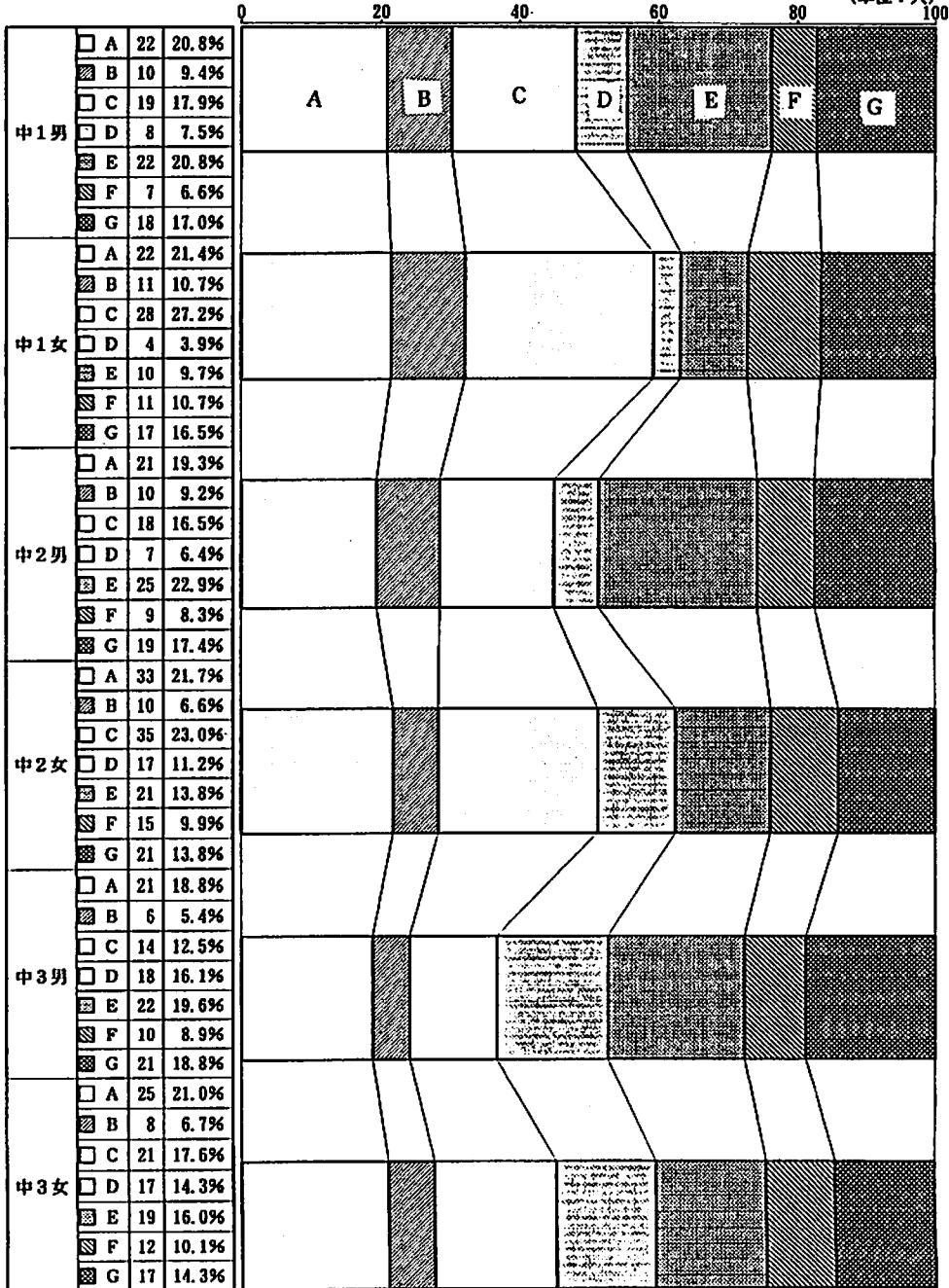


- A: 勉強や成績のこと
- B: 友人関係のこと
- C: 学校生活のこと
- D: 自分の将来や進路のこと
- E: 趣味や遊びのこと
- F: 親の仕事の内容や職場の様子
- G: 政治や社会の出来事



《グラフ19'》 父親と話し合う内容 (中学)

(単位:人)



A : 勉強や成績のこと

B : 友人関係のこと

C : 学校生活のこと

D : 自分の将来や進路のこと

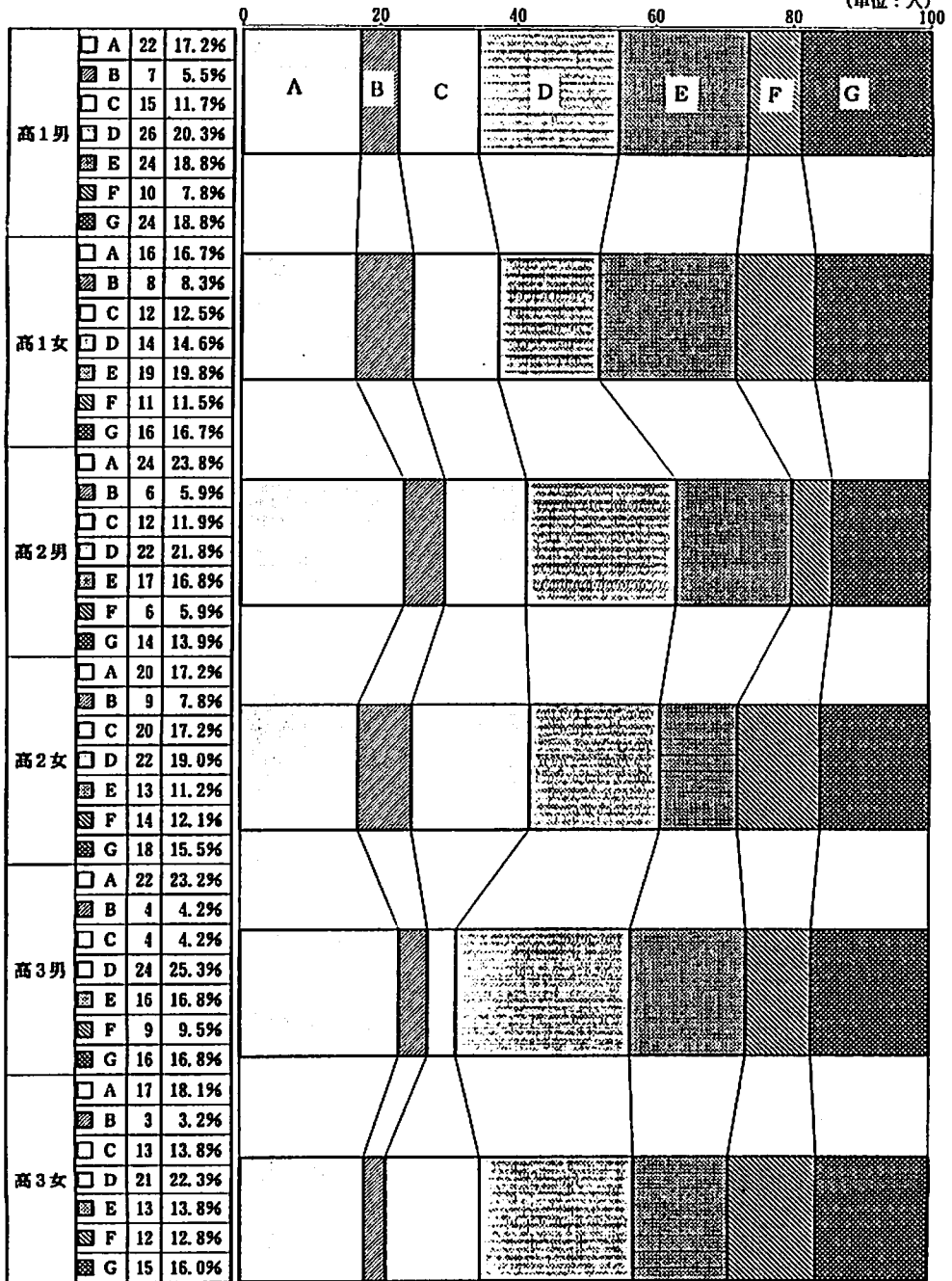
E : 趣味や遊びのこと

F : 親の仕事の内容や職場の様子

G : 政治や社会の出来事

《グラフ19》 父親と話し合う内容（高校）

(単位：人)

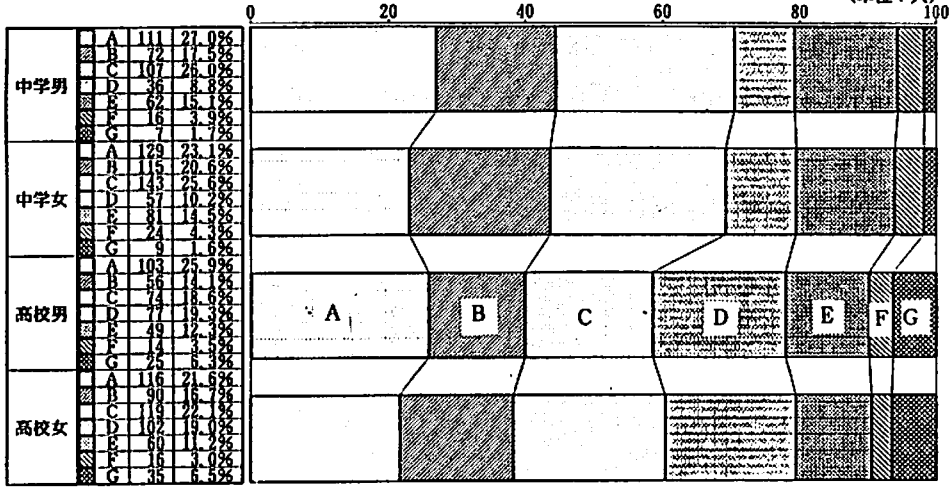


A : 勉強や成績のこと  
 B : 友人関係のこと  
 C : 学校生活のこと

D : 自分の将来や進路のこと  
 E : 趣味や遊びのこと  
 F : 親の仕事の内容や職場の様子  
 G : 政治や社会の出来事

《グラフ20》 母親と話し合う内容

(単位：人)

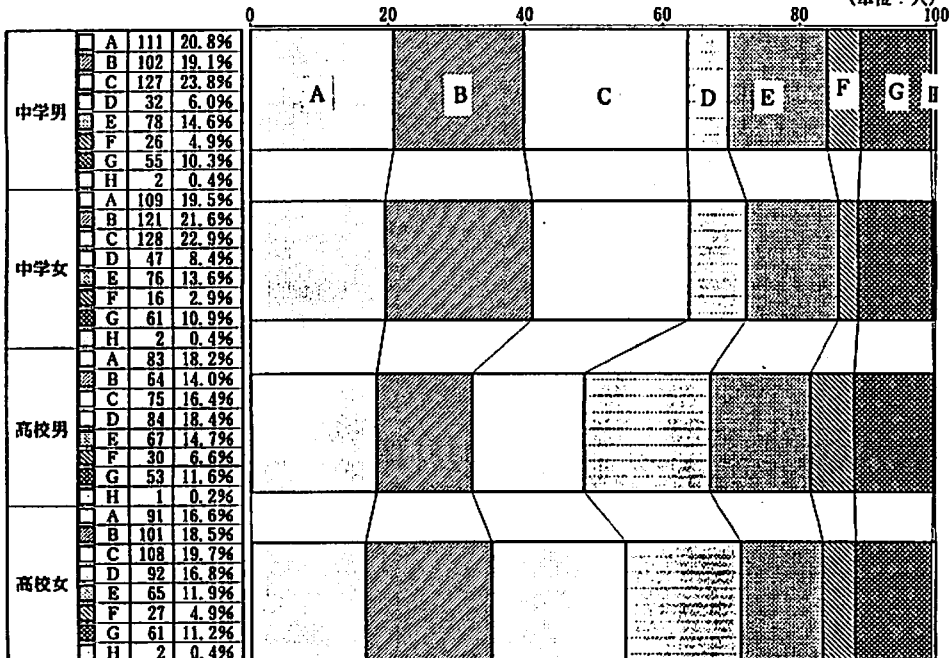


- A：勉強や成績のこと
- B：友人関係のこと
- C：学校生活のこと
- D：自分の将来や進路のこと
- E：趣味や遊びのこと
- F：親の仕事の内容や職場の様子
- G：政治や社会の出来事

親用アンケートより参考

《グラフ21》 子供と話し合う内容

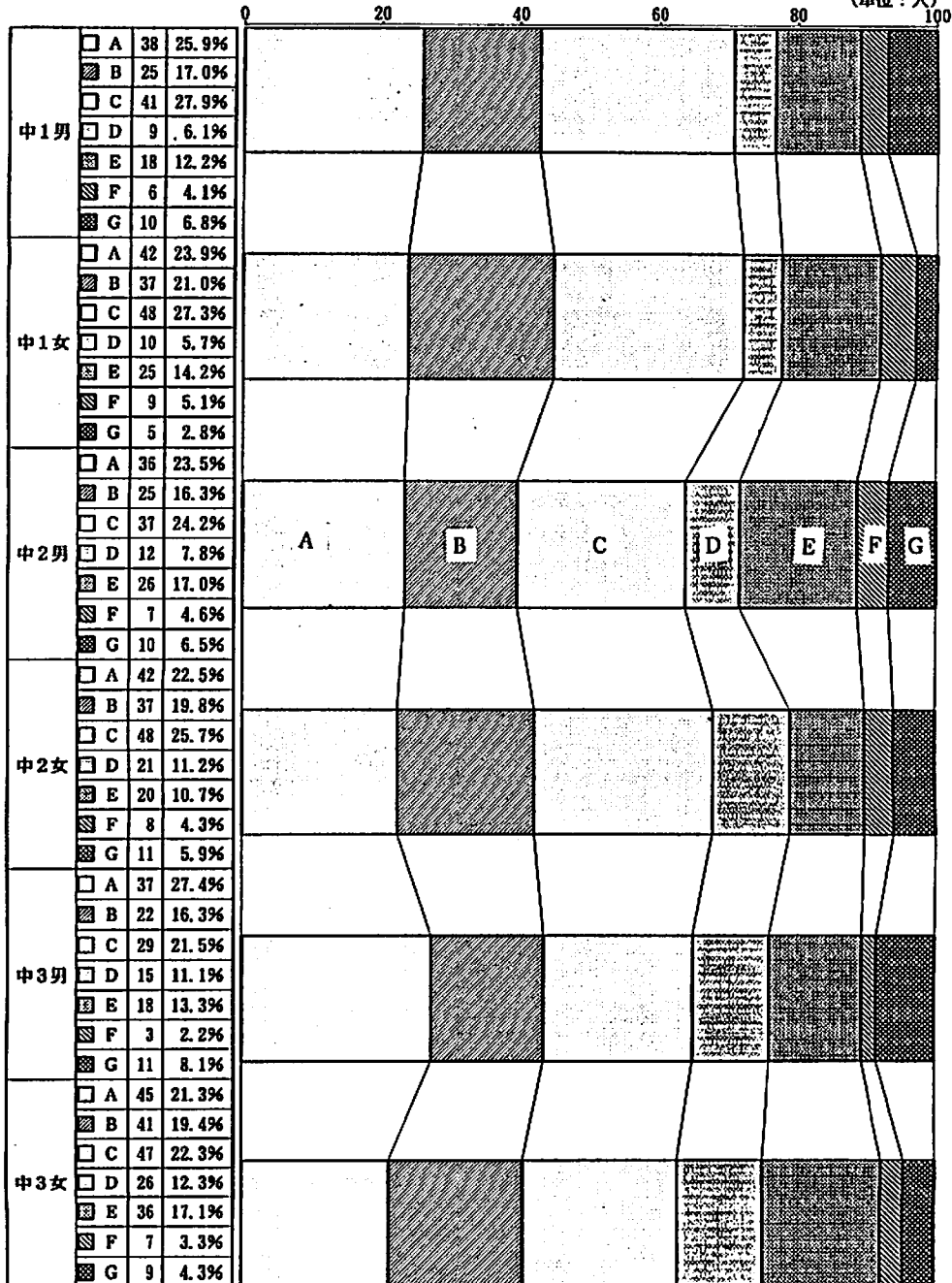
(単位：人)



- A. 勉強や成績のこと
- B. 友人関係のこと
- C. 子供の学校生活のこと
- D. 子供の将来の進路のこと
- E. 趣味や遊びのこと
- F. 親の仕事の内容や職場の様子
- G. 政治や社会の出来事
- H. その他

＜グラフ20＞ 母親と話し合う内容（中学）

（単位：人）



A：勉強や成績のこと

D：自分の将来や進路のこと

B：友人関係のこと

E：趣味や遊びのこと

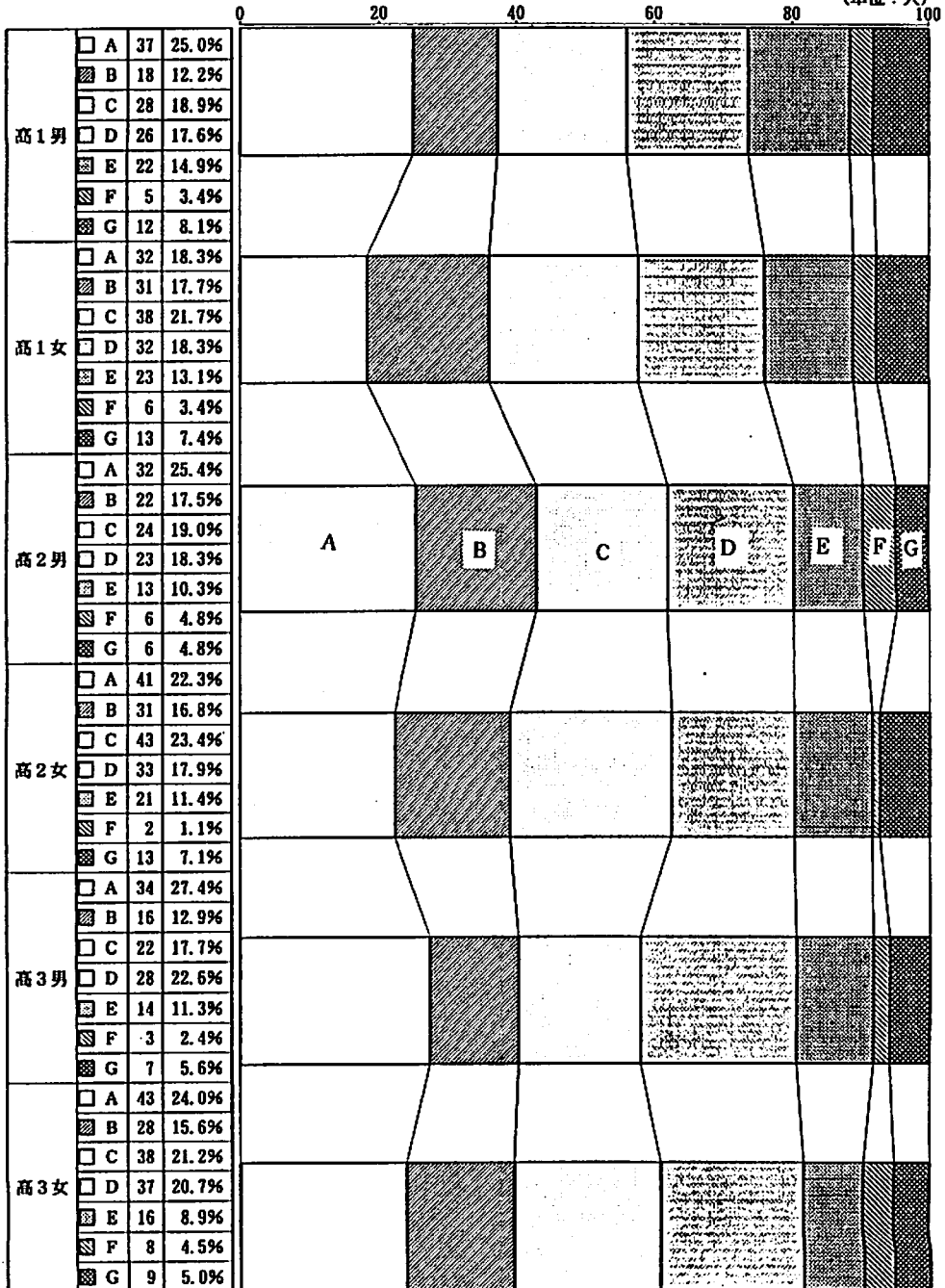
C：学校生活のこと

F：親の仕事の内容や職場の様子

G：政治や社会の出来事

＜グラフ20＞ 母親と話し合う内容（高校）

（単位：人）



A：勉強や成績のこと

B：友人関係のこと

C：学校生活のこと

D：自分の将来や進路のこと

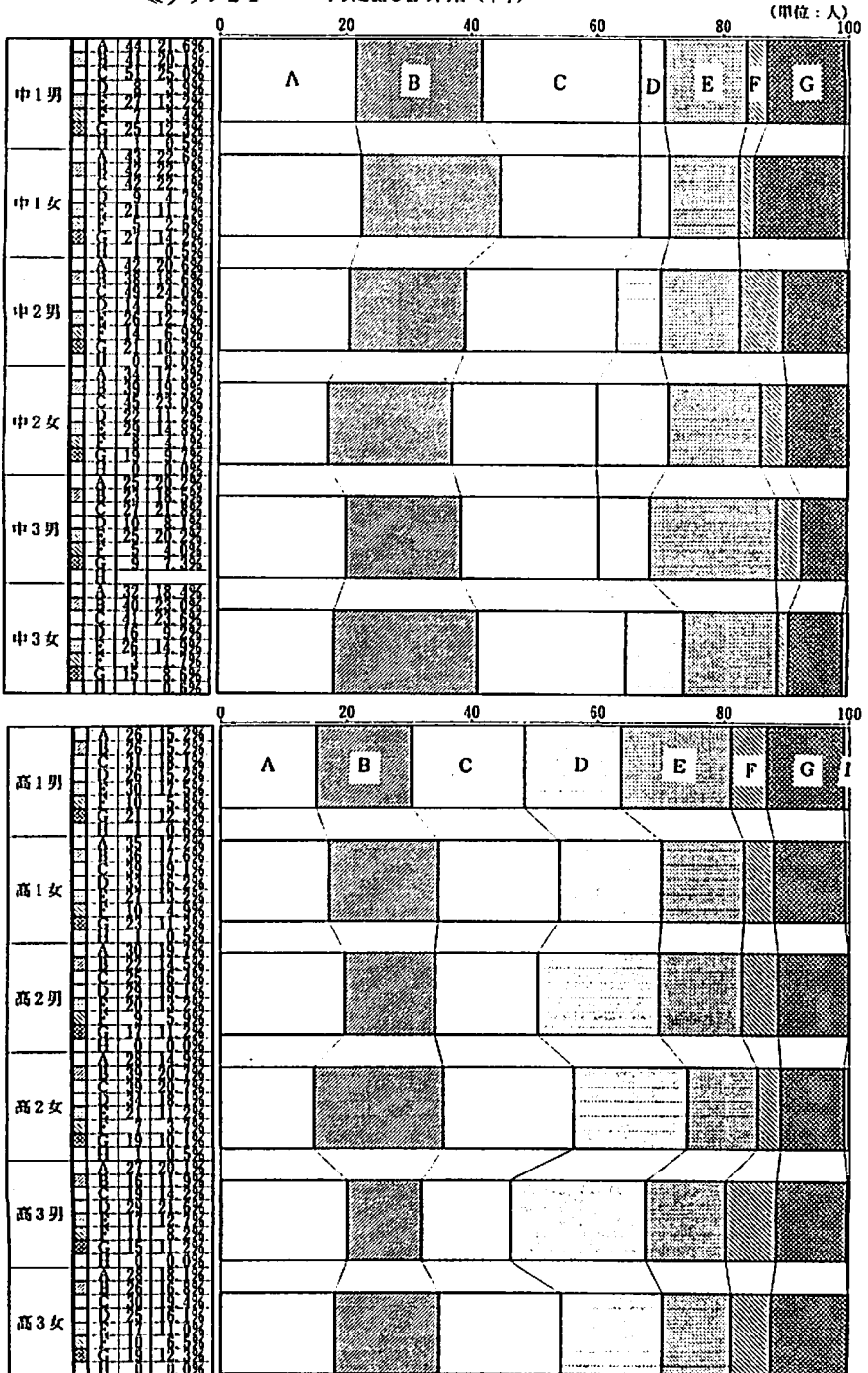
E：趣味や遊びのこと

F：親の仕事の内容や職場の様子

G：政治や社会の出来事

親用アンケートより参考

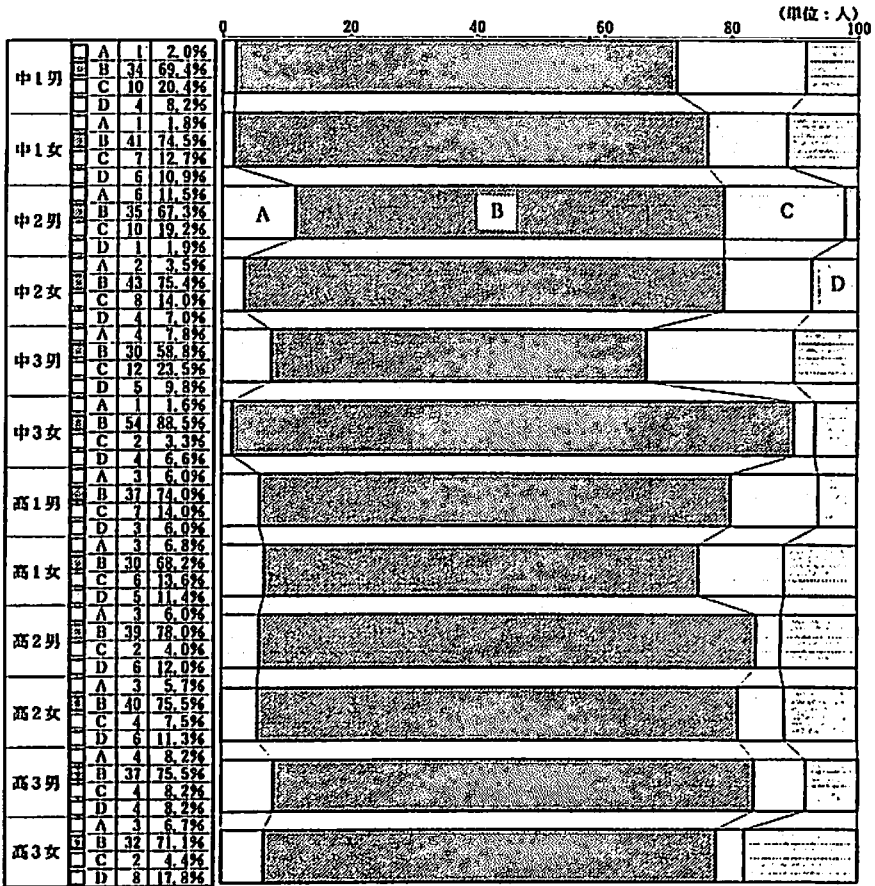
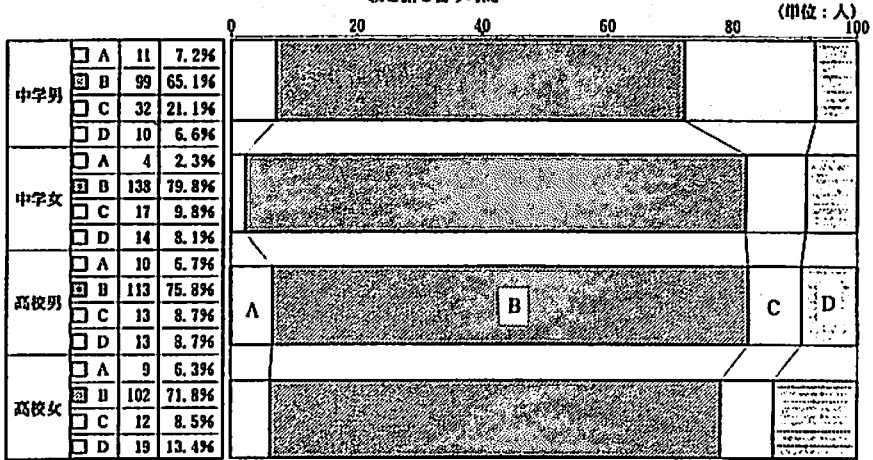
《グラフ21'》 子供と話し合う内容 (中学)



- A. 勉強や成績のこと B. 友人関係のこと C. 子供の学校生活のこと  
 D. 子供の将来の進路のこと E. 趣味や遊びのこと  
 F. 親の仕事の内容や職場の様子 G. 政治や社会の出来事 H. その他

(19) 親と話し合う時間⇒ 親と話し合うのは主にどういう時ですか。1つだけ選んでください。

＜グラフ22＞ 親と話し合う時間



A: 朝食時 B: 夕食時やその団楽 C: 日曜日や休日 D: 就寝前

(20) 日常生活における親のしつけの主な内容(子供から見た)⇒ 日常生活で(両)親からよく注意される点はどれですか。次ぎの項目の中から5つ選んで下さい

- A. 異性との交際 B. 勉強 C. 友達との交際 D. お金の使い方 E. 家事の手伝い  
 F. 家業の手伝い G. 服装や持ち物 H. あいさつや礼儀正しくすること  
 I. 身の回りの片付けや整理 J. 身体、頭髮などを清潔にすること K. 言葉づかい  
 L. 悪い遊びや大人びた遊びをしないこと M. 学校に遅れないようにすること  
 N. 夜更かしせずに早く寝ること O. 帰宅時間  
 P. 趣味や娯楽・レクリエーションに熱中しすぎないこと(テレビ、ラジオ、CD、テープなどの視聴や、マンガ、ファミコン、パソコン、楽器の演奏など)  
 Q. 食事のマナー R. 公共の場でのマナー(ゴミ、空き缶などの散らかし、列のわりこみなどしないこと)

アンケート結果 < 日常生活で、生徒が(両)親からよく注意される点 上位 BIG5 >

<表2>

～子供から見た親のしつけの内容～

学年	性別	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
中1	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	K. 言葉づかい	P. テレビでの勉強
	女	B. 勉強	I. 身の回り片付け	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	H. 挨拶や礼儀
中2	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	D. お金の使い方	P. テレビでの勉強	E. 家事手伝い
	女	E. 家事手伝い	B. 勉強	I. 身の回り片付け	H. 挨拶や礼儀	K. 言葉づかい
中3	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	H. 挨拶や礼儀	P. テレビでの勉強	E. 家事手伝い
	女	B. 勉強	I. 身の回り片付け	H. 挨拶や礼儀	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い
中学全	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	P. テレビでの勉強	D. お金の使い方
	女	B. 勉強	E. 家事手伝い	I. 身の回り片付け	K. 言葉づかい	H. 挨拶や礼儀
高1	男	B. 勉強	D. お金の使い方	I. 身の回り片付け	H. 挨拶や礼儀	P. テレビでの勉強
	女	B. 勉強	K. 言葉づかい	H. 挨拶や礼儀	E. 家事手伝い	I. 身の回り片付け
高2	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	M. 学校への遅刻	D. お金の使い方	P. テレビでの勉強
	女	B. 勉強	E. 家事手伝い	I. 身の回り片付け	H. 挨拶や礼儀	K. 言葉づかい
高3	男	B. 勉強	D. お金の使い方	M. 学校への遅刻	P. テレビでの勉強	H. 挨拶や礼儀
	女	B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	K. 言葉づかい	M. 学校への遅刻
高校全	男	B. 勉強	D. お金の使い方	I. 身の回り片付け	M. 学校への遅刻	H. 挨拶や礼儀
	女	B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	K. 言葉づかい	H. 挨拶や礼儀
中高全	男	B. 勉強	I. 身の回り片付け	D. お金の使い方	P. テレビでの勉強	E. 掃除 H. 挨拶や礼儀
	女	B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	K. 言葉づかい	H. 挨拶や礼儀
中高全		B. 勉強	I. 身の回り片付け	E. 家事手伝い	H. 挨拶や礼儀	K. 言葉づかい



〈表3〉 アンケートの結果集計

	中 1		中 2		中 3							
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%				
A. 異性との交際	0	0.0	1	0.4	1	0.5	2	0.8	0	0.0	5	2.0
B. 勉強	4	17.3	5	18.0	3	18.0	3	14.4	3	18.0	3	14.3
C. 友達との交際	9	3.6	9	3.2	8	4.0	1	4.9	6	2.9	5	2.0
D. お金の使い方	1	7.6	1	6.8	1	9.5	1	6.6	1	6.3	1	5.3
E. 家事の手伝い	2	3.9	2	10.4	1	6.8	3	15.2	1	8.7	2	9.0
F. 家業の手伝い	2	0.8	0	0.0	1	0.5	2	0.8	3	1.4	2	0.8
G. 服装や持ち物	7	2.8	6	2.2	1	6.0	9	3.7	7	3.4	9	3.7
H. あいさつや礼儀	1	5.6	2	9.7	8	4.0	2	8.6	2	10.2	2	9.4
I. 身の回りの片づけ	3	12.1	3	12.6	2	14.0	2	9.4	2	13.1	2	11.0
J. 身体などの清潔	5	2.0	3	1.1	4	2.0	3	1.2	2	1.0	1	0.4
K. 言葉づかい	2	8.1	2	10.4	1	6.0	2	8.2	1	6.3	2	9.4
L. 悪い遊び	3	1.2	2	0.7	5	2.5	5	2.1	6	2.9	7	2.9
M. 学校への遅刻	1	5.6	4	1.4	7	3.5	3	1.2	8	3.9	1	4.5
N. 夜更かしせずに早寝	1	7.6	2	7.5	1	7.0	1	7.9	6	2.9	1	7.3
O. 帰宅時間	5	2.0	6	2.6	2	1.0	5	2.1	4	2.0	1	4.5
P. テレビなどの熱中	1	9.7	1	6.8	1	6.0	1	7.0	1	9.3	1	6.1
Q. 食事のマナー	9	3.6	1	4.7	5	2.5	1	4.1	8	3.9	8	3.7
R. 公共の場でのマナー	9	3.6	1	4.0	6	3.0	4	1.6	7	3.4	1	4.1
計	2	4.8	2	7.8	2	0.0	2	4.3	2	0.5	2	4.5
総 計	5 2 6				4 4 3				4 5 0			

( 高 校 )

	高 1		高 2		高 3							
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%				
A. 異性との交際	2	0.8	5	2.1	2	0.8	4	1.6	5	2.4	4	1.8
B. 勉強	4	18.2	3	12.3	4	18.6	3	13.9	4	18.9	3	15.5
C. 友達との交際	6	2.4	9	3.8	3	1.3	4	1.6	9	4.2	5	2.3
D. お金の使い方	2	8.1	1	4.6	2	8.7	1	4.5	2	10.8	1	5.9
E. 家事の手伝い	1	5.9	2	11.3	1	5.2	3	13.5	1	6.6	2	9.6
F. 家業の手伝い	2	0.8	0	0.0	2	0.8	1	0.4	4	1.9	0	0.0
G. 服装や持ち物	1	4.7	1	5.4	8	3.5	1	4.9	6	2.8	1	4.6
あいさつや礼儀	2	9.5	2	12.1	1	6.1	2	9.8	1	7.5	1	5.5
I. 身の回りの片づけ	2	10.1	2	10.9	2	12.6	3	13.1	1	5.2	2	13.2
J. 身体などの清潔	6	2.4	3	1.3	4	1.7	3	1.2	1	0.5	5	2.3
K. 言葉づかい	1	4.7	3	12.6	9	3.9	2	9.4	1	4.7	2	9.1
L. 悪い遊び	5	2.0	9	3.8	5	2.2	6	2.4	8	3.8	2	0.9
M. 学校への遅刻	1	7.7	4	1.7	2	11.2	1	6.5	1	8.5	1	8.2
N. 夜更かしせずに早寝	1	5.1	1	4.6	1	6.1	8	3.3	1	5.7	1	5.0
O. 帰宅時間	6	2.4	8	3.3	6	2.6	1	4.1	4	1.9	1	4.6
P. テレビなどの熱中	1	7.1	1	4.6	1	7.8	1	4.5	1	8.0	1	5.5
Q. 食事のマナー	7	2.8	7	2.9	1	4.3	6	2.4	7	3.3	8	3.7
R. 公共の場でのマナー	7	2.8	5	2.1	6	2.6	9	3.7	7	3.3	5	2.3
計	2	5.3	2	3.9	2	3.1	2	4.5	2	1.2	2	1.9
総 計	4 9 2				4 7 6				4 3 1			

※(20)の参考 < 日常生活で、親が子供に対して特に注意しているしつけの項目 上位 BIG5 >

<表4> ~ 親が思う、子供に対するしつけの内容 ~

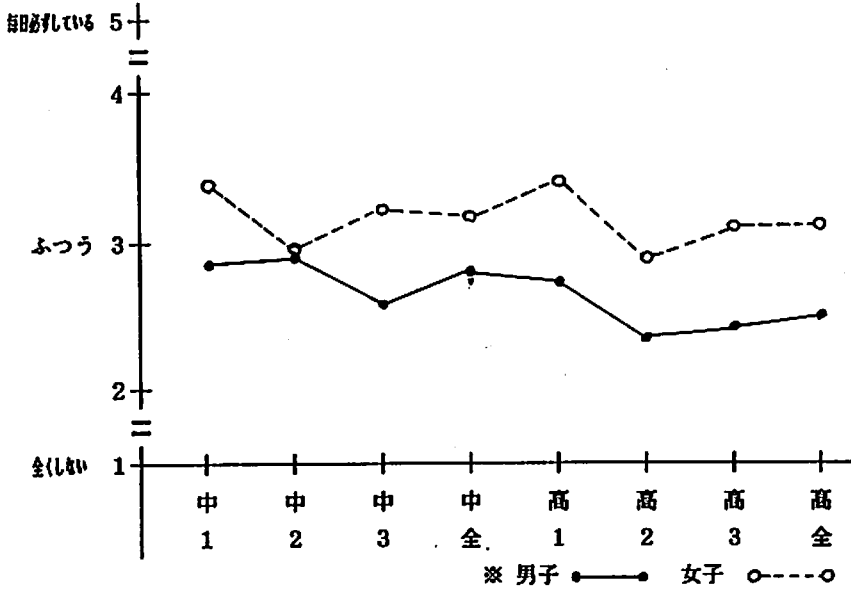
学年	性別	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
中1	男	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	B. 勉強	Q. 食事のマナー	R. 公共の場のマナー
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	R. 公共の場のマナー	B. 勉強
中2	男	H. 挨拶や礼儀	B. 勉強	I. 身の回り清掃	D. お金の使い方	P. テレビの観
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	B. 勉強
中3	男	H. 挨拶や礼儀	B. 勉強	I. 身の回り清掃	C. 友達関係	P. テレビの観 K. 言葉づかい
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	C. 友達関係	B. 勉強	E. 家事手伝い
中学全	男	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	B. 勉強	D. お金の使い方	K. 言葉づかい
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	B. 勉強
高1	男	H. 挨拶や礼儀	P. テレビの観	I. 身の回り清掃	D. お金の使い方	B. 勉強
	女	H. 挨拶や礼儀	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	C. 友達関係	B. 勉強
高2	男	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	B. 勉強	M. 学校への遅刻	C. 友達関係
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	C. 友達関係 O. 身体
高3	男	H. 挨拶や礼儀	M. 学校への遅刻	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	B. 勉強 Q. 食事のマナー
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	B. 勉強	C. 友達関係
高校全	男	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	B. 勉強	M. 学校への遅刻	D. お金の使い方 P. テレビの観
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	C. 友達関係	E. 家事手伝い
中高全	男	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	B. 勉強	D. お金の使い方	P. テレビの観
	女	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	E. 家事手伝い	B. 勉強 C. 友達関係
中高全	全	H. 挨拶や礼儀	I. 身の回り清掃	K. 言葉づかい	B. 勉強	C. 友達関係

アンケートの結果

項目	中1		中2		中3		中学全		高1		高2		高3		高校全		軽男女別		全
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
A	0	0	0	0	1	2	1	2	1	4	0	2	3	3	4	9	5	1	16
B	34	20	25	18	22	20	8	5	19	18	19	15	14	18	5	2	1	3	24
C	16	13	17	17	17	21	5	0	13	22	16	18	13	18	4	2	5	8	20
D	18	18	22	14	14	18	5	4	21	14	14	14	13	13	4	8	4	1	19
E	20	19	12	27	9	19	4	1	6	5	15	25	6	22	8	7	2	9	18
F	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	1	2	1	3
G	6	11	11	14	11	12	2	3	10	16	6	9	8	16	2	4	1	5	13
H	40	44	32	35	26	39	9	1	37	40	27	35	26	27	9	1	1	8	40
I	40	41	24	35	19	26	8	3	24	23	25	31	20	25	6	9	1	5	33
J	13	9	14	10	7	5	3	4	6	5	7	2	8	5	2	1	2	5	9
K	18	29	18	28	15	16	5	1	17	27	12	31	15	20	4	7	9	1	46
L	2	1	8	3	2	6	1	0	3	3	7	0	2	2	1	2	4	1	3
M	10	10	10	8	10	18	3	0	13	17	17	17	21	12	5	4	8	2	6
N	11	14	15	15	7	15	3	4	7	7	11	11	5	7	2	3	5	6	2
O	1	11	11	10	5	13	1	3	7	14	10	18	12	14	2	4	4	8	6
P	13	8	20	9	15	5	4	2	24	8	14	5	10	6	4	1	9	4	7
Q	25	17	7	17	12	9	4	4	6	11	7	16	14	9	2	3	7	7	1
R	21	22	11	13	13	15	4	5	15	4	11	10	13	5	3	1	8	6	1
計	287	287	257	273	205	259	7	5	238	258	210	257	205	207	6	5	1	4	2945
	5	7	6	3	0	4	6	4	1	5	7	0	4	1	2	3	7	5	2945

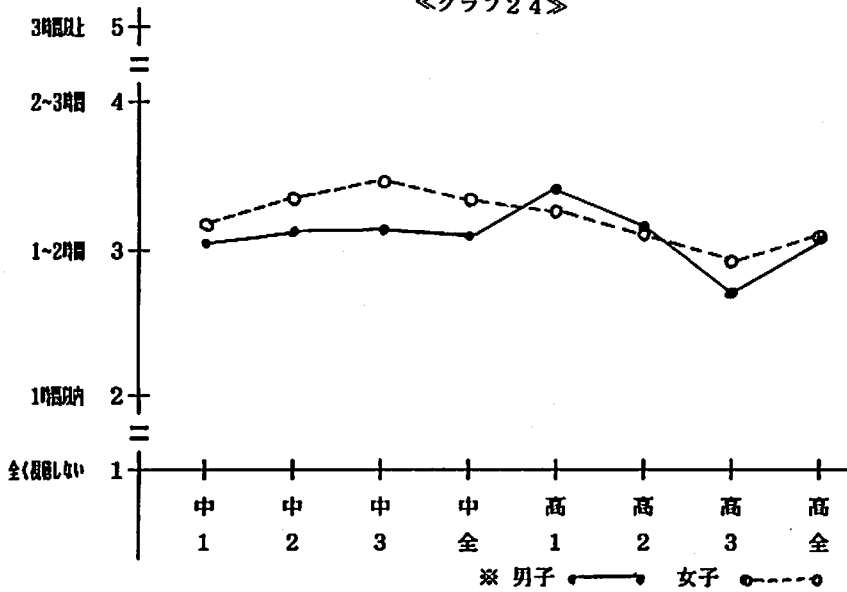
(21) 家事・手伝いの時間⇒ 家事、手伝いを（食事の用意、後片付け、掃除など）して  
いますか。

《グラフ23》

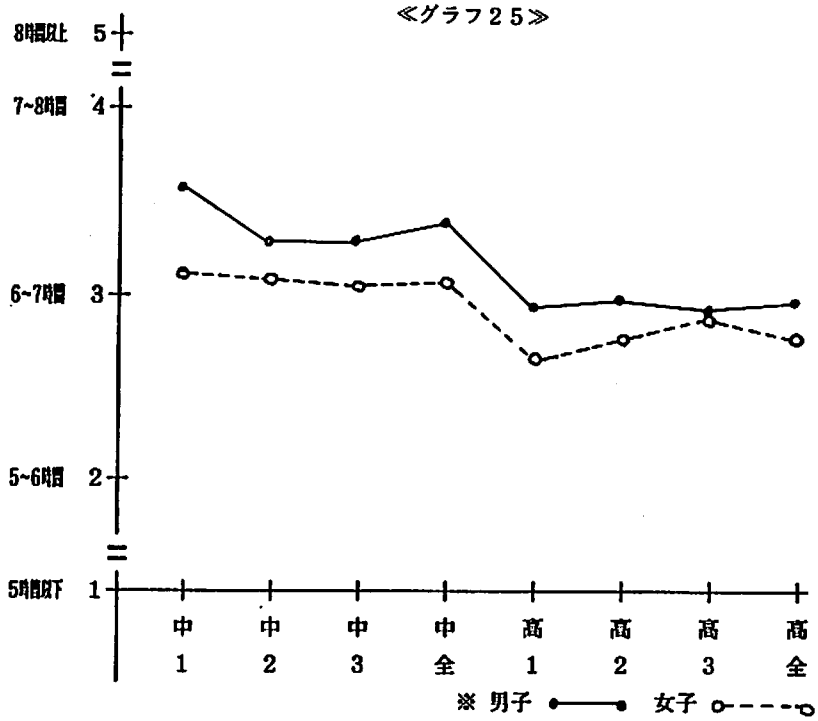


(22) テレビなどの視聴時間⇒ テレビ、CD、テープなどの視聴時間は1日平均何時間ですか。

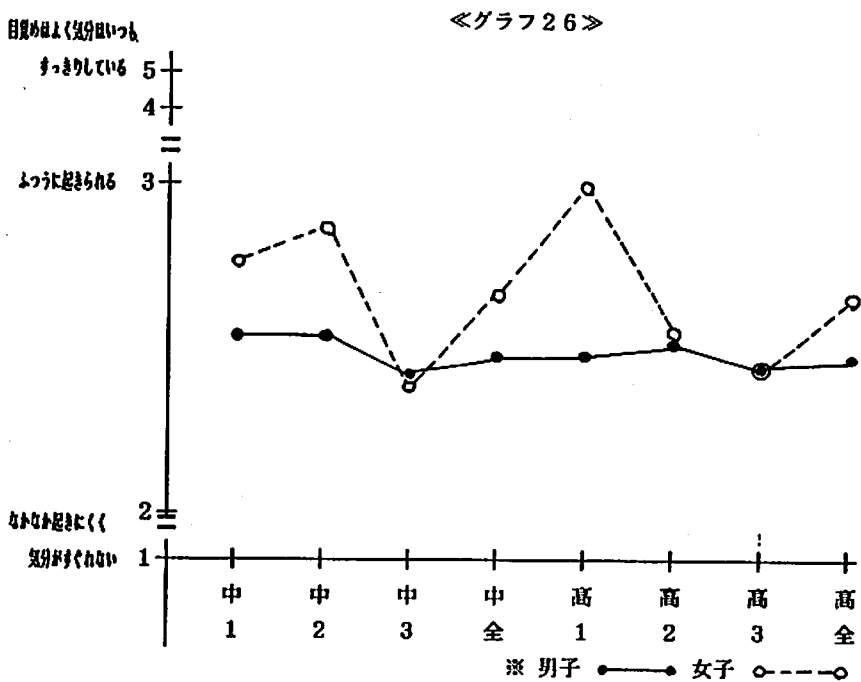
《グラフ24》



(23) 睡眠時間⇒ 睡眠時間は1日平均何時間ぐらいですか。

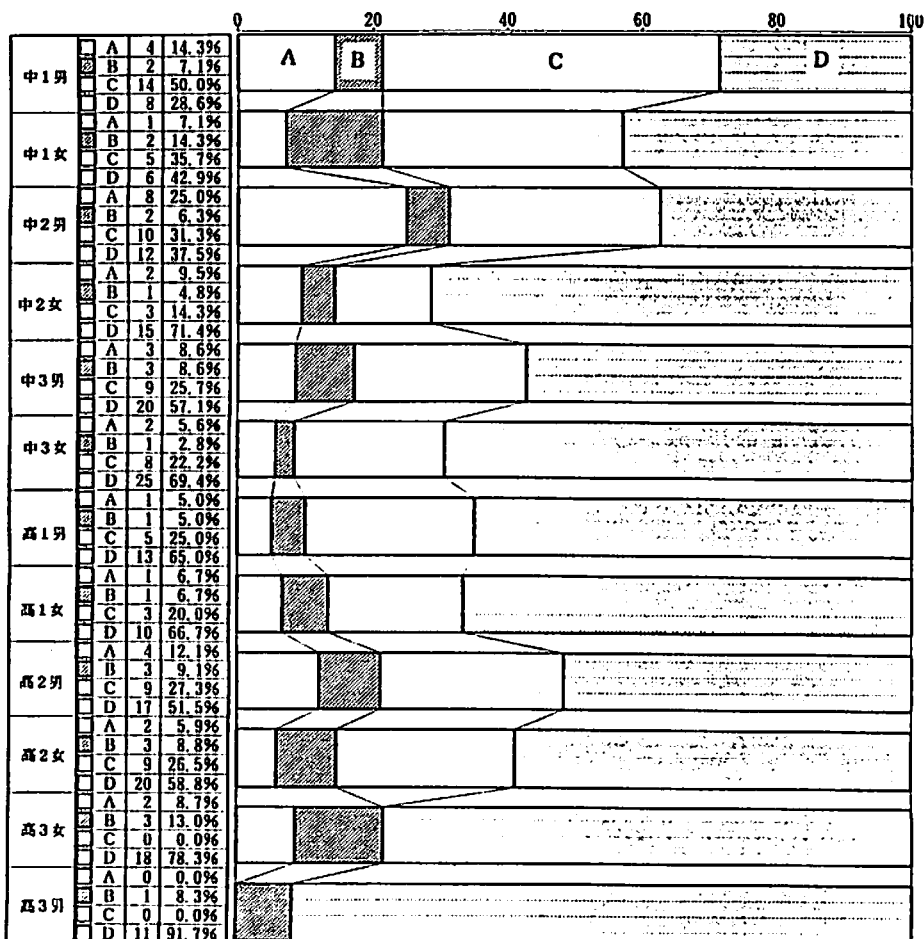
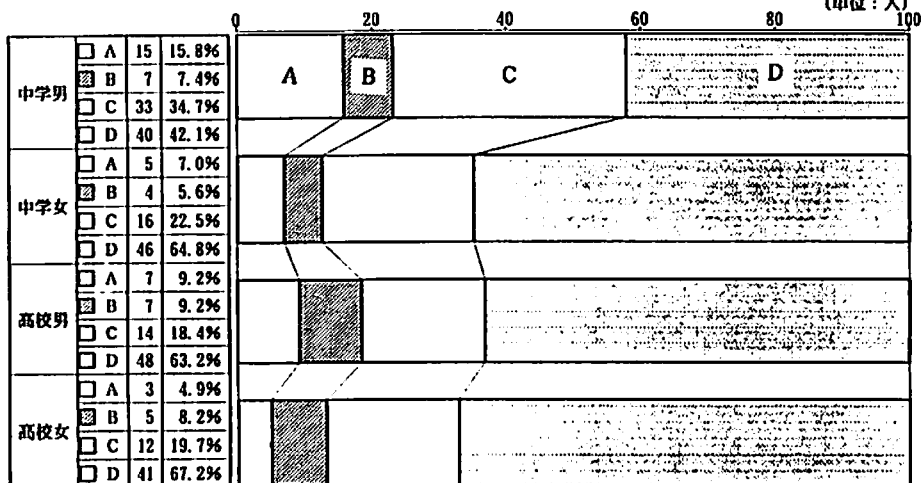


(24) 毎朝の目覚めの良さ⇒ 朝の目覚めはいい方ですか。



＜グラフ27＞ 朝の目覚めの思い訳

(単位：人)



A : 勉強の疲れ

C : クラブ活動の疲れ

B : 通塾 (予備校など) の疲れ

D : 日常生活での全般的なつかれ

(25) 遊びや趣味の種類⇒ 遊びや趣味など勉強以外で楽しめるものがありますか。

それは何ですか。

- A. 読書 B. テレビ、ラジオなどの視聴 C. 音楽鑑賞 D. 楽器演奏  
 E. パソコン、ファミコンなどの操作 F. ビデオ G. 収集(切手、コインなどのコレクション) H. スポーツ I. 旅行 J. 釣やハイキング、登山など  
 K. 手芸、編物、料理など L. お茶、お花など

<表5> アンケート集計結果

( 中 学 )

	中 1				中 2				中 3				中学男女別		全	
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	女子		男女
A. 読書	31	15.8	46	20.0	29	13.6	50	20.5	34	16.3	33	14.5	94	129	223	
B. テレビ	32	16.8	32	13.9	36	16.8	40	16.4	36	17.2	43	18.9	104	115	219	
C. 音楽鑑賞	21	10.7	38	16.5	25	11.7	36	14.8	37	17.7	46	20.3	83	120	203	
D. 楽器演奏	6	3.1	19	8.3	7	3.3	27	11.1	3	1.4	17	7.5	16	63	79	
E. パソコン	27	13.8	10	4.3	28	13.1	4	1.6	35	16.7	12	5.3	90	26	116	
F. ビデオ	14	7.1	13	5.7	23	10.7	22	9.0	19	9.1	19	8.4	56	54	110	
G. 収集	9	4.6	3	1.3	15	7.0	6	2.5	5	2.4	1	0.4	29	10	39	
H. スポーツ	32	16.3	31	13.4	27	12.6	27	11.1	27	12.9	25	11.0	86	83	169	
I. 旅行	9	4.6	9	3.9	9	4.2	9	3.7	7	3.3	7	3.1	25	25	50	
J. 釣り、登山 等	12	6.1	3	1.3	8	3.7	3	1.2	5	2.4	2	0.9	25	8	33	
K. 手芸、料理 等	2	1.0	24	10.4	3	1.4	19	7.8	1	0.5	18	7.9	6	61	67	
L. お茶、お花 等	1	0.5	2	0.9	4	1.9	1	0.4	0	0.0	4	1.8	5	7	12	
合 計	196		230		214		244		209		227		619		701	1320
	426				458				436				1320			

( 高 校 )

	高 1				高 2				高 3				高校男女別		全	
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	女子		男女
A. 読書	24	13.3	31	17.7	23	12.9	30	14.0	27	14.5	31	21.2	74	92	166	
B. テレビ	29	16.1	34	19.4	33	18.5	31	14.4	34	18.3	24	16.4	96	89	185	
C. 音楽鑑賞	27	15.0	40	22.9	33	18.5	46	21.0	35	18.8	32	21.9	95	118	213	
D. 楽器演奏	11	6.1	11	6.3	5	2.8	25	11.6	9	4.8	14	9.6	25	50	75	
E. パソコン	18	10.0	7	4.0	16	9.0	3	1.4	19	10.2	3	2.1	53	13	66	
F. ビデオ	16	8.9	17	9.7	21	11.8	22	10.2	19	10.2	5	3.4	56	44	100	
G. 収集	3	1.7	2	1.1	2	1.1	0	0.0	4	2.6	4	2.7	9	6	15	
H. スポーツ	28	15.6	18	10.3	27	15.2	25	11.6	22	11.8	15	10.3	77	58	135	
I. 旅行	12	6.7	4	2.3	10	5.6	12	5.6	8	4.3	3	2.1	30	19	49	
J. 釣、登山 等	10	5.6	0	0.0	7	3.9	2	0.9	7	4.8	2	1.4	24	4	28	
K. 手芸、料理 等	1	0.6	11	6.3	1	0.6	18	8.4	1	0.5	9	6.2	3	38	41	
L. お茶、お花 等	1	0.6	0	0.0	0	0.0	1	0.5	1	0.5	4	2.7	2	5	7	
合 計	180		175		178		215		186		146		544		536	1080
	355				393				332				1080			

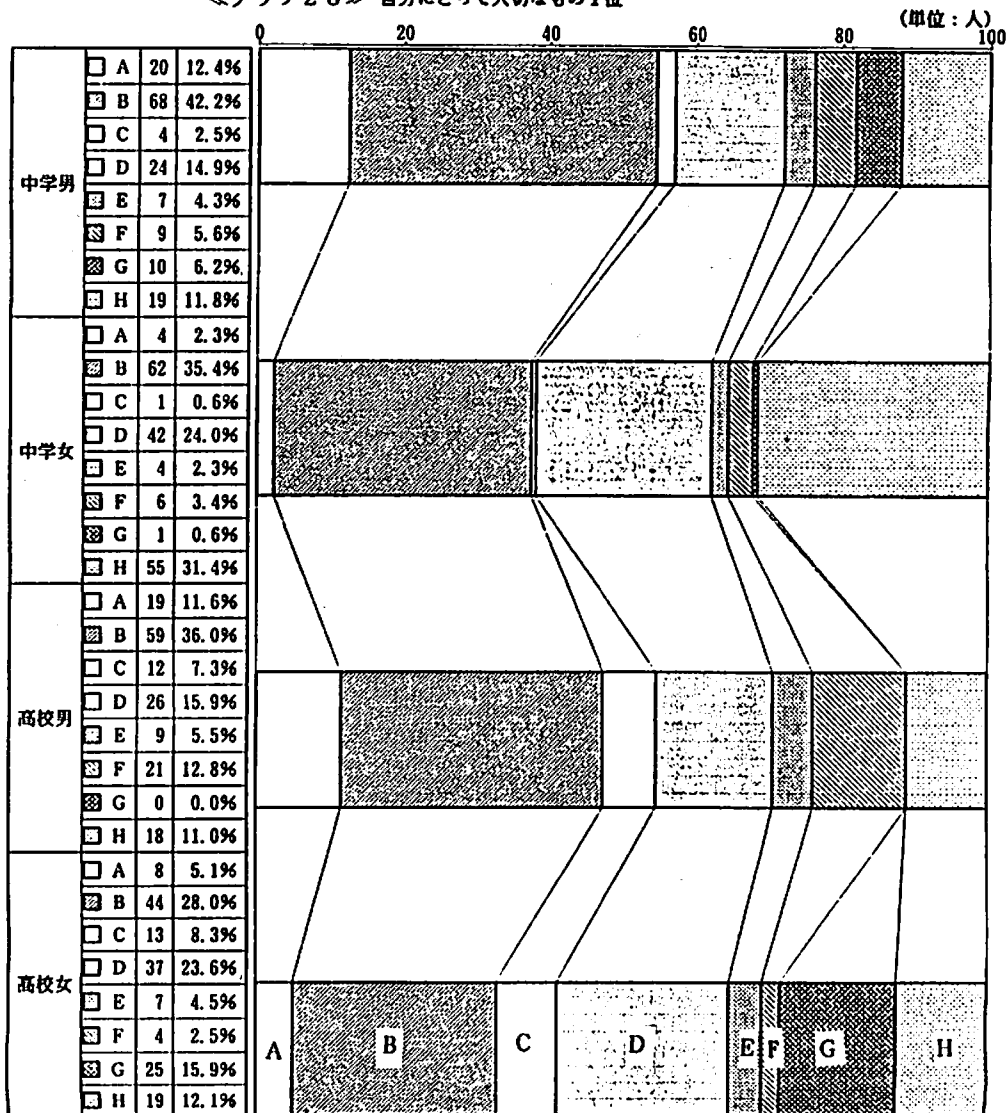
## (25) 生徒の遊びや趣味の上位ベスト5

&lt;表6&gt;

学年	性別	1	2	3	4	5
中1	男	B. テレビ	H. スポーツ	A. 読書	E. パソコン	C. 音楽鑑賞
	女	A. 読書	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	H. スポーツ	K. 手芸、料理など
中2	男	B. テレビ	A. 読書	E. パソコン	H. スポーツ	C. 音楽鑑賞
	女	A. 読書	B. テレビ	C. 音楽鑑賞	H. スポーツ	D. 楽器演奏
中3	男	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	E. パソコン	A. 読書	H. スポーツ
	女	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	F. ビデオ
高1	男	B. テレビ	H. スポーツ	C. 音楽鑑賞	A. 読書	E. パソコン
	女	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	F. ビデオ
高2	男	B. テレビ	C. 音楽鑑賞	H. スポーツ	A. 読書	F. ビデオ
	女	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	D. 楽器演奏
高3	男	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	E. パソコン F. ビデオ
	女	A. 読書	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	H. スポーツ	D. 楽器演奏
中学全	男	B. テレビ	A. 読書	E. パソコン	H. スポーツ	C. 音楽鑑賞
	女	A. 読書	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	H. スポーツ	D. 楽器演奏
高校全	男女	A. 読書	B. テレビ	C. 音楽鑑賞	H. スポーツ	E. パソコン
	男	B. テレビ	C. 音楽鑑賞	H. スポーツ	A. 読書	F. ビデオ
高校全	女	C. 音楽鑑賞	A. 読書	B. テレビ	H. スポーツ	D. 楽器演奏
	男女	C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	F. ビデオ
中高校全	男	B. テレビ	C. 音楽鑑賞	A. 読書	H. スポーツ	E. パソコン
	女	C. 音楽鑑賞	A. 読書	B. テレビ	H. スポーツ	D. 楽器演奏
全		C. 音楽鑑賞	B. テレビ	A. 読書	H. スポーツ	F. ビデオ

(26) 生徒にとって、自分の人生の中で大切なもの⇒ この世の中で、自分にとって大切なものは何ですか。(大切な順に5位までアルファベットで記入)

《グラフ28》 自分にとって大切なもの1位

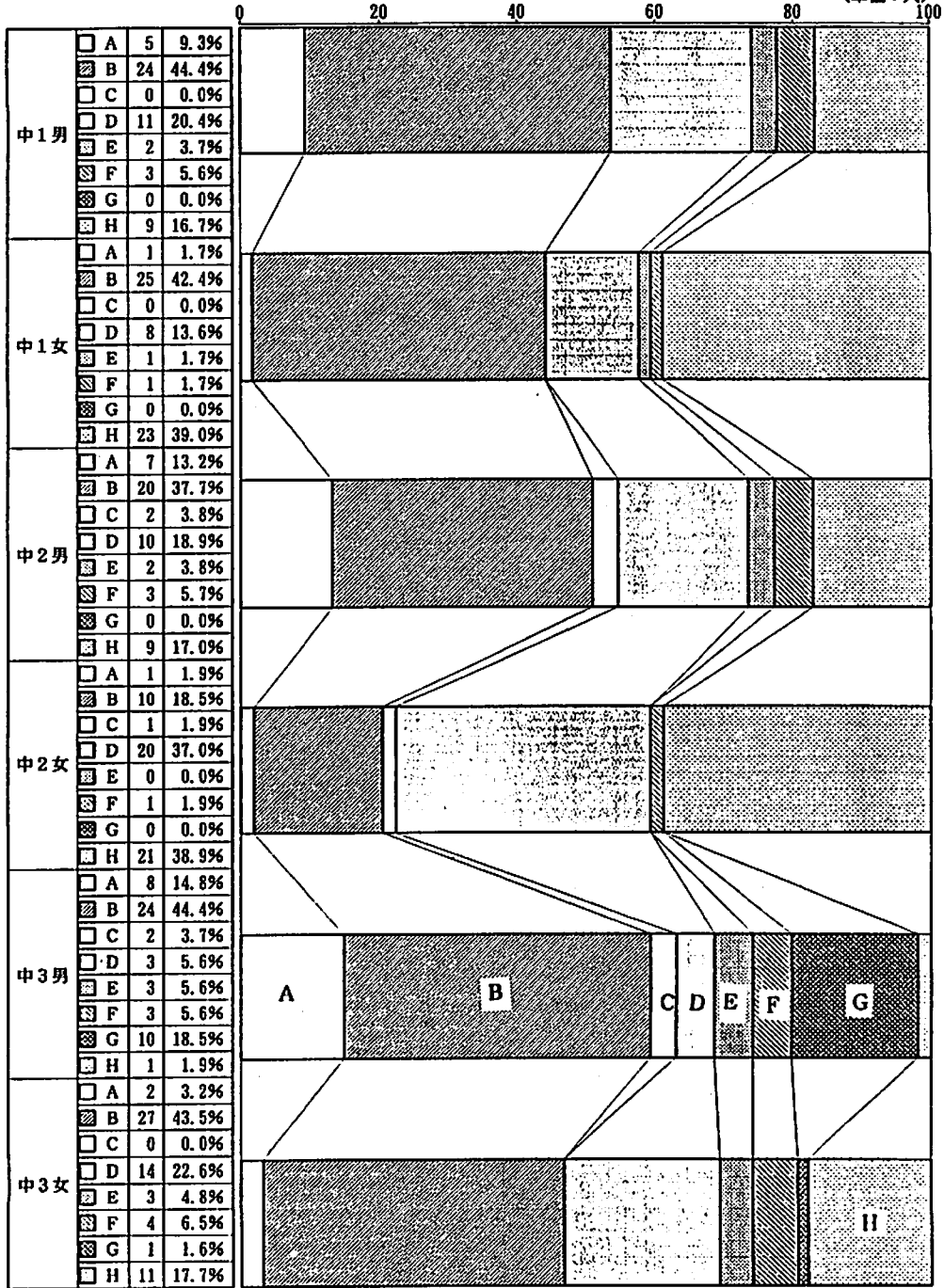


A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族



《グラフ28'》 自分にとって大切なもの1位

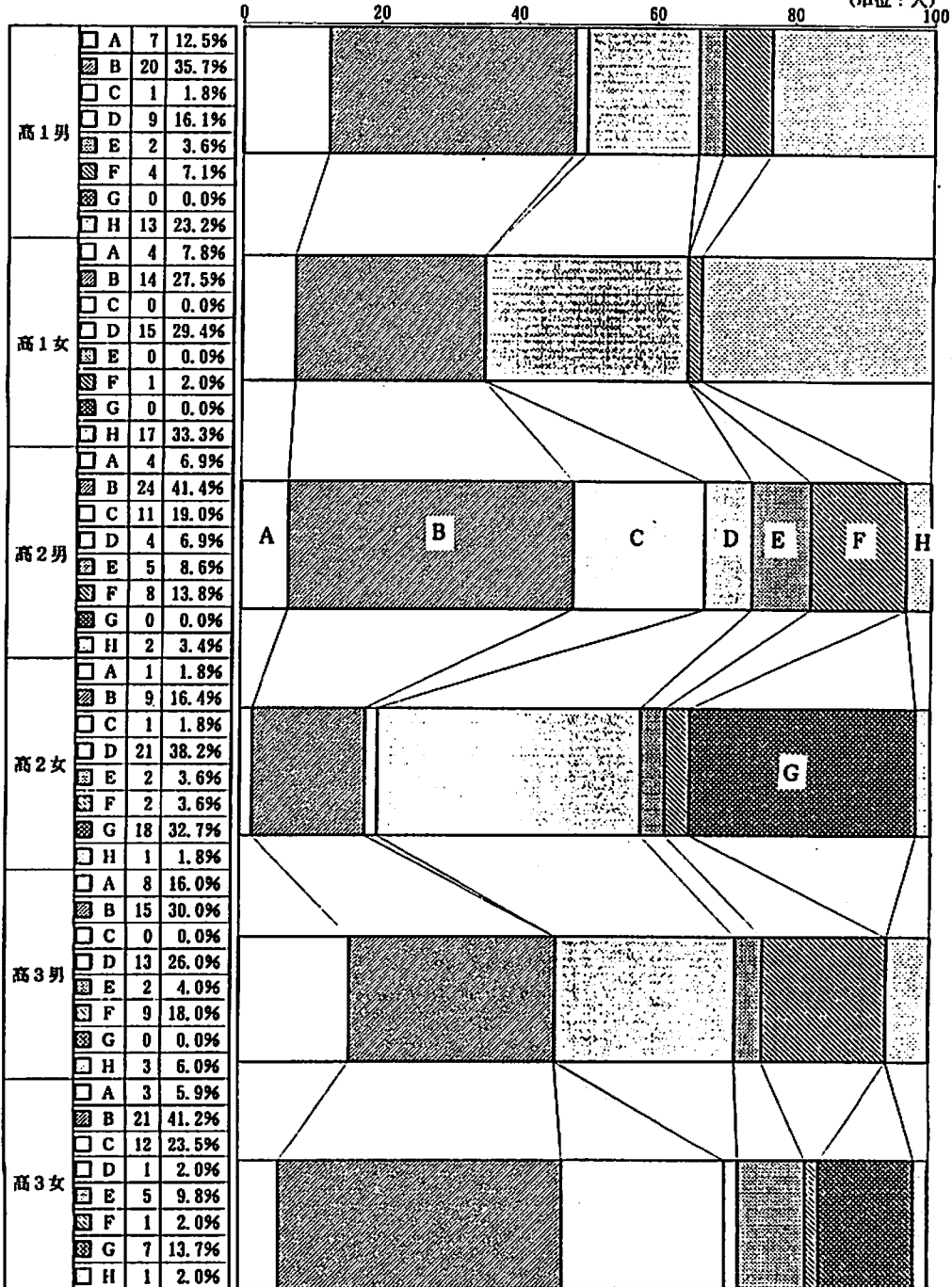
(単位：人)



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

《グラフ28》 自分にとって大切なもの1位

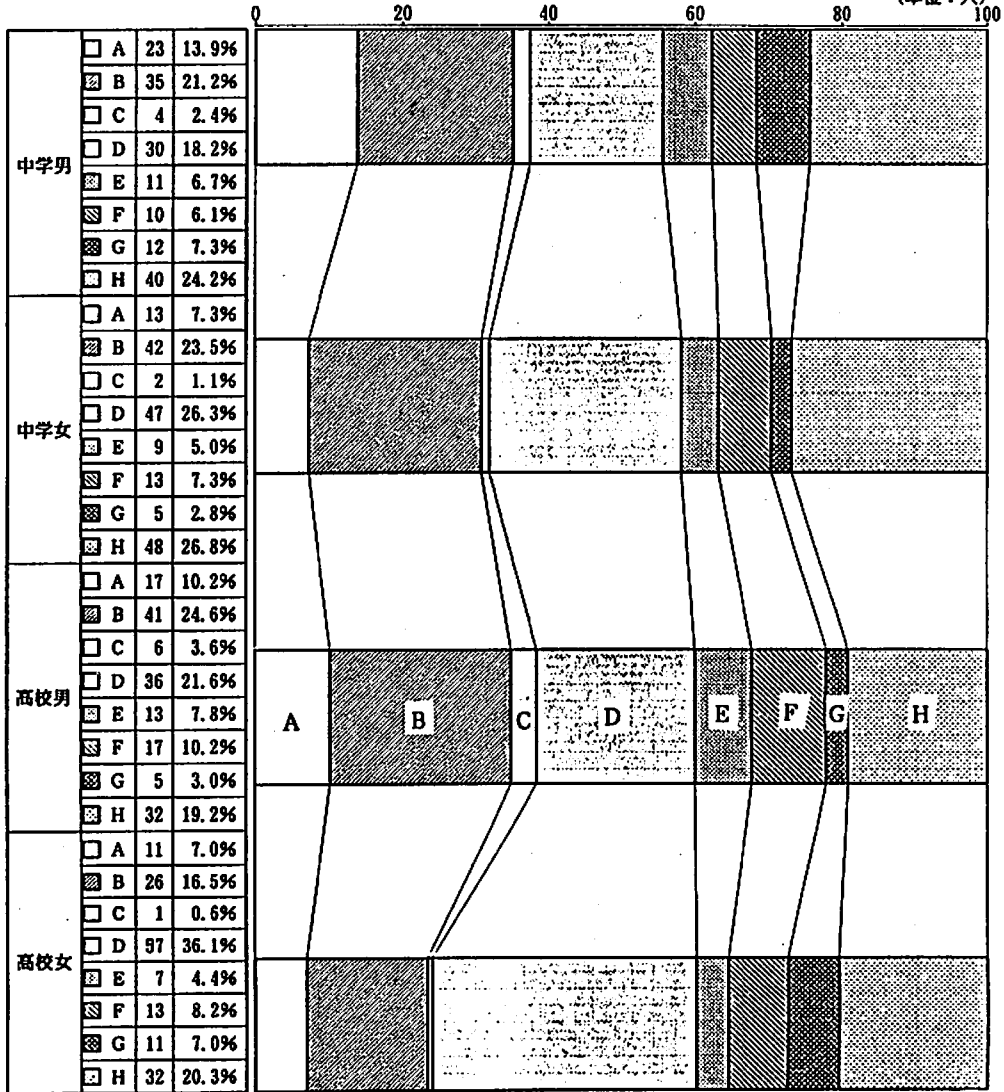
(単位：人)



A：お金 B：健康 C：学歴 D：愛情・友情 E：趣味  
F：個性 G：勉強 H：家族

《グラフ29》 自分にとって大切なもの2位

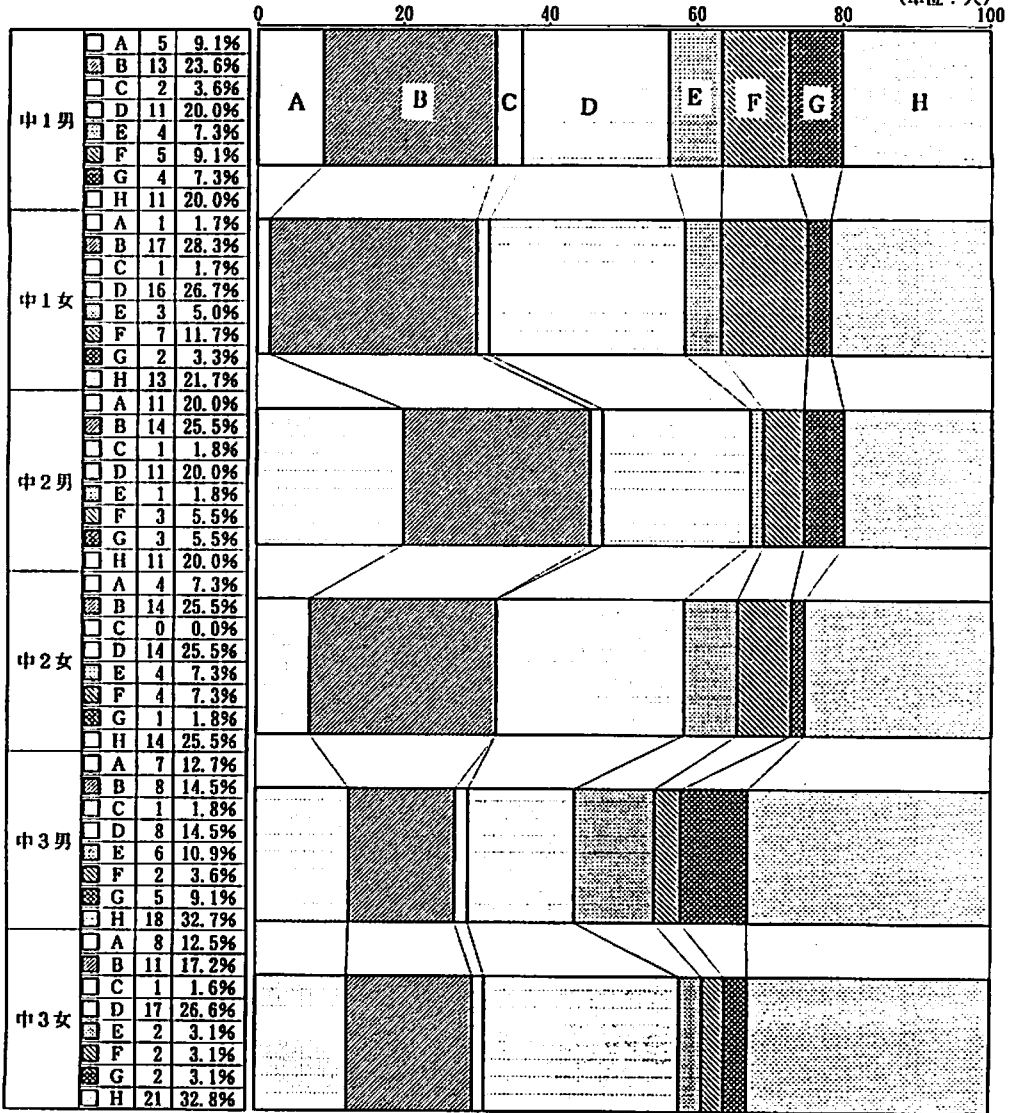
(単位:人)



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

《グラフ29'》 自分にとって大切なもの2位

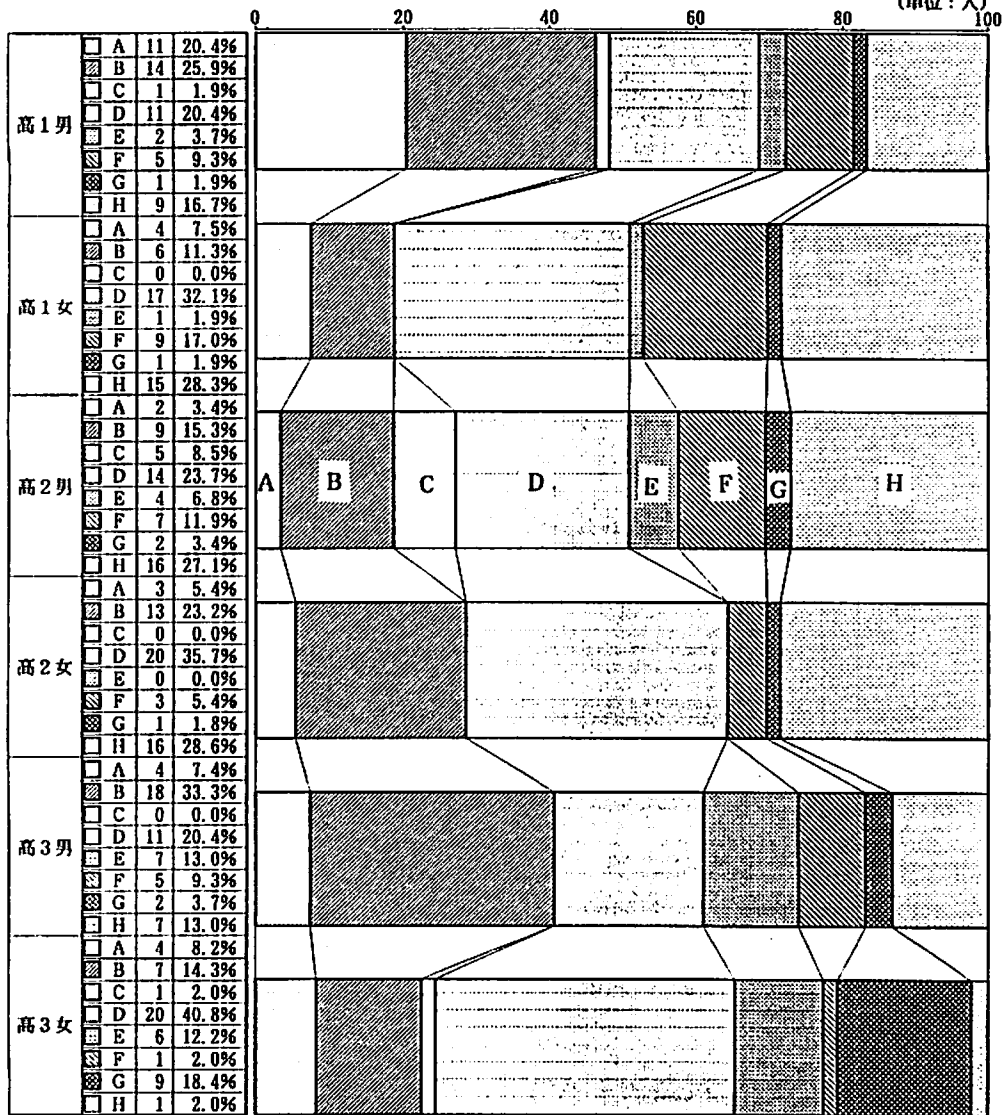
(単位：人)



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

《グラフ29》 自分にとって大切なもの2位

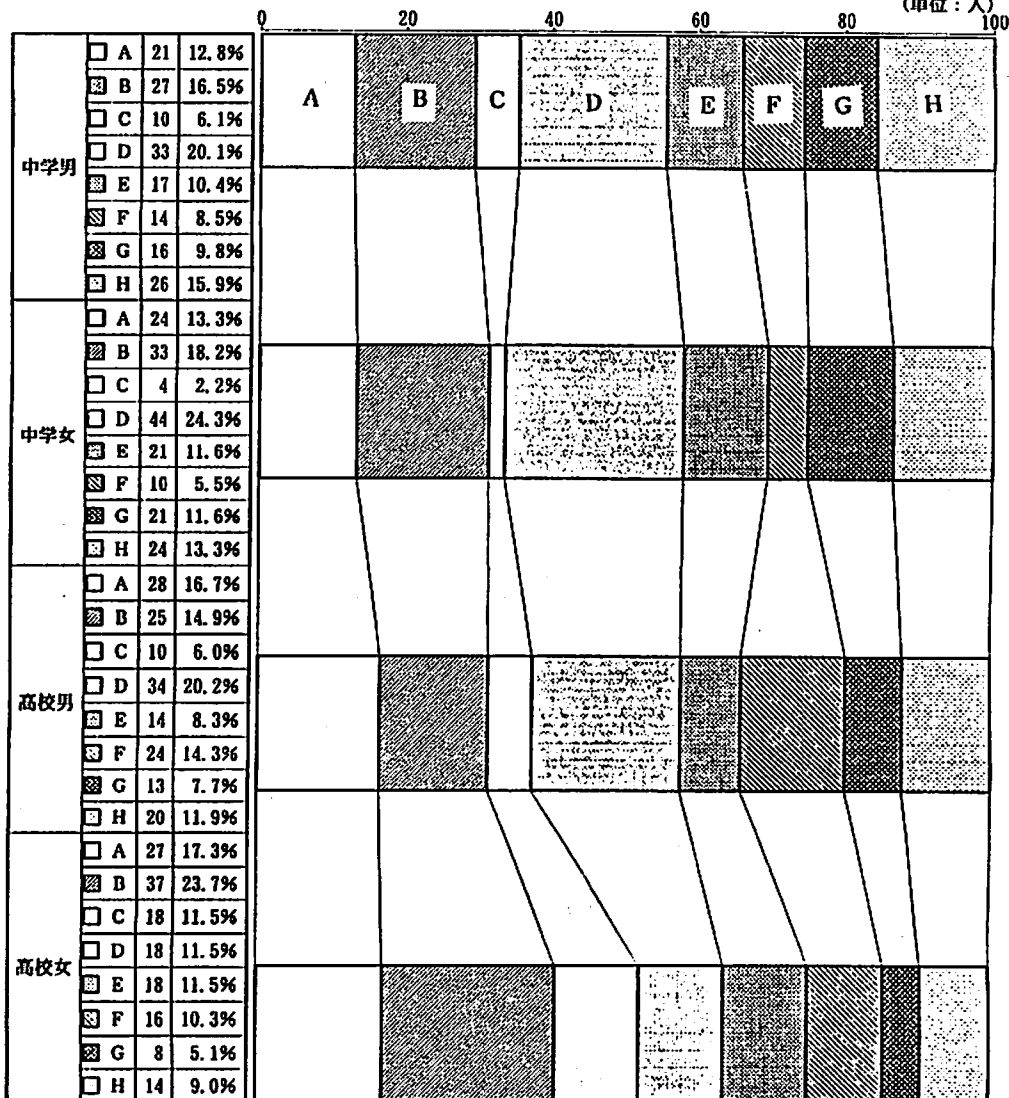
(単位:人)



A: お金    B: 健康    C: 学歴    D: 愛情・友情    E: 趣味  
 F: 個性    G: 勉強    H: 家族

《グラフ30》 自分にとって大切なもの3位

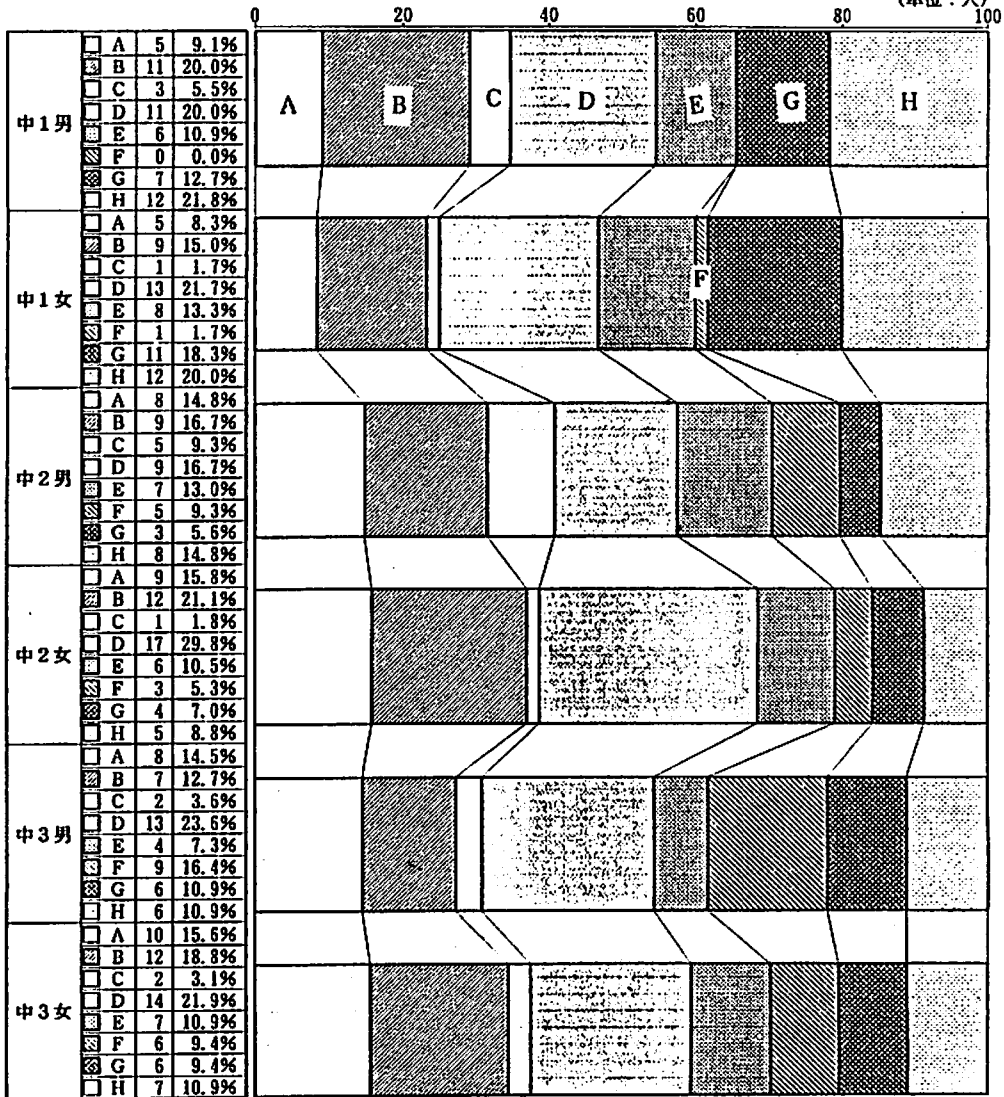
(単位：人)



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

《グラフ30'》 自分にとって大切なもの3位

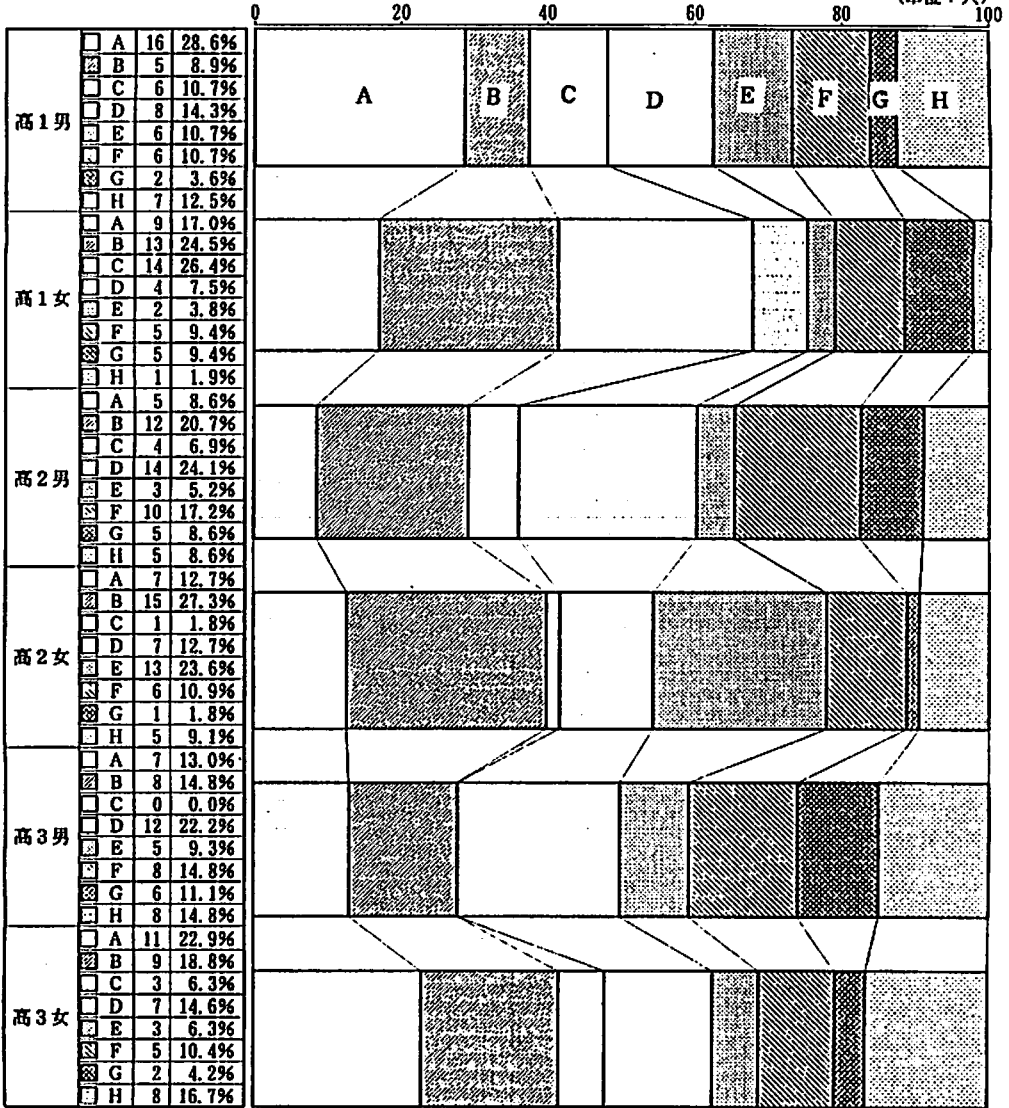
(単位：人)



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

《グラフ30》 自分にとって大切なもの3位

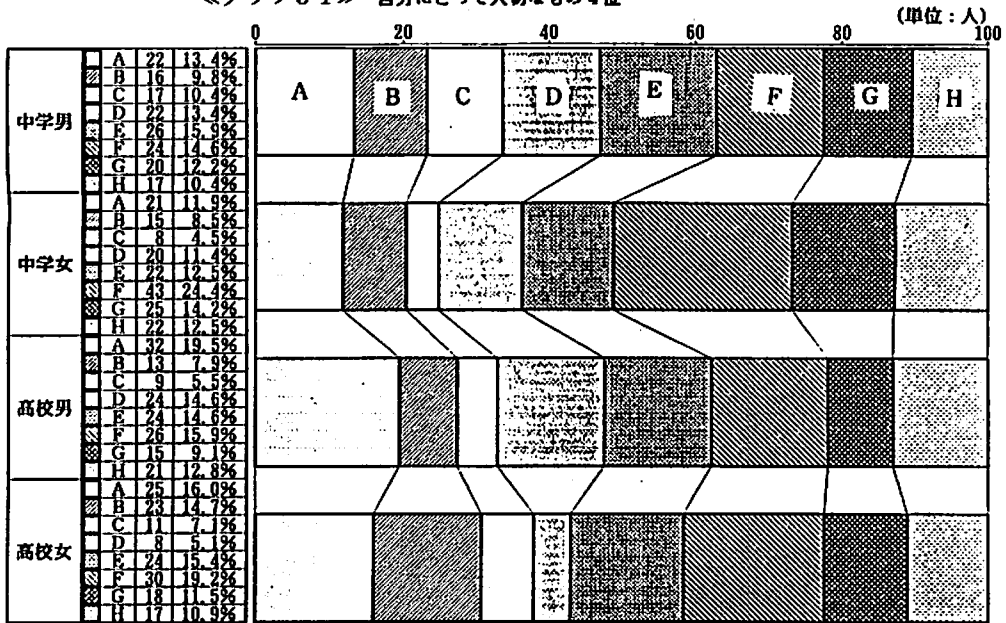
(単位：人)



A. お金 B. 健康 C. 学歴 D. 愛情・友情 E. 趣味  
F. 個性 G. 勉強 H. 家族

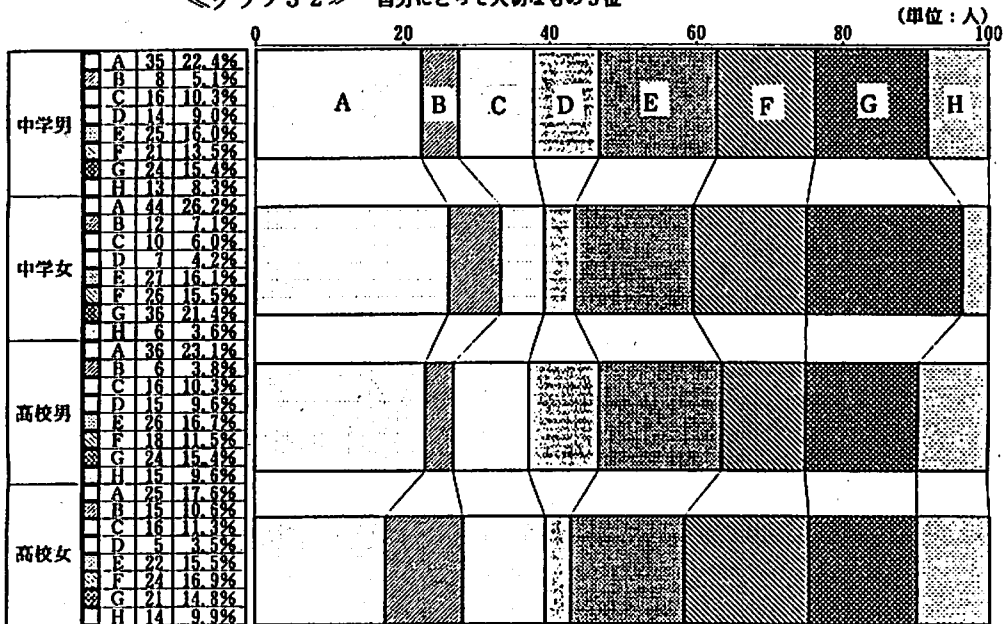


《グラフ31》 自分にとって大切なもの4位



A : お金 B : 健康 C : 学歴 D : 愛情・友情 E : 趣味  
F : 個性 G : 勉強 H : 家族

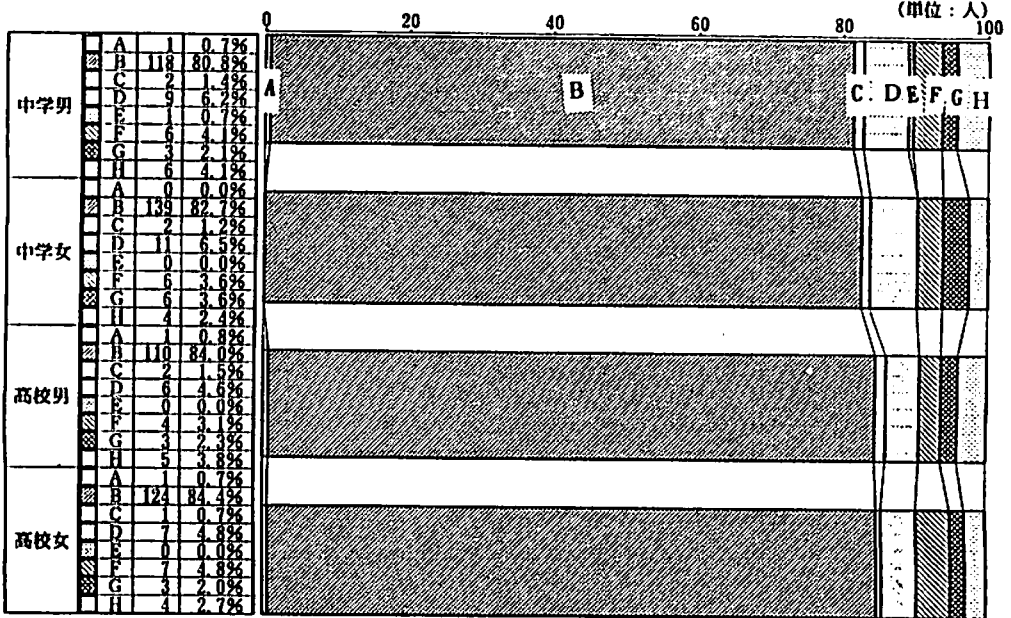
《グラフ32》 自分にとって大切なもの5位



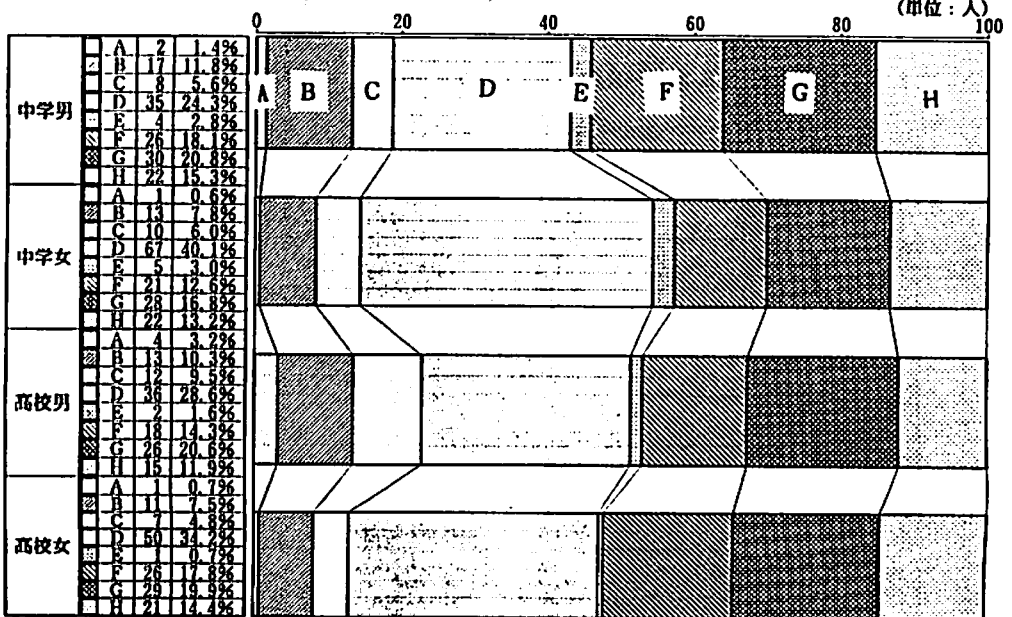
A : お金 B : 健康 C : 学歴 D : 愛情・友情 E : 趣味  
F : 個性 G : 勉強 H : 家族

※ 親用アンケートより考査

＜グラフ 3 3＞ 父親が子供に大切に思うこと1位



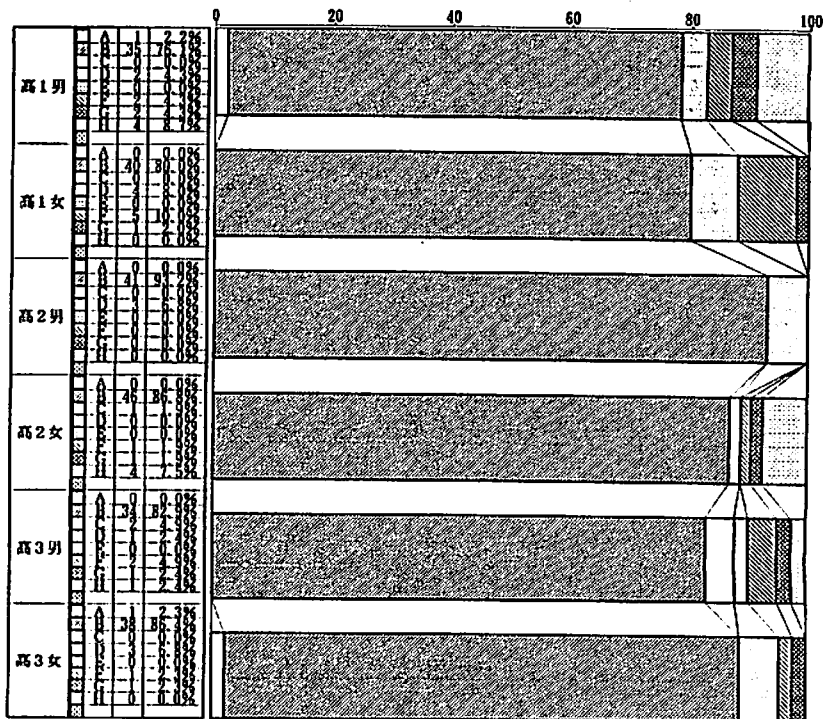
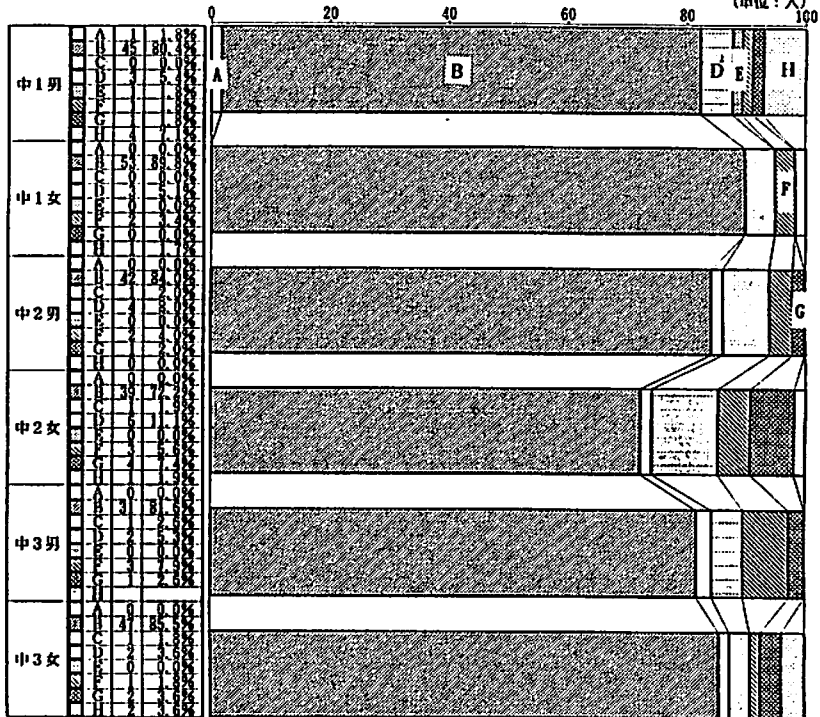
＜グラフ 3 4＞ 父親が子供に大切に思うもの2位



A : お金    B : 健康    C : 学歴    D : 愛情・友情    E : 趣味  
 F : 個性    G : 勉強    H : 家族

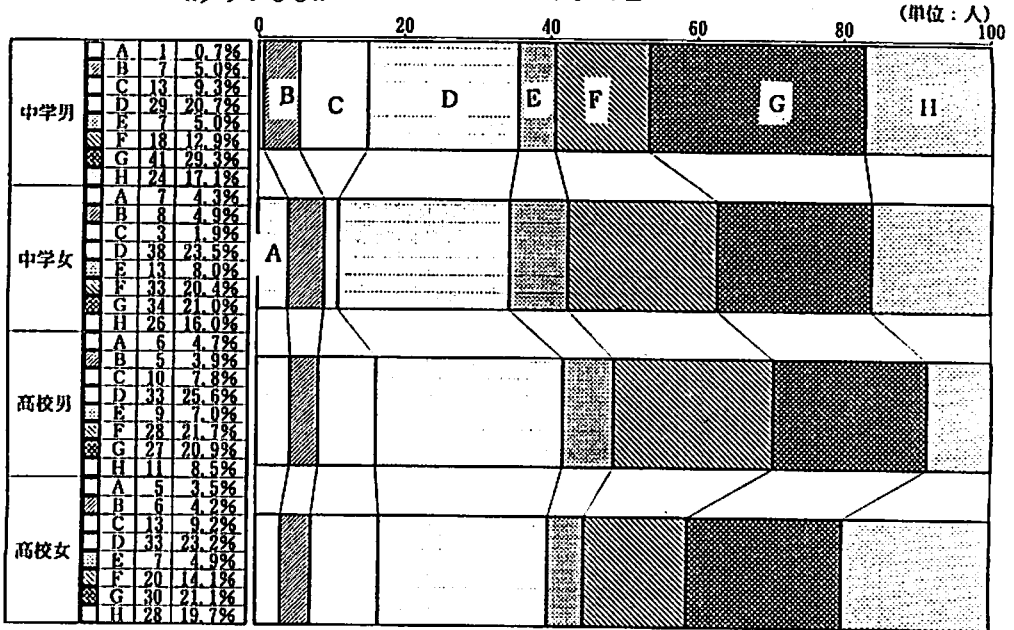
◀ グラフ 33' ▶ 父親が子供に大切に思うこと1位

(単位:人)

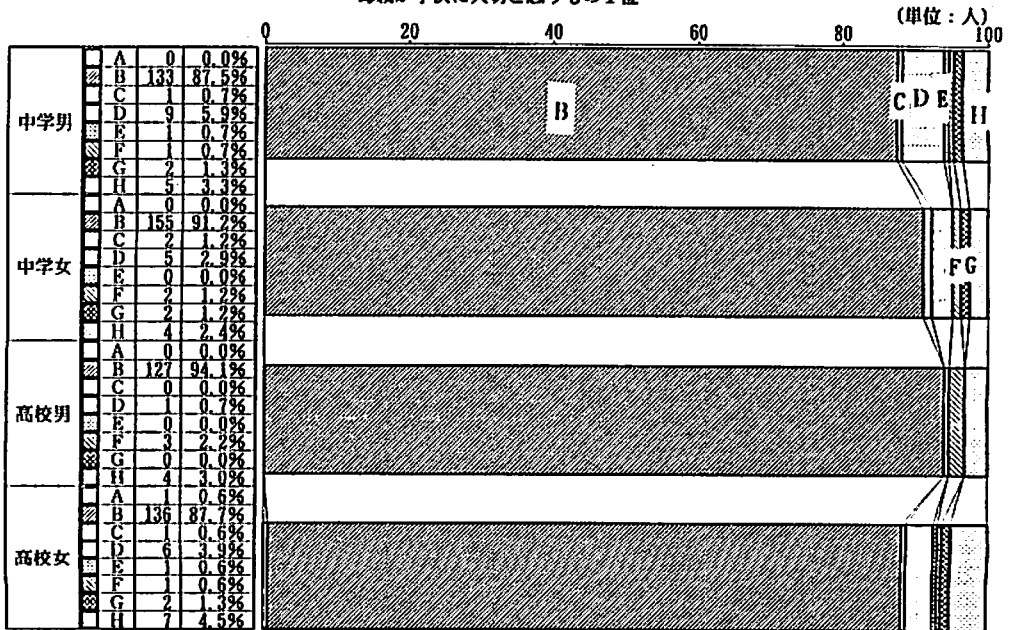


A: お金 B: 健康 C: 学歴 D: 愛情・友情 E: 趣味  
F: 個性 G: 勉強 H: 家族

<グラフ 35> 父親が子供に大切と思うもの3位



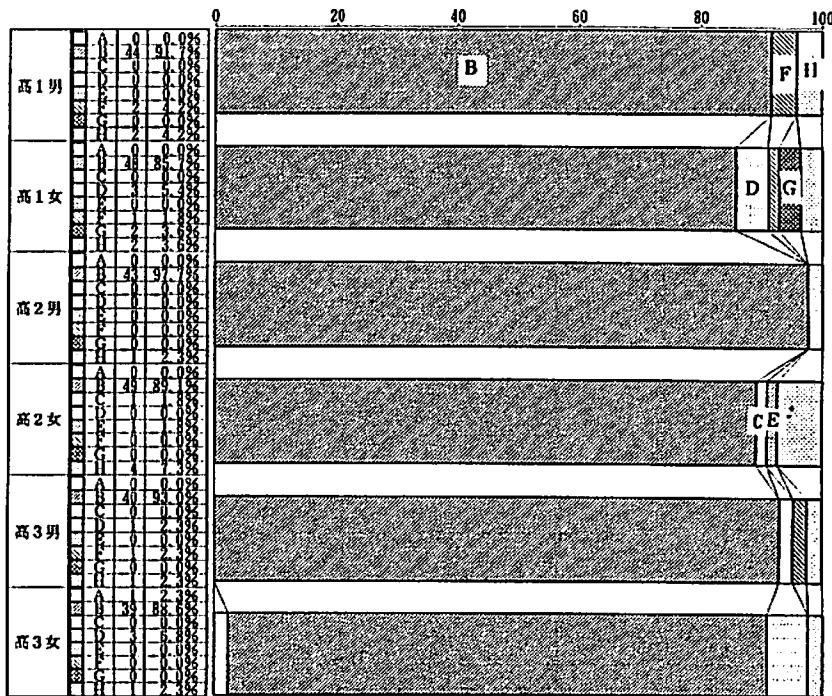
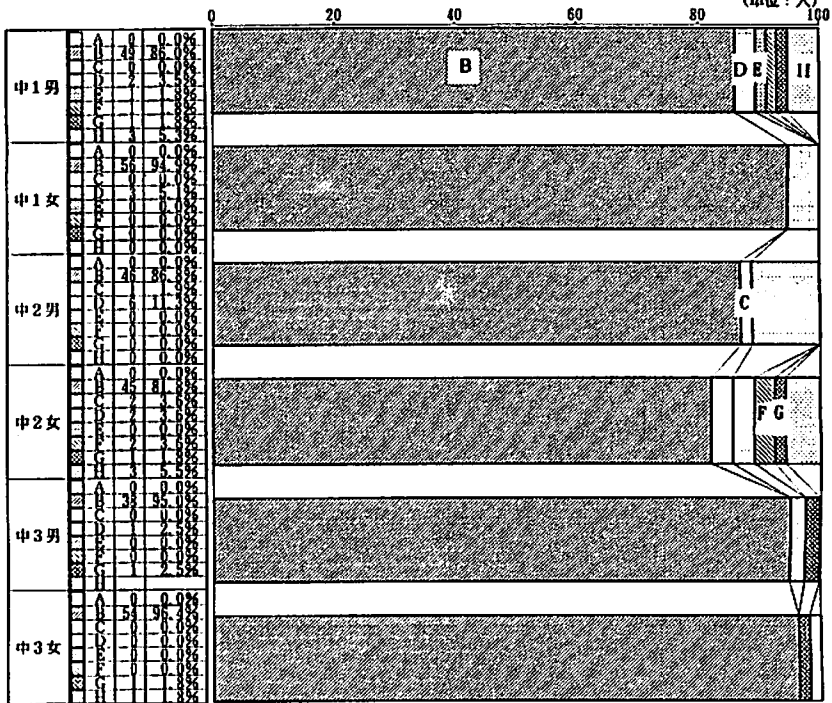
<グラフ 36> 母親が子供に大切と思うもの1位



A: お金    B: 健康    C: 学歴    D: 愛情・友情    E: 趣味  
 F: 個性    G: 勉強    H: 家族

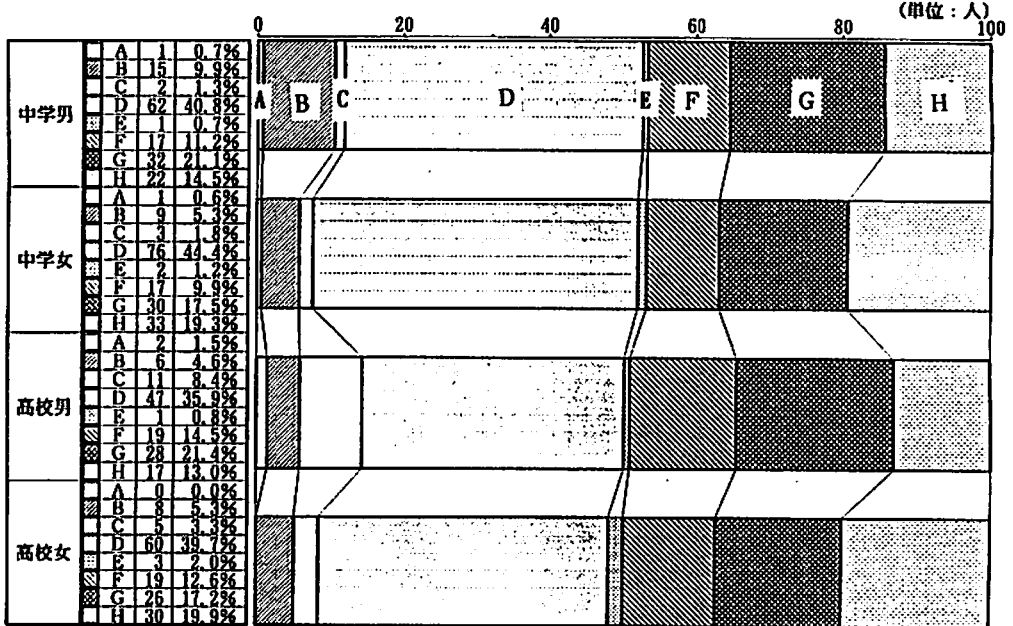
＜グラフ36＞ 母親が子供に大切に思うもの1位。

(単位：人)

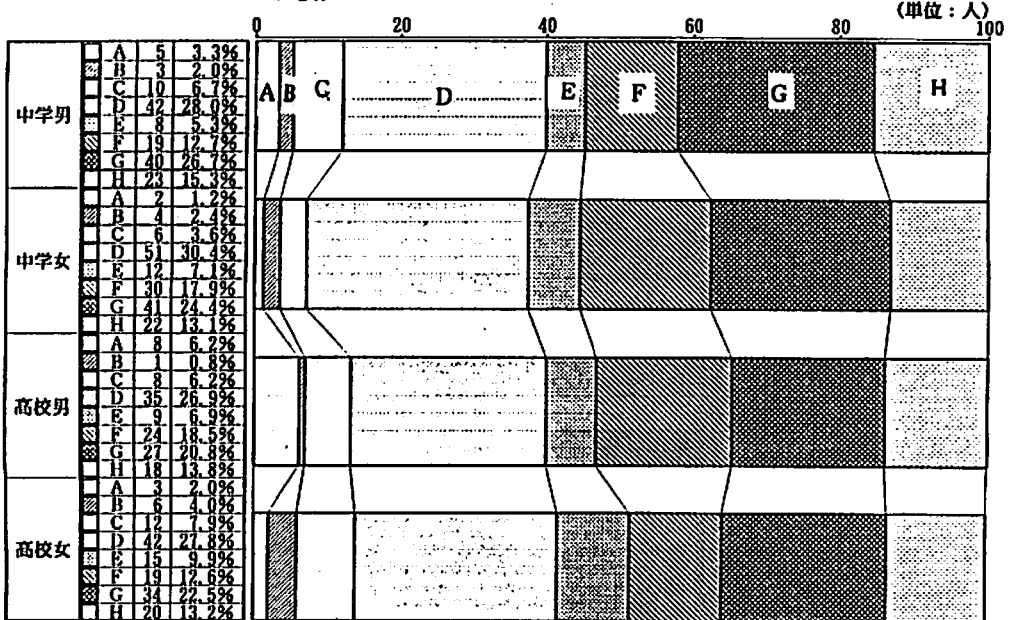


A: お金 B: 健康 C: 学歴 D: 愛情・友情 E: 趣味  
F: 個性 G: 勉強 H: 家族

＜グラフ37＞ 母親が子供に大切と思うもの2位

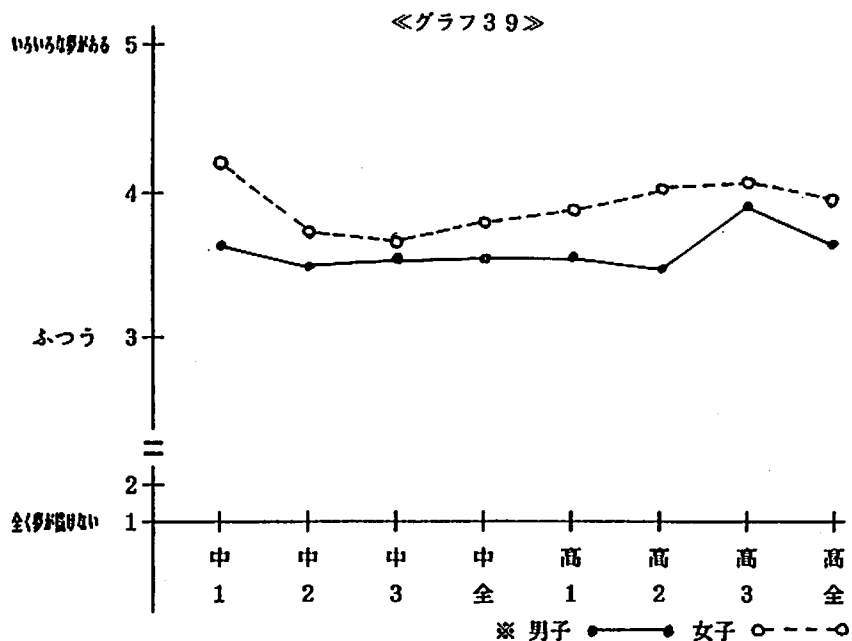


＜グラフ38＞ 母親が子供に大切と思うもの3位

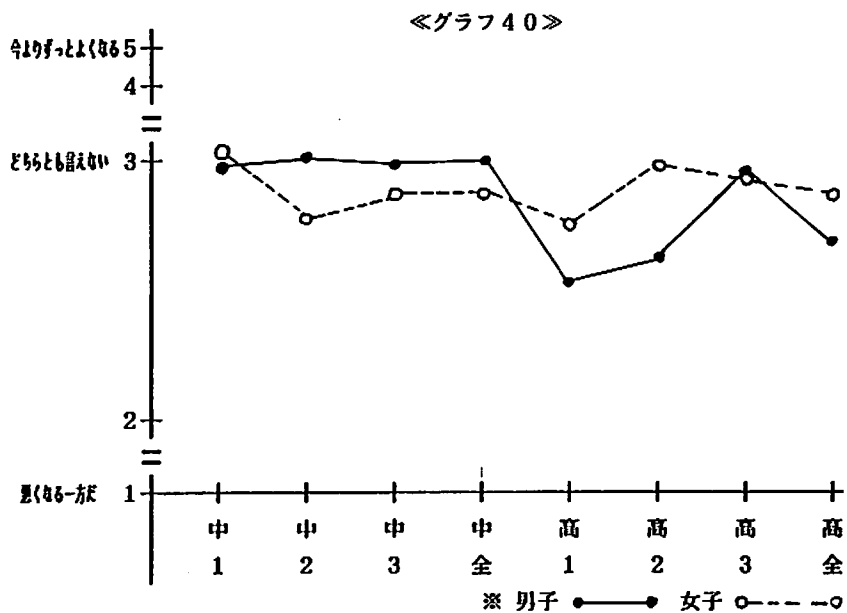


A：お金 B：健康 C：学歴 D：愛情・友情 E：趣味  
F：個性 G：勉強 H：家族

(27) 自分の将来にたいする夢⇒自分の将来について、夢を描いていますか。

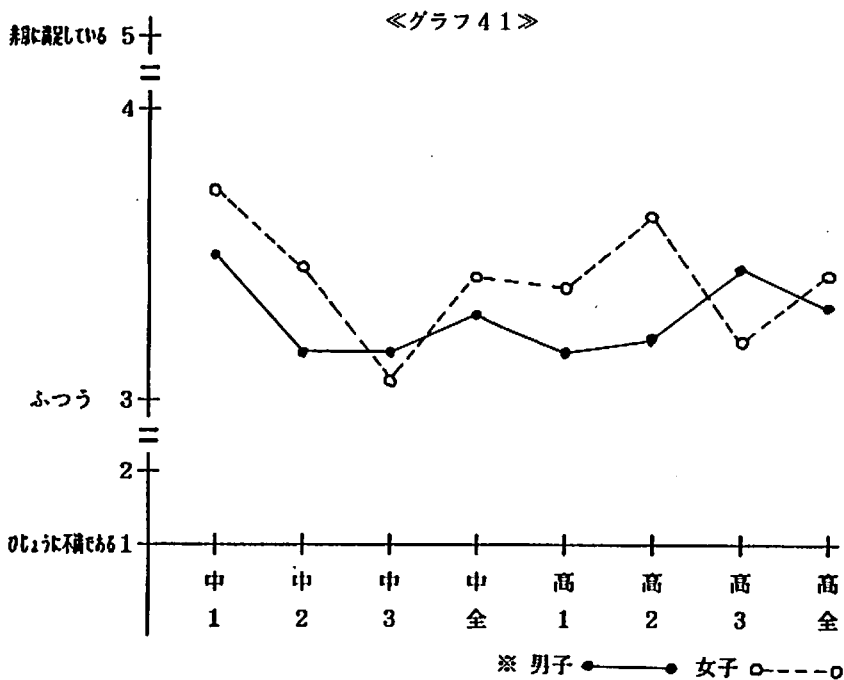


(28) 未来社会への展望⇒あなたがたの未来は明るい方向に進み、よりよい社会になると  
 思いますか。



2. 親用アンケートの結果

(1) 本校の教育についての満足度⇒ 本校の教育について、満足されていますか。



(2) 本校に対する不満⇒ (1)で1, 2と答えた親に対して、「不満な点は何ですか」

(複数回答可)

- A. 教育方針がはっきり分らない
- B. 子供がだらしなくなった
- C. 子供が中だるみ現象で、ほとんど勉強しない
- D. 入学後、成績が急激に下がった
- E. 大学進学に有利でない
- F. 友人関係がうまくいかない
- G. 個人の能力に応じた指導が十分でない
- H. 学校での生活指導が甘くてルーズだ
- I. クラブ活動が不活発だ
- J. 設備が悪い
- K. 教師の指導法に問題がある
- L. 教師集団が組織としてまとまっていないように見える
- M. その他



＜表7＞ アンケートの結果（各学年の男女別不満件数とその総計）

項目	中1		中2		中3		高1		高2		高3		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
A	3	1	2	5	3	9	5	3	1	1	2	4	39		
B	1	1	2	4	2	5	1	1	1	1	0	4	23		
C	4	2	1	1	8	5	9	1	1	6	5	4	1	4	70
D	2	0	4	3	2	2	1	2	1	3	0	3	23		
E	2	3	3	6	5	6	7	5	4	1	2	6	50		
F	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		
G	3	0	2	1	2	4	4	3	2	3	0	3	27		
H	1	1	1	5	6	9	4	2	1	2	2	8	42		
I	2	0	9	4	5	5	5	1	4	2	0	3	40		
J	2	3	6	6	6	8	6	3	2	2	1	7	52		
K	0	1	1	3	2	6	2	1	0	0	2	3	21		
L	0	1	0	3	1	3	0	1	0	0	2	3	14		
M	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		
小計	20	13	41	48	40	66	46	29	21	19	12	48			
合計	33		89		106		75		40		60		403		

- ※ 本校に対する不満の高いもの
1. 子供が中だるみ現象でほとんど勉強しない
  2. 設備が悪い
  3. 大学進学に対して有利でない

(3) 本校の入学選択の理由⇒ 本校を選んだ理由はなんですか（複数回答可）

- A. 子供の意志で
- B. 中高一貫教育（共学）なので
- C. 高校受験がないので
- D. 校風にひかれて
- E. 大学進学に有利
- F. 教育内容が優れていると思ったから
- G. “いじめ”や“校内暴力”がないと思ったから
- H. 設備が充実しているから
- I. 交通の便がいいから
- J. 友達との関係で
- K. 親の教育負担費が安いから
- L. 他の進学校に行かされたかったが、やむをえず選ばざるをえなかった
- M. よい教師に恵まれていると思ったから
- N. その他

＜表8＞ アンケートとの結果

項目	中 1		中 2		中 3		高 1		高 2		高 3		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
A	26	34	19	26	16	23	23	20	12	19	16	19	253
B	40	48	40	44	28	46	33	40	29	36	27	32	443
C	15	27	22	20	13	27	12	21	17	23	20	18	235
D	23	28	14	25	15	11	10	21	18	19	9	17	210
E	3	0	1	2	0	1	1	1	0	2	1	3	15
F	19	19	15	16	11	18	13	20	11	28	5	13	188
G	17	17	15	22	16	12	8	10	15	14	5	11	162
H	4	1	1	1	1	2	2	3	2	1	3	1	22
I	5	2	6	5	3	3	2	3	5	3	3	6	46
J	1	2	6	3	6	4	5	4	8	2	4	5	50
K	11	15	15	8	8	11	4	5	5	11	3	3	99
L	2	1	7	5	3	1	7	3	3	0	1	2	35
M	28	25	14	17	15	22	16	23	17	28	13	15	233
N	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
小計	194	219	176	194	135	181	136	174	142	186	110	145	
合計	413		370		316		310		328		255		1992

※ 本校選択の理由：ベスト5

1. 中高一貫教育（共学）なので
2. 子供の意志で
3. 高校受験がないので
4. よい教師に恵まれていると思ったから
5. 校風にひかれて

(4) 子供の勉強に対する関心（教育的関心）⇒ 生徒用アンケート（16）の項 参照

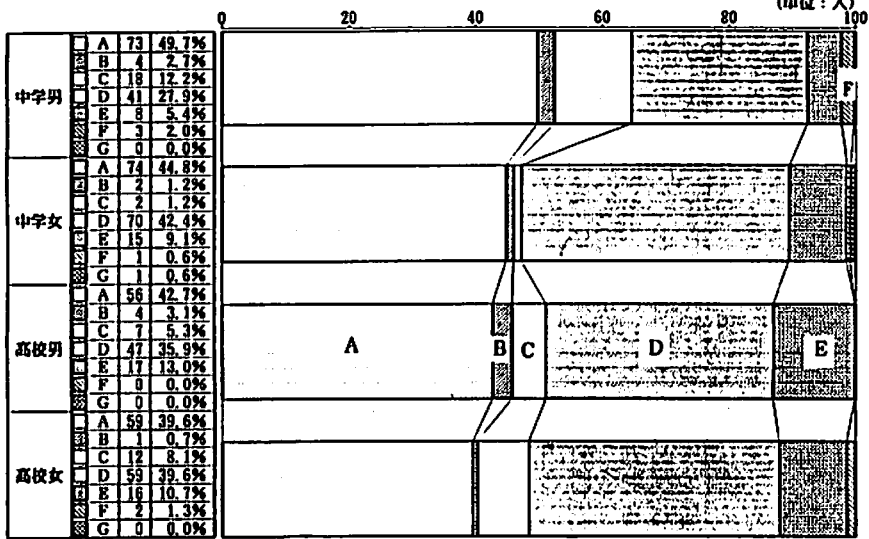
(5) 子供との対話⇒ 生徒用アンケート（17）の項 参照

(6) 子供との対話の内容⇒ 生徒用アンケート（18）の項目 参照

(7) 子供に対するしつけの重点ポイント（5つ選択）⇒ 生徒用アンケート（20）の項 参照

(8) 子供を大学に進学させる意義⇒ 子供を大学に進学させる意義は何ですか。(1つ選択)

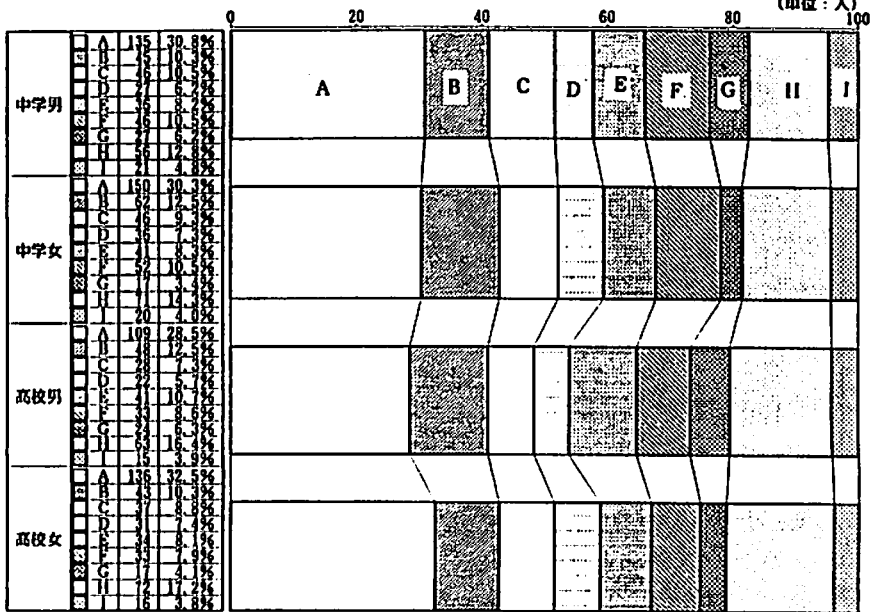
<グラフ42> 大学進学の意味



A: 専門知識や技術を得るため      B: 一流企業や大企業に就職しやすくするため  
 C: 学歴で差別を受けることがないように      D: 交友関係を広げ、豊かな人間関係を築かせるため  
 E: 厳しい社会に出るためのモラトリウム(猶予)期間として必要である      F: その他

(11) 子供たちの将来に対する不安や心配⇒ 子供たちの将来の環境や社会にたいして、不安や心配は何ですか。(複数回答可)

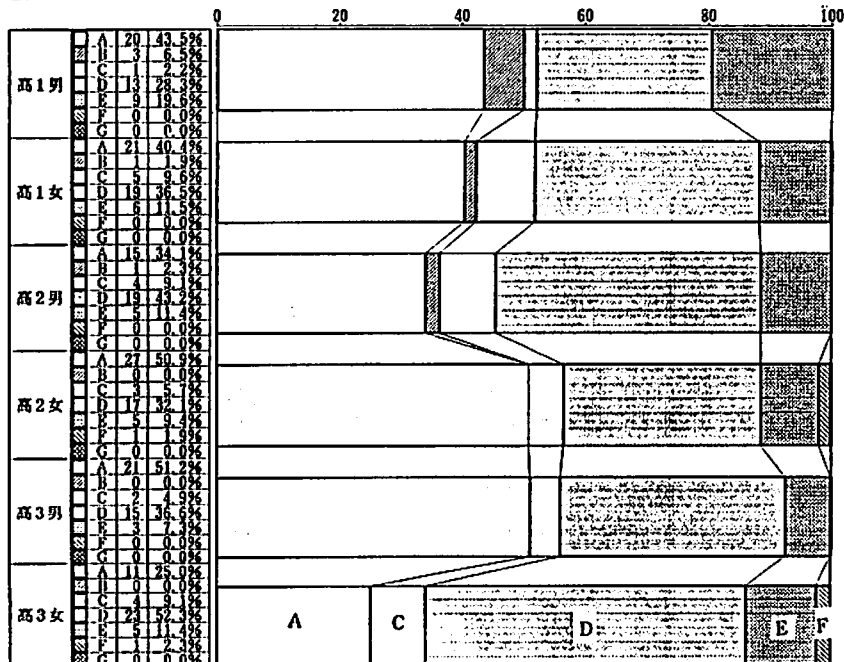
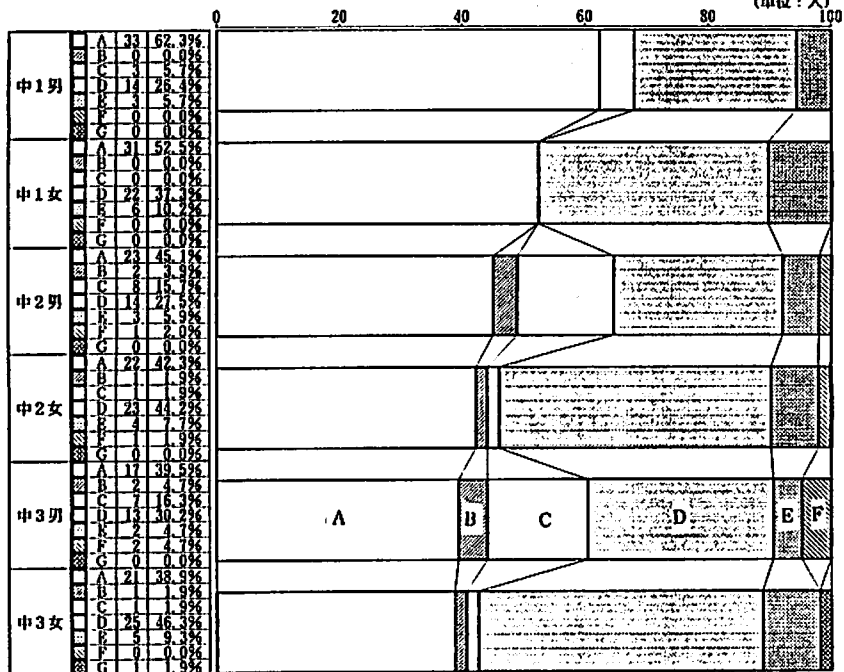
<グラフ49> 子供の将来の不安や心配



A: 環境汚染      B: 食糧危機      C: 核の脅威      D: 人口問題      E: 土地問題      F: 教育問題  
 G: 国際関係の悪化      H: 老人問題      I: 高度先端技術(ハイテクノロジー)の浸透

＜グラフ42＞ 大学進学の意味

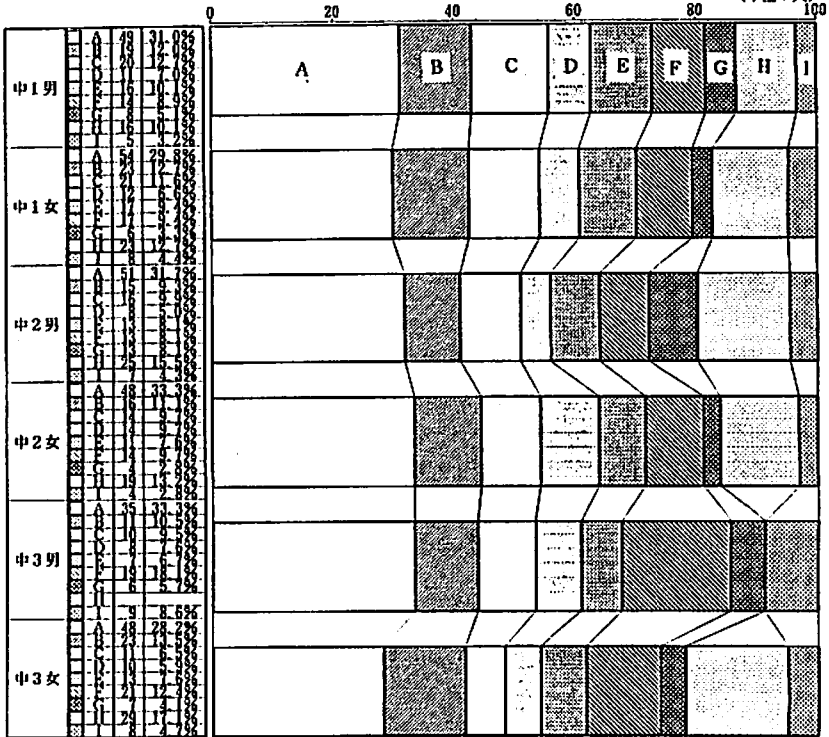
(単位：人)



- A : 専門知識や技術を得るため
- B : 一流企業や大企業に就職しやすくするため
- C : 学歴で差別を受けないように
- D : 交友関係を広げ、豊かな人間関係を築かせるため
- E : 厳しい社会に出るためのモラトリウム (猶予) 期間として必要である

<グラフ49' > 子供の将来の不安や心配

(単位:人)



A: 環境汚染 B: 食糧危機 C: 核の脅威 D: 人口問題 E: 土地問題 F: 教育問題  
G: 国際関係の悪化 H: 老人問題 I: 高度先端技術(ハイテクノロジー)の浸透

(9) 子供の将来の職業への期待⇒ 将来、自分の子供（本校在校生）をどのような職業に就かせたいですか。

- A. 学問の研究や教職関係
- B. 企業での販売や営業
- C. 事務職
- D. 公務員
- E. マスコミやジャーナリズム関係（新聞、放送、出版など）
- F. 医師、パイロット、弁護士などの専門的技術や知識を必要とする仕事
- G. 機械、自動車、建築などのエンジニア
- H. コンピューターなどの情報産業にかかわる仕事
- I. 音楽、美術、工芸などの芸術関係の仕事
- J. ファッション、デザイン、美容などの仕事（おしゃれ関係の仕事）
- K. 調理師、コックなど料理やレストランなどの外食産業
- L. 農林水産業のように自然を相手にするような仕事
- M. 語学力を使って通訳や国際理解に役立つような仕事
- N. 障害者や老人のためなどの福祉の仕事
- O. 看護婦（士）や保母（父）など病める人のための仕事や乳幼児の教育
- P. 演劇、映画、芸能関係などの仕事やタレント
- Q. 主婦として家事や育児に専念してほしい
- R. その他

子供になってほしい将来の職業 アンケートの結果 <表9>

項目	中1		中2		中3		中学全		高1		高2		高3		高校全		男女別		全
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
A	13	17	9	7	11	5	33	29	3	7	6	6	1	7	10	20	43	49	92
B	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	1	3	0	5	1	6	1	7
C	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	3	0	4	2	5	3	8
D	2	2	1	1	2	1	5	4	3	1	9	2	3	3	15	6	20	10	30
E	2	5	2	3	1	2	5	10	0	4	4	3	2	0	6	7	11	17	28
F	12	7	16	16	11	8	39	31	12	11	7	9	4	8	23	28	62	59	121
G	8	2	5	1	4	0	17	3	11	0	2	0	8	1	21	1	38	4	42
H	4	0	3	0	2	0	9	0	3	1	4	2	6	1	13	4	22	4	26
I	1	2	0	1	0	7	1	10	1	3	1	5	1	2	3	10	4	20	24
J	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	2
K	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	2	1	3	4
L	2	1	2	1	1	0	5	2	1	2	3	0	1	0	5	2	10	4	14
M	2	10	5	14	4	17	11	41	4	12	3	14	1	2	8	28	19	69	88
N	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	2
O	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3	3
P	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
Q	0	1	0	1	0	3	0	5	0	3	0	2	1	7	1	12	1	17	18
R	1	2	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
計	47	51	44	46	39	45	130	142	39	47	41	48	35	31	115	126	245	268	513
	98		90		84		272		86		89		66		241		513		

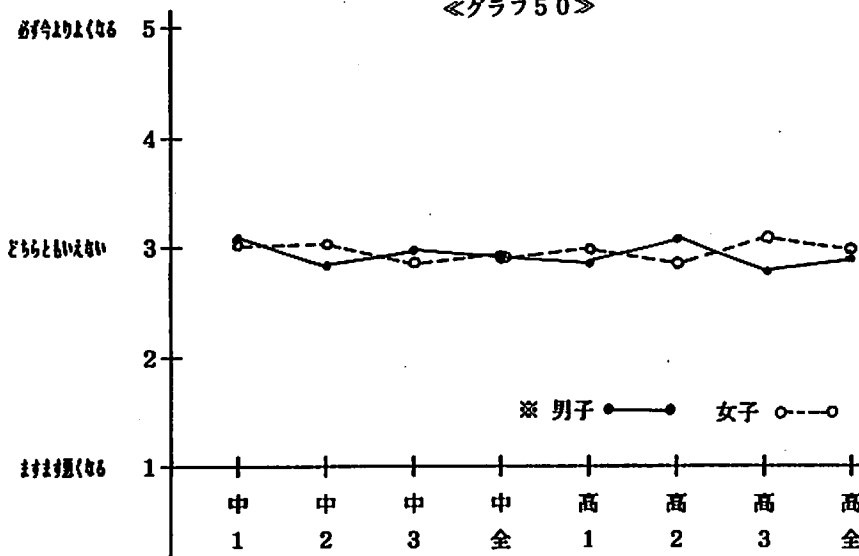
アンケート結果 < 親が子供に将来なってほしい職業ベスト3 >

<表10>

学年	性別	1 位	2 位	3 位
中1	男	A. 学問・教職関係	F. 医師、弁護士など	G. エンジニア
	女	A. 学問・教職関係	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など
中2	男	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係	G. エンジニア M. 通訳
	女	F. 医師、弁護士など	M. 通訳など	A. 学問・教職関係
中3	男	A. 学問・教職関係	F. 医師、弁護士など	G. エンジニア M. 通訳
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
中学全	男	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係	G. エンジニア
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
高1	男	F. 医師、弁護士など	G. エンジニア	M. 通訳など
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
高2	男	D. 公務員	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
高3	男	G. エンジニア	H. コンピューター関係	F. 医師、弁護士など
	女	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係	Q. 主婦(専、パート)
高校全	男	F. 医師、弁護士など	G. エンジニア	H. コンピューター関係
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
中高全	男	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係	G. エンジニア
	女	M. 通訳など	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係
中高全	全	F. 医師、弁護士など	A. 学問・教職関係	M. 通訳など

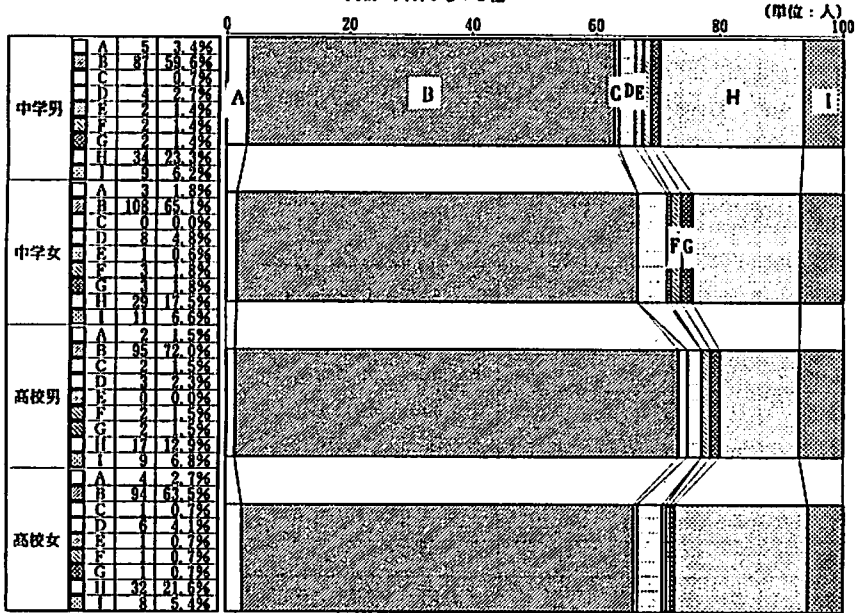
(12) 子供たちの未来に対する思い⇒ 子供たちの未来はよくなると思いますか。

<グラフ50>

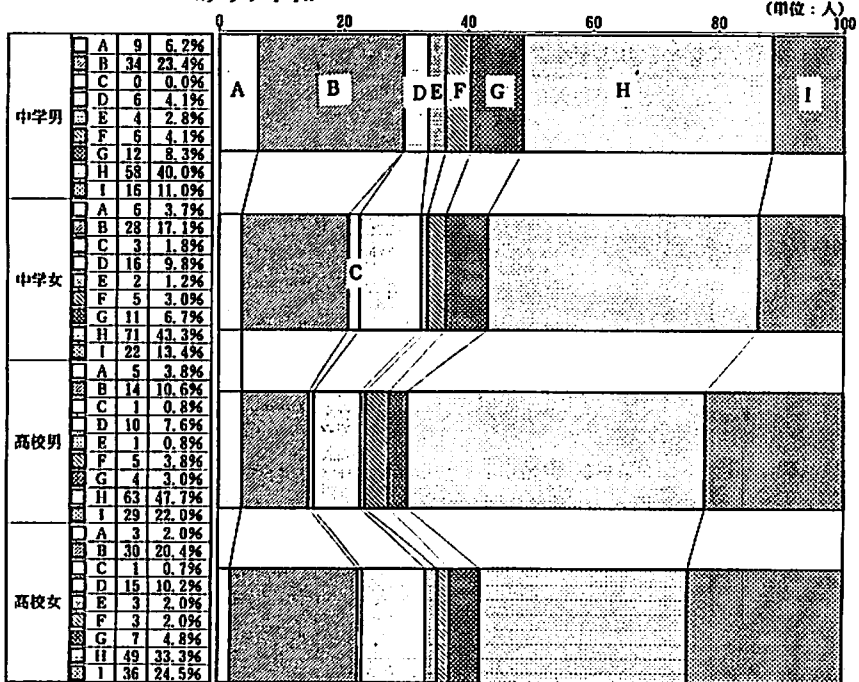


(10) 親が自分自身にとって大切なもの⇒ この世の中で自分にとって大切なものは何ですか。  
 (大切な順に上から3つ選択)

＜グラフ43＞ 父親の大切なもの1位



＜グラフ44＞ 父親の大切なもの2位

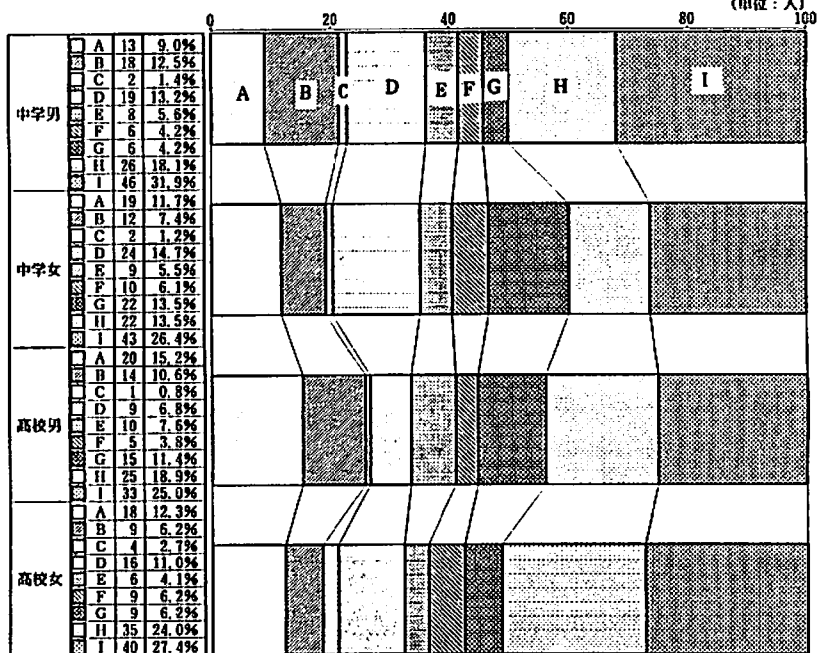


A. お金 B. 健康 C. 学歴 D. 愛情(友情) E. 趣味  
 F. 個性 G. 勉強(自己啓発) H. 家族 I. 仕事



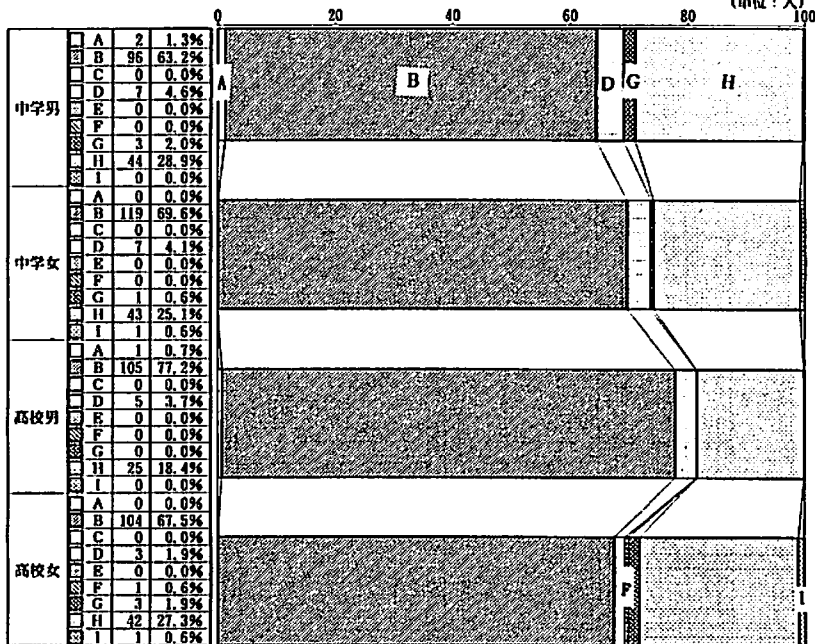
＜グラフ45＞ 父親の大切なもの3位

(単位：人)



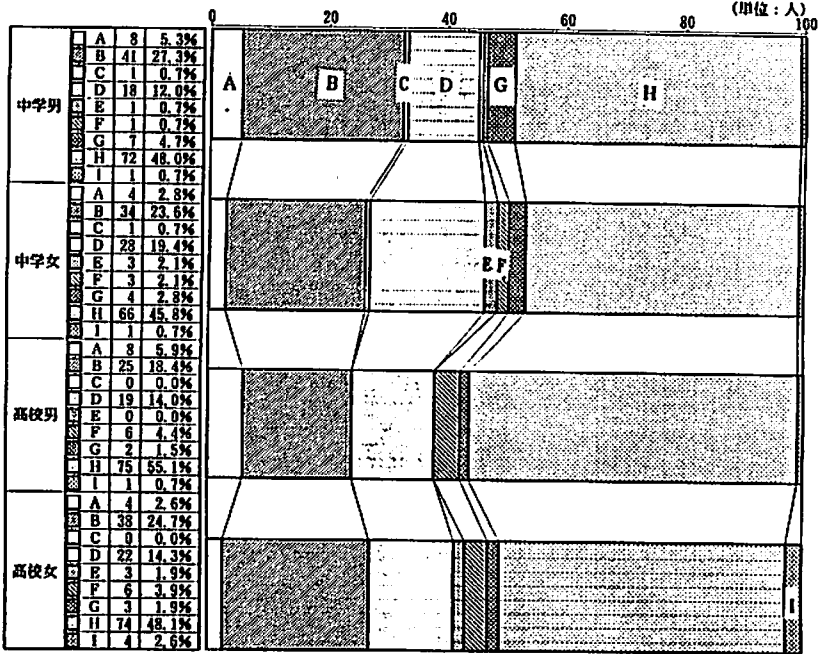
＜グラフ46＞ 母親の大切なもの1位

(単位：人)

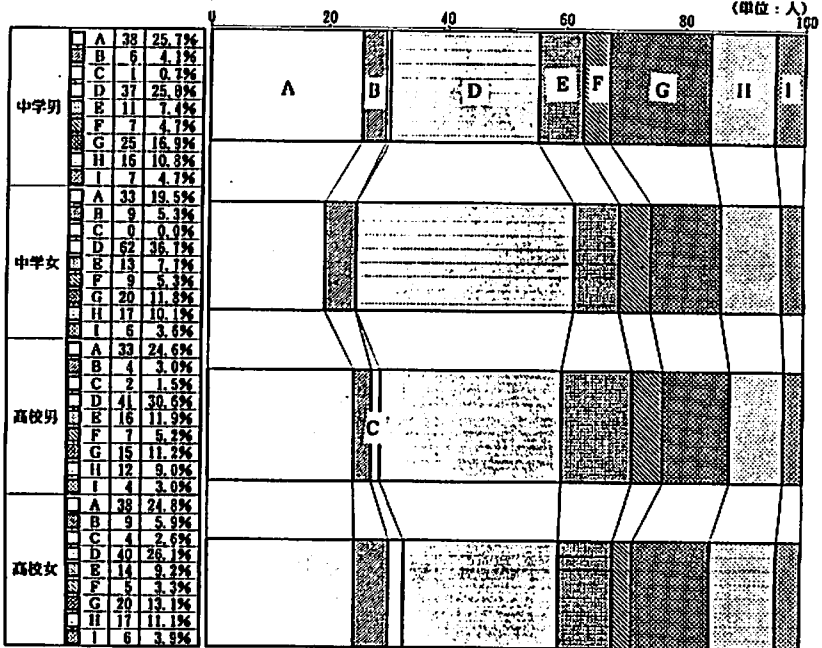


A. お金 B. 健康 C. 学歴 D. 愛情(友情) E. 趣味  
F. 個性 G. 勉強(自己啓発) H. 家族 I. 仕事

＜グラフ47＞ 母親の大切なもの2位



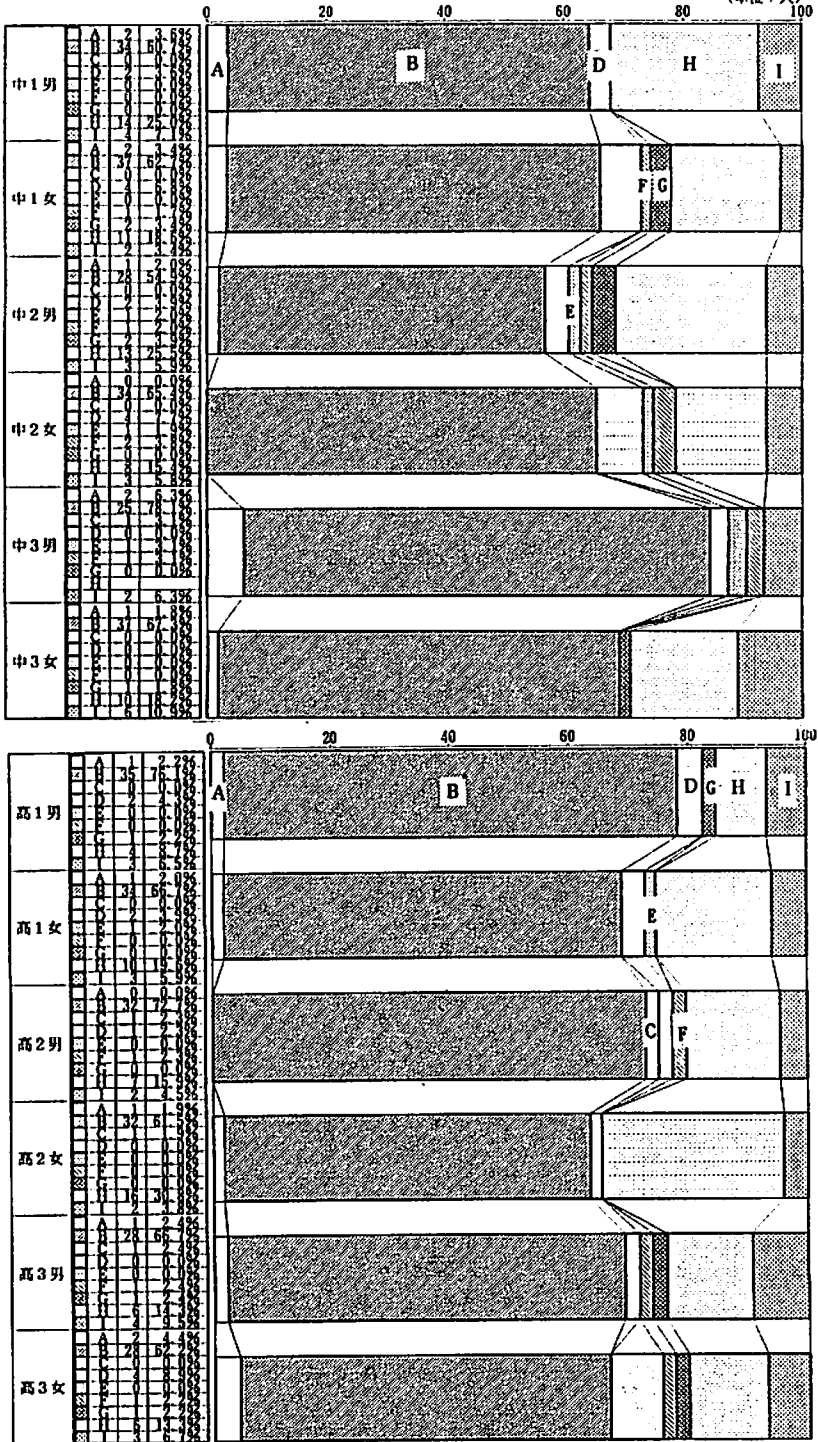
＜グラフ48＞ 母親の大切なもの3位



A. お金    B. 健康    C. 学歴    D. 愛情(友情)    E. 趣味  
 F. 個性    G. 勉強(自己啓発)    H. 家族    I. 仕事

《グラフ43'》 父親の大切なもの1位

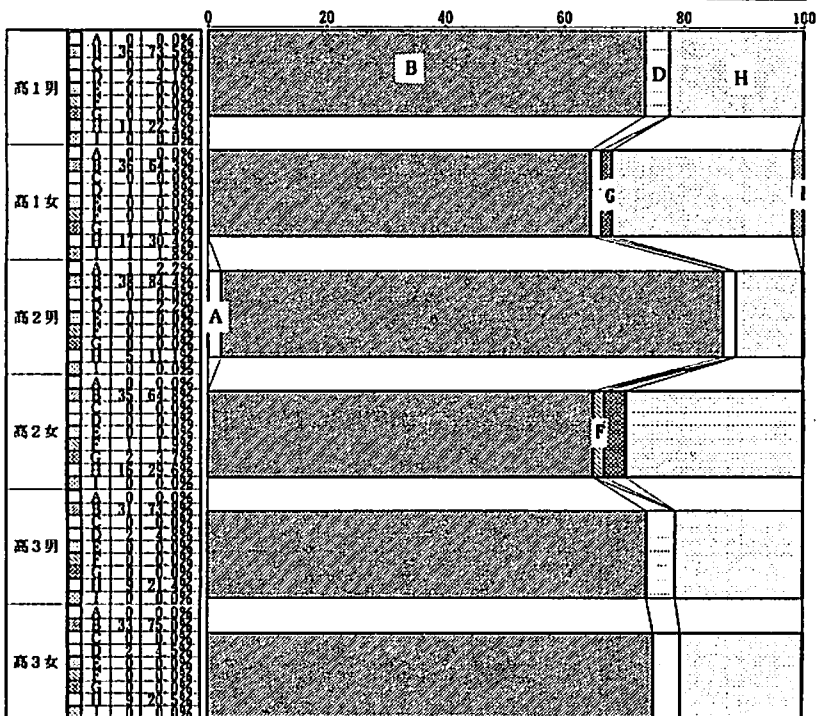
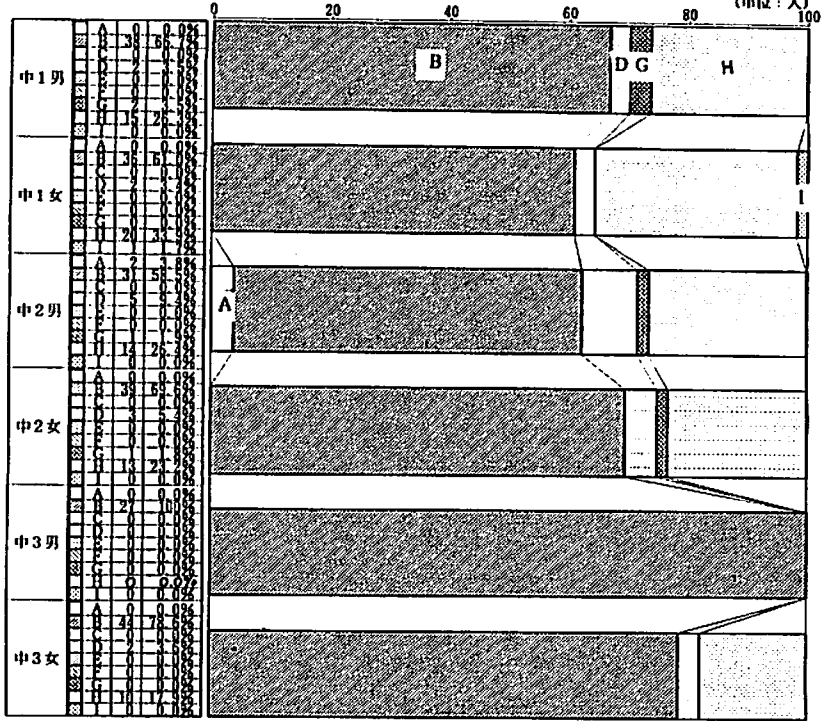
(単位:人)



A. お金 B. 健康 C. 学歴 D. 愛情(友情) E. 趣味  
 F. 個性 G. 勉強(自己啓発) H. 家族 I. 仕事

<グラフ46' > 母親の大切なもの1位

(単位：人)

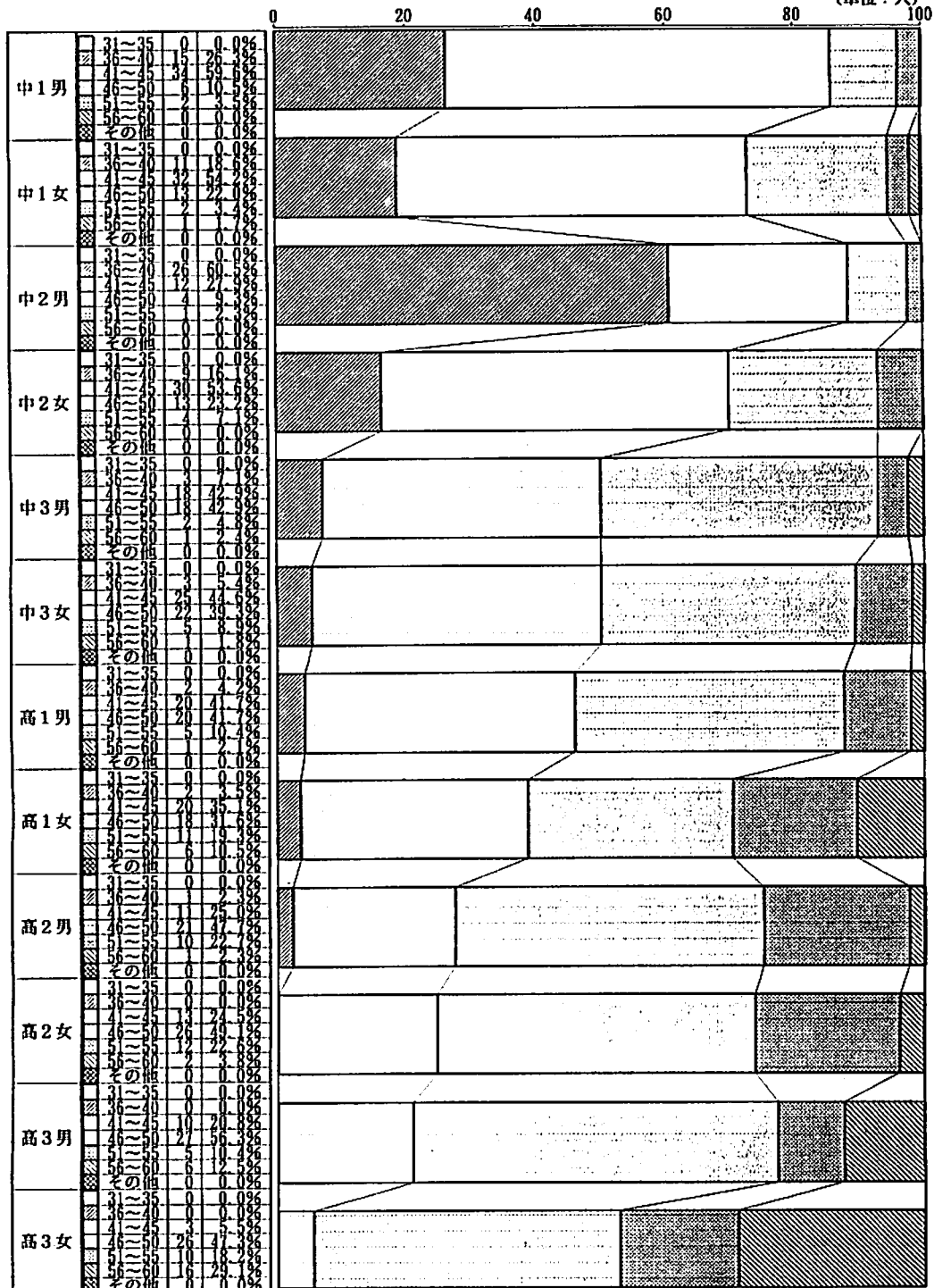


A. お金 B. 健康 C. 学歴 D. 愛情(友情) E. 趣味  
 F. 個性 G. 勉強(自己啓発) H. 家族 I. 仕事

<付録1>

父親の年齢層

(単位：人)

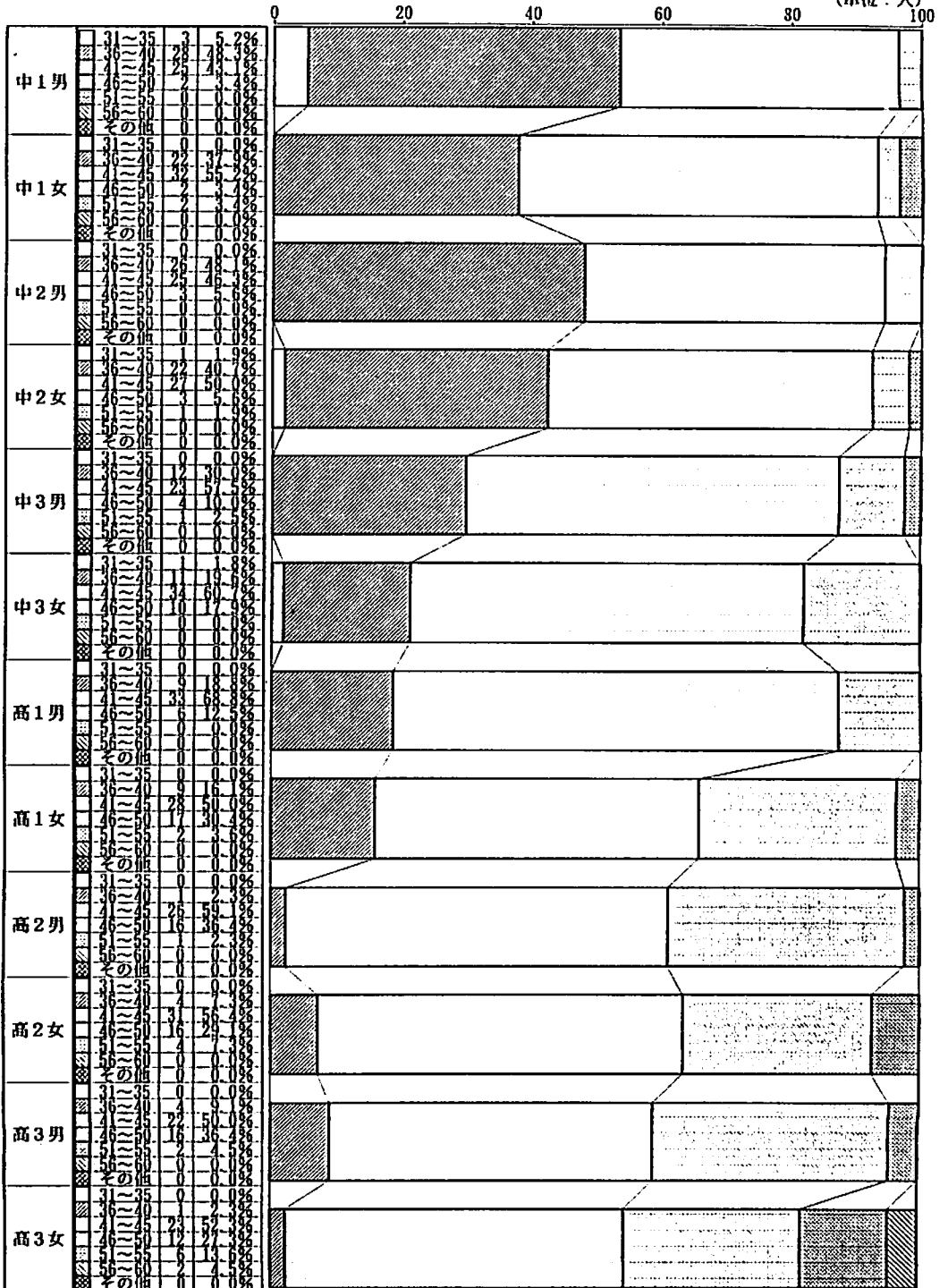


A. 31~35歳 B. 36~40歳 C. 41~45歳 D. 46~50歳  
E. 51~55歳 F. 56~60歳

<<付録2>>

母親の年齢層

(単位:人)



A. 31~35歳 B. 36~40歳 C. 41~45歳 D. 46~50歳  
E. 51~55歳 F. 56~60歳

## 4. アンケート結果から思い考えること

### 1. 生徒の学校生活

#### 【授業について】

学校生活は概して楽しく（生徒693名回答 全学平均5段階評定で3.64、男子全平均3.45、女子全平均3.81）特に、中学1年女子は『非常に楽しい』の最高値の5に最も近い4.4を示している。（グラフ1参照）高校3年を除いたすべての学年で女子の方が学校生活に楽しさを見いだしている。学校生活が楽しい理由として、どの学年も『友人がいるから』がトップで次に『クラブ活動ができるから』が大きな割合を占めている。（グラフ2参照）学校生活の根幹である授業に対しては『授業が面白い、好きな授業がある』『先生がいいから』など、教える側にとっての肯定的な理由をあげている生徒はあまり多くはなく（特に中学3年男子はどちらも0%回答！?→グラフ3参照）教師側の努力や創意工夫、配慮が必要と思われる。また学年が高学年になればなるほど、授業そのものよりも友人の存在が学校生活を楽しくする大きな要因となっている。

授業に対する理解度をみると、最も学校が楽しいと答えている中学1年女子が最も授業を理解しているようで（5段階評定で平均3.88）やはり授業の理解度と学校の楽しさは関連していることがわかる。したがって、授業に対する理解度も中学、高校とも女子の方が優れているのは当然の結果といえるだろう。（グラフ4参照 生徒703名回答 全学平均3.25、男子全平均3.17、女子全平均3.36）女子の方が男子よりも学校生活を楽しみ、授業に対する理解も深いという我校の現状はどうしてもたらされたのか。昨年度、このアンケートと同時に本校生徒の性格特性を調査したが、その結果においても女子の方が総じて外向的、積極的で社会的適応力があることがわかった。

本校は1977年に入学検査に抽選制を導入し（志願者を抽選によって3倍にしぼり、のち9教科で実技を含む学力検査を実施）奈良県下有数の進学校から普通レベルの高校をめざし個性ある学校づくりを積極的におし進めてきた。しかし県下の父母たちの過熱した受験体制志向の教育熱は特に男子生徒を県内外の受験エリート校に向かわせる結果となった。男子の受験生の減少が続き、男子の全体的なレベルが落ちはじめ、日頃の成績の面でも、クラブ活動や生徒会活動でも女性上位が目立っている。

また授業に対する理解度は中学3年から高校1年にかけてぐっと下がりはじめ、高校課程にはいるやいなや、授業の難解さが急激に増すようだ。

好きな教科は男子は中学、高校とも、上から挙げると「体育、社会、理科」、中学女子は「英語、体育、数学」、高校女子は「社会、英語、体育」となっており、中学、高校とも体育に対する興味や関心は強い。知育・徳育・体育と言われ続けてはいるが、知識偏重の現教育体制の中で、生徒達の心からの欲求があらわれているのだろう。また性差では女子の「英語」に対する関心と、男子の「理科」に対する関心がきわだっている。（グラフ5、グラフ5'、グラフ5"参照）

#### 【友達関係について】

学校が楽しい理由として「友人の存在」が大きく、次にクラブ活動がでいることが挙げられていることがわかった。クラブ活動において、生徒達は共通の関心の分野で目標を掲げ、共に活動することを通して友人関係が構築されていく。好ましい友人関係なくして結束あるクラブは存在しえないといえる。しかし、自分の友人がどのタイプかと問われれば『クラブ活動などで仲間としてやれる友人』を挙げるものは、学年を経るにしたがって減少し、『休み時間や放課後に何となく雑談する友人』『遊ぶときに自然に集まってくるタイプで、趣味などがあう』と答える生徒が

多い。特に中学、高校とも男子はその傾向が強く、60%前後を占めている。『困ったときや悩み事のあるときに、相談できる友人』を持っているものは男子に少なく（中学男子10.9%、高校男子19.2%）、それに比べ、女子の方が親しい友人関係に恵まれているようだ。（中学女子26.7%、高校女子32.8%）だが、このことはある友人関係において結束が強ければ、他の集団に対して閉鎖的になる欠陥も持ち合わせていることも否定できない。女子の方が、学校生活において小グループ化がより際立っており、学校行事などの班編成など、指導上むずかしいときがある。

友人として「自分ないもの」を持った人間として『何事でもうまくやれるから尊敬できる友人』を対象としてもつ生徒はかなり少ない。（グラフ6、グラフ6'参照）困ったときに支え合い、時には良きライバルとして互いに切磋琢磨できる友人関係が確立しにくくなっており、いわゆる、その場やその時が楽しければ良い“仲良しグループ”になってしまう傾向が強くなっているのではないだろうか。

#### 【教師との関係】

同世代の友人と別に、学校では生徒達にとって最も近い「大人のモデル」として教師が存在する。残念ながら『自分のことを相談できる本校の教師』の存在感は薄いようで、どの学年の生徒もほとんど『相談できる教師がいる』といえる生徒はいないようだ。特に中学2年、3年の女子生徒にとって、教師は「けむたい存在」のようで（グラフ7参照）、また教師にとってもこの時期の女子生徒は扱いにくい。彼女等は気持ちが変わりやすく、時にはきままで、傷つきやすく、時には明るすぎたり、精神的に不安定な時期にいる。

中学、高校の教師は自分の専門の教科指導を中心に置き、教科における生徒の理解度や達成度、生徒の成績や進路指導に重きをかけがちである。それが重要な点であることは言うまでもないが、いわゆる“教科中心主義”では今の生徒達に対して、うまく対応できないのではないだろうか。生徒が悩んでいたりと、相談したい時に心を開くことができる教師の存在が望まれている。

#### 【悩みや心配事】

それでは、生徒達の悩み事は一体何なのだろうか。悩みや心配事では中学、高校とも『勉強や成績のこと』がトップを占め、次にそれ関連して『自分の将来のこと』が続き、高校になると男女ともそれらが過半数を占めている。（グラフ8参照）しかし、傍らから彼等を見ていると、勉強をしながら、将来を見据えて、“何のために勉強するのだろうか”“何のために大学に行くのだろうか”“何のために働くのだろうか”ひいては“何のために生きているのだろうか”と深く、真剣な問いかけをする生徒は減っているようだ。自分の人生に対して、深刻に、人生論風(?)悩むことはダサク、「答えがすぐにもどってこないこと」や「答えがないようなこと」に対しては「考えても同じこと」と早々に引き上げている。悩む対象にひたむきに格闘していないといっている言い過ぎだろうか。彼等は悩んではいるが総じて明るくみえる。

また、勉強やクラブ活動や塾通いなどで忙しいはずの彼等は、意外と『趣味や自分の好きなことをするゆとりがない』を挙げる生徒は少ない。学習やクラブ活動に充実していれば、緊張感や多忙感があり、6年一貫教育の中たるみ現象のなかにひたっている生徒にとっては、かえって『勉強や成績のこと』『自分の将来のこと』などの方が気になるのだろうか。

また、彼等は身体的には伸長期で発育が著しく、エネルギーにあふれているはずの中・高校生であり、様々な病気の罹患率も一生のうちで最も低い時期にいるわりには、『自分の健康が気になる』生徒も比較的多くみられる。高校生になると男女ともほぼ10%を越えていることは気になる点である。また、『自分の容姿や性格』に悩む生徒は中学2年、3年の女子が最も多い。

（グラフ8'、グラフ8"参照）



### 【クラブ活動について】

中学1年ではほぼ8割の生徒が運動部に属し、中学全体としても、高校受験がないため、約7割の生徒が運動部に参加している。活動の状況も、中学では男女ともかなり充実して、頑張っている。(グラフ9参照、中学男子全平均3.76、女子全平均3.79)しかし、高校になると、急に女子の方が充実感が少なくなり、高校3年では男女の差がかなり開き、高校3年の女子はクラブ活動にたいして消極的になっている。(高校男子全平均3.86、女子全平均3.26)これは、運動部に属している高校女子の方が勉強や成績に対して敏感で、勉強との両立を望むあまり、クラブ活動への意欲がそがれるのではないと思われる。現に、クラブ活動と勉強との両立はすべての学年にわたって、女子の方が、より達成できていると自己評価している。(グラフ11参照)

運動部系クラブのある部員にとって、クラブ活動に熱中することが現実の勉強からの逃避となっていることも事実であろうし、また逆に、勉強とクラブ活動を両立することの“しんどさ”や“大変さ”や親からのプレッシャーのために、クラブ活動における充実感を強く感じる事ができない生徒もいることも事実である。

文化系クラブでは圧倒的に女子の部員の活動の充実ぶりが目立つ。クラブの会員数も特に中学では、女子が圧倒している。(グラフ10参照)本校の文化系クラブは器楽部、演劇部、華道部などがメインで、男子生徒にとって魅力を感じるものが少ないようだ。また、たとえある文化系クラブに参加しても、クラブの中で男子の人数が少なすぎたり、集団活動としてのモチベーションが低かったりして充実感も感じにくくなっている。全国的にみても、中学、高校における文化系クラブの活動は衰退の一途であると聞く。現代の中・高校生は文化的な関心や趣味の領域で、共に活動を通じて、仲間と喜びや連帯感を得る機会に恵まれなかったり、また自分達から積極的にその方法を考えたり、機会をつくったりしないのではないか。パソコンやビデオなどで一人で遊んで楽しむ傾向が強くと、このことは後述する彼等の気晴らしや趣味の傾向と一致する。

## 2. 生徒と塾や予備校等との関わり

### 【塾などの学習の実態】

日本の「塾」という語は、諸外国に該当する語彙がないため、そのまま“Juku”として紹介され、日本の親達の子供にたいする教育の過熱ぶりをしめすものの1つとなっている。

中学入試を終え、一息ついた本校の中学1年生でも男子で約6割、女子で約7割の生徒が塾などに頼り、自分だけで家庭で学習できるものは少数派となっている。中高6年一貫教育のおかげで高校入試がないため、中学3年ではその数は目立たぬが、高校2年ぐらいから、塾などに頼る生徒が増え、大学受験を控えた高校3年になると、女子では塾など行かず自力で勉強している生徒はわずか3名(4.2%)となっている。(グラフ12、グラフ12'参照)小学校からの塾通いに慣れ親しんでいる生徒達にとって、塾や予備校などはもはや学校以外の“特別の勉強の場”ではなく、彼等の日常性の一部となっていると思われる。

### 【塾などに通う理由】

中学、高校全学年、男女とも『自分の意欲だけでは勉強できない』をトップの理由として挙げている。(グラフ13、グラフ13'参照)これでは、勉強は学校外でも勉強の場や環境を自分の意志でととのえることなしに、また自分で勉強のやりかたを創意工夫することなしに、第三者にパッシブ的に与えられたものにならざるをえない。学習の場を受動的に与え続けられた子供達の将来は、学が姿勢や意志のない大学生の急増とつながっているのではないか。

また、『学校の勉強だけでは不満である』という理由を挙げている生徒が、中学入試を終えた

中学1年と大学入試をひかえた高校3年に多いのはどうしてか。(それぞれほぼ20%を越えている) 前述したように、本校はいわゆる受験エリート校ではなく、入試に抽選制などを導入してきた結果、全体として普通レベルの高校となってきた。しかし、生徒達の学力差はひどく、例えば、ある模試の結果を示すと、偏差値は上は80近くから下は40前後まで開いている。附属小学校との接続の問題もあり、学力差を縮める方策はなかなか取りにくいのが現状である。授業をやる方も、受ける方もとまどいがあり、受験エリート校として期待して入学してきた成績上位の中学生にとっても、また学力不振に悩む高校生にとっても不満があることはよくわかる。多様な学力を持った生徒に対して、補習や追試をしたり、一部、教科によっては能力別クラス編成の授業を行ったりしているが、我々、教師が十分、うまく対応しきれていない面があると思われる。

#### 【塾などで習っている教科】

中学、高校とも『英語』が断然トップで、高校では次に『数学』が続く。(グラフ14、グラフ14'参照) このことは、どのような進路や学科を選択しても、大学の入試科目として『英語』が課されないところはほとんどない現状を反映している。

本校では、今年度より国際化時代に対応する意味でも、英語の授業を中学1年、2年時に従来の半分の20人のクラスで行なっている。教育現場でのこのような試みや改革が、塾などの隆盛に少しでも歯止めがかけられることを期待している。

#### 【塾などに通っている頻度】

塾などの通学の頻度を見ると、高校3年にもなると1週間に6回も通っている生徒がいる。(表1参照) 社会人の働き過ぎによる疲労やストレスからおこる“過労死”が社会的に問題となっているが、生徒達は毎日、夜遅くまで残業している父親のようである。人よりもよけいに学習しているという充実感や意欲を差し引いても、彼等の心身の健康面を考えた場合、大きな問題である。現に、保健室には、毎日のように疲労や寝不足、体調不良を訴える生徒が後をたたない。例えば、発熱して授業時に保健室で休養していた生徒に、放課後すぐに帰宅して静養するようにすすめても、そのアドバイスが無視される場合がかなりある。「学校での授業」より「塾などでの勉強」の方が大切なのだろうか。健康第一とさとしても、“母親に言ってほしい”と本気で訴える生徒が少なからずいるのが現状である。

生徒達の『塾などでの勉強にたいする評価』は驚くほど高い。(グラフ15参照) なぜ、彼等はそれほど塾などの学校外での勉強に駆りたけられるのだろうか。普通レベルの高校に近くなったといっても、本校の高校生はほぼ全員が大学への進学を決めている。最初から本気で就職を希望する生徒はほとんどいない。自分の人生や生き方や大学進学の意義などについて、十分考えないで、ただ“みんなが行くから大学に行きたい”“まだ働きたくなく、遊びたい”などという理由で、明確な目的もなく大学進学を志向している生徒もかなりいるようだ。親の経済力に支えられ、幼いときから“普通路線”を歩んでいる(歩まされている)生徒達は、自分自身の内側からの意欲にささえられないと、受け身的学習にならざるをえないし、受け身的学習であるがゆえに従順である。従って、みんなが歩む“普通路線”から何らかの理由で(成績不振など)脱落しかかると、急に無気力に陥ってしまうのである。

人生における早い時期からの“教育投資”が人間の幸せを決めるという多くの親達の考えを改めないかぎり、教育の現場での様々な問題は、解決の糸口さえ見つからず、ますます悪化するのではなかろうか。近い将来、学校も学校5日制(週休2日制)に移行することは必然だが、このような単線的な考え方では日本の子供達はますます塾通いに駆りたてられるのは目に見えている。子供達が、休日毎に、家族とともに旅行や釣りやハイキング、登山などに出かけたり、会話を楽

しんだり、スポーツを地域社会で楽しんだりして、ゆったりした気持ちで生きていることの幸せを体感できるのはいつのことなのだろうか。

### 3. 生徒の家庭生活

#### 【家庭での学習時間】

中高6年一貫教育で、高校受験がないことの学習における“中だるみ現象”が学習時間のアンケートで如実にあらわれている。中学1年段階では中学受験の名残がみられ、その後、公立学校とは逆に中学3年まで学習時間が減り、高校1年でやっと歯止めがかかり、高校3年では大学受験を控え、学習時間が長くなっている。また、家庭の学習時間は女子の方が中学、高校とも多い。

(グラフ16参照) 高校受験がなくても、なおかつ生徒の学習意欲や知的好奇心を刺激する方法を日常的な教科指導の中で追求されることがたいせつである。また、今年、試みとして、中学3年時の3学期に(1月上旬)この学習における中だるみ現象を打開するために“中学卒業検定試験”をはじめて行なった。それが生徒にとって、よい意味での学習の動機づけになったかどうか、今後の検討に待たれる。

学習の中だるみ現象に対して有効な手だてを考えることも大切なことだが、高校受験がないことの本校の本来の長所を見落としてはならないと思う。高校受験のための勉強に拘束されない貴重なゆとりを生徒達にもたらしめていることは確かだし、そのことが、生徒達に学習外における様々な活動(クラブ活動、生徒会活動、学級活動、ボランティアなどの学校外の活動など)に有効に結び付けば、本校の特色である自由を基盤とした魅力ある校風づくりにつながるだろう。

#### 【親との関係→①親の教育的関心】

子供達は自分たちの勉強に対しては、父親より母親の方がよく注意し、関心が強いと感じ、また、男子の方が女子よりも両親からのプレッシャーを強く感じているようだ。言い換えれば、息子をもっている親のほうが娘をもっている親よりも教育的関心が強く、母親はいつも父親より教育的関心が強い。(グラフ17参照) 同じ問を親に対して問うてみると、全く同じ傾向が出ている。(グラフ17'参照) しかし、興味あることに、親は子供が感じているほどは注意していないと思っており、注意を受ける側の子供の方が強く感じていることがわかる。

#### 【親との関係→②親との対話】

どの学年も男女とも、父親よりも母親とよく話し、とくに女子は母親との親密度は強い。男子は高校2年、3年時になると母親との対話が以前に比べると少なくなるようだ。一方、父親に対しては、女子は高校2年を除き、どの学年も男子ほど話をしなくなり、父親を避ける傾向がある。(グラフ18参照) しかし、親に対して全く同じ質問をすると、親の方が子供より、子供との話し合う機会が多いように思っている。しかも、父親は息子を持つ父親より、娘を持つ父親の方が対話がなされていると思っているようで、(特に娘が中学生の場合)娘からみたアンケートの結果とはかなり違った結果が出ていることは興味深い。(グラフ18'参照) 父親は娘に対して、関心や愛情の表現が下手なのであろうか。

#### 【親との関係→③対話の内容、対話の時間】

普通程度以上に親と話し合っていると答えた生徒達に、親との対話の内容を問えば、父親とは中学、高校とも『勉強や成績のこと』『政治や社会の出来事』が多く、中学では『学校生活のこと』『趣味や遊びのこと』が目立っている。高校になると、急に『自分の将来や進路のこと』が増えるが、『親の仕事の内容や職場の様子』はほとんど増えない。(グラフ19、グラフ19'、グラフ19''参照) 『父親の仕事の内容や職場の様子』を通じて、子供達は『自分の将来や進路のこ

と』を考え、父親が抱えているであろう職場の問題や矛盾点からも『政治や社会の出来事』を見る目が養われるのではない。働く父親像が浮かび上がってこないのはどうしてなのだろう。

一方、母親とは主に、中学、高校とも『勉強や成績のこと』『友人関係のこと』『学校生活のこと』『自分の将来や進路のこと』が大部分を占めている。(中学、高校どの学年も、男女とも約80%程度)『親の仕事の内容や職場の様子』や『政治や社会の出来事』はわずか数%である。

(グラフ20、グラフ20'、グラフ20"参照) 父親と母親とでは対話の内容に大きな差がみられる。子供は日々、成長し、変化しているのに、依然と子供の生活に関する話ばかりでは過干渉で、いわゆる“教育ママ”と思われるもしかたがないのではないかと思う。母親はもっと自分のことや自分の人生に関心を持ち、社会に対してももっと目を開くべきである。親は子供が高校生になれば、同じような比重で双方のことを話し合うべきでないだろうか。

親との対話の時間は『夕食時やその団楽』の時がもっとも多く『日曜日や休日』は意外に少ない。『子供の将来や進路のこと』など肝心なことはもっと時間をかけて話し合い、休日は家族が精神的にも時間を共有できるようにしたいものである。(グラフ22参照)

#### 【親からよく注意されること→親の子供に対する“しつけ”の内容】

子供に日常生活で親からよく注意される点を問うと、中学2年女子を除き、全学年の男女生徒はまず第1位に『勉強』を挙げ、次に『身の回りの片付けや整頓』が来る。『家事の手伝い』『お金の使い方』『趣味や娯楽・レクリエーションに熱中しないこと(テレビ、ラジオ、CDテープなどの視聴や、マンガ、ファミコン、パソコン、楽器の演奏など)』『あいさつや礼儀正しくすること』『言葉づかい』などが次に続く。特に女子には『家事の手伝い』『言葉づかい』『あいさつや礼儀正しくすること』などが親から要求されている。男子にとっては『お金の使い方』に問題があるようで、家庭での男女のしつけ方にかかなりの差があることがわかる。

しかし、将来、自立した人間として必要な『公共の場でのマナー(ゴミ、空き缶などの散らかし、列のわりこみなどしないこと)』についてはしつけは、生徒の側からみるとほとんどなされていない。(表2、表3参照) このことは、生徒の学校での生活をみればよくわかる。掃除はサボリ、ゴミや空き缶を投げ散らかす生徒のいかに多いことか。教師はこういった当然の事ができない、できていない点での生活指導で多くの貴重な時間を消費しているといっても言い過ぎではない。

親に対してまったく同じ質問をすれば、アンケート項目の1位の結果は見事なまで異なっている。親は子供に対して、全学年男女とも『あいさつや礼儀正しくすること』を最も重要な点として挙げている。つぎ『身の回りの片付けや整頓』『家事の手伝い』『言葉づかい』『勉強』『友達との交際』などが続く。『勉強』は中学2年の男子に対して、初めて2位で登場し、他の学年の男子では3位に挙げられている程度である。(表4参照) 親と子供がだいたい一致している項目は『身の回りの片付けや整頓』『家事手伝い』『言葉づかい』『学校に遅れないようにすること』などの点である。

いわゆる日本社会の二重構造“建前”と“本音”、“理想”と“現実”が、親の立場と生徒の立場の差でくっきりと現れているのだろうか。それとも、親は子供が気にするほど『勉強』のことは注意していないのに、子供が『勉強』や成績が気になるあまり、少し注意されても、いつも注意されているように感じてしまっているのだろうか。

#### 【生徒の他の生活時間とライフスタイル】

家庭で家族の一員として積極的に家事などを手伝っているのだろうか。全体的に見て、男女とも家事分担が少なすぎるようだ。中学、高校とも女子で普通程度しか手伝わないし、男子はそれ以下である。(グラフ23参照) 男女とも基本的には自分のことは自分でできることが望ましい

し、新しい家庭のあり方や将来の男女の生き方が問われている現在、もっと家庭で基本的な生活訓練がなされなければならないと思う。子供達にもっと家事などに参加させるべきではないか。

生徒達は勉強以外にどういうことをして、家庭での自分の時間を過ごしているのだろうか。気晴らしの遊びや趣味の種類を問えば、まず『音楽鑑賞』『テレビやラジオなどの視聴』『読書』などが挙げられている。中学男子で『パソコン、ファミコンなどの操作』が3位にはいつているが、高校になると時間をとるためか、かなり減少する。女子は幼いころから習い事として楽器に親しむものが男子に比べて多いため、『楽器演奏』を挙げるものがかなりいる。(表5、6参照)

このように(自分の)部屋で1人でできる遊びや趣味が多く、運動クラブに所属していない生徒達はスポーツが好きであっても、運動不足気味で、体育の授業時しかスポーツを楽しめる機会ほとんどない。

テレビ、CD、テープなどの実際の視聴時間は中学、高校とも1~2時間程度で、学年によってさほどの差はない。中学は男子よりも女子の方が余裕があるのか、テレビなどの視聴時間が長い。高校になると平均的には変わらなくなっている。(グラフ24参照)

しかし、睡眠時間は男子の方が多く取り、高校1年時になると、男女とも中学に比べ少なくなっている。(グラフ25参照) 常日頃の疲労が睡眠によってうまく回復されているかどうかを調べると、不思議なことに、睡眠時間を多くとっている男子の方が概して朝の目覚めが悪いことがわかった。(グラフ26参照) 一晩寝れば回復するはずの年代であるのに、普通に起きられる生徒はほとんどいない。なぜ、そんなに朝の目覚めが悪いのかを聞けば、『勉強疲れ』や『通塾の(予備校など)の疲れ』『クラブ活動の疲れ』など具体的理由を挙げる生徒は、学年を追って少なくなり、一体、何で疲れているのかわからないようだ。(グラフ27参照) 『日常的な全般的な疲れ』は慢性的な疲労へとつながり、彼等の倦怠感をつららせているようだ。

#### 【生徒にとって大切なもの→生徒の人生観】

生徒達は自分たちにとって、何を一番大切なものとしてとらえているのだろうか。その価値観から彼等の考え方や行動が窺いしれるのではないかと思い、〈選択肢 A: お金 B: 健康 C: 学歴 D: 愛情・友情 E: 趣味 F: 個性 G: 勉強 H: 家族〉の中から、大切な順に上から5位まで列記させた。

中学、高校とも、大切なものとして第1位は、当然のごとく『健康』がトップで、『愛情・友情』『家族』などが次に続く。中学生にとっては『家族』の占める位置が大きく、高校生になると親離れの精神的自立のきざしか、『家族』を大切なものとして挙げる割合は減ってくる。また、中学、高校とも、女子の方が男子よりも、かなり『愛情・友情』を挙げるものが多い。また、現実的に『お金』を第1に挙げるのは男子の方が多く、『お金』の大切さを認識しているようだ。生徒の本分でもあり、学ぶことが彼等の生活の基本であるのに『勉強』を最も大切なものとして挙げる生徒は、高校女子を除き、残念ながら多くはない。特徴的なことには、高校男子で『勉強』を最も大切なものとして挙げた生徒は0%で、女子のその比率(15.9%)に遠く及ばない。

(参考 中学男子6.2%、中学女子0.6%) 『健康』『愛情・友情』『家族』などと伍して『勉強』が来るべきではないのだろうか。しかし、生徒達は『勉強』よりも『お金』の力に魅力を感じているようだ。“生命”以外のほとんどのものが、『健康』の一部さえ『金』の力で獲得できるのが現実の世相ではないのか、そういう考えが子供の世界まで及んでいるのかもしれない。

(グラフ28、グラフ28'、グラフ28"~グラフ32参照)

両親に対しても、「この世の中で、自分の子供にとって大切なものは何ですか」と同じ項目で子供に大切にしてほしいものを問うた。父親も母親もまず『健康』『愛情・友情』を挙げ、次に

『勉強』を第3位に挙げている。(親用アンケート結果 グラフ33～グラフ38参照) その後に、『家族』や『個性』などが続き、3位までに『お金』を挙げる人はほとんどいなかった。親の願いがあらわれているといえる。

子供達は自分の未来に対しては、やはり期待と夢をもっている。その度合は女子の方が強く、自分の未来に対して、男子より可能性を信じているようだ。(グラフ39参照) 女子の方が、概して、積極的で成績も良いことが考えられるが、これは、今日、女性の生き方が多様化され、男性ほど固定的でないことも反映されているのかもしれない。しかし、自分たちを含む社会全体についての未来については明るい方向を見いだせているものは少ない。(グラフ40参照)

#### 4. 親の立場から→親用アンケートの結果より

##### 【本校の教育について】

本校の教育についてはどの学年も普通以上の評価が与えられ、(親のアンケート回答者総数624名 本校の教育についての満足度 5段階評定 全学平均3.37、女子生徒を持つ親3.42、男子生徒を持つ親3.29) 概して、娘を持つ親の方が本校の教育に対して肯定的である。(グラフ41参照) 不満な点を聞くと、①子供が中だるみ現象で、ほとんど勉強しない、②設備が悪い、③大学進学に有利でない、等が主要な項目として挙げられている。次に『学校での生活指導が甘くてルーズだ』『クラブ活動が不活発だ』『教育方針がはっきり分らない』などが続く。(表7参照)

本校入学選択の理由を尋ねると、①中高6年一貫教育(共学)なので、②子供の意志で、③高校受験がないので、④よい教師に恵まれていると思ったから、⑤校風にひかれて、等が上位約70%を占める。次に『教育内容が優れていると思ったから』『“いじめ”や“校内暴力”がないと思ったから』が続く。(表8参照) 『中高6年一貫教育なので』『高校受験がないので』は『中だるみ現象でほとんど勉強しない』になりやすく、『校風にひかれて』『“いじめ”や“校内暴力”がないと思ったから』『よい教師に恵まれていると思ったから』などは『学校での生活指導が甘くてルーズだ』『教育方針がはっきり分らない』などと転ずる。実際、“自由な校風”が小規模校の6年一貫教育の“なれあい”になれば、“いいかげんで、甘くてルーズ”な学校のイメージと繋がってくる。このように、評価も批判も表裏一体であることがわかる。

本校は教育目標として次の3つを掲げている。

① 自由で自立した人格と社会的責任感の自覚を養う学校

自主的学習活動、生徒会活動・クラブ活動などを通じて、豊かな人間性と社会道徳、社会への適応性を養う。

② 多様な能力に対応し、それらを伸ばせる学校

生徒の特性や能力に応じて、勉学、芸術、スポーツ、自治活動を保障する。

③ 社会、世界に開かれた学校

留学生、帰国子女、社会人なども受け入れる。社会体育と提携したり、社会人や教育関係者などを講師として招く。

この目標設定に際して次の4つが共通の視点として合意、確認されている。

① 本校の伝統的な自由な校風を基本にすること。

② “受験主義”による進学エリート校にしないこと。

③ 進路を保障する学力をつけること。

④ 現代の社会情勢に応じられること。

しかし、このように単なる受験校でもなく、普通の学校でもない“新しい学校”をめざした本

校は、予算や設備の面でも、教職員の人的条件の面でも様々な困難点をかかえており、これらは本校の教育目標達成にとって大きな障害となっている。また、“子供がよい大学に入りさえすればよい”といった近視眼的な見方にとらわれない保護者の真の意味での“本校に対する理解と協力”が必要で、そのことが、教職員の日々の精励と合致してはじめて、本校のユニークな学校づくりが実現化できるのではないだろうか。

#### 【子供を大学に進学させる意義→親の教育観】

前述したように、本校の生徒はほぼ全員、大学進学を志向している。親に子供を大学に進学させる意義を問えば『専門知識や技術を得るため』『交友関係を広げ、豊かな人間関係を築かせるため』の2つの大部分を占めており(約80%前後)、一方、『一流企業や大企業に就職しやすくするため』は数%である。特に女子生徒の親は『専門知識や技術を得るため』と同じ程度に『交友関係を広げ、豊かな人間関係を築かせるため』に意義を見いだしている。(グラフ42参照)ただ、高校3年女子生徒をもつ親が『専門知識や技術を得るため』よりもぐーと『交友関係を広げ、豊かな人間関係を築かせるため』に重きを置くのはどうしてなのだろうか。(グラフ42'参照)親たちは、自分の娘が高校3年生になって具体的に進べき方向や学部を決めたときに、『専門的な知識や技術を得る』ことはあまり期待せずに(or出来ずに)、娘が豊かな交友関係を持ち“人なみに”大学生活をエンジョイできるよう、一種の“モラトリウム(猶予)期間”として大学生活を考えがちではないのか。意識の根底に“どうせ女の子だから”という思いがありはしないか。また、子供が『学歴で差別を受けることがないように』と願う親は、概して、男子生徒の親の方が多い。

#### 【親の期待する子供の将来の職業→親の職業観と子供の将来への期待】

高校や大学の教育を終えて、自分の子供を将来どのような職業に就かせたいかについて尋ねると、本校の大部分の親たちは、①医師、パイロット、弁護士などの専門的技術や知識を必要とする仕事、②学問の研究や教職関係、③語学力を使って通訳や国際理解に役立つような仕事を挙げている。(全回答者数513名中 約60%の301名)次に、『マスコミやジャーナリズム関係(新聞、放送、出版など)』『コンピューターなどの情報産業にかかわる仕事』が続く。

また、子供の性差からみると、男子に対しては『機械、自動車、建築などのエンジニア』『コンピューターなどの情報産業にかかわる仕事』に、女子に対しては『語学力を使って通訳や国際理解に役立つような仕事』に就いてほしい気持ちが強くあらわれている。ただ、高校3年の女子の親が『学問の研究や教職関係』と同じ2位に『主婦として家事や育児に専念してほしい』を挙げているのが気にかかる。これは親たちの子供に対する期待というよりも、現実容認の態度のあらわれであろうか。表9、表10参照)

職業選択においては、もちろん自分の子供達が将来お金に困ることなく、経済的に自立してほしいという親の願いは当然であるが、いつの時代も、その時々の人気の職業は基本的に安定した高収入をもたらす場合が多い。親たちの職業観はまず、安定と高収入を基礎に置く傾向が強く、したがって職業選択の幅が狭くなっている。子供の望みや能力と親たちの認識や期待に大きな差がありはしないか。それにしても、公務員(30名)や主婦(18名)に比べても『障害者や老人のためのなどの福祉の仕事』や『看護婦(士)や保母(父)など病める人のための仕事や乳幼児の教育』などを選ぶ親が、わずか2、3名とは少なすぎはしないか。

#### 【親の大切なもの→親の人生観】

親は自分の人生にとって、一体、何に対して意義をみいだしているのだろうか。子供に対してしたように、〈選択肢 A: お金、B: 健康、C: 学歴、D: 愛情(友情)、E: 趣味、F: 個

性、G：勉強（自己啓発）、H：家族、I：仕事〉の中から、大切な順に3位まで選んでもらった。（子供のアンケート項目に『仕事』を加えたのみ）

父親にとって大切なものは、①『健康』、②『家族』、③『仕事』となる。（グラフ43～グラフ45参照）『健康』や『家族』よりも『仕事』を第一と挙げる父親が中学、高校とも5、6%いる。自分にとっての『勉強（自己啓発）』『個性』『趣味』よりも『仕事』を第一とする父親はいわゆる日本型“企業中心社会”の中にどっぷりと浸かりすぎてはいないか。『仕事』の場である会社を第一義とし、会社しか知らない世間の狭い、いわゆる“社閉族”は社会にとっても、家族にとってもマイナスになりつつあるのが現状である。『健康』『家族』『仕事』だけでは自分自身のためにが欠落している。まず、父親が自分を大切にしないかぎり、経済活動に重きを置く日本社会の論理は変わりようがない。家庭人として時間的余裕を持って、子供達との対話や共通の趣味などを楽しむことが必要だ。父親は『仕事』、母親は子供の教育という分担では現代の子供達がかかえている様々な問題に親たちは対処しきれなくなっている。

一方、母親は大切なものとして、①健康、②家族、③愛情（友情）を挙げている。母親は父親に比べて時間的余裕があるためか、第3位に『勉強（自己啓発）』や『趣味』を挙げる人が多いが、『愛情』の次には『お金』が来る。（グラフ46～グラフ48参照）

両親とも、“仕事のため、家族のため、夫のため、妻のため、子供のためだけの人生”だけでは充実して自分の一生を生き続けることは容易でないし、子供にとっても魅力ある大人のモデルにはなりにくいと思う。

#### 【子供達の未来について】

親たちに、子供たちの将来の社会に対する不安や心配について尋ねると、多くの親たちはまず『環境汚染』を挙げ、次に来るべき高齢化社会の『老人問題』が来る。子供達の『教育問題』に対する心配や不安は思ったより少ない。（グラフ49、グラフ49'参照）

本校は今年度より高校1年生（4年生）を対象に、環境問題に取り組むために従来の教科の枠を越えて、理科、社会、保健体育が合議し、総合教科“環境学”を開講した。週1回の6、7限に行なっている。“余分なことをやらされている”“大学受験に関係がないのに”という生徒の声もあるが、このように時代が要請している問題に生徒と共に取り組めることは、実験的な事ができる附属学校として、よき試みであると思う。

子供達の生きる未来はどうなるのか、今かかえている問題を解決して、よりよい時代になるのか、親に問うてみると全学年のほとんどの親は『良くなるか、悪くなるかどちらともいえない』と答えている。（グラフ50参照）

日頃から、社会の政治や経済、教育問題、環境問題、国際問題などを十分考えていながら、分からないのか、また、よく考える余裕がないのか、判断できない。我々教師に対して、同じ問いを発すれば、どのような結果がでてくるのだろうか。とにかく、親や教師がよく考える時間を持ち、将来の子供達の時代が今よりもよりよくなるよう、環境をこれ以上破壊することなく、平和であるようお願いしたい。

## 5. おわりに

アンケートの結果について、自分の思いや考えを好きなようにしるしたが、本校の現状や広く教育問題について考える際に、すこしでも参考になれば幸いである。全校生徒700余名の小規模の中学、高校併設の附属校という、普通の学校でない学校の、それも昨年度のみ生徒や保護者を対象にしたアンケートで一体なにがわかるのかといわれれば、心もとない感じもする。



しかし、このアンケートについては、奈良女子大学体育学教授 丹羽勲昭先生、本校前校長の奈良女子大学社会学教授 新睦人先生のご指導やご教示をはじめ、元奈良女子大学大学院博士課程 豊田直子さんのご協力を得て、ようやく、まがりなりに完成することができた。心より感謝を申し上げ、この稿を終えたい。

## IX. 研究の成果と問題点

### 1. 学校改革について

- (1) 1次抽選→2次総合学力試験を、1次(算数・国語)基礎学力試験→2次抽選→3次総合学力試験に変更することにより、極端な低学力の生徒数の減少、一斉授業が可能な程度にまでの学力差の縮小(個別補習指導の必要な生徒の減少)、教科における課題の遂行能力の高度化や自主的活動の活発化などが考えられる。
- (2) (1)の結果として、附属学校教官本来の任務である教育研究活動に、現在よりも多くの時間を費やすことが可能になるであろう。  
しかし、生徒の組成が公立学校と異なる可能性があるため本校の教育研究、教育実践が直ちに他校のモデルにならない恐れがある。研究・実践に際しては、この点に十分留意する必要がある。
- (3) 低学年における英語科の20人学級と外国人講師、高学年における選択制拡大に対しては非常勤講師の手当の問題が未解決である。改革を実行する際に、設備・備品・人員の予算的措置、経済的問題をどのように解決するかが隘路となる。
- (4) 10年後の本校の社会的役割について教官に一致した見解が得られなかった。今後どのような学校を目指すかをひき続き検討する必要がある。
- (5) 教育課程については、不十分ながら編成することが出来た、しかし、教育課程以外の学校組織について、2-2-2制への再編成は今後継続的に取り組まなければならない。
- (6) 入試改革の結果生じた附属小学校との接続問題を切っ掛けに、接続問題だけでなく、文学部教官をも含めた協同研究を進めるためのワーキンググループが設けられ活動を開始した。

### 2. カリキュラムの編成を通して

- (1) 中高6カ年を見通して、各教科が教科内容の見直し、再検討を行った。その際、不十分ながら他教科の内容にまで踏み込み、相互批判を会議の席上で為し得たことは<教科セクト主義>を批判し、反省する機会になった。しかし、その壁を打破することは出来なかった。  
教育課程の編成を教官全員が、全体会議の場で徹底討議し得たことの意味は大きい。本校の教師の学問的・専門的な能力は、客観的に見て高いと考えられるが、これらの議論の過程では、教科教育的な視点に欠ける発言がしばしば見られた。
- (2) 学年の枠を外す等のカリキュラムの柔軟性を持たせることができなかった。教育課程の構成に際して、典型的教材の設定等の教科内容の精選に関して、全ての教科で十分に組み込まなかった。  
<少なく教えて多く学ばせる>ことについて継続した取り組みが必要である。
- (3) 中学年において重視している自主的学習方法を高学年において具体的な活動としてどのように生かすかが今後の課題である。
- (4) 高学年の多様な選択の可能なカリキュラムを目指したが結果的には、若干受験対策的な色彩が濃くなった。生徒達が個性にあった選択をするかどうか今後の問題点である。
- (5) 研究開発校として、次の指導要領の改定に資するカリキュラムを作成するにいたらなかった。その原因として、研究開発後の教育課程との落差をできるだけ少なくするという意識が働いたと言える。しかし、本校の総合教科は、生活科の延長として、中学校・高等学校の<生活科>としてのモデルに成り得ると考える。
- (6) 本校の研究開発の成果のひとつであるカリキュラム編成が新指導要領のモデルとして、近畿地区、奈良県内の学習指導研究会や本校の公開研究会を通じて参考にされている。

- (7) 総合教科の実践も含め、本校のカリキュラムの評価の問題が残っている。現在の高校1年生が卒業する段階（平成6年3月）で、高校3年間、中学3年間の実践が終わる。この段階で、カリキュラムの手直しを含めて、自分達の学校の評価を考えなければならない。

### 3. 総合教科を通して

- (1) 本校では、従来から、社会科、理科、芸術科、技術家庭科、英語科、国語科等において、課題学習、自主的学習活動を重視した実践を継続的に実施してきた。その豊富な経験を生かし総合教科<奈良学>を容易に構成することができた。その反面、担当教科内では十分討議を尽くしたが、学校全体としては、総合教科<奈良学>に就いての討議が不十分であり、安易に決定された傾向があった。
- (2) 環境問題が緊急の課題として地球的規模で取り上げられて、これに対応した教育が早急に実施されるべきであると主張されている。しかし、その取り組みは日本ではほとんど手がつけられていない状況である。本校の開発研究にともなう新しい総合教科<環境学>に関しては、その内容と方法が決定され実施中である。今年度の公開研究会に於いて、生徒達のフィールドワークの中間報告の授業を公開した。<環境学>についての評価は次年度に行う予定である。一応のカリキュラムは完成したが、より自然な教科の融合を目指し今後研究を継続したい。本校のこれまでの環境教育の取り組みは、理科が中心であった。その実践は、全国的にも注目を集めた。また、平成2年度の日本科学教育学会第3回研究会において発表された。
- (3) 本校によって作られた「環境教育の構造化」は、他の学校が環境教育のカリキュラムを構成する際に有力な手がかりとなるだろう。今後、本校は<環境学>の実践を継続し、その実践の結果と反省を生かし、この構造化をより完成されたものとしなければならない。
- (4) 総合教科については、毎年、実施後に、内容と方法について点検と、再検討を繰り返し、より自然な一体化、統合化を目指さねばならない。
- (5) 本校の教師個人あるいは教師集団の総合教科についての見方、考え方は、本校の教育の目指すものと不可分である。したがって、本校における総合教科は、本校の教育全体の目標、内容の質的パラメーター的存在と見ることができる。

### 4. 研究開発をうけて

- (1) 本校のアイデンティティの確立

エリート教育を放棄し、開かれた学校を目指して種々の改革を実行した。しかし、その間に、本校が解決しなければならない、様々な課題が明らかになった。すべてが解決されたわけではないが、研究開発の指定を受け、国立附属学校のあり方や本校のあり方等の議論を続ける過程で、解決すべき問題点を顕在化させることができた。その結果を、本校の教育目標の設定やカリキュラム編成に生かすことが出来た。

- (2) 学校・生徒・授業の見直し

生徒の質的变化に対応した教育内容・方法の見直しは、教師の授業に対する態度の変化をもたらした。このような教師の態度の変化によって、カリキュラム編成の際に、他教科の内容や授業方法にまで踏み込んだ議論がなされるようになった。本校の教師が一体となって、共通の目標達成を目指し、議論を重ね、協力できたことの意義は大きい。

- (3) 総合教科の創造

本校では、従来から教科毎の生徒の自主的活動による課題学習を実践してきた。しかし、研究

開発の指定を受けることがなかったならば、総合教科のような、教科の壁を取り払うような科目を構成することは出来なかったであろう。しかも、教師自身が、主体的・創造的に総合教科を構成した経験とそこから得られた自信は、今後の本校の柔軟で開発的な教育を創造する際に、生かしていくことができるであろう。

#### (4) 地域への寄与

##### ① カリキュラム編成

本校におけるカリキュラム開発は、研究開発指定の終了後も大きな変更の必要のないようなものにするというのが当初からの予定であった。だから、今回の本校のカリキュラムは、新指導要領に対応したものとなった。そのための、研究開発学校の本来の役割を果たさなかった恐れがある。高校を対象とする研究開発学校の限界を越える事は出来なかった、ということでもある。

しかし、研究開発校指定の時期が、指導要領の改訂の時期と一致したために、本校の新カリキュラムが、地域の学校のカリキュラム編成の参考になった。

##### ② 総合教科

本校の総合教科<奈良学>は、地域の施設、環境を積極的に生かした郷土学習である。<環境学>でも、学校の近くを流れる岩井川の水源地付近、中流、下流の三地点の水質検査、環境観察、生物観察を行い環境学への導入とした。このような実践は、地域の特質を生かす「生活科」のモデルにもなるであろう。今年度の公開研究会にも地元の中・高等学校から多数の参加を得たことから関心の高さが窺える。

本校で実践している総合教科の様な学習こそが、今後日本の高校教育を正常化し、<競争原理>によらない教育へとその質を変えていく際の一つのモデルとなれば幸いである。

(文責 松本博史)

〔謝 辞〕

運営指導委員の先生方には、教科のカリキュラム編成、総合学習の構成に際して、関係教科の会合や公開研究会の助言者として、再三にわたり参加下さり、懇切丁寧にご指導、ご教示賜りました。ここに感謝の意を表します。

高知大学の菊池るみ子先生には、環境学構成の最初の段階から完成までご協力を頂きました。また、菊池先生のご紹介で、公開研究会の全体会講演の講師として高知県大方町町長の坂本義春氏を迎えることが出来ました。氏は「環境保護」と「町起こし」を結び付けたユニークな大方町の取り組みをお話して頂き、本校の研究会に花を添えて頂きました。ご講演を聞きながら、大方町の努力、坂本氏の教育に対する意識こそ、いま本校に求められていることだと考えたものでした。お二方に、感謝の意を表します。

研究開発担当一同

研究紀要 第33集

平成4年3月31日発行

発行者 奈良女子大学文学部  
附属中・高等学校

校長 山 田 昇

〒630 奈良市東紀寺町1-60-1  
TEL. 0 7 4 2 (26) 2 5 7 1